ポケモン不思議のダンジョン希望の空と絆

フォック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケモン不思議のダンジョン希望の空と絆

【Ｎコード】
Ｎ９６０１Ｊ

【作者名】
フォック

【あらすじ】
記憶を失った元人間、ナエトルのドルク
そして臆病（おくびょう）なパートナー、ヒコザルのシルム
二匹は探検隊ブレイブを結成しプクリンのギルドで探検隊修行をすることに
これは二匹の絆と友情

そして、ドルク達の成長の物語

希望の光をもとめて

彼らは歩き続ける

どこまでも

第1話　嵐の海で～出会い～（前書き）

第5作目の作品となりました。

ゲーム進行で書いていきますんでよろしくお願いします。

ではどうぞ！

第1話　嵐の海で～出会い～

それはある嵐のことだった・・・

ピシャーン！！

雷がなる

声が聞こえる

？？？？「うおっ！・・・・・だ、大丈夫か？！」

？？？？「あ・・・ああ」

声からして二人だった

ピシャーン！！

再び雷がなる

？？？？「は、話してはダメだ！」

なにやら必死のようだった

？？？？「もう少し・・・・・・なんとかがんばるんだ！」

だが

？？？？「くっ？！」

？？？「ダ、ダメだ・・・・・こ、このままだと・・・・・・」

雷が強く激しくなる

ピシピシッ・・・ピシャーーーン！！！！

？？？？「「うわあああああぁぁぁぁぁぁっ！？」」

二人は落雷によって

はなればなれになってしまった・・・

残っているのは

嵐によって凶暴となった海と

鮫（さめ）のような岩が立っていた

・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・

うう・・・・・・・・・・・・

ここは何処かの海岸

嵐も去っていき

きれいな青い海へと戻っていった

そんな時・・・

こ・・・ここは・・・・・・・・・・・・

ここは・・・・・・・何処なんだ・・・・・・・

海岸に一匹のポケモンが倒れていた

亀(かめ)のような甲羅(こうら)に

頭に左右に分かれている葉っぱ

体色は黄緑(きみどり)のポケモンが倒れていた

若葉ポケモンのナエトル

声が弱っていた

ナエトル「・・・だ・・・だめ・・・・だ・・・・・・・・意識が・・・・・・・・・」

そのまま気を失ってしまった・・・・・・・

・・・・・・

ところ変わって夕方

ある施設の入口の前に一匹のポケモンが立っていた

頭に炎のような髪型にしっぽに火を灯した（ともした）猿見たいな
ポケモンだ

小猿（こざる）ポケモン、ヒコザル、名はシルムという

シルム「う～ん・・・・・・」

なんか落ち着かない様子で手術中に待ってるような感じに左右に歩く

シルム「いや、こんなことしてちゃダメだ、今日こそ勇気を振り絞
らなきゃ」

シルムは目の前にある鉄格子の穴に乗った

すると何処からか声が聞こえる

？？？？「ポケモン発見！！ポケモン発見！！」

するともう一つ声が聞こえる

？？？？「誰の足型？誰の足型？」

すると先ほどのポケモン発見と言った声は

？？？？「足型はヒコザル！足型はヒコザル！」

と答える

シルム「わわっ！！」

シルムは驚き、鉄格子の穴を離れる

シルム「び、びっくりしたあ～！！」

そのあとは落ち着いたが

シルム「ふう・・・・・・・」

すると落ち込んでしまった

シルム「・・・・・・・・・ダメだ、結局入る踏ん切りがつかないや、今日こそ・・・・・・と思って来たんだけど・・・・・」

すると不思議な模様の石を取り出した

シルム「この宝物を握り締めていけば勇気も出るかと思ったんだけど・・・・・・」

シルムは石をしまった

シルム「ああダメだ、オイラってホント臆病者だよな・・・・・・・情けないよ・・・・・・」

そのまま振り向き施設を去った

するとその影で紫の浮遊物体とコウモリみたいなポケモンが出てきた

？？？？「おいズバット、今の見たかよ」

ズバットと呼ぶポケモンに呼ぶ

ズバット「ああ、もちろんだぜドガース」

と、ドガースと呼ぶ浮遊物体(ふゆうぶったい)に声をかける

ドガース「さっきウロウロしてた奴・・・・・アイツなんか持ってたよな？」

ズバット「ああ、ありゃあきっとお宝かなんかだぜ」

それはシルムが持っていたあの不思議な模様の石のことだった

ドガース「狙うか」

と、ドガース

ズバット「おう」

そう言ってシルムの後を追う

・・・・・・

海岸

蟹(かに)のようなポケモン、クラブが泡を出す

海岸にシルムがやってきた

シルム「わあ～！きれいだあ！」

海は夕日とクラブ達の泡できれいだ

シルム「ここは天気がいいといつもクラブ達が夕方に泡をふくんだけど・・・・・夕日の海にたくさんの泡が重なって・・・・・・ホントいつみてもきれいだよなあ」

海はクラブの泡できれいな青に染まっている

シルム「・・・・・・・・・・オイラ落ち込んだときは決まってここに来るんだけど・・・・・・今日も来て見てよかった」

シルムにとってここは癒し（いやし）のようだった

シルム「ここに来るといつも元気が出てくるよ」

するとシルムは何かに気づいた

シルム「ん?・・・・・・あれ?なんだろ」

シルムは駆け寄る

それはさっき海岸で倒れていたナエトルだった

シルム「わっ!だれか倒れてる!」

ナエトルに駆け寄った

シルム「どうしたんだよ!?大丈夫か!?」

声をかけるシルム

すると

ナエトル「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ナエトルは起きた

シルム「あっ気が付いた！よかった～！」

するとナエトルは周りを見る

ナエトル「・・・・・・・・こ、ここは？・・・・・・・・・」

シルムは声をかける

シルム「動かないから心配しちゃったよ！アンタここで倒れてたんだぜ？」

するとナエトルは

ナエトル「た、倒れてた？・・・・・・・俺が？」

シルム「あっ自己紹介しなきゃな！オイラ、シルムっていうんだ、よろしくな！」

シルムは自己紹介した

シルム「・・・・・・それでアンタは？ここらへんじゃ見かけないようだけど」

ナエトル「俺は人間だけど」

すると

シルム「ええ～～っ!?人間だって～～っ!」

シルムは驚いた

ナエトル「そんなに驚くほどか?」

と、どんかんなナエトル

だがシルムは

シルム「でもアンタ何処からどう見てもナエトルだぜ?」

ナエトル「えっ!?」

ナエトルは自分の姿を確認する

双葉(ふたば)を頭にのっていて甲羅をもっている

ナエトル「なっ!?たしかに俺はナエトルになってる!どうなってるんだ?・・・それに・・・なにも思い出せない・・・なぜだ・・・・・」

ナエトル自信は記憶もなくそこには疑問という3文字しか残ってなかった

シルム「アンタ・・・なんか怪しいな、もしかしてオイラを油断(ゆだん)さ

せてだまそうとかしてる？」

その答えにナエトルは

ナエトル「なっ！？何言ってるんだよお前！俺はそんな事はしねぇぞ」

と反論

シルム「ホントに？」

と疑うシルム

ナエトル「なんだよ・・・証拠でもあんのかよ」

シルム「いや・・・そんな事はいってないけど・・・じゃあ名前は？名前はなんていうんだい？」

と名前のことを言った

ナエトル「名前？・・・・・・そうだ俺の名前は覚えているたしか・・・・・・」

静寂

するとナエトルは自分の名前を言う

ナエトル「俺の名前はドルク、ドルクだ」

シルム「ふ～ん、ドルクっていうんだ・・・・・・」

ドルク「なんか変か？」

すると

シルム「いや・・・どうやら怪しいポケモンじゃなさそうだな」

ドルク「俺の何処が怪しいんだ？」

と聞くが

シルム「（うっ！？ここは謝らなきゃ）いや怪しくないです。さっきは疑ってゴメンな」

するとドルクは

ドルク「いやいいんだ、俺もここらへんはわからなかったから」

シルム「そうか・・・というのも最近悪いポケモンが増えててさ・・・・いきなり襲ってくるポケモンもいるし・・・・・・なんか最近になって物騒（ぶっそう）なんだよな・・・・・・」

するとシルムの後ろから

ドルク「おい！後ろ！」

シルム「えっ？」

後から付いて来た二匹は体当たりをした

シルム「イテッ！」

石がシルムの手から離れる

ぶつかってきた張本人達は

ドガース「おっとゴメンよ」

となにげない態度であやまる

シルム「なんなんだよ！いきなり！（怒）」

するとズバットは

ズバット「へへっわからないのかい？お前にからみたくてチョッカイだしてるのさ」

シルム「ええっ！？」

ドルク「（単なるいじめじゃねえか？コイツら）」

と、ドルクはいらついていた

するとズバットは

ズバット「それお前のもんだろ」

それとはシルムの石である

シルム「ああっ！それは！！」

ズバット「悪いがこれはもらっておくぜ」

ズバットはシルムの石を盗んだ

シルム「あーーーーっ！！」

ドガース「ケッてっきりすぐ奪い返し（うばいかえし）に来ると思ったが・・・・・なんだ？動けねえのか？意外といくじなしなんだな」

と言われるシルム

ドルク「・・・・・・」

ドガース「さっ行こうぜ」

ズバット「じゃあな弱虫君へへっ」

そう言うと二匹は洞窟に行ってしまった

シルム「・・・・・ああ・・・・・・ど・・・どうしよう？」

ドルク「なああの石って？」

するとシルムは口を開く

シルム「あれはオイラの大切な宝物なんだ・・・・・」

するとシルムの目に涙が

シルム「あれがなくなったらオイラは・・・・・・」

するとドルクは話しかける

ドルク「なあ？取り返さなくていいのか？なんですぐに取り返さない？あれはお前の大切な物なんだろ？」

と言われる

シルム「うん・・・・・・」

するとドルクは

ドルク「お前はそんなんでいいのか？大切な物を奪われて、おまけにアイツ等にバカにされてお前はそれでいいのか？」

と

シルム「それは・・・」

するとドルクは

ドルク「いいか？シルム、俺は大切な物とか奪われたらすごく悲しい、だがな取り戻した時がなにより嬉しいし、大切だからな、俺も記憶はないけどお前を見てるとすっげぇ悲しい、だから・・・取り戻そうぜ！お前の大切な物を、俺も手伝うからさ」

するとシルムは

シルム「ありがとうドルク・・・オイラ・・・悲しんでる場合じゃないんだよな」

ドルク「そうだ、行こうぜ！」

シルム「うん！」

二匹は海岸の洞窟に入った

第1話　嵐の海で～出会い～（後書き）

ポケダン主人公、ドルクに来てもらいました。

ドルク「オッス、俺はナエトルのドルクだ」

ついに始まってしまった、ポケダン小説

ドルク「そんなに嬉しいものなのか？」

うるちゃい♪やりたかったんだもん

ドルク「それで次回はなんだ？」

次回はふっとびます♪

ドルク「ふっとぶって言われても（汗）」

あの2匹に制裁の時が来ますよ♪（黒）

ドルク「（なんか作者に黒いオーラが出ているが）」

第2話　この人（ポケ）強いですけどー！？ｂｙシルム（前書き）

さあ！ぶっとびの時間です。（黒）

ドルク「まあよくわからねぇが、ではどうぞ！」

第2話　この人（ポケ）強いですけどー！？ｂｙシルム

海岸の洞窟

敵は少し弱めだが油断はできない

だが、

ある一匹のポケモンによって

・・・・・・

ドルク「ふう～まあこんなもんか」

オイラはヒコザルのシルム

大切な宝物を取り戻すため、今はドルクと行動をともにしてますが、

いや・・・ありえないです（泣）

シルム「す・・・すごいな、ドルク」

ドルク「んあ？ああこいつらか」

見ると敵の大半は倒れ、ドルクはあまりダメージを受けていなかった

ドルク「俺はトレーニングとかしてるからそのくらい大丈夫だけどな」

ナエトルなのにレベルはどんくらいなんだろう？

ドルク「ポケモンも悪くねぇな～！行こうぜシルム」

シルム「う・・・うん（ほんとに元人間なの？）」

一応元人間です

・・・・・・

海岸の洞窟　奥底

二匹はなんとか追いついた

シルム「お・・・・・・・おい！」

二匹は振り向く

ドガース「おやおや誰かと思えば弱虫君じゃないか」

シルム「うっ・・・・・・・」

シルムはあとずさむ

そして勇気を出して

シルム「ぬ・・・盗んだものを・・・・・・盗んだものを返してくれ！あれはオイラにとってとても大事な宝物なんだ！」

すると

ズバット「ほう宝物？やっぱりあれはお宝なんだな？」

ドガース「思ったより値打ちがあるかもしれないな、何処かに売っぱらえば高い値がつくかもしれない、ケッ余計返せなくなったぜ」

返す気もない二匹のポケモン

シルム「ええ～～っ！？」

ズバット「返して欲しければ腕ずくで来るんだな！へへっ！」

するとドルクは前に出る

ドルク「なあ？その弱虫君って？俺も入ってるのか？」

と聞いてきた

ドガース「ケッそうだよ」

ズバット「お前もそこの弱虫君と同じなんだよ！」

と言う

するとドルクの顔は笑顔だが笑っていない

おまけに怒りマークが付いていた

ドルク「ほう～、じゃあその弱虫君にやられたらどうなるんだ？」

バキッボキッと、前足を鳴らす

ドガース「俺達がやられるわけがないだろ」

ズバット「それに相性的にはお前の方が不利だ」

するとドルクの目が赤く鬼のような眼つきになる

ドルク「ほう～相当覚悟はできてるようだな」

するとドガース達はそれを見てひるむ

ドガース「（な・・・なんだ・・・この殺気は!?）」

ズバット「（か・・・体が!?）」

一歩一歩とドガース達に近づくドルク

ドルク「てめ～ら・・・人(ポケモン)に対して物を盗むわバカにするわ、それでもポケモンか?ああ!どうなんだ!おい!」

まるで性格が変わっていた

ドガース「ひっ!?」

ズバット「い・・・いや・・・あの・・・その・・・・・・・」

完全にやばい雰囲気だった

ドルク「俺はよ、てめ～ら見たいな野郎が大嫌いなんだよ、そうい

う奴はこの俺がじきじきに潰す、覚悟はできてるだろうな！」

ドガース・ズバット「ひいいいいいっ！？」

それを見ていたシルムは

シルム「（こ・・・怖い・・・怖いよ～）」

と怯える（おびえる）

そして、

ドルク「超究武神葉連撃（ちょうきゅうぶしんはれんげき）！！」

ドガース・ズバット「ぎゃあああああああ

シルム「ひゃあ!?」

シルムは驚き、しりもちをついた

ドルク「大丈夫か?」

そこにはいつものドルクの姿があった

シルム「だ・・・大丈夫・・・」

まだ足ががくがくしている

ドルク「ああ、ごめんな、驚いたろ?けどお前にはそんなにしねぇよ!安心しな!」

と、言い切るドルク

ドルク「そんじゃあ行こうぜ」

と、二匹はダンジョンを脱出した

ちなみにあの二匹は

ドガース「・・・・・・・」↑白くなってる

ズバット「・・・・・・・」↑同じく

ドルクの恐怖の攻撃により完全に燃え尽きたようになった(汗)

・・・・・・

海岸

シルム「ホントにありがとな！ドルク！」

お礼をするシルム

ドルク「いいよ、気にすんな！よかったな！取り戻せて」

シルム「うん！（ほとんどドルクがやったんだけど）」

シルムはドルクの実力にある意味怖く感じた

するとシルムは盗まれた石を置いた

シルム「さっき盗まれた物だよ」

ドルク「めずらしい石だな？」

シルム「これは遺跡のかけら・・・・・・と言ってもオイラが勝手にそう呼んでいるだけなんだけど・・・・・・でもこの遺跡のかけらは・・・・・・オイラの大切な宝物なんだ、オイラ前から昔話や伝説が大好きでさ・・・そんな話を聞くたびにワクワクするんだ！だってそう思わない？」

ドルク「そうだな・・・たしかにワクワクするな～」

シルム「だろー！謎の遺跡や隠された財宝・・・・・・」

シルムは語りだす

シルム「闇の魔境や・・・・・・誰も行った事がない新しい大陸・・・・・そんなところには黄金やお宝がザックザク！そこにはロマンがある、オイラいつもそんなことを考えてはワクワクしてるんだ」

そして静寂

シルムはゆっくり語りだす

シルム「そしてある日・・・・・ふとしたことで拾ったのがこの遺跡のかけらなんだ、いっけんガラクタにも見えるけど・・・・・・よ～く見てごらん？」

ドルクは石を見る

シルム「ホラッ不思議な模様が書かれてるよな？」

ドルク「たしかに、不思議だな・・・こんな模様見たことないな」

シルム「この模様にはきっと意味があるに違いないよ、このかけらが伝説的な場所や秘宝への入口になっている・・・・・・そんな気がしてならないんだ」

ドルク「そうか・・・俺もそんな感じがする」

ドルクも感じていた

この不思議な模様の石を

シルム「だからオイラも探検隊になって、このかけらがはまる場所をいつか発見したい！オイラ自信でこのかけらの謎をいつか解きたい！そう思ってさっきも探検隊に弟子入りしようとしたんだけど・・・・・」

ドルク「だけど？」

シルム「オイラいくじなしでさ・・・・・・」

ドルク「（この性格から入れないってことか・・・）」

するとシルムは

シルム「ドルクは・・・・・これからどうするんだ？記憶をなくして、なぜかポケモンになっちゃったってことだけど・・・・・・この後何処か行くあてとかあるのか？」

ドルク「たしかに・・・・・・どうすっかな～」

行くあてがない

ドルクはどうするか考えた

するとシルムが口を開く

シルム「もしないなら・・・・・お願いだ、オイラと一緒に探検隊やってくれないかな？ドルクとなら探検隊をやれる気がするんだ、だからどうかな？なあお願い！」

しばらくの静寂

するとドルクは答えた

ドルク「いいぜ、行くあてないだろうし、それに探検隊になれば俺の記憶や俺がポケモンになったことがわかるかもしれねぇしな（今はシルムといたほうがなにかわかるからな）」

ドルクは賛成した

シルム「え？ホント！？一緒に探検隊やってくれるのか？」

ドルク「ああ！」

シルム「やったぁ！！ありがとう！！」

シルムは喜んだ

シルム「オイラ達絶対いいコンビになるよ！！よろしくな！」

ドルク「よろしくな！シルム！」

二匹は握手した

ドルク「それで？どうやったら探検隊になるんだ？」

と、聞いてきた

シルム「まずはプクリンの所に行って弟子入りしよう、そこで一人前の探検隊になるための修行（しゅぎょう）をするんだ」

ドルク「修行か～、いいぜ！この先強い奴とかがいるから万全にしとかないとな」

シルム「うん、修行はとても大変そうだけど・・・・・・でもがんばろうな！ドルク！」

ドルク「おう！」

こうして・・・・・・

シルムとドルクの

探検隊が結成されました

そしてそれは・・・・・・

これから起こるであろう遥かなる（はるかなる）冒険への・・・・・・

入口だったのです

第2話　この人（ポケ）強いですけどー！？ｂｙシルム（後書き）

ドルク「な～る～そういうことか」

シルム「すごく怖かった」

シルムには危害はくわえないから安心して

シルム「よかった」

ドルク「俺ってそんなに怖かったのか？」

シルム「そうだけど・・・」

ドルク「そうか」

シルム「今ので納得！？」

まあまあシルム、さて今回オリジナルというかアレンジな感じだけど

シルム「超究武神葉連撃（ちょうきゅうぶしんはれんげき）だね」

そう！これはＦＦ７クラウドの最強の剣技というかディシディアではＥＸバーストに使って、さらにバージョン５まである強力な技だよ、それの草タイプのアレンジして作ったの

シルム「けど剣技じゃないけど？」

これはね、ドルクが見えない速さで突進して、葉っぱカッターをド

ルクの周りを包んで突進すんだ、当初葉っぱカッターは覚えないけど、葉は自由に出てくるからドルクはできるんだ

シルム「へえ～そうなんだ！けど他に技とかはなってたな、ええと」

だあああああっ！！その先は言っちゃだめー！！

ドルク「次回から少しずつバラすからな」

シルム「わかった、話さないから」

わかればいいんだよわかれば、ちなみに補足だけど、ぶっとびって言葉はフ〇〇〇ー〇〇〇からきてるので見てるからこんな風にしちゃおうかな～とおもちゃったわけ

シルム「なるほどな（汗）」

ドルク「作者、次回は？」

次回は結成です。チーム名は考えたから

シルム「なんて名前になんだろう」

楽しみにしてて

第3話　結成！その名は（前書き）

ドルク「ついにチーム結成か」

シルム「うわぁ～楽しみ～」

ついに結成です。

ドルク「ところで他の先輩方の小説進めなくていいのか？」

なんかこっちの方で案が浮かんだからこっちの方を更新になっちゃたけど

ドルク「とりあえず始めるぜ、ではどうぞ！」

第3話　結成！その名は

プクリンのギルド前

二匹は立っていた

シルム「ここがプクリンのギルドだ、探検隊になるならここでまずチームを登録して、一人前になるまで修行しなくちゃならないんだけど・・・・・・」

するとシルムは震える（ふるえる）

シルム「ブルブル！」

ドルク「大丈夫か？」

とドルクは声をかける

シルム「だ・・・大丈夫だけど、なんか怪しげな所だよなやっぱり」

ドルク「そう～か～？」

とあまり怪しいと感じなかったドルク

シルム「いや、今度はドルクも一緒なんだ、勇気出さなくちゃ」

ドルク「大丈夫だシルム、俺は見てるからそこの穴にのれよ」

シルム「うん、行くぞ！」

シルムは格子の穴にのった

すると声が聞こえる

さっきの二つの声だ

？？？？「ポケモン発見！！ポケモン発見！！」

？？？？「誰の足型？誰の足型？」

？？？？「足型はヒコザル！足型はヒコザル！」

シルム「わわっ！！」

と驚くシルム

ドルク「がんばれ！シルム！」

ドルクはシルムを応援する

シルム「ドルク・・・こ・・・ここは我慢（がまん）しなくちゃ」

すると声は

？？？？「・・・・・・よし、そばにもう一匹いるな、お前ものれ」

シルムは穴から離れる

ドルク「俺だな・・・おしっ！行くぜ！」

ドルクは穴にのった

ドルク「（足がこそばゆいな、この穴に誰かいるな）」

声が再び言ってくる

？？？？「ポケモン発見！！ポケモン発見！！」

？？？？「誰の足型？誰の足型？」

すると異変が

？？？？「足型は・・・・・・足型は・・・・・・エート・・・・・・」

なにか困惑（こんわく）してるようだ

するともう一つの声は

？？？？「どうした！？見張り番！（みはりばん）ん？見張り番！？見張り番のディグダ！どうしたんだ！？応答（おうとう）せよ！」

二つの声のうち、一つはディグダと言われたポケモンらしい

そんな困惑のディグダは

ディグダ「ん～と・・・・・・エート・・・・・・」

格子の穴の下

そこには茶色でピンクの鼻でかわいいポケモン、ディグダがいた

ディグダ「エート・・・・・・足型はぁ・・・・・・」

そんなディグダが答える

ディグダ「たぶんナエトル！たぶんナエトル！」

するともう一つの声は

？？？？「なんだ！たぶんって！？」

ディグダは焦る（あせる）

ディグダ「だ、っだってぇ～・・・・・・この辺じゃ見かけない足型なんだもん」

するともう一つの声は

？？？？「あーもう情けないな！足の裏の形を見てどのポケモンか見分けるのがディグダ、お前の仕事だろう？」

するとディグダは

ディグダ「そんなこと言われてもぅ・・・・・・わからないものはわからないよー」

その頃こちら入口の方

ドルク「お～いどうした～？」

シルム「なんかもめてるのかな？」

すると

？？？？「またせたな」

ドルク「やっとか」

やっと声が聞こえた

？？？？「まあ・・・・・・たしかにナエトルはここらじゃ見かけないが・・・・・・でも怪しい者ではなさそうだな」

ドルク「なあ？声の主よぉ～俺をなんだと思ってるんだ？」

と、ドルクは言う

？？？？「い・・・いや・・・怪しくないぞだんじて」

そりゃあシルムにも言われたから気にしているのだろう

ドルク「そうか」

？？？？「（今ので納得か！？）」

と、心の中でつっこむもう一つの声

？？？？「よし！いいだろう！入れ！」

ギルドの入口の鉄格子が開く

シルム「ひゃー！緊張(きんちょう)してるせいかいちいちビックリだよ、でも入れるようになったみたいでよかったな、まだドキドキしてるけど」

ドルク「そんじゃ入るとするか」

二匹はプクリンのギルドへ入った

・・・・・・

ギルド地下1階

シルム「わぁ～！」

二匹は見ながら前を歩く

シルム「ここがプクリンのギルドかぁ！」

中は広く、ポケモンもたくさんいた

シルム「みんな探検隊なのかなあ」

すると声が聞こえる

？？？「おい！」

すると地下2階の階段？から一匹の鳥ポケモンがドルク達の前に来た

カラフルな羽に頭の形は音符の形だった

？？？「さっき入って来たのはお前達だな？」

シルム「は、はい！」

ドルク「そうだが？」

するとその鳥ポケモンは自己紹介した

？？？「私はペラップ♪ここらでは一番の情報通（じょうほうつう）であり、プクリン親方の一の子分だ♪」

と、鳥ポケモン、ペラップは紹介した

？？？「かんゆうやアンケートならお断りだよ、さあ帰った帰った」

ドルク「（アンケートとか来るのかここは？）」

と心の中でつっこむドルク

シルム「ち、違うよ！そんなことで来たんじゃないよ、オイラ達探検隊になりたくてここで探検隊の修行をするために来たんだよ」

するとペラップは驚いた表情で

ペラップ「えっ！た、探検隊！？」

ペラップは後ろを向いて一人でぶつぶつ言う

ペラップ「（小声）いまどき珍しい（めずらしい）子達だよ、このギルドに弟子入り（でしいり）したいとは・・・・・あんな厳しい（きびしい）修行はもうとても耐えられないといって、脱走（だっそう）するポケモンも後をたたないと言うのに」

ドルク「なあ？今修行はとても耐えられないとか脱走するポケモンとか言ってたが？」

するとペラップは焦り（あせり）

ペラップ「はっ！？」

そして視点をドルク達に戻す

ペラップ「いやいやいやいやいや！！そ、そんなことないよ！た、探検隊の修行はとーっても楽チン！」

ドルク「へ～」

とドルクはジト目でペラップを見る

ペラップ「（うっ！？なんだこのナエトル！私の聞いていたことを聞いていたのか！？しかもなんかこっちを見ている・・・（汗））」

ドルク「な～んか怪しい」

と、ドルクはさらにペラップに追い討ち（おいうち）をかける

ペラップ「（や、やばい！？・・・とりあえずなんとかしなければ）

」

ペラップは冷や汗ダラダラになる

ペラップ「な、なにを言うんだいナエトル君、私は君達のために言ってるんだよ！？」

と、冷や汗をかきながら言う

ペラップ「そっかー♪探検隊になりたいなら早く言ってくれなきゃー♪フッフッフッフ♪」

ドルク「だいたい最初にかんゆうやアンケートならお断りと言ったのは何処のどいつだ？」

とまたペラップを嫌な目で見るドルク

ペラップ「（うっ！？するどい、このナエトル！？）」

ドルク「それに、態度(たいど)もきゅうだな」

グサッ！

ペラップに矢がささる

ペラップ「（あ・・・あなどれない！？このナエトル！？）ご・・・ごめんな、私が悪かった、じ・・・じゃ早速(さっそく)チームを登録(とうろく)するから付いて来てね♪」

言われるまま二匹はペラップに付いて行く

・・・・・・

地下二階

ペラップ「ここはギルドの地下2階、主に（おもに）弟子達が働く場所だ、チームの登録はこっちだよ、さあ」

と、二匹は付いていくが

シルムは窓に向かう

シルム「わあ！ここ地下2階なのに外が見えるぞ！」

とはしゃぐシルム

ペラップ「いちいちはしゃぐんじゃないよ！（怒）」

と、ペラップは怒る

ドルク「なあ？ペラップ？あんたおばさんっぽいぞ？」

ペラップ「（ガーン！？私がおばさん・・・私は男なのに）」

ドルク「じょうだんだ」

ペラップ「（このナエトル何者！？）じゃあ言わないでくれ」

と、言うペラップ

ペラップ「え～このギルドは崖(がけ)の上に立っている、だから外も見えるんだよ！」

シルム「へえ～」

ドルク「まるで○○○だな」

シルム・ペラップ「それは言わないでね」

と、二匹はドルクにつっこみをいれた

ペラップ「さあここがプクリン親方のお部屋だ、くれぐれも・・・・・くれぐれもそそうがないようにな」

目の前には赤い印が付いた扉だった

ここがプクリンの部屋だろう

ペラップ「親方様、ペラップです♪入ります」

3匹は部屋に入った

・・・・・・

プクリン部屋

そこにはあちこちに財宝があり

中央にはピンク色のポケモンが立っていた

しかも後ろ姿だ

あれがプクリンだろう

ペラップはしゃべった

ペラップ「親方様、こちらが今度新しく弟子入りを希望している者達です」

だが反応がない

ペラップ「親方様・・・・・・・・・・・・親方様?・・・・・・・」

するとプクリンは前を向いた

プクリン「やあっ!!僕プクリン!ここのギルドの親方だよ?」

と、拍子抜けした声で話す、

ドルク「（親方ってなんかすごいイメージ持ったけどこの親方はめずらしいな）」

と、プクリンを見るドルク

声は少年っぽく、額にふわりとしたピンクの毛

目は大きく、瞳（ひとみ）は薄緑（うすみどり）だ

プクリン「探検隊になりたいんだって?じゃ一緒にがんばろうね!」

ドルク「よろしくな！プクリン親方」

と、ドルクは挨拶した

プクリン「君は中々いいね♪とりあえず探検隊のチーム名を登録しなくちゃ、君達のチームの名前を教えてくれる？」

シルム「ええ？チームの名前？チームの名前なんて考えてなかったな、ねえ？ドルクは何かいい名前あるかい？」

ドルク「う～ん・・・ブレイブってーのはどうだ？ブレイブは希望・勇気って言う意味なんだがいいか？」

と、言う

すると

シルム「・・・・・ブレイブ！？ブレイブ！！うん！いい名前だ！気に入ったよ！」

ドルク「そうか、よかった」

と、喜ぶドルク

プクリン「決まりだね！じゃあブレイブで登録するよ、登録♪登録♪みんな登録・・・・・・」

するとプクリンは口を大きく

プクリン「たあーーーーーーーーーーーーーっ！！」

プクリンのハイパーボイスが響く

ドルク・シルム「うわっ！？（わわっ！？）」

これには驚く二匹

プクリン「おめでとう！これで君達も今日から探検隊だよ！記念にこれをあげるよ」

プクリンはポケモン探検隊キットを置いた！

シルム「ポケモン探検隊キット？」

と、ここでプクリンは説明した

プクリン「うん、探検隊に必要な物なんだよ、早く中を開けてみて」

シルムはポケモン探検隊キットを開けてみた

中には探検隊バッジに不思議な地図にトレジャーバックが入っていた

シルム「わあ～！色々入ってる！！」

ドルク「すごいな、これらはどう使うんだ？」

と、ドルクは言う

プクリンは説明した

ここでそれぞれの道具などの使い方を説明しよう

まずは探検隊バッジ

これは探検隊の証であるバッジである

次に不思議な地図

これは各ダンジョンの場所をしめす地図なのだ

最後にトレジャーバック

これはダンジョンで拾った道具をとっておける貴重（きちょう）なバックだ

彼らがある程度まで活躍（かつやく）すればバックも大きくなり、拾える道具がさらに持てることができる不思議なバックなのだ

早速ドルク達はバックの中身を見た

中にはスペシャルリボンとブルーリボンの二つのリボンが入っていた

プクリン「その2つの道具は特別な物、君達の探検にきっと役立つと思うよ♪」

シルム「あ、ありがとう！オイラ達これからがんばります！」

プクリン「うん、でもまだ見習い（みならい）だからがんばって修行してね！」

シルム「はい！」

ドルク「おう！」

二匹は元気に返事した

シルム「ドルク！がんばろうな！！」

ドルク「おう！よろしくな！」

・・・・・・

弟子部屋（ブレイブ寝室）

ペラップ「ここがお前達の部屋だ♪」

部屋には窓があり、ワラが二つもあった

早速二匹はベット（ワラ）へ

シルム「わ～い！ベットだあ！」

ドルク「悪くねぇな～」

と、二匹は気に入ったようだ

ペラップ「これからお前達には住み込みで働いてもらう、明日から忙しい（いそがしい）ぞ♪早起きしなきゃならんし、規則（きそく）も厳しい（きびしい）、夜更かし（よふかし）しないで今日はもう早めに寝るんだぞ♪じゃあな」

ペラップは去った

・・・・・・

夜

シルム「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なあドルク、まだ起きてるか？」

ドルク「起きてるぞ？どうした？」

シルム「オイラ今日はもうずっとドキドキだったけど、でも思い切ってここに来てよかったよ」

ドルク「そうか・・・」

シルム「プクリンも、もっと怖いかと思ったけど案外優しそうだったしさ・・・・・明日からまた色んな事がありそうだけど、でもオイラそんなに怖くない、逆（ぎゃく）にこれからどんな冒険があるんだろうってワクワクしてるんだ」

ドルク「そうだな・・・俺達はまだ見習いだけど、これからがんばって行かなきゃな」

シルム「そうだね・・・少し眠くなってきちゃった、明日からがんばろうな」

ドルク「ああ」

シルム「じゃあなドルク・・・・・お休み」

ドルク「お休み、シルム」

シルムは眠りについた

ドルク「（俺はこれからシルムと一緒か～・・・俺の事何もわかってねぇな・・・さて・・・明日からがんばってみるか・・・俺は何者なのか・・・俺はなぜポケモンになったのか・・・なぜ浜辺で倒れてたのか、調べるしかねぇな・・・さて、寝るか）

ドルクは眠りについた

第3話　結成！その名は（後書き）

ドルク「探検隊、チームブレイブ結成だな」

さて、これから忙しくなるよ

シルム「作者、大丈夫？」

大丈夫だよ、次回は初の仕事だよ！ちなみにこれからポケモンとかでもありえないものとかが起きるから

シルム「えっ！？一体！？」

それは秘密です

ドルク「そうか」

シルム「今ので納得なの！？ドルク！？」

すごいつっこみだねｗｗｗｗ♪

シルム「作者はなんでにこやかなんだ！？」

細かいことは気にしな～い♪

第4話　こいつは第2の親方だ!?ギャース!!??ｂｙドゴーム（前書き）

さて次に被害（ひがい）を受けるのは誰だろうね？（黒）

シルム「怖いこと言うなよ!?作者!?」

時にははっちゃけるのもいいんだよ

ドルク「グ○○○だ○!!」

シルム「ええっ!?」

今回は短いです。

第4話　こいつは第2の親方だ!?ギャース!!??ｂｙドゴーム

次の朝・・・・・・

??:??「おいっ!!おおおいぃっっっっっ!!起きろおおおおおおおおーーーーーー!!!朝だぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉー!!!」

うるさい声が聞こえる

??:??「いつまで寝てんだよーーーーーーーーーっ!!早く起きろーーーーーーーっ!!」

シルム「み、耳がぁ・・・・・・・」

シルムが目を回す

声の主は昨日もう一つの声だ

その正体はこのポケモンだった

スピーカーのような小さい耳にバカでかい口だった

??:??「寝ぼけてんじゃねーーーーー!俺はドゴーム、弟子の一匹だ」

ドゴームが紹介したがすごく馬鹿でかい声だ

だがそれは敵に回すことになるとは

ドルク「おい」

と、ドルクがドゴームに声をかける

なぜか顔は笑っていない

ドゴーム「なんだ?急げ!集合時間に遅れると・・・」

するとドルクは口からピンクのエネルギーをドゴームに向ける

ドゴーム「なっ!?」

ドルク「この俺にバカでかいモーニングコールを鳴らすとは・・・いい度胸(どきょう)してんじゃねぇかあぁ!!(怒)」

怖いです、怖いですよドルクさん

ドゴーム「ちょ!?まっ!?」

ドルク「覚悟しろやあぁぁぁぁぁぁ!!!!ス○○○○ト○○○○ー!!!!!」

ドゴーム「ぎゃあああああああーーーーーーーーーーーーーーーっ!!!!!??????」

この時、ドゴームは某少女アニメの攻撃で遥か(はるか)彼方(かなた)へ吹っ飛ばされてしまった

ドルク「さて、修復っと♪」

ドルクは何か詠唱なものを言って壊した所を直した

シルム「がたがたがたがたがた」

シルムは恐怖を覚えた

そして、こう思った

ドルクと一緒でよかったのか？

と、後悔した

何事かと弟子達が見た時は

すでに壊された部分は一（壁など）直っていた

・・・・・・

ペラップ「え～全員集まったようだな（汗）」

全員並んで整列していたが

一匹（ほうたい）包帯ぐるぐるでミイラ化状態の哀れ（あわれ）なポケモンがいた、哀れドゴーム

ドゴームはドルクを見るとがたがたと震えていた（ふるえて）

ペラップ「え～ではこれから朝礼を行う」

するとペラップは

ペラップ「親方様ー♪全員揃い（そろい）ました♪」

するとプクリンの部屋が開き、プクリンが登場した

ペラップ「それでは親方様♪一言お願いします」

そう言うペラップ

だが、プクリンは

プクリン「・・・・・・ぐうぐう・・・・・・ぐうぐう・・・・・・ぐーうぐうぐう・・・・・・」

目を開いたまま寝ておられた（汗）この人（ポケ）ある意味すごい

弟子達「（小言）ヒソヒソ・・・・・・（プクリン親方って相変わらずすごいよな・・・・・・）」

弟子達「ザワザワ・・・・・・（ああ、ホントそうだよな）」

弟子達「ヒソヒソ・・・・・・（ああやって朝は起きてるように見えて・・・・・・）」

弟子達「ザワザワ・・・・・・（実は目を開けながら寝てるんだもんな・・・・・・）」

ドルク「（すげぇな親方・・・俺はコイツ（ドゴーム）のせいでまじで眠い・・・次からそうすっかな～）」

と、考えるドルク、そんなに寝たいのか!?君は!?

ペラップ「ありがたいお言葉ありがとうございましたぁ♪」

と、ペラップがみんなに視線(しせん)を戻す

ペラップ「さあみんな♪親方様の忠告(ちゅうこく)を肝(きも)に命じるんだよ♪」

ドルク「わかるかアホォォォ!!」

と、ドルクは口から緑のエネルギーをペラップ向けた、先ほどの攻撃とは違い、
緑のレーザービームを繰り出しペラップはドゴームと同じミイラ状態となった

・・・・・・

ペラップ「さ、最後に・・・朝の誓い（ちかい）の言葉!始めッ」

バタッ

ペラップはダメージが大きいため倒れた

ちなみに壊した所はちゃんとドルクに直してもらいました。

全員「せえ～～～のっ!ひとーつ!仕事は絶対(ぜったい)さぼらなーい!、ふたーつ!脱走(だっそう)したらおしおきだ!、みっつー!みんな笑顔で明るいギルド!」

と、ギルトの誓いを言った

ペラップ「さあ、みんなっ♪仕事にかかるよ♪」

全員「おおーーーーーっ！！」

みんなバラバラに散らばった

なぜか一匹小言で何か言っていた

ドゴーム「（小声）このナエトル、親方のたぁーーーーーーーーより恐ろしい」

彼は完全にドルクの攻撃により次からこのナエトルに逆らわないほうがいいと誓う（汗）

残った二匹は

ドルク「で？俺達はなにをやればいいんだ」

と、ペラップに言う

ペラップ「ああ、お前達はこっちだ（このナエトルには逆らわないようにしよう、でもギルドの依頼（いらい）の報酬（ほうしゅう）制度は大丈夫なのか？でもあれは無理があるだろう）」

と、考えるペラップにブレイブの二匹は付いて行く

・・・・・・

地下1階

案内されたのは依頼のある掲示板だ

ペラップ「お前達は初心者だからね、まずはこの仕事をやってもらうよ♪」

ペラップは説明する

ペラップ「これは掲示板、各地のポケモン達の依頼がここに集まってるんだ、最近悪いポケモン達が増えているのは知っているよな?」

シルム「うん、なんでも時が狂い（くるい）始めた影響で悪いポケモン達も増えてるんだろ?」

ドルク「（時が狂い始めた?つまり時間か、それがおかしくなったってことか?それが原因で悪いポケモンが増えている、一体どういうことなんだ）」

ペラップ「その通り、時の影響で悪いポケモンがわんさか増えているせいか・・・・・・この掲示板も最近特に依頼が増えているのだ、また・・・・・・これも時の影響なのかどうかはわからないが・・・・・・最近各地に広がってきてるのが・・・・・・不思議のダンジョンだ」

ドルク「!?不思議の・・・・・・ダンジョン?」

するとシルムが説明する

シルム「ドルク、昨日オイラ達で遺跡のかけらを取り返したよな?

あそこも不思議のダンジョンだったんだよ、不思議のダンジョンは入るたびに地形が変わるし、落ちている道具も変わる、途中で倒れるとお金が半分なくなるし・・・・・道具も半分ぐらいなくなることがあったりして、ダンジョンの外に戻されると言う、ホント不思議な場所なんだけど・・・・・でも！行く度にいつも新しい発見があるから、探検するには本当に魅力的な場所なんだよ！」

ドルク「なるほどな～たしかに魅力的だな」

と、納得する

ペラップ「なんだ！よく知ってるじゃないか♪それなら話が早い♪依頼の場所はすべて不思議のダンジョンだからな」

と、ペラップは掲示板を見て依頼を選ぶ―（ミイラ状態だけど）

ペラップ「さて・・・・・・ではどの依頼をやってもらおうかな♪」

すると一つの依頼を見つけた

ペラップ「うん♪これがいいかな？」

と、依頼を渡される

シルム「え～なになに？・・・・・・」

依頼内容はこうだった

初めまして。私、バネブーと申します。ある日悪者に私の大事な真

珠が盗まれたんです！真珠は私にとって命、頭の上に真珠がないと私落ち着かなくてもう何もできません！そんな時！私の真珠が見つかったとの情報が！どうやら岩場に捨てられてたらしいですが・・・・・その岩場はとても危険なとこらしく・・・・・私怖くてそんな所行けませーーーーーーん！ですのでお願い、誰か岩場に行って真珠を取ってきてくれないでしょうか？探検隊のみなさまお願いします！

バネブーより

シルム「・・・・・ってこれ・・・・・ただ落し物を拾ってくるだけじゃないか！？（怒）」

と文句を言う

シルム「それよりオイラもっと冒険したいな、お宝を探したり、知らない場所を冒険したりとかさあ・・・・・」

するとペラップは一喝（いっかつ）する

ペラップ「おだまり！（怒）」

シルム「ひゃーーーっ！」

と、シルムは驚く

ペラップ「新入りは下積みが大切なんだよ！いいかい！念のためもう一度注意だよ！（怒）不思議のダンジョンは途中で倒れるとここに戻されるし・・・・・お金も半分になるし・・・・・道具も半分ぐらいなくなることがあるから気をつけるんだよ！」

ドルク「おう！わかった！シルム、基本が大事だと思うぜ俺は？」

と、シルムを後押しする

シルム「そう・・・だね・・・ごめん・・・オイラ」

ドルク「わかればいいんだ、そんじゃ行こうぜ」

シルム「わかった」

二匹は岩場へと向かった

・・・・・・

岩場入口通常湿った（しめった）岩場

シルム「ここが岩場の入口だな」

ドルク「依頼によると真珠はＢ７Ｆにあるようだな」

シルム「とても危険らしいから気をつけて行こうな」

ドルク「ああ！そうだな、シルム！がんばって行こうぜ！」

シルム「うん、がんばろうぜ！」

二匹は湿った岩場に入っていった

第４話　こいつは第２の親方だ！？ギャース！！？？ｂｙドゴーム（後書き）

シルム「あのアニメの技はないでしょう！？（汗）」

最近見てたからそうしたかったんだ♪ただし一度きり

ドルク「まあいいけどな～俺は」

いつも納得するね、君は（汗）

第5話　ポケは計画的に（前書き）

ドルク「ん？なんだこのタイトル？」

そのうちわかるよ

シルム「そのうちって（汗）」

ではどうぞ！

第5話　ポケは計画的に

湿った岩場Ｂ１Ｆ

ドルク「ふう～いい汗かいた」

と、ドルク

シルム「そうだな（汗）」

と、シルム

ほとんどのポケモンがドルク達を襲った（おそった）が

ドルクの技によりポケモン達は太刀打ち（たちうち）できずドルクにより敗北（はいぼく）

シルムも足手（あしで）まといにするわけにはいかず、岩場のポケモン達を相手した

二匹は先へと進んだ

Ｂ６Ｆ

ドルク「これで最後だ！葉っぱカッター！＆エナジーブレイカー！」

ドルクは葉っぱカッターと緑色のエネルギーを放射線状にして残ったポケモンに攻撃した

ドルク「これで終わりだな」

シルム「うん（汗）」

シルムは思った

ドルクってホントは人間じゃなんじゃないかと思った

・・・・・・

最深部

シルム「あっ！あれは！」

岩場の中央に光輝く（ひかりかがやく）ピンクのオーブがあった

シルム「これがきっとバネブーの真珠だよ！」

ドルク「これが・・・とにかく持って帰るぞ！」

二匹は岩場を脱出した

・・・・・・

ギルド地下１Ｆ

そこには依頼主のバネブーがいた

ドルク「あんたが依頼主か？」

と、聞くと

バネブー「はい！それで真珠は？」

ドルク「ああ、これだろ」

ドルクはバネブーの真珠を取り出した

バネブー「ああ！それです！どうもありがとうございます！」

バネブーは真珠を頭にのせた

バネブー「私この頭の上の真珠がなかったせいでここ最近落ち着かなくて・・・・・そこらじゅうピョンピョン跳ねまくり！おかげでもうアザだらけでしたよ」

バネブーの体にはいくつかアザがついていた

バネブー「でもそんな心配も今日からなくなります、本当にありがとうございました！」

ドルク「今度はなくすなよ」

と、ドルクは言った

バネブー「はい！もうなくさないようにします、これはお礼です受け取ってください」

ドルク達はタウリン・リゾチウム・ブロムヘキシン、そしてなんと２０００ポケももらった！

シルム「わわっ！２０００ポケ！？こ、こんな大金もらっちゃってもいいの！？」

２０００ポケは確かに大金だ

するとバネブーは

バネブー「どうぞどうぞ、真珠に比べたら安いもんですよ、では」

バネブーは帰っていった

シルム「ドルク！オイラ達いきなり大金持ちだよ！」

ドルク「それにしても、これより真珠ってそんなに価値あんのか？」

と、言う

シルム「いや安いもんっていってたし」

そこからペラップが会話に割り込む

ペラップ「お前達よくやったな♪」

するとペラップはドルク達の前へ

ペラップ「でもお金は預かっておこう」

シルム「えっ！？」

ドルク「それはどういうことだ？」

と、質問

ペラップ「ほとんどは親方様の取り分♪お前達はこれくらいかな♪」

ペラップは２０００ポケを預け、１０分の１の２００ポケをドルク達に渡した

シルム「ええ～～っ？２００ポケしかもらえないの！？ひどいよー！」

ペラップ「これがギルドのしきたりなんだよ我慢しな♪」

と、ペラップに言われた

シルム「うう・・・・・・」

ドルク「まあしゅあないか・・・シルム、元気出せよ、まあダンジョンに落ちてるポケは預けられないようだな・・・まあそのうちなんとかなっから！」

と、ドルク

・・・・・・

チリーンチリーン♪

音が聞こえる

鳴らしていたのは風鈴(ふうりん)のようなポケモン、チリーンだ

チリーン「みなさーーん！おまたせいたしましたー♪」

地下２Ｆ

みんな集まっていた

チリーン「食事の用意ができました♪晩ご飯の時間ですよーーーーー♪」

みんな「わあーーーーーーっ！！」

みんな喜び

食堂へ向かった

・・・・・・

食堂

ドルク「ガツガツ！むしゃむしゃ！ふ～らい～（も～らい）

ドゴーム「ああ！俺のグミが～！！（泣）」

席がドゴームの席だったためドルクはドゴームから取った分も食べた

ドルク「この若草(わかくさ)グミうめぇな！おかわり！」

チリーン「すごい食欲(しょくよく)ですね、ドルクさんは」

シルム「ドルクって大食い？」

と、言うシルム

ドルク「うめぇな・・・おい！スピーカー野郎、おかわり」

と、スピーカー野郎ごとドゴームにおかわりを要求（ようきゅう）

ドゴーム「もういや（泣）」

と、涙目になるドゴームであった、哀れ（あわれ）ドゴーム（汗）

・・・・・・

？？？？「ご馳走様ーー！すごくおいしかったなあ！」

？？？？「おなかがふくれたら眠くなってきたぜ」

？？？？「じゃあみんな寝るかお休みー！」

？？？？「お休みー！」

・・・・・・

ブレイブ部屋

シルム「なあドルク」

ドルク「ん？どうした？」

シルム「今日は色々あって忙しかったな、でも始めての仕事がうまくいってよかったよ、プクリンのところにお金ほとんど持っていかれちゃったのは悔しかったけど」

ドルク「まあそれは修行だからしかたねぇな・・・けどいいかシルム」

シルム「なに？」

ドルク「努力はかならず実を結ぶもんだぜ、このブレイブってチームも、希望と勇気をもってがんばる、そう思い俺がつけたんだ」

シルム「そうなんだ・・・」

ドルク「まああのバネブーに感謝させたんだ、お前嬉しいだろ？」

シルム「うん、そうだね・・・ブレイブ・・・かぁ～・・・オイラ達がんばれるかな？」

すると、

と、言う

ドルク「がんばれるさ！俺達が努力すればな」

シルム「そうだね・・・ふあぁぁ眠くなってきちゃった、オイラもう寝るよ、また明日がんばろうな」

ドルク「おう！」

シルム「お休みドルク」

ドルク「お休みシルム」

二匹はねた

・・・・・・

次の朝・・・・・・

ドゴーム「おはようございます」

と、トーンを低くしていった

ドルク「おう！」

するとドルクが起きた

ドルク「朝だぜシルム」

シルム「う～ん後５分」

ドルク「親方のハイパーボイスが来るぞ」

と、半端(はんぱ)脅し（おどし）のような用件で言った

シルム「お、起きなきゃ」

シルム起床(きしょう)

今日の仕事は

ドルクに

ある力を呼び起こす

第5話　ポケは計画的に（後書き）

シルム「ドゴームが（汗）」

ドルクのス○ー○○○○○○カ○の被害受けちゃったからね♪

シルム「ってかなんで作者はそんなににこやかなの！？」

細かいことは気にしな～い

シルム「それにしても、ドルクって大食いなんだ」

まあ、ドッジとかも大食いだしね

ドッジ「呼んだッスか？」

いや呼んでないし、なんでここに？

ドッジ「ちょっと様子見ッス」

君はだいたい現れてホントにＫＹだね（汗）

ドッジ「だからＫＹってなんなんスか！（怒）」

シルム「落ち着いてドッジ先輩！？作者！次回は！」

次回はあれが発動します

シルム「あれってなんだー！？」

第6話　謎の力（前書き）

うへぇ～↑エナジーバスターで黒コゲ

ドルク「さあ～早くやれ（怒）」↑ド〇

はい～（泣）

第6話　謎の力

今日も一日が始まった

みんな『3つ！みんな笑顔で明るいギルド！』

ペラップ「さあみんなっ♪仕事にかかるよ♪」

ドルク「おおーーーーー！！」

ドガーン！！

みんな「（汗）」

ペラップはドルクのエナジーバスター（弱）により撃沈

ドルク「ふふふ（黒）」

なんか黒いですよドルクさん（汗）

……

今日は何をやるのか

地下1階

シルム「あれ？この前はたしかあっちの掲示板の仕事をしたような」

そう、昨日は左の方だが

今度は右の掲示板だ

ペラップ「そうだ♪今日はこっちの仕事をやってもらうよ♪」

シルム「あっちの掲示板とはどう違うんだ？」

とシルムは質問する

ペラップ「よく見るのだ♪」

見ると

シルム「あっ！ドルク見ろよ！」

ドルク「色んなポケモンの絵があるな～」

シルム「みんなカッコイイなあ！有名な探険家なのかな」

ドルク「おい！鳥（ペラップ）こいつらはなんだ？」

ペラップ「（鳥って（汗）逆らえば何されるか（汗））」

ペラップはドルクになにやらされたか体験した（朝の攻撃）

ペラップ「えーここにあるのは……全員お尋ね者で、みな悪いこと

をして指名手配されてる奴らだ」

シルム「ええっ！！お　お尋ね者～～～～～～～～～っ！？」

シルムは驚く

ペラップ「そう、それゆえ彼らには賞金が掛けられてる、だから捕まえればお金がもらえるんだけど、でも、凶悪なポケモンが多いからねぇ……みんな手を焼いてるんだよ」

ドルク「なるほどな、そんじゃあ殺るか♪」

なぜかドルクは上機嫌だ

ペラップ「（やばい！？やばいよこの子！？）」

ドルク「ふふふ（黒）」

マジ黒いですよドルクさん（汗）

シルム「そんなの絶対無理だよう！」

シルムが言うが

ドルク「どうせならいいんじゃないか♪お金もらえるからな～♪（黒）」

ペラップ「（○だ！？この子ド○だ！？やばいよ！？）」

ペラップがたじたじだった

ペラップ「ま…まだ色々だから（汗）この中から弱そうな奴を選んで懲らしめてくれ♪」

ドルク「O～K～♪（黒）」

シルム「（オイラなんでドルクとパートナーになっちゃったんだろう）」

シルムは後悔した

この悪魔亀ドル君がもはや怖く思えた

しかも腹黒かった（汗）

ドルク「そんじゃあ選ぶとするか…」

シルム「でもすぐには決められないよ」

と、シルムが止める

ドルク「そうか…そんじゃあその前に準備してぇな」

そう、やはり準備も必要だ

ペラップ「それだったら誰か施設を案内させよう（汗）」

ペラップはそう言った

そして呼んだ相手は

ペラップ「おーい！ビッパ！ビッパ！？」

ビッパ「はいーーーーーっ！」

すると地下二階につなぐはしごからビーバーのようなポケモンが現れた

ビッパ「はあはあはあはあ……およびでしょうかー！」

疲れた表情をしてるが（汗）

ペラップ「おおビッパ♪こい…いやこの人達のことはもう知ってるよな♪最近入った新入りだ広場にこの人たちを案内してやってくれ♪」

ペラップは冷や汗をかきながらビッパにいった

ビッパ「（大丈夫ゲスか！？マジで怖いんでゲス！？）はいーーーっ！了解でゲス！！」

ビッパも心の中でそう思った

そりゃあドル君があれじゃねぇ～（汗）

ペラップ「こいつはビッパ、弟子の一匹だ、ビッパの言うことをちゃんと聞いて行動するんだぞ、じゃあな♪」

ペラップは去った

ドルク「大丈夫ですか？なんか疲れているようだが？」

ビッパ「（ハッ！？この子、あっしの事を考えて）あ…ありがとうでゲス」

ドルクはドゴームとペラップ以外は優しいのだ

ビッパ「ドルク君は優しいゲスね」

ドルク「まあ、あの鳥とスピーカー野郎には優しくはしねぇ～けどな」

ドルクの中では

ペラップ&ドゴーム＝ドルクのターゲット

ということだ

とにかく3匹は広場へと向かった

まずはグレッグルのところだが

本人は何をやっているのかわからない

自分の後ろのつぼをいつもいじってなにかをやってるみたいだ

他は見てきたものばかりなので省略

ビッパ「じゃ、次はギルドの外を案内するでゲスね」

3匹はギルドの外へ向かった

十字路から左へ向かった

……

ポケモン広場

ビッパ「ここがポケモン達の広場、トレジャータウンでゲス」

シルム「ああ、トレジャータウンのことならオイラもわかるよ」

シルムはトレジャータウンのことはわかるらしい

ドルク「そんじゃあまずは俺たちの後ろの幽霊のはなんだ?」

それはあの同じポケモンの形の建物があった

顔がどくろの骨のようなポケモン、ヨマワルがいる建物だ

シルム「まずあそこはヨマワル銀行、お金が預けられる」

次は丸い突起物のような黄色い建物だ

シルム「そしてあそこがエレキブル連結店、技の連結ができるんだけど……今日はエレキブルがいないみたいだな」

そしてその先

シルム「ここはカクレオンのお店、道具を買ったり売ったりできるんだ」

ドルク「な～る～」

次はカンガルーのような茶色のポケモンのいる建物だ

シルム「そしてガルーラの倉庫、ここに道具を預ければ絶対になくならない、大切な道具があったら冒険する前にここに預ける、探検隊の基本だよね、大体こんな感じかな」

ビッパ「中々詳しいゲスね、それなら安心でゲス、じゃあ一通り準備ができたらあっしに声掛けるでゲス、そしたらお尋ね者を選ぶのあっしも手伝うでゲスよ」

ドルク「ありがとな、ビッパは優しいな」

するとビッパのほほが赤くなる

ビッパ「そ、そんな……照れるでゲスよ……ぽ……／／／／、じゃああっしはギルドの地下1階で待ってるでゲスよ」

ビッパはギルドへと帰った

シルム「じゃあ行こうか」

ドルク「そうだな、まずは買い物して、どんな道具があるか見てみるか」

シルム「（道具なしだと十分強いと思うんだけど（汗））」

細かいことはきにしない

二匹はカクレオンのお店へと向かった

とりあえず他のポケモンとかに挨拶した

まあ悪くねぇな…ムードメーカーなかに（ヘイガニ）にハイテンションなキマワリ姉さん、それに食べられそうになるケムッソ、大丈夫なのか？

そんなこんなで俺たちはカクレオンの店までやってきた

とりあえず何か買うか…っていわれても金がねぇ～な…そうだ！

俺は前の依頼でもらったタウリンなどを売った、オレソはなにか役にたちそうだな、偽者のオレンの実だから、そうとうなにか効果があるだろう（敵に投げて食べさせたらどうなるかだな）

とりあえず持ち物いっぱいに買った、ふう～いい買い物したな

シルム「そんじゃあ行こうか」

ドルク「そうだな」

その時

?:?:?「カクレオンさ～ん」

二匹のポケモンが俺たちの方にやってきた

カクレオン「おお～！マリルちゃんにルリリちゃん！いらっしゃ～い♪」

ルリリ「すみません、リンゴください」

カクレオン「はいよ！」

マリル達はカクレオンのお店でリンゴを買った

マリル「ありがとう！カクレオンさん！」

カクレオン「まいど～！いつもえらいね～♪」

マリル達は去った

ドルク「なあ？あの二匹は？」

ドルクがカクレオンに質問した

カクレオン「いやねあの二匹は兄妹なんですけど……最近お母さんの具合が悪いんで代わりにああやって買い物してるんですよ、いやホントまだ幼いのにエライですよね～♪」

ドルク「そうだな」

するとマリル達が勢いで戻ってきた

マリル「カクレオンさ～ん！」

カクレオン「おや！どうした？あわてて戻ってきて」

ルリリ「リンゴが一つ多いです！」

どうやらリンゴが一つ多いらしい

マリル「僕達こんなに多く買ってないです」

カクレオン「ああ、それは私からのおまけだよ、二匹で仲良く分けて食べるんだよ」

どうやらカクレオンのおまけらしい

ルリリ「わーい！ありがとう！カクレオンさん！」

カクレオン「いやいや、気をつけて帰るんだよ～♪」

二匹が帰ろうとしたその時

すってん

ルリリ「イテッ！」

ドルクはそれを見て落ちたリンゴを拾った

ルリリ「す、すみません、ありがとうございます」

ドルク「ああ、それより大丈夫か？」

ルリリ「はい、大丈夫です」

ドルク「ほら」

ドルクはルリリにリンゴを返した

その時！

ドルク「（！？な…なんだ？今のは？め、めまいか？）」

その時彼の脳内に閃光が走る

た……助けてっ！！

それは助けを呼ぶ声だった

ドルク「（！？）」

ドルク「（な…なんだ今のは！？たしかに助けの声が）」

あたりを見渡すドルク

ドルク「な…なあ？今のは君が言ったのか？」

ルリリ「？どうかしたんですか？」

マリル「おーいルリリ！どうしたんだ早く来いよー！」

ルリリ「うん今行くよ！お兄ちゃん！」

ドルクに挨拶し

マリル「大丈夫か？」

ルリリ「うん！」

マリル「買い物も終わったし…後は落し物を探すだけだ、早く行こう」

ルリリ「うん！お兄ちゃん！」

二匹は去った

シルム「ウフフ、かわいいなあの二匹…ん？ドルクどうした？」

ドルク「さっき助けてって言う声が聞こえなかったか？」

シルム「いや、オイラ何も聞こえなかったよ？なあカクレオン、さ

っきなにか聞こえた？」

すると

カクレオン「いや…なにも……」

カクレオン（紫）「私にも何も聞こえなかったですよ？」

シルム「カクレオン達も聞こえなかったみたいだぜ、たぶん気のせいだよドルク」

ドルク「（いや、あれは気のせいじゃねぇ、たしかに聞こえた、あの時の声）」

た……助けてっ！！

ドルク「（あの声は間違いない、あれはルリリの声だ！）」

シルム「なにボーっとしてるんだよ、早く行こう！ドルク！」

ドルク「あ…ああ」

二匹はギルドへと向かった

……

トレジャータウン広場

そこにはマリルとルリリの他に一匹のポケモンがいた

像の鼻のような短い鼻に、上半身が黄色、下半身が茶色のポケモンだ

催眠(さいみん)ポケモンのスリープだ

シルム「あっ！あれは？」

ルリリ「わ～い！」

マリル「ありがとうございます！」

スリープ「いやいや、お安い御用ですよ」

そこに二匹が近づく

シルム「どうしたの？」

すると

ルリリ「あっ！さっきの！」

ドルク「よ」

マリル「僕達前に大切な物を落としちゃって……」

ドルク「落し物？」

どうやらマリル達は大切な物をなくしたらしい

マリル「それでずっと探してたんですが、中々見つからなくて、でも」

ドルク「でも？」

マリル「でも！そしたらこのスリープさんが、その落し物なら何処かで見たことがあるかもしれないって！それで一緒に探してくれるって言うんです、僕達もう嬉しくって！」

シルム「そっかあ！それはよかったなあ！」

ドルク「よかったな」

二匹は励ました

ルリリ「ありがとう！スリープさん！」

スリープ「いやいや、君達みたいな幼い子が困ってるのを見たらほっとけないですよ、早く探しに行きましょう！」

マリル・ルリリ「うん！」

3匹は立ち去ろうとするが

ドン

スリープがドルクにぶつかる

スリープ「おっと、これは失礼」

ドルク「ああ、すまない」

スリープが立ち去ったその時！

ドルク「（うっ…こ、これは！？）」

シルム「スリープって親切なポケモンだよな、関心しちゃうなあ、世の中悪いポケモンが増えてるっていうのに、中々できないよな」

ドルク「（ま…まただ……また…あのめまいだ……今度は一体なんだ！？）」

再び閃光が走った

なんとこれはスリープとルリリだ

スリープ「言うこと聞かないと……痛い目にあわせるぞっ！」

ドルク「（あれは！？）」

ルリリ「た……助けてっ！！」

そこで映像が途切れた

ドルク「（い……今のは！？）」

シルム「落し物、早く見つかるといいよな…ん？どうした？ドルク、そんな深刻な顔をして」

ドルク「実は…話があるいいか？」

……

シルム「ええ～～～っ？！さっきめまいが起こって、ルリリがスリープに襲われる所を見たって！！？」

ドルク「ああ、なんか俺にもよくわからないんだ、だが早くルリリを助けに行くぞ！」

そう、ドルク本人とかもわからない能力

シルム「それは大変だよ！大変だけど……う～んでも、ドルクのこと信用してないわけじゃないんだけど、やっぱりオイラ信じられないよ、だってスリープはすごく親切なポケモンだったじゃないか？オイラさっき3匹が行くのをずっと見送ってたけど、すごく仲よさそうにしてたよ？」

たしかに確信がない

スリープが襲うあれは一体なんだったのか

それはドルクには知らないなにかがあるってことになる

シルム「ドルクはたぶん疲れてるんじゃないかなあ、それで悪い夢でも見たのかもしれないよ？」

ドルク「そ…そうか（汗）（でもあれは夢だったのか？たしかにスリープは見た目が悪いってわけじゃねぇーな）」

シルム「それにオイラ達修行中の身だから勝手なことはできないよ、たしかにちょっと気にはなるけどさ、でもとにかく今はギルドの仕事をしなくちゃ」

ドルク「そ…そうだな（汗）そんじゃあビッパのところに行くか？」

シルム「そうだね」

……

ギルド地下1階

ビッパ「おっ？冒険の準備は整ったでゲスか？」

ドルク「ああ、早速依頼を選ぶとするか」

ビッパ「それじゃ一緒にお尋ね者を選ぶでゲス」

というわけでビッパと一緒に選ぶことに

ビッパ「さてとこの中から選ぶでゲスよ」

シルム「ええ～っと、どれ選べばいいんだろう?」

ビッパ「コホン、じゃここは先輩として一つあっしが選んであげるでゲス」

ドルク「いいのを頼んだぜ」

シルム「あんまり怖いの選ばないでね」

ビッパ「わかってるでゲスよ、ええと……どれに……」

ビッパが選んでいるその時

ビービービービー

???「情報を更新します!危ないですので下がってください、情報を更新します!危ないですので下がってください」

3匹は下がった

ドルク「(電車かよ)」

というつっこみはなしの方向で

シルム「な、なんだ?何が起こってるんだ?」

ビッパ「ああ、これは情報の入れ替えでゲスよ」

シルム「情報の入れ替え？」

バカッ

シルム「ひゃあーー！！壁が回転して裏側になっちゃったぞ？！！」

ドルク「なあ？これは一体どういうことだ？」

ビッパが説明した

ビッパ「お尋ね者ポスターや掲示板はこのように壁が回転式になってるでゲス、それで壁をひっくりがえしている間に、ダグトリオというポケモンが情報を書き換えてるんでゲス」

シルム「ダグトリオ？」

ディグタと同じで3つになったポケモンがダグトリオだ

ダグトリオの役目は情報を新しくするのが役目だ

彼らはトンネルを掘ってギルドまで進み、壁を回転して新しい情報に書き換えるらしい

ビッパ「地味だけど、とても重要な仕事なんでゲス、だからダグトリオもこの仕事に誇りを持ってるんでゲスよ」

とまあこんな感じだ

シルム「ふうん、そうなんだ」

ダグトリオ「更新終了！危ないですからあとに下がってご注意ください！」

ドルク「だから！電車のアナウンスか！お前らは！？」

ドルクはつっこんだ

なんとか更新が終わったようだ

ばたっ！

ビッパ「さあ情報が新しくなったでゲス」

ドルク「そんじゃ改めて探すか…なっ！？」

ドルクは驚いていた

そしてシルムは真剣そうに震えていた

ビッパ「二人とも？どうしたんでゲスか？急に驚いたり、震えだして」

なぜなのか？

それは

掲示板には

シルム「ド…ドルク……」

ドルク「ああ、あの左上のところだな」

いつになく二匹は真剣だった

なんとスリープの絵が描かれていた

ドルク「やっぱりあいつは！」

シルム「お尋ね者だったんだ！！」

ドルク「急いだほうがいい！ビッパ！この左上のお尋ね者は俺たちが引き受ける！誰も手を出すなよ！」

そう言うと二匹は全速力で駆け出した

ビッパ「えっ！？ちょ！？急にどうしたんでゲスか！？何処に行くんでゲスか！！？」

ビッパは一人訳がわからず混乱していた

……

十字路

シルム「あっ！あそこにマリルが！！」

二匹はマリルに向かって駆け出した

ドルク「マリル！どうしたんだ？ルリリとスリープはどうした？」

マリル「そう！そうなんです！！あの後３匹で落し物を探してたんだけど、気がついたらスリープさんがルリリを何処かに連れてっちゃって、呼んでも戻ってこないし、それで不安になってきちゃって」

ドルク「それで！二匹は何処に行った！？」

マリル「こ、こっちです！」

二匹はマリルの案内でルリリが連れ去った場所へと向かった

ドルク「二匹はこっちの方に消えてったんだな？」

マリル「はい」

シルム「夢の中で見たスリープとルリリは、山の中の場所にいたって言ったよな？」

ドルク「ああ、どうやらここのダンジョンだな」

シルム「やっぱり二匹はこの先にいそうな気がする」

ドルク「行くぞ！シルム！探検隊ブレイブ！今からお尋ね者スリープを逮捕しに行ってくる、マリルはここにいろ」

マリル「気をつけてください」

二匹は山へと入った

第6話　謎の力（後書き）

やっと終わった～

ドルク「さて、次回はもちろん暴れさせてもらうぜ」

ご自由に（汗）

第7話　撃退！変態野朗を倒せ（前書き）

シルム「もうタイトルが（汗）

さあてスリープにも被害にあってもらおうか（黒）

シルム「もう勘弁して（泣）」

ドルク「シルム、大丈夫だ、どうせやるつもりだったしな～♪」

シルム「逆にドルクが怖いよ～（泣）」

ドルク「細かいことは気にするな♪では第7話をどうぞ♪」

第7話　撃退！変態野朗を倒せ

ドルク達はまたチートな感じで進んでいた（汗）

ドルク「ふぅ～やっぱいいな～こりゃ♪」

シルム「この状況を楽しんでるのはドルクだけだよ（汗）」

まあ二匹はトゲトゲ山のポケモンを撃破していた

まあそのほとんどが悪魔亀ドル君によってだが（汗）

そんなこんなで頂上までついた

頂上

ルリリ「あれ？行き止まり……」

ルリリはスリープに向く

ルリリ「ねえスリープさん落し物は？落し物は何処にあるの？」

するとスリープは

スリープ「ごめんな、落し物はここにはないんだよ」

ルリリ「えっ？……お兄ちゃんは？お兄ちゃんは後から来るんでしょ？」

スリープ「いやお兄ちゃんも来ないんだ」

スリープは衝撃の言葉をルリリに話す

スリープ「実はお前のことを……だましてたのさ」

ルリリ「ええっ！？」

ルリリはだまされたことに驚く

スリープ「それよりちょっと頼みがあるんだ、お前の真後ろに小さな穴があるだろ？」

ルリリの真後ろにはルリリには入れる小さな穴があった

スリープ「あの穴の奥には、実はある盗賊団が財宝を隠したんじゃないかという噂があるんだ、ただ俺の体じゃ大きすぎて穴の中には入れねぇ、だから……小さなお前をここに連れてきたというわけさ」

どうやらスリープの目的は最初からルリリだったのだ

スリープ「大丈夫、言うことさえ聞いてくれれば、ちゃんと返してやるからよ」

ルリリ「ええーっ！！」

スリープ「さあ　行くんだ！」

スリープがルリリに一歩近づく

スリープ「穴の中に入って、財宝を取って来い！」

ルリリ「うわあああああんお兄ちゃあああん！！」

ルリリが逃げるが

スリープ「こっ…こらっ！待て！」

スリープに阻まれ逃げられない

スリープ「まったく！ちゃんと返してやるって言ってるだろっ！言うこと聞かないと、痛い目に合わせるぞっ！」

ルリリ「た……助けてっ！！」

？？？「伏せろ！ルリリ！」

ルリリ「えっ？」

ルリリは伏せた

すると何処からかビームみたいなものがスリープに直撃した

スリープ「ぎゃあああああああああ！！」

スリープは飛ばされ小さな穴の壁に激突

？？？「大丈夫か？」

ルリリ「えっ？」

なんとエナジーバスターを撃ったドルクだった

ドルク「どうやら無事みたいだな」

シルム「よかった～」

スリープ「ううー」

スリープはなんとか起き上がる

シルム「そこまでた！お尋ね者スリープ！」

スリープ「なっ！？なぜここが！？しかも不意打ちとは」

ドルク「俺達は探検隊ブレイブ」

シルム「悪い奴は見逃さない！」

ドルク「正義の鉄槌でテメーを倒す！」

ドルクが構える

スリープ「た、探検隊だとっ！？じゃあ俺を捕まえに」

だがシルムが震える

スリープ「あ、あれ？もしかして震えてるの？お前」

ドルクがシルムに向く

シルムは震えていた

スリープ「そうかわかったぞ、お前達探検隊といってもまだ新米なんだな」

シルム「ううっ……」

たしかに返す言葉がない

スリープ「フフッたしかに俺はお尋ね者だよ、でもお前達にできるのかな？そのお尋ね者を、捕まえることが！」

シルム「ううっ……」

まだ震えてるシルム

するとドルクは

ドルク「な～に震えてるんだよ♪」

バシッ

なんとまるで励ますようにシルムの肩をたたいた

シルム「ドルク？」

ドルク「俺もいるんだぜ？気合入れろよ♪」

なぜか楽しげなんですが（汗）

シルム「そ…そうだね！オイラは…」

シルムはスリープにいう

シルム「お前みたいな悪い奴に負けるわけにはいかない！」

だがスリープは

スリープ「ははははは！今まで色んな探検隊に襲われてきたが、こんな弱そうな探検隊は初めて見たよ！」

シルム「ううっ……」

ブチッ

なにかが切れた音が聞こえた

ドルク「おい、そこの変態、もう一度言ってみろ」

ドルクが冷静にいう

スリープ「あ？こんな弱そうな探検隊は初めて見たよ！って言ったんだ！それがなんだ？」

ドルク「そうか…なら…その探検隊にやられたら…」

ドルクが構える

ドルク「どうなるか教えてやろうか！！（怒）」

ドルクがブチ切れた

スリープ「なっ！？なんだこのプレッシャーは！？」

ドルク「シルム、しばられの種をあいつの口に入れろ」

シルム「ドルク…」

シルムは

シルム「わかった！食らえ！」

スリープに向けてしばられの種を投げた

スリープ「ふんこんな種で」

だが

ドルク「はーいそこの変態さん♪ちゃーんと口に入れましょうね！！」

ドルクは勢いよく種にパンチしてスリープの口に入れた

すると

スリープ「ぎゃあああああああ！！？？」

すぐに効果が発動

スリープは動かなくなった

ドルク「それじゃあドーピー♪3分クッキング♪」

たららたたた♪

たららたたた♪

たたたた

いいい！！」

ドルク「シルム～♪次は火の粉やってくれ～♪」

シルム「う…うん（汗）」

シルムは火の粉をスリープに向けてはなった

すると火力は増し

スリープ「ぎゃあああああああああああ！！」

スリープにさらにダメージ

ドルク「そして今度はメテオを変態にぶちかまし～す♪」

ドルクはメテオの魔法を変態ことスリープに向けて攻撃

スリープの頭上から、何発もある隕石がスリープに向かっていた

ドカーーーーーーン！！

スリープはメテオを数発食らった

スリープ「ぎゃあああああああああああああ！！！！」

ドルク「そして最後は…フルボッコタ～イムで変態をフルボッコにして完成で～す♪」

そしてドルクは口から緑のエネルギーをためて

ドルク「エナジーバスター！！」

エナジーバスターで攻撃

シルム「オイラはどうしたらいいの（汗）」

シルムはなにもやることがなかった

ドルク「ああ、シルムは俺と一緒に変態をフルボッコだ」

シルム「そう（汗）それじゃあオイラも火の粉ラッシュ」

シルムは火の粉を数発連続で攻撃

ドルク「速攻魔法発動！バーサーカーソウル！！」

と、某カードゲームのフルボッコチートカードの名を言った

ドルク「ドロー！モンスターカード！」

スリープ「ぎゃあああああああああああああああ！！！！！！！」

トゲトゲ山には変態の悲鳴だけがこだました

……

数分後

保安官のポケモン、ジバコイルにより
変態（スリープ）は御用となった

一応死んでません（汗）

アンテナのようなものに、手は磁石のようなポケモンがジバコイル
保安官だ

ジバコイル「コノタビハオカゲサマデ、オタズネモノヲタイホスル
コトガデキマシタ！ゴキョウリョクカンシャイタシマス！」

ドルク「いや、俺達は探検隊のことをしたまでだ」

ピポピポとサイレンをならすジバコイル

ジバコイル「ソウデスカ、ショウキンハギルドニオクッテオキマス、
アリガトウゴザイマシタ！」

スリープに向いて

ジバコイル「サア、クルンダ」

スリープ「トホホ」

ボロボロになりながらスリープは連れてかれた

すると

マリル「ルリリ！」

マリルがやってきた

ルリリ「お、お兄ちゃん！」

ルリリとマリルはかけた

ルリリ「うわあ～～～～～～～～ん！お兄ちゃ～～～～～～～～ん！怖かったよ～～～～～～～～！（泣）」

マリル「ルリリ大丈夫か？怪我はないのか？」

シルム「大丈夫、何処も怪我はないよ」

シルムが言った

マリル「ホント？」

ドルク「ああ、何処もないぜ」

マリル「よかった！本当によかった！ルリリ、ルリリー！」

これにて一件落着となった

ギルドから戻って賞金３００ポケをもらった

だが！？

ドルク「もう少し欲しいな～（黒）」

笑顔でドルクはペラップをお…じゃなくておねだりした

ペラップ「わ…わかりました～（泣）」

なんと６００ポケをもらった

ドルクは本当に何者!?

まあそんなこんなで１日は終わった

だがドルクのあの能力は一体

未来のことも見えるこの能力

はたして

……

嵐の夜

俺はシルムに時の歯車のことを教えられた

時の影響はこのアイテムがとられるとやばいらしい

だが…なんかな～

……

ある森

一匹のポケモンが駆け出していった

その森の中央に時の歯車があった

青く歯車のようだが

これが時の歯車だ

そのポケモンが時の歯車に近づく

？？？？「初めて見たが、これが……そうなのか」

その声はしぶい声だった

？？？？「ついに見つけたぞ！時の歯車を！！まずは……一つ目！！」

そのポケモンは時の歯車を取っていった

するとその森の時が止まった

第7話　撃退！変態野朗を倒せ（後書き）

あ～やっとだよ

ドルク「あ～楽しかった～♪」

シルム「楽しんでるのはドルクだけだよ（汗）」

だって（汗）

ドルク「さ～て、次回も楽しみにしてろよ♪」

第8話　初めての探検と新たな仲間（前書き）

シルム「久しぶりの更新だあ！」

ドルク「遅い（怒）」

ごめん（汗）今回は新たに仲間が加わるけど、それがなんとコラボキャラなんだよこれが

シルム「えっ！じゃあついにオイラ達にもコラボが！」

ドルク「おお！で？誰なんだ？」

ドルクが知っている人物

ドルク「アイツか？」

シルム「一体誰なんだろう？」

第8話　初めての探検と新たな仲間

よっ！

俺はナエトルのドルクだ！

探検隊の方は順調だぜ♪

見張り番もこなして俺達ブレイブはがんばっている

さ～て、今回はどんな風になるかだな♪（黒）

……

ペラップ「え～今日はみんなに伝えたいことがある」

ん？伝えたいこと？

一体なんだ？

ペラップ「ここから遠く北東に行ったその奥にキザキの森という場所があるのだがそのキザギの森のときがどうやら止まってしまったらしいのだ」

これにはみんなが驚いていた

時が…止まった？

ペラップ「そうだ」

ペラップが説明した

ペラップ「時が止まったキザキの森は、風もなく、雲も動かず、葉っぱについた水滴も落ちず、ただその場でたたずむのみ、そう、キザキの森は時間そのものが停止してしまったらしいのだ」

そうペラップは説明してくれた

さすがギルド一の情報屋だな

原因は時の歯車が何者かによって盗まれたからだ

時の歯車…たしかシルムが前話したものか

まあそれはさておき

……

今日俺達は探検隊らしい仕事をやることになった

今回調査するのは…トレジャータウンから北東にある滝の調査を頼まれた

とりあえず俺達は準備をしにいった

地下1階に来たとき

チリーン「あっ！ドルクさん！シルムさん！」

呼んでいたのはチリーンだ

なにやってんだ？

チリーン「私今日からここで編成所を始めたんです」

編成所とはどうやら仲間を預けたり連れて行ったりのやつらしい

たしかに仲間が俺達二人しかいないからな～

そこでチリーンは俺達ブレイブに友情のベルを鳴らしてもらい

これで俺達に仲間を作れるようにはなった

ドルク「ありがとな」

チリーン「いいえ、それじゃあ調査がんばってください♪」

シルム「うん！」

俺達は準備してから滝へと向かった

だがここで十字路にさしかかったときに何か穴があった

ドルク「なんだ？」

しかも階段があった

看板を俺達は見た

シルム「なになに…パッチールカフェ、一攫千金！夢とロマンの店、もうすぐオープン！だって」

ドルク「おお！そんじゃあ入ってみようぜ♪」

シルム「でももうすぐオープンって書いてあるからまた今度来て見よう」

ドルク「そうだな、じゃあ準備してからいくか」

俺はその前にガラガラ道場がリニューアルオープンするとヤルキモノがいっていたので先にガラガラ道場に行った

……

そこには恐竜のような白い頭に骨を持っている奴がいた

こいつがガラガラだな

ガラガラ「……きゃ…客だ…つ、ついに…客が…きただあああああああああーーーーーーーーーーーーーっ！！」

ドルク「うっせぇ！！（怒）」

俺は遠慮なくエナジーバスターでガラガラを倒した

シルム「ちょっ！？ドルク！？」

……

ガラガラ「いや～すまないだあ、初めての客が来たからつい」

ガラガラは照れていた

ドルク「まあとりあえず来たが、説明いいか？」

ガラガラ「そうだあよ！ここは探検隊を鍛えるための道場だあよ！」

とりあえず一通り説明してくれた

まあとりあえず無理はせずにがんばってみるか♪

俺達はその後道場で修業してから

準備をして俺達は滝へと向かった

……

滝

シルム「ここが何か秘密があるという滝か」

シルムが滝に触れると

シルムは押し返された

シルム「わわっ！！」

ドルク「大丈夫か？」

俺はシルムに声をかけた

シルム「大丈夫、水の勢いがすごいな！ドルクも滝のそばにたってごらん」」

俺は滝のそばまで行った

たしかにすごい勢いだな…って

ドルク「わわっ！」

すげぇ…ん？

またか！

くっ！

……

ん？これは今の滝か…それにあのシルエットのポケモンは一体？

滝に入ったぞ？

！？滝の中に洞窟か！？

……

ここで映像は終わったが

またか！

今度はなんだ！

……

今度は別のポケモンのようだな、しかも同じだ

あのポケモンと同じように入ったが

まさか！

……

二度も映像が出るとはな

一体？

シルム「ん？どうしたの？ドルク？」

ドルク「ああ実はな」

俺はシルムにまたあの夢のようなものを見たと説明した

シルム「今度は一匹のポケモンがこの滝につっこんでいって、さらにまた別のポケモンがこの滝につっこんでいったんだって!?しかも滝の裏側は洞窟に通じてるんだって!?」

ドルク「ああ、もしそうならこの滝をつっこめば行けるとは思うが？」

本当にそうかもしれないな

そうならあの映像は写らないはずだ

だがシルムは

シルム「うーん、滝のいきおいはこのとおりすごいし、もし滝の裏側になにもなく、ただの壁だったら、そしてオイラ達そんなところにつっこんだら」

ドルク「まあペチャンコになるだろ、でも安心しろ、俺の魔法や技でなんとか切り抜ける！大丈夫だ！俺を信じろ！」

俺はあらんかぎり言った

確認しないとわからないものだ

するとシルムは

シルム「……わかった、オイラドルクを信じる！ドルクを信じるよ

！」

ドルク「よーし！それでこそだ！それじゃあ俺につかまれ」

俺はシルムを抱えたまま滝から距離を離した

ドルク「しっかりつかまってろよ！」

シルム「うん！勇気を振り絞るんだ！」

ドルク「そうだ！それでこそだ！」

俺は深呼吸をして、周りに葉の風をあらわした

俺の技、葉の風をまとい

そしてつっこむ！

ドルク「行くぜ！リフネドジェット！！」

俺は助走をつけて滝へとつっこんでいった

……

そこから俺達は滝の中へと入った

シルム「イタタタタ」

ドルク「大丈夫か？」

俺はシルムに声を掛ける

シルム「大丈夫だよ、これは！？」

どうやら俺の正解のようだ

シルム「やった！洞窟だ！やっぱりドルクは正しかったんだ！」

これで俺達は洞窟へと入れた

とりあえず行くか！

俺達は洞窟へと入った

……

シルム「それにしてもすごいな～滝の中にダンジョンがあるなんて」

まだシルムは目をキラキラしていた

まああこがれは誰ももってるからな～

そんな俺達がある階に差し掛かると

シルム「ん？誰か戦ってる！」

それは

？？？？「ファイガ！」

数匹相手に苦戦しているポケモンがいた

ふさふさした毛にしっぽ、顔がかわいいポケモンだ

進化ポケモンのイーブイだ

だがそのイーブイは銀色だった

ドルク「こいつは！映像で見たやつだ！」

シルム「ええーーーー！？」

ドルク「助けるぞ！」

シルム「えっ！？ちょっと待って！」

俺はそのポケモンの元に駆け出した

……

？？？？「どうしよう、僕の魔力もあまりないし、なんとかしないと」

そんな中迫るポケモン達

そして逃げ場がない銀イーブイ

絶体絶命の大ピンチ
だがその時！
ドルク「アルテマ！！」
なんとドルクが助けに来た
ドルク「大丈夫か？」
すると銀イーブイは
イーブイ「はい！助かりました！お願いがあるのですが残りのポケモン達を懲らしめるの手伝ってくれますか？」
という銀イーブイ
とうぜん答えは
ドルク「もちろんだ、行くぞ…って」
イーブイ「僕はソウといいます」
ドルク「ソウか、俺はドルクだ」
ソウと呼ばれたイーブイがなにかを詠唱した
すると
ドルク「おお！それじゃあ俺もやるぜ！」

ドルクも詠唱して

ドルク・ソウ「Wアルテマ！！」

二匹の最強呪文により

数秒後彼らはやられた（汗）

……

シルム「すごい（汗）」

ドルク「はあ～とにかく先に進むか」

俺達は行こうとしたが

ソウ「待ってください！」

ソウが呼び止めた

ドルク「なんだ？」

俺は声を掛けた

すると

ソウ「僕を助けていただいた師匠とどこまでもついていきたいです！」

そう言った

シルム「えっ！？師匠って！？」

俺の事だろ、まあつまりは

ソウ「僕を弟子にしてください！」

そうお願いしてきた

俺の答えは

ドルク「一緒にいくか♪俺もまだまだだがお前といるとなんか楽しそうだしな♪」

シルム「ええっ！？」

ソウ「ありがとうございます師匠！」

こうして俺は新たに

銀イーブイのソウを仲間にして、洞窟を進んだ

第8話　初めての探検と新たな仲間（後書き）

はい！というわけでまたまたこちらでも出しました！ライトの冒険から、イーブイのソウ君が来てくれました！

ソウ「イーブイのソウです♪」

ドルク「ついに俺とソウとのコラボか♪」

シルム「ねえ？作者さん？あの二人なにか関係があるの？」

悪魔亀大王とその弟子

シルム「えええええええええええええええええええええっ！！！？」

ソウ「シルムさんもこれからもよろしくお願いしますね♪」

シルム「う…うん（オイラどうなるんだろう（汗））」

第9話　流されて温泉（前書き）

ドルク「ん？なんか早いな」

そうしないと攻撃するでしょ？

ドルク「まあ早いならよかった」

ソウ「それじゃあ第9話をどうぞ♪」

第9話　流されて温泉

洞窟の最深部までついたブレイブの一行

新しくソウを加えて3匹となり、さらに力をつけていった

ここの洞窟のポケモン達はドルク&ソウに恐れ入った（汗）

ドルク「ここが最深部か…」

ソウ「綺麗ですね～」

そこの最深部は宝石があって、でかい宝石がありました

シルム「とりあえずこれをもって帰ろう！」

シルムさんが大きな宝石を引き抜こうとしましたが

シルム「う～～～～～～～～ん！う～～～～～～～～～～～～～ん！！はあはあ」

中々抜けないみたいです

ソウ「今度は僕が」

僕はやってみますが

ソウ「う〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ん！！」

全然ダメでした

ドルク「今度は俺がやる」

すると師匠が引き抜こうとしましたが

ドルク「う〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ソウ「大丈夫ですか師匠！」

僕は師匠に声をかけた

ドルク「大丈夫だ、またあの夢みたいなものだ」

ソウ「夢？」

そういえば師匠、途中で僕が入ったのをみたって言ってたけど、もしかしてその夢みたいなものがそうだってことになる、だから僕が洞窟に入ったのを見たんだ、なんか預言者みたいな感じですね、師匠は

ドルク「（さっきのポケモンのだ…ん？宝石を押した…そしたら水が）」

師匠はどんなのを見てるんだろう？

ソウ「師匠、なにか見えました？」

僕が師匠にそういうと

シルム「だ、だめだ、やっぱり抜けないや」

ドルク「まっ！待て！シルム！？」

シルム「え？」

カチッ

シルムさんは宝石を押してしまった

なんかカチッという音が

ドルク「あああああああああああああああああああ！！！！！？」

師匠がビックリしてます、一体なにをみたんですか！？

その時何処からか音が聞こえました

シルム「おや？どうしたんだろう？」

その音はさらに大きくなって

ソウ「水！？」

シルム「うわあーーーーーーーーっ！水だぁーーーーーーーーーーーーっ！！」

３匹「うわあああああああああああああああああああっ！！！！！！？」

僕達は水流に流されました

……

ドルク・ソウ「シルム（さん）の馬鹿あ！！！！！！！！」

シルム「ごめんなさあああああああああああああああああい！！！！」

僕達は流れていき

そして

間欠泉が出て

３匹「うわあああああああああああああああああああああああ！！！！！？」

ヒューーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！

バシャーーーーーーーーーーーーーーーーン！！

シルム「あれれ？ここは一体」

ドルク「なんだ？温かいぞ」

たしかに温かいです

そこに熊のぬいぐるみみたいなポケモン、ヒメグマが僕達に話しかけてきた

ヒメグマ「もしもし？君達大丈夫？君達上から落ちてきたのよ？もうビックリしたわよ！」

ソウ「あの？ここはもしかして？」

ヒメグマ「ここは温泉よ」

シルム「お、温泉～～～！？」

ドルク「どうりで温かいと思ったな」

そこに甲羅を装備して亀のようなポケモンが話してきた

コータスというポケモンです

コータス「そう、温泉じゃ、ここの温泉は肩こりによく効くんで多くのポケモンが訪れるんじゃよ」

コータスのおじいさんが説明してくれました

滝からずいぶんと流されましたので僕達はコータスのおじいさんのはからいで温泉でリフレッシュした

その後なんですが

僕は正式にブレイブの仲間になり

師匠とシルムさんと同じ部屋で寝ることになりました

その後ペラップというポケモンは師匠のアルテマなどでフルボッコにされましたとさ

第9話　流されて温泉（後書き）

ポケダン劇場（シアター）

ドルク「今回の後書きからこんなのが始まるみたいだ」

シルム「なんか次回から見たいだよ（汗）」

ソウ「たのしみです♪」

第１０話　きれいな空気を（前書き）

ドルク「よく進むな～」

まあポケダンだから

ソウ「今回はなんですか？」

今回はあいつらが登場＋あの野朗が登場します

ドルク「なんだろうな♪（黒）」

ソウ「ボルトさんほどの方ならフルボッコにしますけど♪（黒）」

まあボルトほどにフルボッコできる奴らだからやってもいいよ♪（黒）↑腹黒な作者

ドルク「ならやってやろうじゃねぇか♪ちょうど修行にはいいしな♪（黒）」↑修行なのか（汗）

ソウ「そうですね♪ボコボコにしましょう師匠♪（黒）」

シルム「なんかむなしい（泣）」

第１０話　きれいな空気を

こうして俺達の仲間になったソウ

まああの鳥（ペラップ）をフルボッコにしといた

なぜか…それはあの滝にプクリン親方がいったからだ

俺はあのシルエットがプクリンだと思い、鳥に頼んで親方に聞いてみた

するとどうやら行ったらしく、俺はソウとともに鳥にWアルテマでフルボッコした

夜、シルムが俺にお礼を言った

あの時のことだな

あいつも勇気を出さないと

俺もそう思った

ソウも加えたからがんばらないとな

疲れた

それにしてもあの能力はさわっただけで出るとはな

いずれ何かに触れたあとにめまいが起こったからな～

それに親方が過去に行ったこともあったから

つまり未来だけじゃなく

俺は過去まで見えるってことか

それで後親方に呼ばれた

どうやら遠征に行く予定があるらしい

ソウも喜んでたからな

だがいつもは新弟子は選ばれないらしいが

だが俺達の努力によって特別に候補に入ったみたいだ

とりあえず次の朝だ

俺達はギルド地下1階に来た

ん?あれは

掲示板にはあいつらがいた

ズバット「あーっ!!」

ドガース「お、お前達は!?」

ドルク「俺にやられた弱虫君どもじゃないか♪」

笑顔に答えた悪魔亀大王ドル君

ズバット・ドガース「誰が弱虫だあああああああああああああ！！！！！？」

ソウ「師匠？この方達は誰ですか？」

ソウが質問してきた

ドルク「泥棒だ」

俺はそう答えた

ソウ「そうですか…ならやってもいいですか？♪（黒）」

もちろん

ドルク「ＯＫだ♪（黒）」

シルム「えええええええええええええええええええええええっ！！！！！！！？」

ズバット「ちょっ！？」

ドガース「ま、待て！話せば」

ソウ「問答無用！アルテマ！！」

ズバット・ドガース「ギャあああああああああああああああ!!!!!?」

二匹の断末魔がギルド内に聞こえた（汗）

……

ドルク「で?なんでここにいんだ?弱虫ども」

ズバットとドガースをドルクとソウが踏む

ズバット「Sか!お前らは!?」

ドガース「イテテ!?やめてくれ!?」

ソウ「さて、泥棒した罪は重いですよ♪覚悟はできてますか?お二人さん♪（黒）」

ズバット・ドガース「ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいっ!!!!!!!?」

シルム「すごく怖がってる（汗）」

ズバット「アニキィィィィ!!!!!!!!!?」

ドルク「誰なんだ?アニキって?（黒）」

ズバット「ぎゃあああああああああああああ!!!!!!!?」

ドガース「俺達の探検隊のリーダーです」

テンションが下がった二匹

ドルク「ほうほう（黒）そいつが真犯人ってことだな（黒）」

ズバット「アニキにたてつくと後悔するぞ」

そういうが

ドルク「じゃあそのアニキっていう奴は何処にいるか教えてもらおうか？弱虫君（黒）」

ソウ「師匠に弱虫君といったことここでアルテマでやりますよ？（黒）」

ズバット・ドガース「やめてください！！？お願いですから！！？」

そんな2匹にご…いや質問をしていると

シルム「ん？なんだこのくさいニオイは？」

ドガース「おっ！うわさをすれば…っていいニオイがするのですが（汗）」

くさいニオイがしたが逆にいいニオイがただよってきた

ドルク「アロマセラピー覚えてよかったぜ♪」

ソウ「どうやら僕達を舐めていますね（黒）一緒に地獄へと落としましょうか？（黒）」

ズバット・ドガース「いやあああああああああああああああああ！！！！！？」

その時

くさいニオイがドルク達に向かってきた

だが

ドルク「トルネド」

風というか竜巻を起こしそのニオイの発信源へと返す

？？？？「ぐはっ！」

すると入口からでかいポケモンが落ちてきた

スカンクのような体にリーゼントみたいな先の白い髪

スカンクポケモンのスカタンクだ

ズバット・ドガース「ア、アニキィーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！？（泣）」

スカタンク「くっ！貴様ｒ」

ソウ「ハイハイあなたみたいなくさいニオイは発する人は消毒でもしましょうね♪（黒怒）ライオットカッター！！」

ドルク「エナジースター！！」

スカタンク「ぎゃあああああああああああああああ！！！？」

ズバット・ドガース「アニキィーーーーーーーーーーーーーー！！！！！？」

……

ドルク「さあて（パキポキ）こいつら（ドグローズ）どうする？ソウ？」

俺は最初に会ったあの野朗とそのリーダーであってニオイ発信源のスカンク（スカタンク）を縄で縛り付けて色々と質問攻めした

ドルク「さあてリーダーさんよ～（黒）なんでこんなことするのかな～（黒）」

俺はスカンクの顔に近づいて威圧した

スカタンク「（な、なんだこの亀は）」

ソウ「師匠に失礼ですよそこのスカンク野朗（黒怒）アルテマ」

ドクローズ「ぎゃあああああああああああああ！！！！！！？」

心を読むとは、さすが俺の弟子だ

数分間説教され、最後にドクローズは悪魔亀大王ドル君とその弟子ソウ君によって

はるか彼方へとアルテマでふっとんでいった（汗）

ソウ「さあて気を取り直して依頼をこなしましょう♪」

シルム「（ガタガタブルブル）」↑逆に二匹を怖がるパートナー

ドルク「どうした？シルム？」

俺はシルムに声をかける

シルム「ちょっとドルクがすごいな～と思ったんだよ」

俺が怖いか…でも俺は別にそんな風にシルムを怖がらせていないぜ

シルム「けど、オイラ、なにもできなくて、やっぱ弱虫なのかな」

落ち込んだな

ドルク「そんなことはないぜ、シルム」

俺はシルムの肩をたたく

シルム「ありがとな（泣）ドルク…でもオイラやっぱ弱虫だよ、勇気がなくてがんばろうって決めたのに」

そこに俺は

ドルク「努力すればいい、俺もいるし、それにソウもいる、だから弱虫とかいうな、お前は一人じゃないんだ」

ソウ「そうですよ、師匠とシルムさんに出会わなかったら僕はここにはいませんよ」

ソウがなぐさめのことばをかけた

シルム「ありがとうソウ（泣）」

……

俺達は依頼の準備をするためにトレジャータウンに向かっていた

十字路にさしかかったとき

二匹の水色のポケモンがなにか宣伝していた

そのポケモンはソーナノとソーナンスだ

ソーナンスは口の周りに赤いのがあるため♀らしい

おっとそうじゃないな

なんとパッチールのカフェがオープンしたらしい

なので入ってみた

……

シルム「わあ～！結構広いお店だな！」

その中央からうさぎのようで水玉模様のポケモンが俺達の方へと向かってきた

こいつがそのパッチールのようだ

パッチール「いらっしゃいませ～『パッチールのカフェへようこそ！』てまえこのカフェのオーナーのパッチールと申しますぅ～ここは新しい発見を求めて日々チャレンジし続ける探検家のためのカフェなんですぅ」

ソウ「探検家のためのカフェですか？」

探検家のためのカフェか～

パッチール「はい～探検の合間においしいドリンクを片手にくつろいでいただくのはもちろんのこと、探検家のみなさんによろこんでいただけるようなサービスをご用意しておりますぅ、今日はオープン初日なのでお店の中をご案内しますね」

ここからは説明だ

この中にはドリンクスタンドなど色々とあるみたいだ

まずドリンクスタンドは探検中などにグミやリンゴなどの食べ物をドリンクスタンドでおいしいドリンクを作るらしい、よだれが出るほどだな～♪

作ってくれるのはパッチールが腕によりをかけて作ってくれる

そしてカフェの目玉『探検リサイクル』だ

ここは使わない道具とかもったいない場合がある

ここではあまった道具を欲しい道具と交換することができるらしい

たしかにエコだな

今の時代はエコだからな♪

何？探検隊と関係ないって？細かいことは気にするな♪

さらにオマケでクジとかもできるみたいだ

大体こんな感じだ

俺はドリンクスタンドでオレンの実を使ったつぶつぶオレンの実を

飲んだ

ひかえめな甘さが素材のうまみを最大限に引き出している！

ドルク「うめぇ！！！！！！」

パッチール「喜んでくれましたか♪」

ドルク「さすがにうまいな♪毎回通わせてもらうぜ♪」

パッチール「ありがとうございます♪」

ソウ「僕はリンゴソーダで♪」

シルム「オイラも！」

二人はリンゴソーダを注文した

ドルク「味はどうだ？」

二人に感想をしてみた

ソウ「少し大人の味で僕にはちょっと」

シルム「すごくおいしいよ♪」

とりあえずソウには無理な味か、俺はしかたなくソウにつぶつぶオレンの実とリンゴソーダを再度注文して準備をした

……

たきつぼの洞窟

今回の依頼は、浜辺で見つけた小瓶から入っていた依頼と掲示板の依頼の３つ、合計４つの依頼をこなすことにした

まずはＢ４Ｆのアノプスを助けに

階段の近くにいた

ドルク「おい大丈夫か？」

アノプス「あ…貴方達は？」

ドルク「探検隊ブレイブだ、起きられるか？」

アノプス「はい」

アノプスは起き上がった

ドルク「とりあえずあんたは戻ってくれ」

ソウ「その前に回復しときましょう、ケアルガ！」

ソウはケアルガを唱えてアノプスを回復させた

俺はバッジとかざしてアノプスをダンジョンから脱出させた

……

次にサニーゴの救出だ

ソウ「大丈夫ですか？」

ソウはサニーゴに話した

サニーゴ「た、助かった」

ドルク「今回復させるぞ」

俺はケアルガを唱えてサニーゴを回復させてサニーゴを脱出させた

後はワンリキーを助けて

最後は犯人探しだ

……

たきつぼの洞窟Ｂ８Ｆ

ドルク「エナジードレイン！」

？？？？「ぎゃあああああああ！！！！！？」

こうしてなんとか依頼をこなした

その後俺はカフェに行って注文した

そんな時

？？？？「ふう～ここがパッチールのカフェか、中々のもんだな」

龍のような赤いポケモンが入ってきた

火炎ポケモンのリザードンだ

だがあのリザードン

右の翼膜に傷があるな

相当実力があるらしいな

リザードン「なああんた？」

パッチールに話していた

ハッチール「はいなんですか？」

リザードン「ここら辺にプクリンのギルドがあるって聞いたのだが知らないか？」

ギルドにようがあるのか

ちなみに俺一人だ

シルムとソウは買い物だ

パッチール「それでしたら坂をのぼったところにありますよ」

リザードン「ありがとな」

そういってそのリザードンは去った

だが俺の前をすぎると

リザードン「!?」

俺をみていた

ドルク「なんだ?俺の顔に何かついてるのか?」

といった俺

リザードン「いや、なんでもない、すまないな」

そういって去った

ドルク「なんだアイツ?」

そんなこんなで次の日

第１０話　きれいな空気を（後書き）

ポケダン劇場（シアター）

ずっとドルクとソウの師弟コンビのターン

ドガース「これでお前らのターンは攻撃終了」

ズバット「毒効果でお前らのＨＰは０だ！」

ドガース「俺達の勝ちだ！」

ソウ「何勘違いしてるんですか？」

ズバット・ドガース「はい？」

ドルク「まだ俺達のバトルフェイスは終了してないぜ」

ズバット「なにいってるんだ」

ドガース「毒の状態でなにができる」

ソウ「エスナ！」↑状態異常回復

ドルク「そしてこのとき俺の特性が発動して、速攻魔法発動！バーサーカーソウル！」

ズバット・ドガース「な、何ぃいいい

ソウ「覚悟はできてますか?この毒野朗ども!!」

ドルク「行くぞ!ドロー!モンスターカード!!」

ソウ「第1打!!」

ズバット・ドガース「ぎゃあああああああああああああああ!!!!!!?」

ドルク「ドロー!モンスターカード!!」

ソウ「第2打!!」

ズバット・ドガース「ぎゃあああああああああああああああ!!!!!?」

ドルク「ドロー!モンスターカード!!ドロー!モンスターカード!!ドロー!モンスタカード!!」

ソウ「3打!4打!!そして第5打!!!!!!」

ズバット・ドガース「ぎゃあああああああああああああああああああああ!!!!!!?」

キラーン↑星となった二匹

スカタンク「ガタガタブルブル」↑怖くなってしまった

第１１話　登場！バトル部部長！？（前書き）

ドルク「このタイトルは！？まさか！？」

ついにわかりますｗ

ソウ「それよりあのスカンク野朗は何処ですか？くさいニオイを発したらどうなるか教えてやらないといけませんし（黒）」

はいはいそこ（汗）なにげにやらない（汗）

シルム「バトル部部長…まさか！？あの有名な」

おっとここからは見てからだ、それじゃあ第１１話

ソウ「どうぞ♪」

ちょっ！？俺のセリフ！？

第11話　登場！バトル部部長！？

ペラップ「みんなっ♪今日は仕事にかかるまえに新しい仲間を紹介するよ♪」

今日は新しい仲間が来るらしい

一体誰だ？

ドゴーム「仲間？また弟子入りなのかな？」

ビッパ「どんなポケモンでゲスかねえ？」

ソウ「一体誰なんでしょうね♪」

ペラップ「おーいこっちに来てくれ♪」

するとくさいニオイが…

ソウ「師匠」

ドルク「アロマセラピー」

俺はアロマセラピーを発動？してにおいをいいにおいにした

これはまさか

そこに来たのはドクローズだ

ソウ「あっ！貴方達は！」

ペラップ「この3匹が新たな仲間だ」

俺はとりあえずこの鳥野朗（ペラップ）にエナジーボールをおみまいして気絶させた

そして鳥よ、お前は鳥野朗へと降格だ

ソウ「な・ん・で貴方達がいるんでしょうかね～（黒）」

早速ソウにフルボッコにされたドクローズいや下品組

スカタンク「い…いや俺達は…（滝汗）」

すっげ～汗だくになってるぞ

ドルク「まさかてぇめ～らとはな～（黒）」

この時俺はいつかペラップをやｋ…羽根とか全部刈ろうと思っただがそんなときに

？？？「ん？なんだよ来てそうそうこんな歓迎かよ」

ドルク「！？」

そこには前にカフェで会った右翼の傷のリザードンだ

ペラップ「そういえば言い忘れてた、さらにしばらくお世話になる方で別の世界からこちらの探検隊の体験をしにきたポケハン学園のラッシュさんだ」

リザードン「俺はラッシュ、よろしくな♪」

ドクローズ「（な!?何っ!?）」

これにはドグローズいや下品組はたじたじしていた

ラッシュ…けど一体?

ラッシュ「それと親方様だっけか?」

親方に話したリザードンのラッシュ

プクリン「うん、そうだよ」

親方なんか機嫌悪いな?

あのスカンク野郎のにおいか

ラッシュ「あんたの好物を持ってきた、校長からだ」

それはなんとリンゴだ

だがそれはただのリンゴじゃなかった

プクリン「わあ～♪セカイイチだ～♪」

親方はセカイイチを頭に乗せて機嫌が良くなった

スカタンク「（まさか他にいたとは！？これはなんとかしないと）」

そう考えるスカタンク

……

とりあえずみんな解散して

俺達は少し円をかこんで話した

ソウ「あのドクローズの野朗ども怪しくないですか？」

シルム「うん、たしかに」

ドルク「とりあえずなんとかしないとな」

ラッシュ「なあ？何話してんだ？」

そこにラッシュが入ってきた

ドルク「なんでもねぇよ」

俺達が地下1階に向かうが

ラッシュ「なあペラップさん、ちょっとこいつらと一緒にいたいのだがかまわないか？」

なんと鳥に頼み申した

ペラップ「ああ♪別にかまわないです♪どうぞどうぞ♪」

てめ～あとでしばく（怒）

ラッシュ「というわけだ、早速だがちょっと海岸にいいか？」

シルム「かまわないですけど…えーと」

ラッシュ「呼び捨てでかまわないぜ♪その方が俺はいいから」

呼び捨てかよ、まあ俺もこいつに呼び捨てで呼ぼうと思ってたからな

そんなこんなで俺達は海岸へと向かった

……

俺達はラッシュに連れられて海岸にやってきた

ラッシュ「そういえばこのナエトル以外は会ってないな」

シルム「えっ！ドルクは知り合ったの！？」

ドルク「俺はその時飲んでいたらこいつが来たんだよ！」

まあギルドの場所教えだけどな

ラッシュ「まあまずはお前らの紹介をさせてくれ」

しゃあねぇな

ドルク「俺はナエトルのドルク」

シルム「オイラはヒコザルのシルム」

ソウ「僕はイーブイのソウです」

それぞれ自己紹介した

ラッシュ「そうか、覚えておく」

なんだよそれ

ラッシュ「まあとりあえずなぜここに来たのかだけどな…ドルク…お前人間だろ？」

！？

ソウ「えっ！？」

シルム「なんでドルクが元人間とわかったの！？」

俺は驚いた

こいつ一体！？

ラッシュ「俺は波動が使えるからこれでお前の正体をあの時感じたんでな」

だからあの時俺に振りむいてたのか（汗）

ソウ「まさか僕達だけの秘密なのにバレるなんて！？」

ラッシュ「だが別に誰かに教えるつもりないから安心しろ」

まあそれはよかった

シルム「けどラッシュってすごいな～波動ってたしかルカリオだけが使う能力だと思ったのに？」

ラッシュ「まあたしかにな、俺は修行して手に入れた能力だからな」

一体コイツの修行はなんだよ（汗）

ラッシュ「まあ遠征の間はよろしくな♪」

とまあこんな感じでラッシュが一時的に仲間になった

第11話　登場！バトル部部長！？（後書き）

というわけでなんとラッシュが来てくれたよ♪

ラッシュ「ドルクの所に来たか」

ドルク「マジかよ！？」

ソウ「まさかラッシュさんとは（汗）」

シルム「それに正体までバレるなんて！？」↑ドルクが元人間だったこと

ラッシュ「まあ遠征終了まではいるからな♪」

次回は仲間集めです♪

ドルク「ソウとかで十分じゃねぇか？」

あのね～（汗）仲間は多いほうがいいんだよ（汗）

ラッシュ「その方が俺はいいと思うぞ？」

ドルク「まあ次回まで待つか」

第１２話　登場！？結成腹黒同盟（汗）（前書き）

ドルク「なんだ？このタイトル」

ラッシュ「まあ見てみればわかる」

ソウ「フォックさん？なにか知ってるんですか？」

それはこの話でわかるから待っててね

シルム「一体なんだろう？」

ドルク「それじゃ第１２話を」

ソウ「どうぞ♪」

第１２話　登場！？結成腹黒同盟（汗）

ドルク「とりあえず今日はどうっすかな～」

ドルク達＋ラッシュの４匹はパッチールのカフェに来ていた

ラッシュ「そうだな、とりあえず依頼あんだろ？」

そう、すでにドルク達は依頼を受け付けていたためカフェで一息ついてから出発するようだ

ドルク「今回の依頼で気になることがあるんだが？」

ソウ「気になることですか？」

ドルクはある一枚の依頼を出した

ドルク「この依頼だが？聞いたことがない種族で名前があるポケモンからの依頼なんだ」

その依頼とは

依頼：ここは何処？

依頼主：スカイック（ネク）

報酬：１０００ポケその他

こっちの世界にまだ慣れなくて迷ってしまいました誰か助けて！
という依頼だ

シルム「ホントだ、スカイックってなんだろう？」

ラッシュ「実際に行くしかないな」

ドルク達はカフェを出て依頼をすることにした

……

トゲトゲ山

ラッシュ「火炎放射！フレアソウル！」

ドルク「エナジーバスター！！」

シルム「ラッシュってすごいな～こんな技まで持ってるなんて」

シルムはラッシュの使った技に見とれていた

ラッシュ「シルムもがんばれば覚えられる、色々と俺が教えてやろうか？」

シルム「ありがとう！」

ドルク「さっさと行くぞ」

ソウ「はい師匠！」

シルム「うん！」

……

トゲトゲ山Ｆ７

ドルク「たしかここだな…」

ドルク達は依頼者を探し出す

すると

ラッシュ「なあ？あれじゃないか？」

ラッシュが見た先には

ポケモンとは違うみたことがない姿だった

赤い羽毛は男性の着物を思わせる羽毛、背中の両翼の毛には炎のようなマークがついていた

それはまるで翼がついたバシャーモだ

ドルク「こいつだな」

シルム「とにかく話してみよう」

ドルク達は赤い羽毛のポケモン?に駆け寄る

ドルク「あんたが依頼主か?」

ドルクがたずねるとそのポケモン?は

???「ん?君たちは…って!?ラッシュじゃないか!?」

ラッシュ「よっ!ネク、こんなところに来てたとはな♪」

ドルク「えっ!?」

ソウ「ラッシュさんの知り合いですか!?」

ラッシュ「ああ、知り合いだ」

どうやら知り合いのようだった

ネク「なんでラッシュがこんなところに?」

ネクはラッシュにたずねる

ラッシュ「まあこっちは探検隊の体験とかで来てるんだ、ネクはどうしてこんなとこに来たんだ?」

ネクは答えた

ネク「俺は色々と世界を少しまわってみようと思ってね♪ここの世界はいいね♪でね、俺ねここに来て迷っちゃって♪」

テヘッと舌を出してかわいくいうネク

ラッシュ「で？依頼したってことだな？」

ネク「うん、でもよかった、こんなところでラッシュに会って♪」

どうやら迷ったらしく依頼したネク

ドルク「なるほどな、とりあえずここから脱出するぞ」

ドルク達は探検隊バッジをかかげてダンジョンから脱出した

……

ギルド地下１階

ネク「とりあえずありがとう♪」

ドルク「いや、俺達は探検隊をしたまでだ」

と、ドルクはいう

ネク「お礼の報酬だよ♪」

ネクから１０００ポケと星が３つあるペンダントを何個かもらった

ドルク「これは！？」

ソウ「スリースターズじゃないですか！？いいんですか！？」

スリースターズとは

魔力の消費が激しい者にとっては貴重な物だ

これによって魔力の消耗を少なくして魔力を心おきなく使えるシロモノだ

ネク「いいよ♪俺ももってるし、それに別世界からいっぱい敵倒したらもらったから♪」

ラッシュ「（１００％腹黒なお前がやりそうだけどな（汗））」

ラッシュはネクのことがわかるため何をやったのかあながち予想していた

ネク「後お願いがあるんだけど？」

ドルク「お願い？なんだ？」

ネクは思い切っていう

ネク「俺をブレイブのメンバーに入れて♪」

なんと仲間へのお誘いだ

ドルクの答えは

ドルク「いいぜ♪なんかネクと気が合う感じなんだよな♪」

ソウ「そうですよ♪なんかネク君に腹黒な感じがしそうだったんです」

するとネクは

ネク「そういえばそうだったね♪ドルクやソウにもそんな感じがしたんだ♪」

おいおい（汗）

ドルク「そんじゃ俺達3人は腹黒三人衆＋同盟だな♪」

シルム「えっ！？」

ドルクの突然の同盟にソウとネクは

ソウ「面白いですね♪よろしくお願いしますね♪ネク君♪」

ネク「こっちもよろしくな♪ドルク♪ソウ♪」

すっかり意気投合してしまった

シルム「ラッシュ、どうしよう（汗）」

ラッシュ「あの三人のことだ、好きにやらせたほうがいいかもな（汗）」

こうしてネク君を仲間にしてますます腹黒くなるブレイブのメンバー（シルム除く）

これからどうなるのか（汗）

第１２話　登場！？結成腹黒同盟（汗）（後書き）

はい！ラッシュも出演しているベルゼルクの光陰からオリポケ、スカイックのネクロ君こととネク君です！

ネク「初めまして！ネクです♪」

ドルク「まさかネクが来るとはな♪」

ソウ「すごいサプライスですね♪」

シルム「なんかすごく黒く感じるけど（汗）」

ドルク「気のせいだシルム♪（黒）」

ソウ「そうですよ♪（黒）」

ネク「そうだよ♪（黒）」

ラッシュ「すごく黒くなってるぞお前ら（汗）」

ネク「さて♪ドクローズをフルボッコにしておかないとね♪（黒）」

ドルク「そうだな♪（黒）」

ソウ「消毒しておかないといけませんね♪（黒）」

はいはい（汗）次回ぐらいにやるから待っててね（汗）

第１３話　さらに増える仲間～ドクローズの危機～（前書き）

ドルク「おっ！久しぶりかと思ったらさらに仲間が♪」

ソウ「わあ～楽しみです♪」

ネク「どうやらフォックさんの話では腹黒らしいよ♪」

ドルク「これで４匹だな♪（黒）」

腹黒４人衆「フフフフフ（黒）」↑目が怪しく光る

シルム「すごく不安な予感が（汗）」

ラッシュ「俺もそう感じる（汗）」

第13話　さらに増える仲間～ドクローズの危機～

次の朝

ペラップ「ああお前達」

ドルク「なんだ？」

ペラップ「今日はちょっと食料を調達してきてくれ」

ペラップに食料調達を命じられたドルク達

ソウ「自分で探せばいいじゃないですか？なんで僕達が？（黒）」

顔が笑ってないソウがペラップにせまる

ペラップ「あっ（汗）いや、実は今朝倉庫を見たらギルドの食料がなぜかいきなり減っていたのだ、しかもセカイイチだけがすべてなくなっていた」

ネク「セカイイチ？」

するとラッシュが割って話しに入る

ラッシュ「プクリンの大好物だろ、俺が持ってきたあの」

ドルク「あのリンゴか」

そう、プクリン親方が喜んで頭に乗せているのがあのリンゴ、セカ

イイチなのだ、とても大きなリンゴでプクリン親方の大好物なのだ

ドルク「な～る～つまりセカイイチがないと親方様のアレがくるってことだな？」

とドルクが言う

ペラップ「（うっ！するどい！？）」

図星のようだ

ドルク「じゃあとってくる、場所は何処だ？」

ペラップ「場所はリンゴの森の奥深くにセカイイチがある、いいかい？これは簡単なようだが大事な仕事だ」

ソウ「しっかり頼めばいいんですね♪じゃあいきましょうか」

ラッシュ「そうだな」

ネク「わ～い♪ついでのセカイイチだけじゃ物足りないからリンゴとかいっぱいとってこようっと♪」

もはやピクニック気分なネク

ペラップ「（汗）」

ドルク達は早速行くことにした

それを見ていた者達が見ていた

ドガース「ケッアイツら食料をとってくるみたいだぜ」

スカタンク「昨日俺様達が食べちゃったせいでとんだとばっちりだなクククックッ」

食料を食べたのはドクローズのようだ、だが彼らはなにか企んでいた

ズバット「へへっ少しちょっかい出してやるか」

だがこれが後にドクローズにとっても危険なことになろうとは、この時のドクローズは知る由もなかった

……

リンゴの森

ドルク「ほいほいっと♪」

ドルクはリンゴを取りまくる

ラッシュ「あんまり取りすぎるなよ（汗）」

腹黒三人衆「は～い♪」

もはや子供な腹黒三人衆（汗）

すると何処かから声が

？？？「何処だろう？ここ…僕はたしかティガだったはず、それにここは何処だろう？」

一匹のポケモンが歩いていた、しかも困った表情をしていた

稲妻の形のしっぽに耳はとがってて先が黒く体色は黄色のポケモン、ピカチュウだった

ドルク「おい」

ドルクがそのピカチュウに声をかけた

ピカチュウ「はい？あの～ここは何処ですか？」

と、すっとんきゅうな感じでいうピカチュウ

ドルク「ここはリンゴの森だ、ここで何してるんだ？」

するとピカチュウは

ピカチュウ「実は僕別世界からここに来たのですが迷ってしまって」

どうやら別世界から来たらしい

ラッシュ「おーい！」

ラッシュ達が駆けつけた

ピカチュウ「この人達（ポケモン）は？」

ドルク「ああ、俺の仲間で探検隊だ」

なんとかみんな合流

ラッシュ「ん?そのピカチュウは?」

ドルク「ああ、こいつは」

ピカチュウ「えっ!?アナタはラッシュさん!」

なんとピカチュウがラッシュの事をいう

ドルク「えっ?」

ラッシュ「ん?この波動は…ラースか!?なんでティガレックスなのにピカチュウになってんだ?」

どうやらこのピカチュウはラースという名前だ

ラース「実は…」

……

ラッシュ「なるほどな、こっちもか」

ネク「俺と同じ目的だね♪」

どうやら目的はネクと同じようだ

ラース「はい、エイクさんに強制的に行かされて（汗）」

どうやら自分の仲間によって強制的に行かされたようだ

ラッシュ「それでここに来たってことだな（汗）」

ラース「はい」

そうらしい

ラッシュ「はあ～お前が腹黒でさらにアイツに好かれるからだぞ？」

アイツとは？それはいえないだろう、誰なのかはバトル部とかに明かされるだろう（予定）

ラース「エイクさんめ（黒）」

黒くなるラース

するとドルクが

ドルク「おお！俺達と同じ腹黒なのか～♪」

ラース「えっ？アナタもですか？」

ソウ「僕と師匠とネク君もそうなんです」

そこにソウが割って話す

ラース「なるほど、なら僕も探検隊に入れてください！お願いしま

す！」

土下座してお願いするラース

するとドルクは

ドルク「顔上げろよラース、俺達はもう仲間じゃねぇか♪そんな頭下げるなよ、一緒に行こうぜ♪」

ラース「は、はい！」

これによりラースは仲間になった

ドルク「先に進むぞ」

ラース「はい師匠！」

ソウ「これで僕にも後輩が出来てよかったです♪」

ソウは後輩が出来て嬉しいようだ

ネク「よかったね♪」

ネクも喜ぶ

……

リンゴの森奥地

シルム「ここがリンゴの森の一番深いところだよな」

ソウ「どうやらアレみたいですよ」

ソウが指を指したのは大きな木があった、そこについてるのは間違いなくセカイイチだ、みんなが行こうとしたとき

ラッシュ「待て」

ラッシュが止めた

ネク「ラッシュも感じた？」

ラッシュ「ああ」

二匹はなにか感じたらしい

ラッシュ「波動弾！」

ラッシュは木に向かって波動弾をうった

するとそこから

ドクローズ「うわっ！？」

ドクローズが落ちてきた

ラッシュ「やっぱりそうだと思ったな、どうやらついてきたようだな」

ドルク「何っ!?」

ラッシュはカンがよかったのかどうやらわかっていたらしい

スカタンク「クククククッまさかついてきたことがバレるとはな」

スカタンクは不適な笑いをする

ラッシュ「俺が気づかないと思ったか?」

ネク「俺達についてきたってことは俺達の邪魔しようっていうことだね」

スカタンク「クククククッ中々するどいな」

図星だ

スカタンク「だがお前達はここで終わる!俺達を舐めては困るな」

ドルク「何かしかけて来るぞ!」

ドルク達は構える

スカタンク「お前達にはこの攻撃は耐えられるかな?俺様とドガースの……スペシャル毒ガスコンボを!!」

スカタンクとドガースが毒ガスをしかけてきた

シルム「うあぁぁーーーー!!!」

だが

ドルク「リーフストーム！！」

ソウ「トルネド！！」

なんと毒ガスがドルク＆ソウの風の技（リーフストームは草タイプの技だが）で二匹のスペシャル毒ガスコンボを打ち消した

スカタンク「なっ！？何っ！？」

ドカース「俺とアニキのスペシャル毒ガスコンボが破られただと！？」

これには二匹は驚く

ラッシュ「俺達でやっつけるぞ！」

全員『おおー！！』

まずは

ラース「僕や師匠達にこんな毒ガスを！！１０万ボルト！！」

ソウ「僕達にこんなことをしたのを後悔してください、サウザントカッター（草）＆ライオットカッター！！」

電気と草のしんくうはとさらにしんくうはがズバットをおそう

ズバット「ぎゃあああああああああああああああ！！！！！？」

ラース「これで僕の攻撃が終わったと思いますか？テールオール！」

ラースはしっぽを何度も振り、大きく右に払ってズバットをふっとばした

ズバット「ぎゃあああああああああああああああ！！！！！！？」

ズバットは木にぶつかり目を回した

……

ラッシュ「やるぞシルム」

シルム「うん！」

二匹はドガースに襲い掛かる

ラッシュ「エアスラッシュ！！」

シルム「フレイレイン！」

シルムはドガースにとび蹴りした

ドガース「くっ！」

そこから炎の弾が6つ現れドガースに襲い掛かる

ドガース「ぎゃあああああああああああ！！！！！！？」

シルム「おまけ！」

さらに6つの炎の弾が現れ再びドガースに襲いかかる

ドガース「ぎゃあああああああああああああああああ！！！！！！？」

これによりドガースは目を回し戦闘不能に

……

スカタンク「くっ！セカイイチを食べなければ俺さまは！」

スカタンクはよけながらいうがどうやらセカイイチを食べていたため動きがにぶくなっていた

ネク「よそみなんかしてるとやられるよ、かまいたち！」

スカタンク「くそっ！」

スカタンクはかまいたちを避けるが

ドルク「エナジーバスター！！」

そこにドルクのエナジーバスターが襲い掛かる

スカタンク「ぎゃあああああああああああ！！！！？」

ネク「お前みたいな奴は探検隊の資格はない！！インビシブリーズからつばめがえし！！」

ネクは自らの姿を風に変えてつばめがえしでスカタンクにダメージを与えた

ドルク「俺達を敵にしたことを後悔すんなよスカンク野朗、エナジーバースト！！」

ドルクは武器をしまい、エナジーボールを放った、するとエナジーボールはスカタンクに当たると爆発を起こした

スカタンク「ぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！？」

スカタンクはエナジーバーストにより目を回して倒れた

……

ペラップ「よくやったなお前達♪これは報酬だ」

ドルク達は１０００ポケをもらった

ドルク「よ～し♪明日もがんばるぞ♪」

全員「おおーーーーーーーっ！！」

もちろんラースも仲間＋腹黒同盟になった、おまけに腹黒４人衆になった（汗）

……

その頃ドクローズはというと

スカタンク「くそっ！アイツら覚えてろよ！！」

ボロボロになりながらドルク達ブレイブに復讐を誓った

第13話　さらに増える仲間～ドクローズの危機～（後書き）

はい、モンスターハンター～モンスターの視点～改め、モンスターハンター～モンスター達の絆からは元人間でティガレックス改めピカチュウになったラースが来てくれました♪

ラース「ラースです、よろしくお願いします」

ソウ「やっと僕にも後輩が出来てよかったです♪」

ラース「ホントにドルク師匠やソウ先輩はいい人（ポケ）ですよ♪」

よかったね（汗）

ネク「俺の能力なかったら危なかったね」

ラッシュ「まあそうだな」

ドルク「これからもよろしくなラース♪」

ラース「はい師匠！」

次回は依頼だけになるけどラース君にオリ技つけたけど大丈夫かな？

ラース「大丈夫ですよ♪フフフ（黒）エイクさんに負けないぐらいに覚えておかないと♪（黒）」

相当エイクに執念があるように見えるけど（汗）

第１４話　いつもの（前書き）

ドルク「遅い（怒）」

だって色々とあって

ドルク「色々だと？エナジーバースト！！」

ぎゃあああああああ

第１４話　いつもの

もうすぐ遠征メンバーが発表されるようだ

よっ！ドルクだ、今日も依頼だ！

ドクローズの野朗どもは朝はボロボロのままできた

鳥が「どうかしましたか？」と言ったが俺達が睨みつけたため言えなかった、まあ元はといえばこいつら（ドクローズ）のせいだからな

さて、今日の依頼は

……

ドルク「プロジェクトPか…」

俺達はカフェで新しくプロジェクトPというのを聞いた

説明するとリサイクルで道具を交換のおまけに未開の地へと行けるらしい、な～る～これはいいかもな

なので俺達は後でカフェに行くことにして、依頼をした

……

ラース「ライトテッカー！！」

ラースは元ティガレックスの突進を生かしたオリ技、ライトテッカーをくりだした

敵ポケ「ぎゃあああああああああああああああああああっ！！！！！！！！？」

光の閃光により敵ポケは倒れた

ドルク「やるじゃねぇかラース」

ドルクがほめる

ラース「ありがとうございます師匠！」

ラースはペコリとおじぎをした、するとドルクは

ドルク「なあどうせだから俺とバトルしようぜ！」

なんとバトルの申し込みをした

ラース「えっ！？師匠とですか？」

ラースはとまどった、師匠であるドルクとバトルすることが

ドルク「まあお前の実力をさらにみてぇからいいか？」

と、ドルク、するとラースは

ラース「わかりました、やりましょう」

引き受けた

……

場所は変わってトゲトゲ山の頂上、ドルク達は依頼をこなしてからこのトゲトゲ山の頂上に来た

ソウ「師匠とラース君の試合ですね」

シルム「なんでオイラまで（泣）」

ソウとシルムは司会というか実況

ネク「楽しみだね♪ラッシュはどう見る？」

ラッシュ「まあ実力はかなりのもんだ、まあドルクの方が魔力が多いからな」

と、ラッシュは言った

こうして二匹の対決が今始まろうとしていた

第１４話　いつもの（後書き）

ポケダン劇場（シアター）

探検戦士ナエドルク

？？？？「ありがとうございましたぁ～」

出撃！ナエドルク

ドルク「はあ～腹減った～大きなリンゴにすりゃあよかったか」

スタスタスタ

？？？？「しねぇ！！ナエドルク！！」

モワモワ～

シュウ～↑リンゴが毒ガスで腐った

スカタンク「くくくくっまた会ったなナエドルク、どうだ？ドガースと俺様のスペシャル毒ガスコンボは」

ガシッ！

スカタンク「あ」

ドルク「オラァ！！（怒）」↑地面にたたきつける悪魔亀大王ドル

君いやナエドルク（汗）

スカタンク「ぎゃあああああっ！！？」

げしげしげしげしげしげしげし

ドルク「テメッなんてことしやがるんだゴラァ！！（怒）」

ドガース&ズバット「あ、兄貴ー！！」

スカタンク「あ、鼻血が、鼻血が」↑蹴られて鼻血が出た

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

スカタンク「あ…」

ゴスッ！！

スカタンク「アーーー

第１５話　ドルクＶＳラース（前書き）

ドルク「エナジーバスター！！（怒）」

ちょっ！？いきなり攻撃すんな！？↑よける

ソウ「遅いからですよ（怒）」

ごめん（汗）とりあえず始めようか

ラース「第１５話をどうぞ」

第15話　ドルクVSラース

トゲトゲ山の頂上

ソウ「さあ始まりました！師匠VSラース君のバトルが始まりました！シルムさん！どうですか？」

と、隣にいるシルムに話しかける

シルム「これはドルクの方が勝ちそうな感じがするよ（汗）」

シルムは大体予想していた、この勝負はドルクが勝つと

……

二匹は互いに見る、ドルクはラースを睨み

一方のラースはドルクを見てたじたじ

ラッシュ「それじゃあバトル開始だ！」

ラッシュの掛け声でバトルは始まった

ドルク「葉っぱカッター！！」

ドルクは顔を横に振った、頭の若葉から葉っぱがまるでブーメランのように3つも出てきた、3つの葉っぱがラースに迫る

ラース「でんこうせっか！」

ラースはでんこうせっかで避けた

ラース「今度はこっちから行きますよ、テールエッジ！！」

ラースは体を横回転してドルクに迫る

ドルク「エナジーバスター！！」

ドルクは口からエナジーボールをビーム状に発射した

ラース「うわっ！？」

ラースはエナジーバスターを受けてしまった

ラース「くっ！さすが師匠、このままじゃやられる！」

ラースは考えてるうちにドルクが攻める

ドルク「リーフドライブ！！」

ドルクは草の風に包まれラースに攻撃

ラース「うわあああああああああああああああああああっ！！！！！！！？」

ラースは当たってしまってそのまま地面に叩き落とされた

ラース「う～ん…」

目を回して気絶してしまった

ドルク「やりすぎちまったか」

ドルクは頭をポリポリとかく

ラッシュ「ラース戦闘不能、ドルクの勝ちだ」

その後ラースを運んで一日は終了した

第15話　ドルクVSラース（後書き）

ドルク「あってなく終わったな」

まあオリ技は少しは出たけどね

ソウ「僕のオリ技とかもっと出るんですか？」

ちゃんと出るようにするから楽しみにしててねソウ君

ソウ「楽しみにしてますよ♪」

第１６話　遠征発表（前書き）

ドルク「遅い！！（怒）」↑アルテマ

ぎゃあああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！！？

ソウ「いつまで待たせるんですかフォックさん（怒）」↑アルテマパート２

ちょっ！？わかったからＷアルテマやめなさい（汗）↑ボロボロ

ドルク「今度遅れたら…どうなるかわかるよな？（怒）」

ちゃんとするからやめて（泣）

ドルク「ＦＥやってる場合あるならこっちも更新しろ！！（怒）」

わかったから（泣）それではどうぞ

第16話　遠征発表

次の朝

ペラップ「え～ここで遠征メンバーの発表を行う」

ついに遠征メンバーの発表となった

ドルク「誰が選ばれるかだな」

ソウ「僕たちが選ばれたらいいのですが」

はたして選ばれるのか？

ペラップはプクリンから遠征メンバーが書かれたメモを受け取りついに発表された

ペラップ「え～それでは発表する…ん…（やっぱ親方様の字は汚いな（汗））」

少し汗だくになってるペラップ

ドルク「早く発表しろよ」

ドルクは言う

ペラップ「今発表する……」

ペラップはなぜか固まっていた

ドルク「どうした？」

シルム「なんで固まってるの？」

ドルクとシルムが言う

ペラップ「なんと全員…って親方様！！これってどういうことですか！？」

なんと全員だった

スカタンク「（なんだと！？）」

ドガース「（全員！？）」

スバット「（しかもあのブレイブの奴ら全員まで！？）」

ドクローズもこれに驚く

プクリン「うん！そうだよ！」

ペラップが駆け寄り

ペラップ「そんなぁ～！それじゃ選んだ意味が、大体そんなことしたらギルドには誰もいなくなっちゃうじゃないですかぁ！？」

そうギルドの留守番が誰もいなくなってしまうのだ

するとプクリンは

プクリン「大丈夫だよ、ちゃんと戸締りして行くから♪」

なんという笑顔で言うプクリン親方

そこにスカタングが話に入り

スカタンク「親方様、私も心配です、遠征に行くには少しメンバーが多すぎでは？」

すると親方様が困った顔をする

プクリン「う～ん友達にそう言われると困るけど…う～ん…」

そこからさらにスカタンクが話す

スカタンク「そもそもなぜ全員で行くのです？みんなで行く意味なんかあるんですか？」

すると親方様は

プクリン「えー！？意味はあるよ！？だってー」

その意味とは

プクリン「全員で行った方が楽しいでしょ！？」

するとスカタンクは少しさがって

スカタンク「ひぇっ？」

プクリン「みんなでワイワイ行くんだよ！？そう考えたらさ！僕ワクワクして夜も眠れなかったよ♪」

これによりドクローズ達の計画にヒビが入った、こうしてついにギルド全員の遠征が始まろうとしていた

第16話　遠征発表（後書き）

さて次回からはギルド遠征編です

ドルク「飯とかつめて～♪」

ソウ「お菓子もつめましょうよ師匠♪」

ネク「わ～い♪遠征だ～♪」

ラース「楽しみです♪」

シルム「よかった、ついにオイラ達遠征に行けるんだ」

まあ色々と遅れを取り戻しておかないと

ドルク「スランプとかになるなよ？」

わかったからアルテマ構えるのやめて～（泣）

第17話　あっしの出番が（泣）ｂｙビッパ（前書き）

ついに遠征のときです

ドルク「よ～し！暴れまくるぜ！！」

あんまりやり過ぎないようにね（汗）

ソウ「ドクローズとはここで別れてですか～また会ったときは（黒）」

ネク「やつらをぶちのめそう（黒）」

ラーク「やりましょう師匠（黒）」

腹黒４人衆「フフフフフ」↑目が怪しく光る

シルム「オイラどうしたらいいの（汗）」

第17話　あっしの出番が（泣）ｂｙビッパ

準備を済ませた俺達はついに遠征へと出発するところだ、その前に説明会だ

……

ペラップ「まず今回の目的、それは霧の湖の探索だ」

シルム「霧の湖？」

シルムは頭にハテナが浮かぶ

ペラップ「そうだ、ここよりはるか東にあるとされている湖なのだが、そこは霧に包まれておりゆえにはっきりと確認されたこともなく、噂だけが生きているという幻の場所なのだ、そしてそこには、とても美しいお宝が眠っているといわれている♪」

そこにシルムが目をキラキラさせ

シルム「わぁ～！お宝！？それをオイラ達が発見しに行くんだな！すごくワクワクするぜ！」

ラッシュ「そうだな…俺も修行にはちょうどいいしな♪」

ラッシュは逆に目的からはずれているような気がした

ペラップ「あの～ラッシュさん（汗）私達は修行に行くわけじゃな

いのですが（汗）」

あくまで遠征なのだが

ラッシュ「遠征でも強くなるために修行はかかせない、それにいつ敵が襲うのかわからないぜペラップさん？」

たしかにそのとおりだ

プクリン「うんそうだね♪修行もいいものだよ♪楽しみ♪楽しみ♪」

親方様は楽しそうだ

だがお宝を奪うたくらみをしているドクローズは

スカタンク「（ククククッ）」

にやりとするが

ソウ「……」

ソウがにらみつけたため態度を普通にした

……

みんなグループに分けていくことになった

ドルク「俺達は沿岸の岩場からのルートだな」

シルム「結構辛いけど」

ソウ「大丈夫ですよ♪」

ネク「俺もいるし♪」

ラーク「僕もです♪」

ラッシュ「そうだな」

ビッパ「あっしはドルク君達のグループでゲスね」

ドルク達探検隊ブレイブはいつものメンバー＋ラッシュとビッパを加えた7匹で行くことになった（半端ソウがお…説得したため）

ドルク「それじゃあ出発だ！！」

こうして彼らの遠征が始まった

……

まず彼らは遠征の岩場に来ていた

ブレイブ＋αは海沿いのルートを通ってベースキャンプに行く予定だ

シルム「うわぁ！ドルク、ここから先は海だ！」

ドルク「それにものすごいガケだなこりゃ」

ビッパ「やっぱり遠征に行くというだけあって、それだけ道も険しくなるのかもしれないでゲスねえ」

そう、ここからが険しい道の始まりだ

ソウ「ん？この像は…ガルーラさんの像みたいですね」

ソウが見ているのはガルーラの像だった

ビッパ「これは探検家の間で有名なガルーラ像でゲスよ」

ネク「ガルーラ像？」

ビッパ「そうでゲス、ガルーラ像でゲス」

ラッシュ「たしか持ち物の整理などができる優れものだったな」

ラーク「じゃあ荷物とか必要な物とかを預けることができますね」

ドルク「今はまだ使わないが、この先にもあるような気がするな」

今は預けるものはドルク達にはなかった

ラッシュ「それじゃあ出発しようぜ」

ブレイブ一行は沿岸の岩場に入っていった

……

ドルク「エナジーバスター！！」

ソウ「ブレイブクレシェント！！」

ドルクはエナジーバスターをソウは三日月のカッターを数発放った

シルム「フレアドラゴン&大文字！！」

ラッシュ「フレアソウル！！」

シルムは炎の龍を放ち、さらに大文字を繰り出した、ラッシュはフレアソウルで敵を倒した

ネク「ライニングウィンド！！」

ラース「ボルクラッシュ！！」

ネクは雷をプラスした風を、ラースは尻尾に電気を集めて地面を叩きだした、すると地割れが発生してこの地域のポケモン達は次々と倒れていった

ビッパ「あっしの出番（泣）」

ビッパは攻撃する出番がなく涙目である（汗）

……

ビッパ「ふう～やっと抜けたでゲス」

ほとんどビッパは何もできずほとんどの敵はブレイブ一行により撃破された

ビッパ「それにしてもみんな強いでゲスね（汗）」

みんなのありえないほどに力に驚くビッパ

ネク「トレーニングしてたから♪」

シルム「オイラもラッシュ師匠に稽古つけてもらってフレアドラゴンまで完成させたからよかった」

シルムも納得していた

ソウ「でもベースキャンプまではまだまだですよ」

ラッシュ「この山を越えればベースキャンプだな」

どうやらだいぶ近くまで来たようだった

すると

ぐう〜

ビッパ「うぐっ、お腹がなったでゲス」

するとまた

ぐう〜

シルム「ハハハハ、オイラ達もな」

みんなお腹がなった

ラッシュ「そうだな、今ここを越えようとすると夜中になっちまうかもしれないな、今日はここまでだな、ここで一晩メシを食って休んで、朝になったら出発するぞ」

ここでブレイブ一行は一晩を過ごした

……

次の朝

シルム「さてと、そろそろ出発しようか」

ラッシュ「そうだな、少し準備してから行こうぜ」

ビッパ「賛成でゲス」

数分後

ドルク「準備ができたぞ」

ソウ「出発しましょう」

一行はツノ山を登った

……

ラッシュ「敵も強くなってきたな」

ソウ「でも僕達にとってはなんともありませんけどね♪メテオ！！」

ソウはメテオを唱え、敵ポケモンを一掃

ネク「ホワイトウィンド」

ネクは白い風で一行を包んで体力を回復させる

ラース「サンダガ！！」

ラースはサンダガを唱えて敵を倒す

ビッパ「なんかあっしって足引っ張ってるような気がするでゲスが（汗）」

ラッシュ「まあとりあえず石でサポートしてくれ」

ビッパはゴローンの石などでサポート

ビッパ「前にもこれで倒した記憶があったような気がするでゲス（汗）」

そう口説いていた

こうしてなんとかブレイブ一行はツノ山を抜けた

第17話　あっしの出番が（泣）ｂｙビッパ（後書き）

ポケダン劇場（シアター）

探検戦士ナエドルク２

スカタンク「（泣）」↑ボロボロ

ドガース「（泣）」

ズバット「（泣）」

ドルク「ホンッとに…何度言えばわかるんだテメーら（怒）いい加減俺にかまうなって言ってるだろ（怒）」

ここは公園

ドガース「あの～」

ドルク「あぁ（怒）」

ドガース「俺達は悪の組織で」

ズバット「ドルクさんが正義の味方で」

スカタンク「悪の組織が正義の味方を倒すのは常識ですし」

グリグリグリ

ドルク「何が常識だゴラ（怒）悪の組織が常識語ってんじゃねぇよ！（怒）」

ドガース「いたたた」

ドカドカドカ

ドルク「やるならやるで時と場所を考えろ（怒）空気よめよ空気（怒）」

スカタンク「ぎゃあああああああっ！！！！！！！！？」

ドルク「うっせえ！！」

ドガッ

……

数分後

店員「特盛り弁当のお客様」

スカタンク「あっすみません」

ドガース「なんで俺達が（泣）」↑大量に食い物を袋に持っている

ズバット「こんな目に（泣）」↑同じく

探検戦士ナエドルク、これはポケモン世界で起きた正義と悪との壮

絶な戦いの物語であった

つづく？

第１８話　もうこのチームには逆らわない方が（泣）ｂｙペラップ（前書き）

連続更新です、ではどうぞ

第１８話　もうこのチームには逆らわない方が（泣）ｂｙペラップ

ビッパ「はあはあ……や、やった～っ！ツノ山を越えて……やっと……やっとベースキャンプまで到着したでゲスゥ～～ッ！！」

ブレイブ一行はベースキャンプへと到着した

そこにはギルドのメンバーがすでに到着していた

ビッパ「みなさんおまたせしましたでゲス～！」

みんな振り返ったがペラップは怒っていた

ペラップ「遅いぞ！（怒）お前たち！他のみんなはもうとっくに到着してるよ！（怒）」

だが

ドルク「おい鳥…ちょっとこいや」

ペラップ「え……」

ペラップは固まった、ドルクがペラップをキャンプの近くで……

ペラップ「ぎゃあああああああ

！！！！！！！！！！！！！！！？」

近くから鳥のうるさい鳥の断末魔が聞こえた

……

ドルク「何が遅いだ～（怒）」

ソウ「僕達に逆らうなんて（怒）」

ネク「どうなるかわかるよね（怒）」

ラース「ヘタレ先輩と同じようにうるさいですよバカアホヘタレ鳥さん（怒）」

ペラップ「はい…すみませんでした（泣）」

ペラップはミイラ化した状態で腹黒４人衆の説教を受けていた（汗）

ラッシュ「まあそれより荷物整理して作戦会議じゃなかったのか？」

ラッシュに言われ

ソウ「それじゃあ行きましょう♪」

ソウはペラップを引きずって行く

ペラップ「ぎゃあああああああああああああああああやめてええええええええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！？（泣）」

鳥の断末魔がベースキャンプに響く

ラッシュ「俺達も行こうぜ」

ドルク達も行こうとしたがドルクが足を止めた

シルム「ん?ドルクどうした?」

ドルクは黙っていた

ドルク「(なんかここに来てたら感覚が…なぜそうなったのかわかんねぇが、俺は…この場所を知っている!ここに来たことがあったのか?もしかして…俺の記憶と関係あるのか……)」

シルム「ドルク?」

シルムが声をかける

ドルク「すまない、そんじゃ行こうぜ」

ドルクはようやく歩きだした

……

ペラップ「えーというわけで、みな無事にベースキャンプに来れたようだし、これより霧の湖の探索を行う♪」

鳥はミイラ状態になりながら話す

ペラップ「見ての通りここは深い森に覆われている、そしてこの森の何処かに霧の湖があるらしいのだが、今の所噂でしかない、これまで色んな探検隊が挑戦してきたがまだ発見されていないのだ」

そこにヘイガニが割って話す

ヘイガニ「ヘイヘイヘイ！ヘイ！本当にあるのかい！？霧の湖ってさ！？」

なんだか落ち着きがないようだった

キマワリ「まあヘイガニったら、それを言ったらあまりにも夢がないですわ」

そういうキマワリ姉さん

ドゴーム「いまさらそんなこと言ってどうするよ！」

スピーカーがいつもと変わらない声で言う

ヘイガニ「ヘイヘーイ……」

少し落ち込むヘイガニ

するとそこからチリーンが話に入る

チリーン「あのう、私ここへ来る途中である伝説を聞いたのですが」

ペラップ「伝説？」

それは一体どんな伝説なのだろうか？

チリーン「はい、霧の湖にまつわる伝説です」

チリーンは静かに語りだす

チリーン「なんでも霧の湖にはユクシーというとてもめずらしいポケモンが住んでいるそうです」

ラッシュ「（ユクシー、たしか知識のポケモンだったな）」

ラッシュはユクシーの事を知っていた

チリーン「そしてそのユクシーには、目を合わせたものの記憶を消してしまう力があるそうなんです」

ドルク「（なっ！？記憶を消してしまう力だって！？）」

ドルクは驚いていた

チリーン「なのでもし霧の湖に訪れたものがいても、ユクシーによって記憶を消されてしまうので、湖の存在を伝えることができない、ユクシーはそうやって霧の湖を守っていると、そういう伝説が残っているそうなんです」

周りの反応は

ビッパ「ううっ、ちょっとおっかない話でゲスね……」

ドゴーム「ワシ、記憶を消されたらどうしよう」

ドゴームの心配にキマワリ姉さんが

キマワリ「あら！アナタは心配ないですわ、だってそうでなくてもアナタ物忘れが激しいじゃない」

ドゴーム「なんだと（怒）」

ドゴームが怒るが

ラッシュ「やめておけ、それより続きを話してくれ」

ラッシュが割って入りなんとか騒動を収める

ペラップ「まあこういった場所にはたいていいいつたえや伝説が残されているものだ、そしてわがギルドはこれまでもそういう困難を乗り越えて探検してきたのだ♪」

キマワリ「その通りですわ！」

ダグトリオ「それこそが親方様のギルドが一流とされる由縁（ゆえん）だからな」

それにプクリン親方が

プクリン「フフフ、心配はいらない、きっと大丈夫だよ♪今回の冒険も成功を信じて、がんばろ♪がんばろ♪」

親方様はみんなを励ます

ラッシュ「（さすがギルドの親方だ、見た目はかわいいがこのリーダー性がすごいな）」

ラッシュは納得する

ペラップ「それで今回の作戦だが、まず私と親方様はここに残りみんなからの情報を集める、そしてみんなは各自森の中を探索してくれ、ただしこの森は奥へ進むともやがかかっていて非常にわかりにくい、たぶん霧の湖はこのもやのせいで発見しにくいのではないかと考えられる、もしかしたらこのもやをとる方法があるのかもしれない、なのでもし探索中に霧の湖を見つけるか、もしくはもやをとる方法を見つけたら、ベースキャンプに戻って私か親方様に伝えて欲しい、以上だ、それではみんなっ♪がんばっていこーーーーーーっ♪」

ペラップの号令とともにみんなは森へと入っていった

シルム「ドルク、オイラ達も」

ドルク「（俺はなぜかこの場所を知っている、そして記憶を消す力があるというユクシーというポケモンの伝説、この二つは偶然か…もしかしたら記憶をなくす前に俺はここに来たことがあって、そしてユクシーに出会い……記憶を消された、そう考えられるな）」

シルム「ドルク！」

シルムが声をかける

ドルク「んあ？」

シルム「さっきから何ボーッとしてるんだよ?らしくないなあ、オイラ達も早く準備して森へ行こう!」

ドルク「ああ、すまない」

ソウ「熱でもあるんですか師匠?」

ソウが心配そうにいう

ドルク「心配するな、少し考え事してただけだ」

ネク「とにかく行こうよ」

ラース「そうですね、行きましょう」

ブレイブ一行は濃霧の森に入る、するとまたドルクが立ち止まる

ドルク「(俺の記憶を解く鍵がここにあるかもしれない、霧の湖、そこに行けば何かわかるかもしれないな)」

すると

シルム「あれ?なんだろう?」

森の入口で一行が集まっていた

シルム「なんか石のようだけど」

ラッシュ「赤くて綺麗だな」

ソウ「まるで宝石みたいですね」

シルムは赤い石を拾ってみた

シルム「わあ～！この石温かいぜ！？」

ラッシュ「温かい？」

その石は温かかった

シルム「石の中から熱を出してるような……不思議な感じだよ」

ソウ「僕に触らせてください」

ソウは石にさわった

ソウ「ホントだ、温かいです」

ネク「溶岩でもなさそうだし、なんだろうな？」

ラッシュ「それはお前が持ったほうがいいな」

ラッシュは何かあると思いシルムにその石を託した

シルム「うん、めずらしいからとっておくよ」

石をトレジャーバックに入れて

ラッシュ「行くぞ」

ブレイブ一行は森の中へと入った

第18話　もうこのチームには逆らわない方が（泣）ｂｙペラップ（後書き）

ドルク「更新早かったな」

ポケダンの方進めたかったからそうしたの

シルム「でもこの石なんだろう？」

それは次回で明かされます

ドルク「どうなんだか」

第１９話　グラードンの心臓（前書き）

ドルク「ん？」

今回はこっちの更新を進めないと

シルム「急に作者どうしたんだろう？」

ラッシュ「今日は色々あって更新しようとしてるようだ」

シルム「どうなるんだろう（汗）」

第19話　グラードンの心臓

ソウ「アルテマ！」

ソウがアルテマで一掃した

ドルク「敵も少しはやるな…だが俺達はそう簡単に甘くねぇ」

一行は敵を倒しながら進む

……

一行は水が滝のように流れている場所へとついた

ソウ「水が」

ネク「すご～い♪」

シルム「でもどのあたりなんだろうなここ」

ラッシュ「ここが森の一番奥みたいだな」

だがもやが深くてどっちに行けばいいのかわからなくなったそんなとき

？？？「ヘイヘーーーーイ！！」

見覚えのある掛け声が

シルム「あっ！ヘイガニ！」

そこにいたのはヘイガニだった

ヘイガニ「ヘイヘーイ！何か手がかりとかあったかい？」

ラッシュ「いや、こっちはどうなんだ？」

ラッシュがヘイガニに聞いた

ヘイガニ「おいらもサッパリだぜヘイヘーイ……」

何も見つけられずがっかりしていたが

ヘイガニ「でも……ちょっと気になる物があってよ」

ソウ「気になる物？」

ヘイガニ「あれを見てくれよ」

ヘイガニが指（というかハサミだが（汗））を指したところには

シルム「な、なんなんだ！？これは！？」

ラッシュ「これは…グラードンの石像だな」

ラッシュが言うグラードンとは

ネク「たしか大陸を広げたポケモンのだよね？」

ソウ「でもどうして石像がこんな所に？」

ヘイガニ「それがおいらにもわかんねぇんだ」

そのグラードンの石像はバランスが悪く、まるで何処かの国の塔のように傾いていた

シルムが石像を見てまわると何かを発見した

シルム「あれ？ここに何か書いてあるよ？」

そこには何かの足型のような文字だった

シルム「足型文字だ、読んでみるよえーと……『グラードンの命ともしき時、空は日照り、宝の道開くなり』……宝の道？……だってぇ！？」

ソウ「もしかして霧の湖のお宝ってことじゃないのですか！？」

シルム「宝への道が開く……ということは……もしかしたら……霧の湖に行く謎がここに隠されてるのかもしれないぜ！」

どうやらそうらしい

ヘイガニ「ヘイヘイヘーイ！！ほ、本当か！？」

ドルク「そんじゃあ謎を解こうぜ」

問題はグラードンの命とはなんなのかだ

ソウ「でも命を灯すって……どうすればいいんですか？」

そこで

シルム「そうだ！ドルク！この石像に触ってみてよ！ドルクならもしかしたら何か見えるかもしれないよ！？」

ドルクはわかったような顔をして

ドルク「ああ、俺もそうしようと思った（俺の過去を紐解くためのカギがこの石像にあるなら）」

ドルクはグラードンの石像に触れてみた

シルム「どうお？ドルク？」

すると

ドルク「（来た……あのめまいだ）」

……

そうか！ここにっ！！ここに……があるのか！！

……

ドルク「（今のは！？今の声は誰だったんだ？……ま…またか！？連続で）」

……

なるほど、グラードンの心臓に日照り石をはめる、それで霧は晴れるのか！さすがだな！やっぱり俺のパートナーだ！

……

ドルク「（今のは……一体…今まで見えたものとはちょっと違うな……今回は声だけで映像も何もないな、それに誰の声だったんだ？…それに俺のパートナーって？気になるな……）」

シルム「ドルク大丈夫か？」

シルムが声を掛ける

ドルク「ああ、すまない（声が何を言ってたか思いだしてみるか…たしかグラードンの心臓に日照り石をはめるだったよな…それで霧が晴れるだったな…！待てよ！日照り石ってもしかして）」

それは濃霧の森でシルムが拾ったあの石

ドルク「（あの時シルムが拾ったあの石がそうだとしたら）」

ラース「師匠！」

そこにラースが入ってきた

ラース「石像の胸の部分に小さなへこみがありました」

ラッシュ「へこみ」

みんなが石像を見るとたしかに胸のところにへこみがあった

ドルク「シルム、その石をこの石像の胸にはめてくれ」

そういうと

シルム「わかった！やってみるよ！」

シルムはへこみに石をはめた

するとグラードンの石像の目が赤く光地震が起きる

ラッシュ「みんな！離れるぞ！」

ラッシュの号令とともにみんなが石像から離れる

すると光が一行を包んだ

全員『うわ～～～～～～～～～～～～～～～～～っ！！！？』

光が収まると太陽が顔を出していた

ネク「もやが…」

ヘイガニ「消えたな」

シルム「晴れちゃったな」

日がみんなに当たる

ソウ「まぶしいです」

するとシルムは上を見ると

シルム「あっ！あれは！み、みんな！上を見ろよっ！！」

ヘイガニ「うわっ！なんだ！？あれはっ！！」

ラッシュ「これは」

一同騒然とする

シルム「もやが晴れてやっとわかった、今まで誰にも見つからなかったはずだよ、オイラ達もここをウロウロするしかなかったんだからな」

ヘイガニ「ヘイ！それってさ」

ラッシュ「ヘイガニが思ってる通り霧の湖は……あの上にあるってことだな」

シルム「そうさ、オイラはそう思う、霧の湖は……きっとあの上にあるんだ！」

上にはワイングラスのような形の岩があり、そこから滝が流れていた

第19話　グラードンの心臓（後書き）

シルム「やっと霧の湖まで」

もうすぐ見たいだね

ソウ「ついにですか」

さて次回は…まあ見てください♪（黒）

ラッシュ「何か嫌な予感が（汗）」

第２０話　熱風の洞窟へ～霧の湖の謎～（前書き）

ドルク「行くぜ！！」

シルム「おう！」

ソウ「突撃です♪」

はいはいいってらっしゃい（汗）

第２０話　熱風の洞窟へ～霧の湖の謎～

ヘイガニ「ヘイ！こうしちゃいられねぇ！おいらギルドのみんなに知らせてくるよ！おめえ達はがんばって先を目指してくれ！」

そう言うとヘイガニはみんなの所に戻っていった

シルム「よし！みんな行こうか！」

ソウ「霧の湖を目指して行きましょう！」

行こうとしたが

？？？「待ちなっ！！」

そこに下品…いやドクローズが乱入

ドルク「しつこい！エナジーバスター！」

ドクローズ「ぎゃあああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？」

ドルク「とんでもないお邪魔虫か来たから行こうぜ」

ドクローズ「待てっ！！」

だがまだ倒れてなかった

ドルク「チッ！しぶといG野朗が（怒）」

スカタンク「こんな所で倒れるわけにはいかないのだ！」

ラッシュ「俺達の邪魔するのなら容赦しねぇぞ」

全員が構える

ラッシュ「お前らの目的はお宝だろ？わかってんだよ」

スカタンク「やはりわかってたか」

どうやらそうらしい

ソウ「ずいぶんと卑怯なことしてまでお宝を頂くなんて…どうなるかわかりますよね？（黒）」

ソウはアルテマの攻撃準備を

スカタンク「ここで…くたばってもらう！」

ラッシュ「だがあの毒ガスは無駄だ」

スカタンク「クククククッ無駄なのはどっちだ」

スカタンクは何か策があるらしい

ラッシュ「（奴ら何か策とかで俺達を生かせないつもりだな…なら…）」

ラッシュは力を入れる

スカタンク「食らうがいい！貴様らはここでくたばれ！俺様とドガースの毒ガススペシャルコンボｔ」

その時

？？？？「あ～ん！待ってえ～～～～～～～！」

横からセカイイチが転がってきた

ズバット「な、なんだ？」

そこから

？？？？「セカイイチー♪セカイイチーーーーッ♪」

ドルク「なっ！？親方様！？」

なんとプクリン親方だった

プクリン「やっと捕まえたっ♪僕のセカイイチ♪セカイイチが無くなったら僕は……僕は……うるうる（泣）」

なぜか目をうるうるとしていた

プクリン「あ、あれ？」

ブレイブ一行に振り向く

プクリン「君達……」

ドクローズに振り向く

プクリン「そして僕の友達も♪みんな一緒だ♪わーい！わーい！」

プクリンは喜んでいた、何を考えてるのか（汗）

スカタンク「お、親方様（汗）ここで何をしているのです？」

プクリン「ん？何って、森を散歩してたらねセカイイチが僕からコロコロ逃げ出しちゃったの……んでそれを追いかけてきたらここに来ちゃったってわけ♪」

森を散歩してたらしい（汗）よくベースキャンプからここまで来たのはある意味すごかった（汗）

全員『（この人すごい（汗））』

みんなそう思っていた

プクリン「そうだ！君たちこんなことろでさぼってちゃいけないよ？」

ブレイブ全員『えっ？』

プクリン「君達のお仕事は森の探索でしょ？ほら先へ行って行って♪」

プクリンは先に進めるようういう

ドルク「でも親方様？」

プクリン「親方の言うことが聞けないの？プンプン」

某芸能人のような感じに言う親方様（汗）

ラッシュ「ここは行った方がいいな（汗）」

ドルク「そんじゃ行こうぜ♪（ありがとな親方様♪あんたはすごいぜ♪）」

一行は先へと進んだ

プクリン「がんばってね～♪」

元気にお見送りした

プクリン「ああ早くいい知らせが来ないかなあ～♪ルン♪ルルルン♪ルンルン♪ルルルン♪ルンルン♪」

スカタンク「あのー親方様（汗）」

スカタンクがプクリンに話す

プクリン「ん？どうしたの？友達♪」

スカタンク「われわれも探索に出かけようと思うのですが」

そういうが親方様は

プクリン「ええ～!?いいよう、友達にそんな苦労はさせられないよう、探索はさっきの6匹に任せてここで一緒に知らせを待ってよ♪ルルルン♪ルンルン♪ルルルン♪ルンルン♪」

もはやドクローズはプクリン親方に足止めをさせられた

……

シルム「おっ!ドルク!みんな!あったぞ!」

ドルク達ブレイブ一行は裂け目がある洞窟を見つけた

ラッシュ「ここから入れるな」

ドルク「みんな、気を引き締めて行くぞ!」

全員『おおーーーーーーーーーーー!!!!!』

全員は水蒸気が発している洞窟へと入っていった

一方その頃、グラードン像の前では

スカタンクとプクリンがにらめっこしていた（というかスカタンクがにらめっこしているが（汗））

プクリン「どうしたの?友達♪さっきから怖い顔して?」

スカタンク「（うむむ……コイツ……できるっ!!!!）」

もはや一歩も動けない状態だ

プクリン「あっ！わかった♪僕とにらめっこしたいんだね♪それなら僕負けないよ♪」

何を勘違いしたか親方は変な顔をして

プクリン「ベロベロンドゥバー♪でろでろどばどばんばあー♪」

もはや我慢の限界に達したドクローズは

ドガース「ヒソヒソ（ダメだ、俺もうこの状況に耐えられねえ）」

スカタンク「ヒソヒソ―（くっ！しかたがない！）」

意を決してスカタンクは

スカタンク「おいプクリン！」

プクリン「どぅわあぬぃ（なあに）？」

スカタンク「悪いが……貴様には……ここでくたばってもらう！食らえ！俺様とドガースの毒ガススペシャルコンボ2を！！」

毒ガスが親方に襲う、はやして親方様の運命は！？そしてブレイブ一行は無事に霧の湖にたどり着けるにか！！

第２０話　熱風の洞窟へ～霧の湖の謎～（後書き）

最後は勢いよく作りました

ラッシュ「ついに来たな」

ドルク「よ～し！親方様には後でセカイイチで乾杯しとかないとな♪」

おいおい（汗）なぜか親方様と仲良くなってるよ～このドS亀（汗）

第２１話　迫り来る敵（前書き）

ドルク「ついに２０話突破だ！！」

全員『わーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！』

ソウ「僕もいますし♪」

ネク「俺も♪」

ラース「このままがんばりましょう！！」

全員『おーーーーーーーーーーーーー

第２１話　迫り来る敵

熱水の洞窟中継地点

ラッシュ「大分上ってきたな」

シルム「頂上まではあと少しかもしれない」

すると

グォォ……

ネク「ん？なんだろう？」

するとまたグォォォォ……

シルム「今なにか……聞こえた？」

ドルク「たしかに聞こえたな」

だが

……

ラッシュ「聞こえてこないな」

シルム「気のせい……なのかな？」

ラース「頂上まであと少しですからがんばりましょう！」

全員『おーーー

ドルク「そういえばみんなに話さなきゃなんねぇが」

みんなの足が止まる

シルム「なんなのそれは？」

ドルクはここにきてから自分が感じたことについて説明した、自分がここに来たことを

シルム「えっ？ベースキャンプについたときからなぜかここを知っている気がしてたんだって？」

ドルク「ああ」

ラッシュ「そして霧の湖にすみ、訪れた者の記憶を消してしまうというユクシーの伝説、それらのことからドルクは以前にもここに来たことがあってユクシーに会い、そして記憶を消されたんじゃないかと」

ドルクの記憶、それはこの霧の湖に隠されているのか？

シルム「そんなこと考えてたんだドルクは……」

シルムは少し考え

シルム「うむむ……ドルク！それなら！ますますこの上に行かなきゃ！」

ラッシュ「そうだな」

ソウ「行ってユクシーに会って真実を聞きましょう！」

ネク「記憶を失う前のドルクはどんなだったのかをね」

ラース「ユクシーに会えば何かわかるかもしれません！師匠！」

みんなとの絆が深まる

シルム「ドルク行こう！この上へ！」

ドルク「ああ！行くぞ！」

再び彼らは歩き出した

……

ドルク「厄介だな」

ソウ「師匠は草タイプですからここは僕のフラッドで！」

ソウは水柱を発生してブーバーを倒した

ラッシュ「ここまではきついな」

ドルク「ラッシュのおかげでなんとか助かる」

ラッシュ「そりゃどうも」

どんどんみんな敵を倒していく、そして……

……

熱水の洞窟頂上

周りは岩だらけだった

シルム「だいぶ上まで上ってきたけど、ここは……なにか……妙な感じがする」

ソウ「はりつめた感じだけじゃなくて」

ラース「体中の皮膚が逆立つような感じでとてつもなく危険な予感がします」

すると

グオオオオォォォォーーーーーーーーーーーーーーーッ！！

シルム「ヒッ！？」

シルムは驚く

シルム「ド、ドルク！さっき聞いた声だ！」

ラッシュ「やはりあれは何かの鳴き声に間違いないな」

グオオオオォォォォーーーーーーーーーーーーーーーッ！！

ズン

ズン

ソウ「な、ゆれてます!?」

シルム「な、何かが…」

ラッシュ「何かが近づいてくるぞ!!」

その頃

濃霧の森奥地

ヘイガニ「ヘイヘイヘーーーイ!みんなー!こっちだぜー!」

みんなが駆け寄る

ペラップ「これかグラードンの石像というのは」

キマワリ「しかし……誰もいないですわね」

誰もいなかった、数分前にはプクリン親方とドクローズがいたはずだった

ペラップ「おいヘイガニ!お前本当に親方様も見たんだろうな?」

ヘイガニ「ヘイ!たしかに!おいらがベースキャンプに帰る途中…
…セカイイチと追いかけっこしている親方様とすれ違ったんでおいら声をかけたんだけど親方様はそれどころじゃなかったみたいでさ

あ」

ヘイガニがあたりを見回す

ヘイガニ「ヘイ！ドルク達は先に言ってるはずだし……たぶん親方様もその後を追ってるんじゃないかと思うぜ！？」

だがこっちにも

ディグダ「あれっ？地面が」

ビッパ「少しゆれてるでゲスね」

グォォォ……

チリーン「今のは……なんでしょう？」

ドゴーム「鳴き声……かな……」

ヘイガニ「ヘイ！この上で何か起こってるのかもしれねえ！みんあ急ごう！」

ギルドメンバーはその後を追った、するとディグダが足を止めた

ディグダ「あれ？お父さんあっちのほうから今何か聞こえなかった？うめき声のような声が……」

ダグトリオ「気のせいだ急ごう」

ディグダ「うん」

ディグダグ親子も急ぐ

その逆側にはドクローズが倒れていた

ドガース「や、やられた……体が動かねえ……」

スカタンク「うう……な、なぜだ……なぜプクリンは……毒ガススペシャルコンボ2を食らって平気でいられるのだ」

あらら、いわんこっちゃないｗｗ

スカタンク「なんだと！（怒）」

はいはい汚物は消毒しとかないとね～♪アルテマ♪

ドクローズ「ぎゃあああああああ

ズン

ズン

グオオオオオオオオォォォォォーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！

ズンズンズンズン

一行の前に現れたのは赤い体色で４本の細い尻尾に両方にトゲがついているポケモンだ

シルム「わわっ！？あ、あれはっ！？あの石像の！？やっぱり石像のポケモンは本当にいたんだ！？」

？？？？「グオオオオオオオォォォォォォォッ！！」

シルム「ひぇぇ……」

シルムは驚いてひるんだ

？？？？「グオオオッ！お前達！ここを荒らしに来たのかッ！！帰れっ！！」

シルム「そ、そんな……オイラ達はただ霧の湖に行きたくて」

？？？？「何ッ！霧の湖ッ！？」

そのポケモンは驚く

グラードン「我が名はグラードン！霧の湖番人だ！侵入者は生きては返さんッ！！」

ズシーーン！！

シルム「ええっ！！？」

ドルク「どうやら俺達を舐めてるな…なら全力でこじあけてやる！！」

ドルクは構えた

ラッシュ「相手は伝説の1体だ！油断するとやられるぞ！」

ソウ「僕達がここで引き下がれるわけにはいきません！」

ネク「俺も！なら俺達が倒せば問題ない！」

ラース「僕達はドルク師匠の仲間です！僕達はここで立ち止まるわけにはいきません！」

ラッシュ「そうだな、ドルク！」

ドルク「ああ！」

……

その頃、ギルドメンバーは熱水の洞窟の入口へとやってきた

ヘイガニ「ヘイ！ここに入口が！」

キマワリ「ここから上に行けそうですわ！」

ドゴーム「急ごうぜ！」

みんな入っていった

……

ヘイガニ「はあはあ……ヘイ！ペラップ！走りながら聞きたいんだがよ……ペラップは知ってるのかい？グラードンってポケモンの事を」

当然

ペラップ「バカにするな！（怒）私は情報屋だぞ！？バサバサ！」

冷静になり

ペラップ「グラードンは……神話の世界に語り継がれた伝説のポケモンだ」

ヘイガニ「伝説のポケモン？」

ペラップ「そうだ、いい伝えには……大地をもりあげて大陸をひろげたポケモン……とされている」

ヘイガニ「ひえええ……なんかすごそうなポケモンだな」

……

ドルク「（俺は絶対に……）」

ラッシュ「（なんだ？こいつ…波動で見たが本物なのか？）」

……

ヘイガニ「ヘイ！もし……もしグラードンってのと戦ったらどうなるんだい？」

ペラップ「ええ！？戦うなんてとんでもない！ババサ！もしグラードンと戦ったとしたら……そのポケモンの命はないと思ったほうがいい！！それほど強いのだ！伝説のポケモンは！」

すでに今対峙していることをギルドメンバーは知らない

ブレイブ一行が今対決しようとしていますよ（汗）伝説のポケモンに（汗）

グラードン「グオオオオオオォォォォォォォッ！！」

シルム「ううっ怖い……」

ドルク「シルム、怖がるな！俺達がついてる！」

ソウ「そうですよ！ここで師匠の手がかりがつかめなくなります！」

ネク「それでも俺達は負けない！」

ラース「僕もです！」

ラッシュ「そうだ、ここで怖がるな！」

シルムは勇気をだし

シルム「勇気だ！勇気を出さなきゃ！みんな！がんばろうな！」

グラードン「覚悟ッ！！」

ズシーン！！

グラードン「グオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォッ！！」

今戦いの火蓋がきって落とされた！！

第２１話　迫り来る敵（後書き）

ドルク「あの野朗（怒）ぜってぇ～ぶっ潰す！！」

色々言われて腹立つのはわかるけど（汗）負けないでね

ラッシュ「俺もついてるしな」

次回はグラードン戦です、はたして

第２２話　ＶＳグラードン～湖の真実～（前書き）

ついに対決です

ソウ「僕の召喚獣がついに♪」

はいはいネタバレしない（汗）

ドルク「そんじゃ行くぜ！」

ドルク・ソウ「どうぞ」

第２２話　ＶＳグラードン～湖の真実～

ラッシュ「グラードンは地面タイプを持っている、さらにひでりで炎タイプの威力も上がっている」

ドルク「なら俺が」

シルム「でも相手が炎持ってた場合も考えられるよ」

たしかにひでりがある時点でそう考えられる

ソウ「それでも僕達は行きます！召喚獣【炎】！！」

ソウは地面に魔方陣を作り、そこから炎で出来たリザードンが現れた

ラッシュ「召喚か」

ソウ「僕のは物質でできたポケモンですが、性能はバッチリです」

そういうとソウは炎でできたリザードンに乗った

グラードン「行くぞッ！！地震！！」

グラードンは地震を繰り出した

ラッシュ「乗れ！」

みんなはラッシュとソウの召喚リザードンに乗って回避した

ソウ「日照りが厄介ですね」

シルム「どうしたら」

すると

ドルク「なら日照りを利用するしかねぇがとりあえず攻撃だ！エナジーバスター！！」

ドルクはエナジーバスターを放つが

グラードン「火炎放射！！」

火炎放射で相殺された

ドルク「チッ、ここまでやるとはな」

ラッシュ「日照りの効果もある、水タイプでは威力は下がるがどうするかだな」

ここでシルムが

シルム「ねえ？だったら炎タイプの攻撃を一斉に放って、一つにすればいいんじゃないかな？」

その考案で

ドルク「炎…そうか！日照りの効果を利用するなら威力は！」

グラードン「グオオオオオオォォォォォォ！！作戦は終わりか？ならこれでソーラー」

グラードンがソーラービームを発射しようとした

ラッシュ「エアスラッシュ！」

ラッシュが発射の前にエアスラッシュで

グラードン「グオッ！？」

一瞬ひるませた

ドルク「今だ！俺達の力を一つに行くぞ！！メルトン！！」

ドルクは大きな火球を

ソウ「サウザントカッター炎！！」

ソウは炎の衝撃波を

ネク「フレリアルブレイク！！」

ネクは閃光のような炎を

ラース「オートマチックスパーク！！」

ラースは花火のような電気を

ラッシュ「龍炎！！」

ラッシュは炎タイプ最強技＋炎の龍を召喚し

一行の技が一つとなった

全員『いっけえええええええええええええええ！！！！！！！！』

巨大な炎の龍となった、それはグラードンを飲み込んでいく

グラードン「何っ！？グオオオ

ラース「わっ！」

シルム「うわあぁ～～～～～～～～～！！」

光が収まると

シルム「あれ？グラードンがいない！？」

そこにはグラードンの姿がなかった

すると何処からか声が

？？？？「あれは……あれは本物のグラードンではありません、あのグラードンは私が作り出した幻です」

ソウ「今の声は一体？」

？？？？「私はここを守るもの、この先を通すわけにはいきません」

その声は清らかだった

シルム「ちょ、ちょっと待ってくれ！オイラ達悪いことをしに来たんじゃないよ！？ただたしかめたいことがあって」

？？？？「たしかめたいこと？」

シルム「うん！ホントだよ！」

ネク「そりゃ俺達は探検隊だから」

ソウ「お宝とかもらえたら嬉しいですけど」

ドルク「でもそれが悪いことになるのならいただけない、それに俺達はここまで来れたことが嬉しい」

そう、お宝はなんでもってわけではない、悪いことに使うものならいらない、いいことだったらいる、それがお宝なのだから

シルム「なあ！信じてくれ！」

すると声の主は

？？？？「……わかりました、あなたたちを信じましょう」

すると目の前から頭が黄色でクラゲのような姿のポケモンが現れた

？？？？「初めまして、私はユクシー、霧の湖の番人です」

それはユクシーだった

シルム「ええっ！？ユクシーだってっ！？」

シルムは驚きみんなも

ソウ「ええっ！？」

ネク「このポケモンが！？」

ユクシー「はい……私は霧の湖である物を守っているのです」

ラッシュ「ある物？」

ユクシー「今からその霧の湖へ案内します、どうぞこちらへ」

一行はユクシーについていった

第２２話　ＶＳグラードン～湖の真実～（後書き）

さてグラードンは倒しましたが

ドルク「偽者か…本物かと思ったな～」

ラッシュ「どうも怪しいと思ってたからな」

まあそのトリックも次回で明かされるよ、でも次回はラッシュはこっちに出るのが最後になるよ

シルム「えっ？」

この次の話が終われば新章突入するから

第２３話　遠征終了と別れ（前書き）

さて、遠征編ラストです

ドルク「やっとか」

シルム「湖の真実はなんだろう？」

それはお楽しみに

ソウ「でも別れって？」

ラッシュはここでお別れになります

ラッシュ「俺か…まあいい思い出になったからいいか♪」

それではどうぞ

第２３話　遠征終了と別れ

一行が湖に着いた

シルム「わあっ、辺りがすっかり暗くなってるよ」

ユクシー「もう夜なので少し見づらいですが……ごらんください、ここが霧の湖です」

一行が近づく

シルム「わあ～～っ！」

それは美しい風景だった、様々な光がさまよっている、まるでホタルのようだった

ソウ「すごいです♪」

ネク「綺麗～」

シルム「す、すごい！こんな高台にこんなにも大きな湖があるなんて、後バルビートやイルミーゼが飛んでて、なんて綺麗なんだろう」

そう、光の正体はホタルのような体格のポケモン、バルビートとイルミーゼなのだった

ユクシー「ここは地下から水が絶えず湧き出ることで大きな湖になっているのです」

ラッシュ「なるほどな、それでか」

ラッシュは納得する

ユクシー「湖の中央に光ってる物が見えますでしょうか？」

シルム「うん、見えるよ、湖のそこからのびている青緑色の光のことだろ？」

ユクシー「前に行ってよくみてください」

前に行ってみると

そこには青緑色の歯車だった

ドルク「なんだ…あれは？（わからないがあれを見てるとなぜかドキドキするな！なんなんだ…この胸騒ぎは）」

ドルクはこの歯車を見て、胸騒ぎがした

シルム「わあ！すごく綺麗！だけど、なんだろうなあれ？」

ネク「なんか不思議な感じだよ」

ユクシーが説明した

ユクシー「あれは……時の歯車です」

シルム「えっ？ええっ！？あれが……時の歯車！？」

シルムは驚く

ユクシー「そうです、あそこにある時の歯車を守るために私はここにいるのです」

ラッシュ「なるほどな…」

ラース「それでユクシーは時の歯車を守るために侵入者の僕達を」

ユクシー「そうです、これまでにもここに侵入してきた者がいましたが、そのたびにグラードンの幻影で追い払ってきたのです」

ソウ「そういえばあのグラードンはなんだったんですか?」

ソウは気になっていた、もちろん他もだ

ユクシー「私の念力で生み出したものです、このように」

ユクシーは念力を出すとそこにはグラードンが

シルム「うわ〜〜〜〜〜〜〜〜っ!」

ラッシュ以外はあとすざんだ

ユクシー「驚くことはありません、さきほども申しましたがこれは私が作り出した幻なのです、あなたたちは幻と戦っていたのです、そしてあなたたちのようにグラードンの幻影に打ち勝ちここに到達するものもいましたが、そういった者達には……今度は私が記憶を消すことによって、私はここを守り続けてきたのです」

ラッシュ「なるほどな…だから俺の波動には生体反応がなかったんだな」

波動の言葉でユクシーは

ユクシー「えっ？あなたはリザードンなのに波動が使えるんですか……」

ラッシュ「まあ俺が修行してきわめたんでな」

ユクシー「リザードンが覚えない波動を持ってるなんて…」

少しあせったユクシーだが冷静に戻した

シルム「そうだ！ユクシーに聞きたいことが」

ソウ「そうでした！？実はここにいるドルクっていう方なんですが」

ネク「元は人間なんだって」

ユクシー「えっ？人間？」

ユクシーは少し驚いた

シルム「うん、でも人間だったときの記憶はなくなってしまってるんだ、だからもしかしたらドルクは以前にここでユクシーに出会って、ユクシーに記憶を消されたのかもしれないって思ったんだけど」

ラッシュ「どうなんだ？ここに人間が来たってことはないか？ユク

シーは何か覚えてはいるか？」

しかしユクシーは

ユクシー「……いえ、ここに人間が来たことは一度もないです、それに……私が記憶を消すのはこの霧の湖に来た記憶のみです、すべての記憶を消す力は私にはありません、ですのでそこの方が記憶をなくされ、ポケモンになってしまったのはまた別の原因ではないでしょうか」

ドルク「そうか…せっかく俺の事がわかると思ってたのによ」

シルム「どうやらドルクはここには来てなかったみたいだな、ユクシーに聞けば何かわかるかと思ったんだけど……う～ん」

どうやらドルクの記憶を消してポケモンになったのはユクシーが原因ではなかった、では一体何が原因なのか…その時

？？？「時の歯車かぁ♪残念♪」

そこにプクリン親方が現れた

プクリン「時の歯車はさすがに持って帰っちゃダメだもンね♪」

ドルク・シルム「お、親方様！」

親方様は湖に近づき

プクリン「わあ～♪すごーい♪」

ユクシー「この方は？」

ドルク「俺達のギルドの親方だ」

プクリン「初めまして～♪友達♪友達～♪」

プクリンはユクシーに挨拶した、さらには

プクリン「わーい♪君すごいね♪初めまして～♪友達♪友達～♪」

幻影のグラードンまで挨拶した、ある意味この方伝説でも動じなかった（汗）

ラッシュ「（この人すげぇ（汗））」

プクリン「それにしてもすばらしい景色だよね～♪来てよかったよ～♪ルンルン♪」

……

キマワリ「ふうっやっとついたですわ」

こちらギルドメンバーはなんとか到着

ダグトリオ「一息ついてなんかいられないぞ、急ぐのだ！」

その時

ヘイガニ「ヘイ！あっちに誰かいるみたいだぜ！」

ヘイガニが誰かを見つけたようだ

ペラップ「行ってみよう！」

全員が行こうとした時、グラードンの幻影があり

ペラップ「ぎょえええええええええええええ～～～

ペラップ「お、お、親方様～～～！」

親方様が登場

プクリン「そんなことよりみんな見てごらんよ♪今ちょうど噴出し始めたんだ♪すごく綺麗だよ♪」

みんな「……へっ？」

みんな唖然としたが湖をみた、すると

バルビートとイルミーゼが一緒となって光、時の歯車の中央から噴水のように水が噴出していた

チリーン「うわ～綺麗」

ビッパ「綺麗でゲスねえ～」

ユクシー「この湖は時間によって間欠泉が噴出すんです、まるで噴水のように、そして水中からは時の歯車が、また空中からはイルミーゼとバルビート達が噴水をライトアップしてあのような美しい光景になるのです」

間欠泉はよりいっそう引き出していた、時の歯車の光と、バルビートとイルミーゼのライトアップによって

プクリン「きっと、霧の湖のお宝って……この景色のことだったんだね♪」

お宝は物だけではない……景色などもそうだ

シルム「……ドルク見てるか？ホント綺麗だな」

ドルク「そうだな…俺の過去が分からなかったのは残念だけどな」

ソウ「ここでみんなと一緒にこんな綺麗なものをみれて嬉しいですよ♪」

ドルク「そうだな、本当に来てよかった」

たしかに俺は何者かわからなかったが…ユクシーは俺の事を知らないって言ってたな、それなら…なぜ俺はこの場所を知っていたんだろうか、そしてあの……時の歯車…これを見ると妙に胸騒ぎがする…この胸騒ぎは一体なんなんだ

……

プクリン「色々とお騒がせしました♪そしてホントに楽しかったよ♪ありがと～♪友達♪友達～♪」

ユクシー「私は貴方達の記憶は消しません、貴方達を信頼しているからです、ですのでここでのことは秘密にしていただけないでしょうか？」

もちろん親方様は

プクリン「うん、ありがとう！わかってるよ♪最近時の歯車が盗まれる事件もあって物騒だしね、ここのことは絶対に誰にも言わないよ♪プクリンのギルドの名にかけて」

まるで某名探偵のようなセリフを言う親方様

ユクシー「よろしくお願いします」

プクリン「それじゃ、僕達はそろそろおいとまするね♪ペラップ！」

ペラップ「はい！親方様～！」

ペラップが号令をした

ペラップ「それではみんなっ♪ギルドへ帰るよーーーーーーーーーーーっ♪」

みんな「おおーーーーーーーーーーーっ！！」

そこにラッシュが

ラッシュ「悪いがここでお別れさせてもらうぜ」

プクリン「えっ？もう行っちゃうの？」

ドルク「ラッシュ…」

ラッシュはホバリングをして

ラッシュ「遠征楽しかったぜ♪また会える日を楽しみにしてるぜ♪じゃあな！」

ラッシュは空を飛んで去っていった

シルム「行っちゃった…」

ドルク「あいつはよかったな…」

ソウ「そうですね…」

ラース「僕達も行きましょう」

ギルドメンバーは霧の湖を後にした

こうして……長かったギルドの遠征も終わり、プクリン親方とその弟子達は無事ギルドへと帰っていくのでした

そしてドルク達もまた……次の日からはいつもの修行生活が再開されるのでした

だが…彼ら探検隊ブレイブは気づいていなかった

この時の歯車が

後に重要なことを

彼らはまだ知らない

それが……

ドルクにかかわることになろうとは

第２３話　遠征終了と別れ（後書き）

遠征編終了！！

ドルク「おつかれ～！」

シルム「やっと終わったよ」

ソウ「わ～いパーティです♪」

ネク「パーっと行こう♪」

はいはい、次回からは新章突入です、さらにスペシャルエピソードも数話、フォックの集会所で書きますのでお楽しみに♪

第２４話　ギルド修行再開！！訪れし者と新たな仲間（前書き）

久しぶりの更新です

ドルク「あ～アラタんとこで暴れまくりでスッキリしたぜ♪」

ソウ「いいな～師匠～」

ドルク「正光に許可得ればよかったんじゃねぇか？」

ソウ「あっ！その手がありました！なら早速！」

ちょっと待て！

ソウ「フォックさん？」

安心して、この新章から新しい仲間が増えるよ

ネク「しかも俺と同じ腹黒仲間だよ♪」

それではどうぞ

第２４話　ギルド修行再開！！訪れし者と新たな仲間

次の朝

シルム「おはようみんな」

シルムが起きる

最近は生活リズムがよく、起きるのが早くなっていた

ドルク「おう！おはような！」

ソウ「おはようございます♪」

ネク「おはよう♪」

ラース「おはようございます」

シルム「おはよう、それじゃあ行こう」

彼等は部屋を出た

……

いつもの誓いを言って今日も仕事にかかる

ドルク「よし野朗ども！！今日からまたギルドの仕事だ！！気を引き締めて行こうぜ！！」

みんな「おおーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！」

ブレイブメンバー一同は大声を上げる

ペラップ「（私にはすごく不安で嫌に思うが（汗））」

ペラップはタジタジ

すると

ドゴーム「何!?足型がわからない!?」

ドゴームの声だ

ドゴーム「わからないってどういうことだよ!?」

穴からディグダの声が

ディグダ「だってぇ～わからないものはわかんないよう……」

前のドルクの足型の時みたいに弱きな風に言うディグダ

ペラップとブレイブメンバーが駆け出す

ペラップ「どうした?」

ドゴーム「足型の不明なポケモンが来ているらしいんだ、ディグダは優秀な見張り番だ、足型がわからないなんて滅多（めった）にないんだが、コイツらみたいなシロウトが見張り番ならそれもわかるんだがな」

と、ブレイブメンバーを見る

ドゴーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！！

ドゴーム「ヨノワールって!?あ、あの有名な!?」

……

みんなが集まり、親方とペラップの向かいには大きな奇妙なお腹に黄色い突起がついていて目が一つ目のポケモンがいた

このポケモンこそヨノワールだ

プクリン「たずねて来てくれてありがとう～♪」

ヨノワール「いえいえ!滅相もない!お礼を言うのはこちらの方です、かの名高きプクリンのギルドに来れて……真に光栄です」

ソウ「あの～スピーカードゴームさん」

ドゴーム「な…なんでございましょうか……」

ガタガタと震えてる

ソウ「あの方は誰なんですか?」

その質問に横にいたキマワリとビッパは驚く

ドゴーム「何ィッ!?貴方様はヨノワールを知らないんですか!?とっても有名な探険家ですよ!?」

なぜ敬語なのか、まあドルク達に色々とコテンパンにやられまくりだったためこう話している

もはや悪魔亀大王ドル君とその弟子と腹黒仲間の二人がいるためビクビクとするドゴーム、最近ヘタレ化になってきてるように感じる（汗）

ちなみにシルムは普通に話す

ドルク「ってかよ～そう言っても俺達知らねぇし」

たしかに彼等は知らない

キマワリ「まあ無理もないですわ、知られるようになったのもつい最近の事ですし……突如彗星のごとく現れて一躍有名になった方ですから、でもそれぐらい探検家としての能力はすごいらしいですわ」

シルム「ふうん、そんなにすごいの？ヨノワールって」

ドゴーム「ああ、これは聞いた話だが……まず特徴的なのは……チームを持たず単独で行動するところだ」

なんと単独で行動しているのだ

相当腕に自信があるようだ

ドゴーム「でももっとすごいのは……その知識の多さだ、世の中の事で知らない者はないというぐらい色んな物事を知っているらしいんだ」

ソウ「そんなに物知りなんですか！？」

キマワリ「あくまでも噂ですわ、でもその知識で探検を次々と成功させていったわけですし……今ではヨノワールを尊敬するポケモンもかなりいると聞きますから……あながち嘘ではないと思いますわ」

ネク「そういえばヨノワールってここに何度か来たことがあるの？」

ネクが質問する

ドゴーム「いや初めてだ、ディグダがわからなかったぐらいだからな、親方様も合うのは初めてなんじゃないかな……」

たしかに

ほとんど初めてに見える

シルム「でもあんなに仲良さそうにしてるよ？」

ドゴーム「親方様はああいう方だからな、初めて会おうがなんだろうが関係ない」

ドルク「（まあたしかに、親方様の過去を聞いて、過去の親方様は仲良くなった奴等もいたしな…ししょーというあいつが）」

ドルク達は知っている

少しはわかったぐらいだが（汗）

ヨノワール「……なるほど、それは残念でしたね」

プクリン「うん、今回は大失敗、何もわからなかったよう♪」

前回の霧の湖の遠征だ

ヨノワール「プクリンのギルドが霧の湖に挑戦するとお聞きしましたので……その成果を伺おうとここへ来たのですが……」

プクリン「ごめんね～♪何もわからなくて～♪」

そりゃユクシーの約束があるから言えない

ヨノワール「いえいえ、いいんです、それよりこれも何かのご縁、私はしばらくトレジャータウンに滞在する予定ですので……その間たまにここへお伺いしてもかまわないでしょうか？ここは新しい情報がたくさん入るので私の探検にも役立ちそうなのです」

プクリン「それなら！全然オッケー！ここは他の探検隊も普通に出入りしてるし、もう大歓迎だよ♪」

と、許可を得た

プクリン「というわけでみんな！このヨノワールさんが……しばらくトレジャータウンにいると思うからよろしくね♪ヨノワールさんは有名だし物知りだから……みんなも色々相談したいことがあると思うけど……でもそこはあまり迷惑かけない程度にお願いね♪」

ペラップ「みんな！有名だからといって……間違ってもサインとかねだらないようにな！」

しかし

ヨノワール「……いや、サインぐらいお安いご用ですよ、私の知識などつたないものですが……それでもみなさんのお役に立てれば幸いです、何か相談があれば遠慮なく聞いてくださいね」

するとみんなが拍手する

ビッパ「こ、光栄でゲス！」

キマワリ「こちらこそよろしくですわ」

拍手がおさまる

ペラップ「じゃあみんなっ♪解散っ♪」

みんな解散する

ヨノワール「では私はトレジャータウンのあたりでも散歩してます、何かありましたらいつでも呼んでください、では」

ヨノワールは去った

……

今日も依頼を探すブレイブ一行

ネク「ん！？」

ネクは何かを発見した

ドルク「どうした？ネク？」

ドルクが聞く

ネク「これは！？」

依頼を震えながら見ている

その内容は

依頼：助けて

何処かに迷いこんでしまってしまいました、助けて！！

依頼主：カザリ（レントラー）

と、書いてあった

ドルク「この依頼になにかあるのか？」

ネク「うん！この依頼主のカザリって僕の友達だよ！」

なんとネクの友達であった

ソウ「これは助けにいかないといけませんね、それにレントラーですか…仲間になれば戦力にもなりますね」

たしかに、レントラーはコリンクの最終進化系、仲間になれば戦力にもなる

ドルク「それじゃあネクの友達を助けに行くぞ！！」

こうして彼等はネクの友達を助けることに

……

濃霧の森

ネク「カザリちゃーん！！何処にいるのー！！」

ネクは大声で探す

ソウ「これでは中々見えませんね」

たしかに、濃霧の森は霧がかかっている、このままなんともなければいいのだが

その時

こっから遠くに暴風が吹いていた

ラース「今のは！？」

ネク「これってカザリちゃんの風の技！」

ネクはその暴風が吹いた場所に

ドルク「ネク！」

シルム「僕達も！」

みんなが暴風が起きた場所に向かう

……

？？？「はあ…なんとかやっつけたけど…ここってポケモンの世界だよね…僕はどうしたらいいんだろう…」

そう疲れたように言うのは一匹のポケモン

髪が後ろ髪のドレットヘアーで、尻尾の先端には手裏剣の形をした黄色い物がついていて、目つきが鋭い

眼光ポケモンのレントラーだ

だが普通のレントラーは髪がツンツンと伸びているが、このレントラーはもう一度言うと、後ろ髪のドレットヘアーだ

大事なので2回いいました

そこに

ネク「カザリちゃん！！」

ネクが現れた

レントラー「あっ！ネクちゃん！！」

カザリと呼ばれているレントラーは叫ぶ

……

カザリ「助かったよ♪ありがとう♪」

なんとかブレイブメンバーはギルドに帰ってきた

カザリ「探検隊面白そうだね♪僕もいいかな？」

なんとカザリは仲間になりたいらしい

ドルク「いいぜ♪これからよろしくな♪」

カザリ「はい！」

こうしてカザリが仲間になった

第２４話　ギルド修行再開！！訪れし者と新たな仲間（後書き）

はい！「虞理戸一家の１日！！」から、カザリ君が来てくれました！！

カザリ「レントラーのカザリです♪一応ポケモンじゃないけどグリードという怪物だよ♪」

ポケモンだけどあえてオーズのキーワードは出さない、こっちではグリード設定しないもん

ドルク「たしかにな、これポケダンだしよ～」

ソウ「そうですね、でもグリードですか…敵ですよね？」

敵だけど、こっちは味方だから危害は加えないよ

ソウ「そうですか！」

ネク「俺の友達だから大丈夫だよ」

次回はカザリ君、早速暴れてもらうね

カザリ「楽しみ～♪」

第２５話　水のフロートを取り戻せ（前書き）

さて、ここから少し展開が

ドルク「一体なにがだよ？」

ったく少しは空気読めよ（汗）

ドルク「まあカザリの実力もどうなのか見てみてぇしな」

そんな第２５話

カザリ「行くよ♪」

第２５話　水のフロートを取り戻せ

次の朝

ペラップ「ああお前達、今日は仕事の前に一つ頼みたいことがあるんだが……」

ドルク「なんだ？ロクなものなら撃つぞ？」

ドルクはエナジーバスターを発射する準備完了だった

ペラップ「イヤヤメテクダサイドルクサン」

なんかかたごとになったペラップ

カザリ「とりあえず聞くけど？何？」

ペラップ「え～ちょっとしたことだ、カクレオンのお店に行ってセカイイチの入荷予定を聞いてきてほしいんだ」

どうやら入荷予定を聞きたいらしい

ドルク「つまんねぇが、とりあえずセカイイチが売り出す予定を聞けばいいんだろう？」

ご名答

ペラップ「ギルドの倉庫にはたくさんのセカイイチが保管されてい

る……はずなのだが……」

シルム「はず？」

ペラップ「ちょっと目を離すと親方様が食べてしまいすぐ足りなくなってしまうのだ、セカイイチがなくなると親方様は……かといってセカイイチがそこをつくたび……イチイチリンゴの森へ取りに行くのも大変だし」

まあたしかに親方様なら（汗）

ドルク「たしかにいちいち取りに行くのってめんどいしな～」

カザリ「じゃあ行こう♪」

ペラップ「頼んだぞ♪」

ブレイブ一行はカクレオン兄弟の店へ

……

シルム「あれ？あそこにいるのは？」

カクレオン商店でヨノワールは何かを話していた

メンバーは早速駆け寄る

ヨノワール「おお、あなたたちはたしかギルドの」

ドルク「ああ、俺達はブレイブ、ギルドで働く探検隊だ、よろしくな」

みんな挨拶した

ソウ「所でヨノワールさんは何しに来たのですか？買い物ですか？」

ソウが率直に質問した

ヨノワール「いえいえ、単におしゃべりしてただけですよ」

カクレオン（緑）「私が呼び止めたんです、ヨノワールさん有名ですから、そしたら！もうビックリ！ヨノワールさんって実に色んなことを知ってるんですよね！もう感激しましたよ～♪」

カクレオン（緑）は感激したらしい

カザリ「ふうん、みんな噂してたけど、ヨノワールさんってやっぱり物知りなんだね、僕もまだまだだけど」

実はカザリは頭がいいので彼等にとってはいい仲間だ

まああまり黒いこと考えなければいいが（汗）

カクレオン（緑）「所で……シルムさん達こそどうしたんですか？もしかして♪何か買いに来てくれたとか？ワクワク♪」

カザリ「一応買い物もだけど先に聞きたいことがあって来たんだ、実はね……」

カザリはカクレオン（緑）にセカイイチの入荷予定について話した

カクレオン（緑）「う～ん、申し訳ありませんね～、うちの店でセカイイチはまだ入荷する予定がないんですよ～」

ソウ「そうですか、まあペラップさんはがっかりしますけどね♪（黒）」

何気に黒くなってますよソウさん（汗）

すると

マリル「ルリリ早くー！」

ルリリ「お兄ちゃん待ってよー！」

マリルとルリリの兄弟が走ってきた

カクレオン（緑）「あれ？マリルちゃんにルリリちゃん！」

カクレオン（緑）が二匹を呼び止める

ルリリ「あ！カクレオンさん！」

マリル「シルムさん達も」

カザリ「ねえ？この子たちは？」

ドルク「ああ、この子らは俺達が最初にお尋ね者から助けたんだ」

ソウ「そうだったんですか」

ラース「さすが師匠」

この頃はドルク&シルムがいたので後に入ったソウ達は知りません

シルム「どうしたんだい？そんなに急いで」

マリル「僕達、ずっと落し物を探してたんですが……」

ドルク「たしか前に落し物とか言ってたな、その落し物って一体？」

そう、前にマリルとルリリは落し物を探していた

マリル「水のフロートっていう道具です」

水のフロートはルリリ専用で他にマリルとその進化系のマリルリ専用の道具である

ヨノワール「水のフロート？それはまた貴重な物ですね」

そう、水のフロートは貴重な道具だ

マリル「はい、ですので僕達もずっと探してたんですが……」

ルリリ「そしたら！今日海岸で水のフロートが落ちているのを見たって誰かが！」

マリル「それで海岸へ急いでるんです」

どうやらそれで急いでいたようだった

そこから聞いているある者たちが

ズバット「へへっ、これはいいこと聞いたぜ」

ドガース「ケケッこれはあのブレイブの奴等をおびき出すのに使えるな」

聞いていたのはあのドクローズのズバットとドガースだ

どうやらブレイブにしかえしするつもりだろう

プクリンにやられて失敗したが、奴等はプクリンからブレイブに標的をつけたのだ

もはやあきらめが悪い

ブレイブ一行にやられるのがオチだ

二匹『うるさい！ナレーション！俺達を舐めるな！』

と、文句を言う二匹

ズバット「早速兄貴に相談して先回りだ」

彼等は去った

シルム「そっかー！見つかったのならよかったな！」

マリル「はい！」

ルリリ「うん！」

マリル「さあルリリ、早く行こう！」

ルリリ「うん！お兄ちゃん！」

二匹は急いで海岸へ

シルム「あの二匹の探し物がちょっと気にはなってたんだけど……
でもなんか見つかったようだし……よかったよな」

カザリ「そうだね（僕は欲しい感じもあるけど、ここでそうしたら
師匠に色々と怒られる感じになるからやめておこう）」

いい子ちゃんになってきたカザリ

カクレオン（緑）「水のフロートというのは私も知らないですよ～
どんな道具なんですか～？」

ヨノワールが説明する

ヨノワール「水のフロートとは、ルリリ専用道具なんですが……貴
重なお宝を繰り返しトレードすることでやっと手に入れることがで
きるという……とてもまれな道具だと言われているんですよ」

カクレオン（緑）「ひゃー！そうなんですかー！商売している私で
すら知らないんですから……相当めずらしい物なんでしょうね～そ
んな物を私の店に入荷することなんか……一生無理なんでしょうね

～トホホ」

カクレオン（緑）は少し落ち込む

シルム「入荷する？……そうだ！思い出した！」

ソウ「早くペラップさんに報告しましょう」

ドルク「それじゃあ行くか、それじゃあまた後でな」

ドルク達はギルドへ

……

ペラップ「ええ～～～っ！？セカイイチの入荷予定はないって！？ううっガックリ、どうしよう……」

ペラップは落ち込む

ドルク「どうせなら俺達が取りに行くか？」

ペラップ「いや（汗）逆に嫌な感じになりそうなのでそれはちょっと（汗）」

冷や汗だらだらのペラップ

ドルク「そんじゃあ行こうぜ」

ドルク達は仕事へ

……

今日の晩御飯の時だった

突然ペラップが待ったをかけた

ペラップ「時の歯車が……また盗まれたらしい」

みんな「ええ～～～っ！？」

チリーン「時の歯車が！？」

ドゴーム「また盗まれただってえ～～～っ！？」

ビッパ「それって……もしかして……きりの湖の？」

全員に緊張が走る

カザリは聞いたためわかっている

ペラップ「いや違う、盗まれた時の歯車は霧の湖の物ではなく、どうやら別の場所の物らしい、しかし盗まれた時の歯車はこれで2つ目だ、これ以上盗まれるのは非常によくない、みんなのことは信用しているが……でも念を押しておく、遠征でみんなが見たことについては……絶対に誰にも言わないように！ちなみに新しく入ったカザリも言わないようにな！わかったな！！」

ダグトリオ「当たり前だ！（怒）」

ドゴーム「言う訳ないだろうが！うがーーーーっ！」

キマワリ「ユクシーとの約束を破るわけにはいかないですわ！」

みんな怒ったり結束したりした

ペラップ「わかったわかった！みんな静粛に！」

みんな納まる

ペラップ「それでは……お待たせしたな、あらためて……せーの」

みんな『いっただっきまーーーーーーーす！！』

……

夜

シルム「さっき、ご飯の時……また時の歯車が盗まれたってペラップが言ってたよな」

ソウ「僕も見たし、ネク君も見たから…」

カザリ「僕はわからないけど、相当重要な物なんだね？」

ネク「うん、カザリちゃんは言わないでね、やばいから」

と、ネクは念を押してカザリに言う

カザリ「うん、師匠達が困るから♪」

ソウ「でも誰が盗んだかわかりませんね」

たしかに、誰が盗んだのかわからない

シルム「時の歯車を集めてどうするつもりなんだろうな？」

ドルク「俺もわからねぇな（そういえば霧の湖で初めて時の歯車を見たとき…俺はなんであんなにもドキドキしたんだ？いや…考えすぎだな、俺が時の歯車を見て胸騒ぎすることと、時の歯車が盗まれたこととは関係ないな）」

たしかに

なぜドルクは時の歯車で胸騒ぎしたのか？

それは彼には知らなかった

シルム「なあドルク、なんか今思うとさあ……霧の湖まで遠征に行ったのがもうずいぶん昔の事のように感じるよな」

ソウ「たしかに、あそこの景色、今でも忘れませんよ」

ネク「ユクシー、元気にしてるかな？」

……

その頃……

ユクシー「……やっぱり……やっぱり信用するべきではなかったですね」

ここは霧の湖

そこには念力で作り出したグラードンが倒れていた

ユクシー「こんなにも早く……別のポケモンがやってくるとは……しかも今度は本当に……本当に時の歯車を盗みに来るとは！」

一匹のポケモンがいた

しかしそれはシルエットで黒くてわからなかった

ユクシー「……やはりあの時……あの者達の記憶は消しておくべきでした」

？？？？「……何のことかわからんが……違うな、俺は誰かに聞いてこの場所に来たわけじゃない、俺はここに時の歯車があることを……前から知っていたのだ」

そのポケモンは前からこの霧の湖に時の歯車があるのを知っていたのだ

？？？？「悪いが……もらっていくぞ！３つ目の……時の歯車を！」

……

次の朝

シルム「みんな！今日もがんばっていこうな！」

ドルク「そうだな♪」

その時

ドゴーム「何？どうしたって？……むっそうか、じゃちょっと待っててくれ、おーい！ブレイブの６匹！」

ドルク「なんだ！」

ドゴームに駆け寄る

ソウ「どうかしたんですか？」

ドゴーム「お前達にお客さんだ」

シルム「お客さん？」

ドゴーム「ギルドの入口で待っている、ちょっと行って来てくれ」

カザリ「誰だろう？」

一行はギルド入口へ

……

入口で待っていたのは

ルリリ「あっ！シルムさん！ドルクさん！それにソウさんやネクさんやラースさんやカザリさん！」

カザリ「あれ？君たちは？待っていたのは君たち？」

マリル「そうです」

ソウ「どうしたんですか？」

ソウはどうしたのか聞く

マリル「実は僕達、ブレイブにお願いがあって来たんです」

ラース「お願いですか？」

そのお願いとは？

マリル「はい」

ルリリ「水のフロートを取ってきてほしいんです！」

ソウ「たしか君たちの探してた物だよね？」

マリル「はい、海岸に落ちてるって聞いたんで言ってみたのですが……そしたら変わりにこんなものが……」

マリルが取り出したのは紙切れだった

そこにはこう書かれていた

シルムは読む

シルム「え～と……何々？『海岸にあった水のフロートは……我々が預かった、取り返したければエレキ平原の奥まで来い、しかし力の弱いお前達に……果たしてそこまで来ることができるかな？ククククッ、無理ならせいぜい頼もしい仲間に頼むこったなクククククッ』……ってこれは……」

ソウ「脅迫じゃないですか！？」

カザリ「君達は絶対いっちゃだめだよ！もしかするとこれは何かの罠かもしれない」

マリル「でも水のフロートは大切な物なんです、だから絶対に取り返したいんです、けどルリリは危険な目にあわせられない」

たしかに、ルリリでは危険が及ぶ

ルリリ「ルリリも一緒に行くって言ったんだよ！」

マリル「お前はまだ無理だよ、怖い目にあわせたくないんだ、なので僕一匹でエレキ平原に挑んでみたのですが……あそこは電気タイプのポケモンが多くて……僕にはとてもはがたたなくて……だから何度行ってもすぐにたおされちゃうんです……僕は……僕は弱い自分が悔しくて……うう……」

マリルは涙目になる

ドルク「ここは俺達がなんとかする、待ってろ、あんまり泣くなよ、大丈夫、俺達に任せろ」

ドンッ！と胸を叩くドルク

彼等はすぐにエレキ平原へと向かった

……

エレキ平原

ドルク「来たな…とりあえずそいつらの正体が誰だがしらねぇが…ぶちのめしてやらねぇとな（黒怒）」

キレるドルク

ソウ「そうですね、それじゃあ行きましょう」

カザリ「そうだね♪あいつらぶちのめさないと♪」

ブレイブ一行はエレキ平原に入った

第２５話　水のフロートを取り戻せ（後書き）

すみません、カザリ君の実力は次回で（汗）

ドルク「誰がやったのか…（黒怒）」

エレキ平原に入った彼等に待ち受けるのは！？

第２６話　エレキ平原の罠と真実（前書き）

さて、ここから物語が大きく動きます

では２６話をどうぞ

第２６話　エレキ平原の罠と真実

カザリ「エアロガ！」

カザリのエアロガで電気タイプのポケモン達はぶっ飛ばされた

風などの飛行タイプには効果はいまひとつだが、カザリはレントラーでも電気は使えるようだった

ネク「さすがカザリちゃん♪」

ドルク「やっぱ仲間にして正解だな」

ドルクはすでに敵ポケモンをやっつけている

カザリ「すごい！？さすが師匠ですね♪」

ドルクの実力を見たカザリはドルクの新たな弟子となってしまった（汗）

ドルク「それじゃあ行こうぜ」

ドルク達は先へと進んだ

……

エレキ平原中間地点

ソウ「そろそろ一番奥みたいだね」

カザリ「気をつけていこう」

ドルク「そうだな、みんな油断するなよ」

ドルク達は先に進んだ

その頃トレジャータウンでは……

カクレオン（緑）「……なるほどー、水のフロートがねー……そんなことがあったんだ、それで今はドルクさん達が向かってるんだね」

ルリリ「うん！」

マリル「僕達の変わりに取ってきてくれるって！」

ルリリとマリルはカクレオン（緑）と話していた

カクレオン（緑）「よかった！ブレイブなら安心できるものね♪」

マリル「はい、本当に……ルリリも助けてもらいましたし、本当に感謝してます」

すると

ヨノワール「みなさんどうかしたのですか？」

ヨノワールだ

カクレオン（緑）「あっ！ヨノワールさん！いやね……前にマリル達の落し物について……ここで一緒にお話したの覚えてます？」

ヨノワール「ああ、水のフロートのことですよね？たしか海岸に落ちてたとか……」

カクレオン（緑）「そうですそうです♪ただそれがですね、こんなことに……」

カクレオン（緑）はヨノワールにこれまでのいきさつを話した

ヨノワール「……なるほど、そんなことが……誰がどういう目的でそんなことをするのかわかりませんが……しかし悪質なやからですね」

カクレオン（緑）「でしょう！？こんな幼い子を相手にいじわるするなんて……わたしゃ許さないですよ！プンプン！（怒）」

カクレオン（緑）は怒る

ヨノワール「それで……ブレイブは今何処に行っているのですか？」

マリル「エレキ平原です」

ヨノワールはその言葉に驚く

ヨノワール「えっ？エレキ平原ですか？……エレキ平原は……この時期はたしか……」

ヨノワールは何かに気付く

ヨノワール「！！いけない！！このままではブレイブが危ない！！」

カクレオン（緑）「ええ～～～～～～～～～っ！！？」

一体その危険とは？

ヨノワール「私これからエレキ平原に行ってきます！！」

ヨノワールはエレキ平原へと向かう

カクレオン（緑）「ええ～っ！？ちょっと！？ちょっとぉ～～っ！？」

ただ残された彼等は呆然としてしまった

一体何が危ないのか？

その頃彼等は

ドルク「もうここまで来ればもうすぐだな」

すでに奥地にいて、かなり奥まで来ていた

シルム「急ごう！」

一行は先に進んだ

……

雷がなる

シルム「ううっ……なんか怖そうな所だな……」

ピシャーン！！

シルム「うわっ！」

カザリ「いまにも落ちそうだね」

ネク「早く水のフロート探そう…ん？」

ネクは何かを見つけた

水のフロートだった

ドルク「やっと見つけたな」

近づいたその時

急に暗くなった

ソウ「わっ！急に暗くなりましたけど一体？」

そこに

？？？？「ここへ何しに来た！ここは……我々の縄張りだ！！」

ドルク「誰かいるみたいだな、誰だ！！」

その声の主は一体？

？？？「フフフフ、私の名はライボルト！そして……ラクライ一族のリーダーだッ！」

すると雷が鳴って明るくなった

シルム「うわあああーーーっ！」

なんと囲まれてしまった

周りにはラクライが８匹

そしてそのドルク達の前には

つんでた長い黄色の髪のポケモン、ライボルトが立っていた

ライボルト「覚悟ッ！」

しかし彼等は

ドルク・ソウ「Ｗアルテマ！！」

ネク「ツイスアルテマ！！」

カザリ「ウィンドバスター！！」

ラース「きあいだま！！」

みんな容赦なく総攻撃

ライボルト「ちょっ！？それ反則じゃ…ってぎゃあああああああ

雷が攻めてくるが

？？？「待てっ！！」

なんとヨノワールがなんとか到着していた

ヨノワール「待てっ！この者達に偽りはない！この者達は……ここを荒しに来たのではない！」

シルム「ヨ、ヨノワールさん！！」

ソウ「なぜここに？」

ラクライ達が下がる

ライボルト「貴様！何者だ！」

ヨノワール「私はヨノワール！探検家だ！ライボルト！あなた達の怒りはもっともだ！特に！以前ここであなた達が受けた仕打ちを考えれば……無断で侵入する者に対して攻撃的になるのは当然だ！またこの地があなた達に安らぎを与えていることも……私は理解しているつもりだ！この者達があなた達の縄張りをおかしたのは詫びよう！しかし！それは決してあなた達に危害を加えるためではない！用が終わり次第我々はすぐにここから立ち去る！信じてくれ！ライボルト！」

ヨノワールは一生懸命ライボルトに説得する

ライボルト「……私達の事をよく知っているんだなヨノワールとやら、本当に脅かしに来たわけではないのだな……よかろう、ヨ

ノワール貴様を信じてやろう、しばらく時間をやる、その間にここから立ち去るのだ」

ライボルトはラクライ達に撤退を伝え

ライボルト「行くぞ」

彼等は去っていった

シルム「ふう～～～っ！ありがとう！ヨノワールさん！おかげで助かったよ！」

ソウ「しかし……彼等はなんだったんでしょうか？」

たしかに彼等は一体？

ヨノワール「ライボルトとラクライの一族です、彼等はいつも過ごしやすい地域を求めて……たえず移動して生活してるんです、この時期のエレキ平原は特に雷が多いせいなのでしょうか、彼等はかならずこの時期になるとエレキ平原で暮らすのです、ただ…以前彼等はここで何者かにいきなり襲われたことがあり……その時に大分傷を負ったそうです、それ以来ライボルト達はここに来る者達に対してものすごく敏感になったそうなんです、この地に侵入する者がいたら……やられる前にやる、いつしかそれが……ライボルト達の掟（おきて）となったそうです」

カザリ「それでライボルト達はあんなに警戒してたんだ、どうりで言っても聞いてくれなかったんだ」

ソウ「そうでした、水のフロートを！」

一行は水のフロートに近づく

シルム「あった！これだ！」

ソウ「ヨノワールさん、これなんだけど……」

ヨノワールが見てみると

ヨノワール「間違いないです、間違いなくこれは水のフロートです」

どうやら間違いないようだ

ラース「早くマリル達の所に届けましょう」

ドルク「なあ？おかしくないか？」

ドルクが何か疑問を感じていた

カザリ「そうだね、なんで水のフロートがここにあるんだろう？あのライボルト達の事を知ってそうしたと思うんだよね」

たしかに

脅迫したのならそれはありえる

ヨノワール「それは……これを仕掛けた者達の仕業かと」

ネク「もしかして？俺達がここに来ることをわかっていた」

ネクの言ったとおり正解だろう

ヨノワール「それをわかったうえで、またライボルトの縄張りだということを承知のうえで……あなた達とライボルトが衝突することを期待して……ここにおいたんだと思います」

ヨノワールを後ろを向いて

ヨノワール「そうなんですね!?そこにいる輩達(やからたち)!」

シルム「えっ?」

ヨノワール「隠れてないでいい加減出てきたらどうですか!?」

?????「クククックッわかっていたのか、じゃあしょうがねえ」

なんと隠れていたのは

シルム「ああ～～っ!?お、お前達はっ!?」

ドクローズだった

ドガース「ケッ!」

ズバット「へへっ!」

スカタンク「クククククッ」

ソウ「あなたたちだったのですか（怒）」

ドガース「ケッ、お前達がライボルトにズタボロにされた後を狙って……さらに俺達が痛めつけてやろうと思ってたんだが」

ズバット「へへっ計算違いだぜ！とんだ邪魔が入っちまったよなあ」

そんな彼等は知らなかった

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

すでに殺気が放っていたことを

ドルク「どうやらテメェらは俺達におしおきされてぇようだな（黒怒）」

ソウ「逃げられると思いますか？（黒怒）」

ネク「たっぷりといたぶってやる（黒怒）」

カザリ「へえ～こいつらがドクローズか～…こんなことしてタダで済むと思う（黒怒）」

ラース「ヨノワールさん、ちょっと待ってくださいね（黒怒）」

ヨノワール「えっ？」

ヨノワールはきょとんとする

スカタンク「（げっ！？まさか！？）」

ドガース「（これは！？）」

ズバット「（嫌な予感が（汗））」

ドルク・ソウ・カザリ「Tアルテマ！！（黒怒）」

ネク「ブレイクサンダー！！（黒怒）」

ラース「バースト！！（黒怒）」

シルム「怒りの炎！！（怒）」

全員総攻撃

ドクローズ『ちょっ！？これ反則じゃ…ってぎゃあああああああ

なんとか戻ってきたブレイブ一行とヨノワールはマリル達に水のフロートを返した

マリル「ルリリを助けて頂いたうえに今度もまた……本当になんてお礼を言っていいのか」

ソウ「大丈夫ですよ♪こうして戻ってきたのですから」

ドルク「俺達は探検隊の事をしたまでだ、それにお礼はヨノワールに言ってくれ、ヨノワールが説得しなかったらやられていたかもしれなかったしな」

ドルク達でも油断はする

まあ彼等の魔法や技などで撃退したのだが（汗）

そんなカクレオン（緑）はあのルリリが助けた時を話していた時だった

シルム「ああ、ルリリの時は……あれはカクレオンの言うとおりだとかっこいいんだけど……でもちょっと違うんだよね、ルリリの場所を突き止めたというよりは……偶然夢を見て……」

ソウ「僕の時もそうでした、あの時師匠が駆けつけてくれなかったら僕はここにいませんし」

その時ヨノワールが反応した

ヨノワール「ん?夢?夢ってどういうものなんですか?」

シルム「あっ！そっか、もしかしてヨノワールさんならわかるのかな？何かに触れた瞬間、めまいに襲われて……過去や未来の出来事が見える……そういうものなんだけど……」

その言葉にヨノワールは驚く

ヨノワール「！！そ……そ……それはっ！！時空の叫びでは！」

ソウ「時空の叫び？」

カザリ「何か知ってるみたいだね」

シルム「それなら！あのことをヨノワールさんに聞いてみよう！？」

ドルク「（俺の過去とかも）」

シルム「ドルクいいよな？」

ドルク「ああ」

ドルクはこくんと頷く

ソウ「ヨノワールさん、実は相談が」

……

場所は変わって海岸

ヨノワール「……なるほど、ここに倒れてたわけですか」

シルム「そう、ちょうどこの場所だよ」

ここでドルクが倒れていた

記憶喪失のままで

ヨノワール「それであなたはここで気がつき……でもそれまでの記憶はなくしてしまったと」

ドルク「ああ、その時覚えているのは俺の名前と、元々はポケモンじゃなくて人間だったことだ」

ヨノワール「ええ～っ！？に、人間ッ！？」

ヨノワールは驚く

ヨノワール「でもどっからどう見てもポケモンの姿をしていますよ！？」

たしかに今のドルクはナエトルだ

若葉ポケモンのナエトルである

シルム「そうなんだよね……」

ソウ「さすがに物知りなヨノワールさんでもわからないことってあるんですね」

カザリ「きっと何か原因で記憶を失って、師匠は人間からポケモンになったって思うね」

ヨノワール「……時空の叫びを持つ人間……あなたは……あなたは自分の名前は覚えているとおっしゃってましたよね？して……その……その名前は？……」

ドルク「俺はドルクっていうんだ」

ドルクはヨノワールに自分の名前を伝えた

ヨノワール「！！……ドルク……さん……」

何か驚いた感じのヨノワール

シルム「どうお？何かわかったの？」

ヨノワール「……いや、残念ながら何も……」

ドルク「（ん？今かすかにヨノワールが笑ったように見えるが？気のせいか？）」

ヨノワールがかすかに笑っていた

何か知ってるように見える

まるで…何かを確定したかのように

ヨノワール「お役に立てず申し訳ないです……でもドルクさんの持つ能力については……知っています」

時空の叫びと言っていたドルクの能力

ネク「その時空の叫びってなんなの？」

ヨノワールは時空の叫びについて説明した

ヨノワール「時空の叫びは、ものに触れることで未来や過去が見える能力……それが時空の叫びです、どのようなきっかけでそうなるのかはわかりませんが……物やポケモンを通して時空を超えた映像が……夢となって現れる、そんな能力があるというのを聞いたことがあります」

シルム「時空の叫び……ドルクにそんな能力が」

ソウ「でもなぜ師匠は魔法使えたのでしょう？」

たしかに、ドルクは他に魔法などを覚えている

ヨノワール「魔法ですか…こっちではないものですね、うん！よろしい！これも何かのご縁です、ドルクさんがなぜポケモンになってしまったのか……その謎を解くのに私も協力しましょう！」

シルム「えっ！ホントに！？」

ヨノワール「はい、まあ正直申しますと……私にわからない物事があるのは悔しい！というのが本音なんですが！ハハハハハハハ！」

ヨノワールは笑う

シルム「やった！ヨノワールさんが協力してくれるならすごく心強いよな！よかったな！ドルク！」

ドルク「たしかにな…ｃｒ」

その時彼等の上空から何かが通りすぎた

シルム「あっ！ペリッパーだ！」

上空にペリッパーが飛んでいた

シルム「いつもより……やけにたくさん飛んでいるな……」

ヨノワール「何かあったんでしょうか？」

すると

ビッパ「お～～～～～～い！」

ビッパがかけてきた

ソウ「ビッパさん、どうかしたんですか？」

ビッパ「ここにいたんでゲスね……はあはあ……」

疲れた表情を見せるビッパ

ネク「どうしたの？そんなに息をきらせて」

ビッパ「召集がかかってるでゲス！弟子達全員すぐにギルドへ集まるようにと！」

カザリ「何かあったみたいだね」

ヨノワール「私も行きましょう！」

ビッパ「急ぐでゲス！」

みんなギルドへと急ぐ

これが……

彼等の歯車が

動き出そうとしている

時がつむぎだす

時間の歯車が

第２６話　エレキ平原の罠と真実（後書き）

ドルク「時空の叫びか…これで何度救われたんだか」

まあドルクの能力だからいいじゃん

シルム「でもなんでドルクは魔法とか覚えるんだろう？」

それはそのうち明かすよ、次回は事態は急展開に！？

第27話　盗賊ジュプトル（前書き）

遂に物語は動き出します

ではどうぞ！

第27話　盗賊ジュプトル

ブレイブ一行はギルドへと戻ってきた

すでにみんな集まっているようだ

シルム「みんなお待たせ！集合って聞いてとんできたんだけど、一体何があったの？」

ペラップ「時の歯車が……また盗まれたのだ」

ビッパ「ええ～～っ！？またでゲスか～～～っ！？」

ビッパはブレイブを呼びに行っていたため聞いていない

ソウ「それで…今度は何処のですか！？」

みんなが静かになる

ペラップ「そ…それが…」

ビッパ「ん？どうしたんでゲスか？なんかいいにくいことなんでゲスか？」

そのことでシルムは

シルム「！！そ、それって……ま、まさか！？」

キマワリ「そう、そのまさかですわ、今回盗まれたのは……霧の湖の……時の歯車ですわ……」

ビッパ「ええ～～～～～～っ！？」

ドルク「なんだと！？」

ビッパとブレイブのみんなが驚く

シルム「ど、どうして！？霧の湖の時の歯車のことは、オイラ達の秘密だったハズだよね？それなのにどうして！？」

みんな「……」

たしかに、知っているのはヨノワール以外だ、カザリは来たばかりだがネクが少し教えただけで時の歯車のことは少ししか知らない

シルム「まさか……まさかギルドの誰かが？」

ドゴーム「そんなわけないだろう！（怒）」

ヘイガニ「仲間を信用できないのかよ！ヘイヘイ！（怒）」

ギルドのみんなが怒る

シルム「ううっ……ごめん、そうだよね、この中の誰かが秘密をしゃべっちゃうなんてありえないもんな、よく考えてみたらわかることなのに……ごめん」

シルムは謝った

キマワリ「まあでもそう思うのもしかたないですわ、私達が遠征に行った直後にこうなったわけですし」

その時ヨノワールが焦る

ヨノワール「ちょ、ちょっと待ってください！私よくわからないんですが……霧の湖に時の歯車があるなんて……私初めて聞きました、そもそも今回のギルドの遠征は、霧の湖への遠征は失敗したんじゃなかったのですか？」

ここでプクリン親方が謝る

プクリン「ごめんね、ヨノワールさん、実はある約束があってヨノワールさんには言えなかったんだよ……それにカザリ君も入ったばかりで少ししか話してないから」

カザリ「たしかに僕は時の歯車の事は初めて聞いたからそれしかわからないよ」

たしかにカザリは入ったばかりだ

わかるはずがない

ペラップ「ともかく、霧の湖に来た侵入者は……ユクシーを倒し……時の歯車を盗んでいった」

ラース「そ、それでユクシーさんは！？ユクシーさんは大丈夫なんですか！？」

ユクシーの安否が気になる

ペラップ「大丈夫、無事だ」

プクリン「今はジバコイル達に保護されているよ、心配しないで」

シルム「ホッ……よかった～」

ブレイブ一行は安堵する

ペラップ「それに……ユクシーの証言から……その侵入者の詳細がわかった」

ドルク「どんな奴なんだ？」

ペラップ「すでにお尋ね者としてポスターに張り出されている、お尋ね者ポスターを見るのだ」

ブレイブ一行はお尋ね者ポスターを見た

そこには鋭い目つきでかっこいい黄緑色の顔のポケモンが映っていた

そして名前にはジュプトルと書かれていた

シルム「ジュ、ジュプトル……っていうポケモンなのか……」

ビッパ「ううっ……見るからに凶悪そうな顔でゲスねえ」

たしかに見れば目つきが鋭いので凶悪そうに見える

ドルク「（ジュプトル…こいつが時の歯車を盗み続ける盗賊なのか…そういえば…こいつ見たことあったような……気のせいか？）」

ドルクはジュプトルの事で気がかりになっている

ソウ「師匠？どうかしました？」

気になったソウがドルクに話す

ドルク「いや、なんでもねぇ」

ソウ「？」

ペラップ「このお尋ね者ポスターはユクシーの証言から先ほど一斉に指名手配されたものだ」

ビッパ「なるほどー、ペリッパーがたくさん飛んでいたのはそれを伝えるためだったんでゲスね」

どうやらペリッパーが一斉に飛んでいたのはそれなのだ

ペラップ「ジバコイル達もこれ以上放っておくことはできないらしい、今度のジュプトルには多額の報奨金をかけたようだ」

シルム「オイラ達はユクシーと……霧の湖の秘密を守ると約束したんだ、それなのに……こんなことになるなんて」

キマワリ「私達が秘密を漏らしてないにせよ、ユクシーには顔向けできないですわね」

ヘイガニ「ヘイ！あんな綺麗な景色が壊されるなんて……絶対許せねえよ！ヘイヘイ！」

みんなが意気込む

プクリン「ううう……」

親方の様子が変だ

チリーン「あっ親方様」

プクリン「ううう……うううう……うううううう……」

親方は震えている

ペラップ「お、親方様！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

プクリン「うううううううううううううう……たあーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

ドゴーム「うわーーーーーーーーー！」

気合のたあーが出てくる

ペラップ「ひえええええええええええ……」

プクリン「みんな！ジュプトルを捕まえるよ！プクリンのギルドの名にかけて絶対捕まえるよ！！ペラップ！！」

ペラップ「は、はいっ！！」

ペラップは呼ばれて驚く

ペラップ「みんな！今からすべての仕事をジュプトル捕獲にシフトする！ジュプトルを捕まえるために全力を尽くしてくれ！！」

ドゴーム「い、言われなくてもっ！！」

ヘイガニ「これ以上盗まれるわけにはいかないぜ！ヘイヘイ！」

キマワリ「みんなで協力しましょう！ユクシーのためにも！」

みんなは一致団結した

ヨノワール「プクリンさん、大体の事情はわかりました、ジュプトルの捕獲……私もお手伝いしましょう！」

プクリン「あ、ありがとう！ヨノワールさん！」

ヨノワールもジュプトル捕獲に協力することに

だがこれが

ドルク達チーム・ブレイブの

過酷な運命になろうとは

まだ誰も知らない

第２８話　砂漠へ（前書き）

ジュプトルは何処に？

今物語の扉が開く

第２８話　砂漠へ

ギルド地下１階

みんな集まっていた

ペラップ「みんな集まったようだな♪まず……これは当たり前なことだが……ジュプトルは時の歯車がある場所に現れる、ただその時の歯車が何処にあるのか、私達にはわからないのだ」

たしかに、残りの時の歯車が何処にあるのかわからない

ペラップ「そこでヨノワールさんにも協力してもらって、時の歯車がありそうな場所の目星をいくつかつけた、みんなはグループに分かれて、それぞれそこを調査してくれ」

みんなそれぞれの場所を言われる

まずドゴームとヘイガニは東の森

ビッパ・ダグトリオ・キマワリは水晶の洞窟へ

そしてブレイブ一行は北の砂漠だ

説明によるとトレジャータウンの北西に位置していて広大な砂漠が続いてるところだ

彼等は早速北の砂漠へ

ちなみに残りのメンバーはお留守番

……

北の砂漠入口

ソウ「ここですね」

ラース「とりあえず水もたくさん持ってきましたし」

ネク「ここに時の歯車があるならジュプトルはかならずやってくるはずだ」

ドルク「行くぞ！！ブレイブファイトォー！！」

全員『おーーー

なり厄介だよ、それに砂嵐もあるし」

広い砂漠のためか全員が苦い顔になる

ドルク「まあでも俺は地面には有利だから大丈夫だな」

そう、砂漠なのでここは地面タイプのポケモンが多い

ソウは召喚獣などで進化して対応

ラースとカザリは電気なのでサポートしてなんとか進んだ

……

ソウ「ここが砂漠の一番奥ですね」

そこは流砂などが多かった

ソウ「これ以上先には進めませんね」

シルム「たしかにね…ん？どうしたのドルク？」

ドルクは流砂を見つめ何かを思った

ドルク「（以前霧の湖で感じたものと同じだ…俺は…この場所を知っている！知っているだけなのか…それとも実際ここに来たのか？…だが俺はここを知っている」

シルム「なあドルク！」

ドルクはハッ！とし、シルムに向ける

ソウ「どうしたんですか師匠？」

シルム「どうしたんだ？さっきずっとボーっとしてたぜ？」

ドルク「あ、ああごめんな」

ラース「ここには何もないみたいですしギルドに戻って報告しましょう」

ブレイブ一行はギルドへと戻った

……

戻ったみんなはそれぞれ報告した

だが

シルム「ええ～～～っ！？じゃあ他のみんなも調査したものの……何もなかったってこと！？」

ダグトリオ「残念ながら」

キマワリ「そういうことになりますわ」

ビッパ・ダグトリオ・キマワリの３匹の方は何もなかったようだ

ヘイガニ「ヘイ！東の森に行ったけど……ホント森ばかりで何もな

かったぜヘイヘイ！」

ビッパ「水晶の洞窟も水晶がいっぱいあって、それはそれは綺麗な洞窟だったでゲスよ～！あまりにも綺麗だったんで思わず水晶を一つもらってきちゃったでゲス」

ビッパは顔を赤くし、しかもいつの間にか水晶まで持って帰ってきたのだった

キマワリ「まあいつの間に！一緒にいたのに気付きませんでしたわ」

ダグトリオ「おいビッパ、我々の目的は時の歯車の探索だったはず、それなのに目的を達成するどころか、まったく関係のないおみやげまで拾ってきて、お前は一体なんなんだ！？」

ダグトリオは怒る

ビッパ「ううっ……スマンでゲス、あっしの宝物にしたくてつい……」

ビッパは落ち込む

ペラップ「ヨノワールさん、残念ながら、どうやら探索はみなからぶりに終わったようですね」

ヨノワール「う～ん、困りましたね、調べる場所としてはいいせんいってると思ったのですが、私の知識不足ですね、申し訳ないです」

と、ヨノワールは残念そうにしてしまう

ペラップ「と、とんでもない！そんなことないですよ～～っ！ヨノワールさんの知識があるからこそ、今回の作戦も立てられたんですよ！？」

ヨノワール「でも失敗だったのは事実です、ただまあここでがっかりしてもしかたないですし……明日から違う作戦を考え直してみましょう！」

ペラップ「はい！がんばりましょう！よろしくお願いします♪」

今日も1日は終了した

……

次の朝

ペラップ「えー……というわけで、今私とヨノワールさんで新しい作戦を考え中だ、なので新しい作戦ができるまでは……みんな各自自由に時の歯車を探索してくれ、以上だ」

ペラップとヨノワールはまだ新しい作戦が考え中のため、各自で探索となった

シルム「みんな、今日は自由に探索してくれって事だけど……何処行こうか？」

ソウ「たしかにそうですね…昨日はあまり見つかりませんし…」

カザリ「そうだよね、特にアテがないし」

ドルク「（たしかにそうだな…ん！待てよ！昨日のあの時…）」

……

ドルク「（以前霧の湖で感じたものと同じだ…俺は…この場所を知っている！知っているだけなのか…それとも実際ここに来たのか？…だが俺はここを知っている」

……

ドルク「（そうだ！昨日は流砂ばかりで一見何もないように見えたが、でもあそこには……まだ何か謎が残ってるはずだ！）」

ソウ「師匠？またボーっとして？」

ドルク「すまないみんな…もう一度昨日のとこへ行くぞ！」

カザリ「あの流砂の地ですか師匠？」

ドルク「そうだ」

と、自信があるように言った

ラース「でもあそこは昨日行ったばかりでなにもなかったはずじゃないですか？」

ドルク「実はここに来た時、霧の湖と同じ感覚を感じた、もしそこに何かあると思うんだ」

ドルクはここに来た感覚を感じたことをブレイブメンバーに言った

シルム「うん、わかった、ドルクがそう言うなら信じるよ！」

カザリ「たしかに、何もないのはおかしいしもう一度行こう！」

ソウ「そうですね」

みんなは流砂の地へ

……

流砂の地

シルム「また来たけど……やっぱりここにあるのは、広がるように続いている白い砂漠と」

ソウ「流砂しかないですね、ここには一体どんな謎が隠されているんでしょう？」

ドルク「（やっぱり感じる…俺はここを知っている）」

ドルクは辺りを見渡した

ドルク「（でもこうやって見渡すとシルムやソウの言うとおり砂漠と流砂以外何もないか……流砂以外は……なにも……！！待てよ！！流砂しかないってことはここの突破口は一つしかねぇ！！」

カザリ「どうする師匠？何処を調べますか？」

ドルク「ああ、だけど覚悟が必要だがいいか？」

ソウ「覚悟？」

ドルクは説明した

シルム「ええ～～～～っ！？流砂の中に入るだってぇ～～～～～っ！？」

カザリ「う～ん、ちょっと待って」

カザリはレントラー独特の透視をした

カザリ「たしかに流砂の中に何かありそうだよ」

シルム「えっ！？本気なのか？ドルク！みんな！」

ソウ「でもカザリ君の言うとおりでもありそうですし、レントラーの透視があるから何かあるはずですよ……」

シルムは少し考えた

しばらくして

シルム「わかった、オイラドルクを信じる、ドルクやみんなを信じるよ、オイラがここまでがんばってこれたのもドルクやみんなのおかげだから……オイラ達の初めての探検の時だって」

……

シルム「うん！勇気を振り絞るんだ！」

ドルク「そうだ！それでこそだ！」

……

シルム「あの時だってドルクを信じたから、ドルクがいてくれたから勇気を出して先にいけたんだ」

ソウ「僕の時だって、時空の叫びがあったから助けてくれましたし、僕は師匠を信じます」

ネク「そうだね、俺も♪」

ラース「僕もです師匠！」

カザリ「僕も師匠を信じるよ♪」

ドルク「お前等……」

みんながいるから絆がある

それがブレイブなのだから

ブレイブメンバーは流砂の近くへ

ドルク「みんな！いいか！行くぞ！」

みんな『1…2…3！それっ！！』

みんなは流砂に飛び込んだ

みんな『うわあああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！？』

流砂はブレイブメンバーを飲み込んだ

……

ひゅー…

ポトッ×5

シルム「イテテテ……お尻うったよ」

みんな無事のようだ

カザリ「ここは洞窟になってるみたい、やっぱりそうだったんだね！」

ソウ「どうやら僕達はあそこに落ちた…やっぱり流砂の中には秘密があったんですよ！行きましょう！」

ブレイブメンバーは洞窟を進んだ

……

ドルク「こっちでも変わってないな、どうやらなんとかなるみたいだ」

カザリ「おいかぜ！」

ラース「電磁浮遊！」

北の砂漠と変わらないため彼等には有利だった

ソウ「ファイガ！」

ソウはスコルピにファイガで倒した

カザリ「行こう」

みんなは攻撃しながら進んで行った

……

中間地点

ドルク「中間地点があるということはやっぱりこの先にあるみたいだな」

シルム「行こう！」

ブレイブメンバーは先へ進んだ

……

地底の湖

シルム「こ、ここは……」

辺りが湖になっていた、その湖の中央には何かが光っていた

シルム「す、すごい……まさか地底に……こんな湖が広がってるなんて……」

シルムが目をキラキラさせる

カザリ「あっ！あそこに何か光ってる！」

ソウ「あの光……前にもありましたよ」

ネク「たぶん、間違いなく時の歯車がそこに！」

どうやらそうらしいようだ

カザリ「ねえ！もっと近くに行ってみてみよう！」

先に進むと辺りが暗くなった

すると何処からか声が聞こえる

？？？？「待てっ！なんなの！？お前達は！？」

ドルク「誰だ！」

？？？？「ここへ……ここへ何しに来たっ！」

シルム「何しにって……オイラ達、時の歯車を探しに……」

その言葉の例の声は反応する

？？？？「時の歯車に近づいてはならない！時の歯車に近づく者は……許さないッ！！」

湖からユクシーのようだがピンク色の顔をしたポケモンが水中から現れた

ドルク「お、お前は！」

？？？？「私はエムリット！深き地底の湖で時の歯車を守る者！」

シルム「時の歯車を……守る者だって！？」

エムリット「時の歯車を脅かす者は……私が許さないッ！いくよッ！」

と、交戦の構えを取った

ドルク「ここは…やるしかねぇ…みんな行くぞ！！」

ブレイブメンバーはエムリットにつっこむ

第２８話　砂漠へ（後書き）

ドルク「エムリットか～ってか女なのか？」

口調は女だけど伝説系統は性別ないけど、言い方によるけどね（汗）

ソウ「僕は♂ですけど」

カザリ「僕もだよ」

ほとんど♂だよ（汗）

第２９話　ＶＳエムリット～残された可能性～（前書き）

エムリット戦です

ドルク「さて、どうやってやろうかな～♪（黒）」

容赦ねぇなお前（汗）

第２９話　ＶＳエムリット～残された可能性～

ドルク「エナジーバスター！」

エムリット「サイコキネシス！」

ドルクはエナジーバスターを放つがエムリットがサイコキネシスでコントロールする

カザリ「雷の牙！」

エムリット「キャッ！？」

カザリはその隙をついて雷の牙で噛み付く

ネク「トルネド！」

そこからネクはトルネドでエムリットにダメージを与えた

エムリット「なっ！？人数が多い！？このままじゃ！？」

しかし一瞬の隙を与えない

彼等の絆は深いものだ

カザリ「そうはいかないよ、ボルトストーム！」

カザリは電気と風を使って電気の大嵐を作り出す

エムリット「まずい！」

エムリットは回避するが

シルム「大文字！」

シルムは大文字でエムリットに攻撃する

エムリット「サイコキネシス！」

サイコキネシスで大文字を跳ね返すが

ドルク「リフレク！」

ドルクはリフレクで大文字を跳ね返した

エムリット「きゃあああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！？」

エムリットは倒れた

だがすぐに立ち上がった

エムリット「うぐっ……うぐぐぐっ……」

苦しそうな顔をするエムリット

エムリット「でも……渡さない……時の歯車だけは」

ドルク「だから！俺達は時の歯車を盗みに来たわけじゃねぇんだ！いい加減気付けよ！」

ドルクは説得するが

エムリット「とぼけるなッ！私はユクシーからテレパシーで聞いてるんだよ！霧の湖の時の歯車が盗まれたことを！」

シルム「ええ～っ！？ユクシーから！？」

テレパシー

エスパータイプであるユクシーならありえることだ

エムリット「あれはお前達の仕業だろう！？」

ソウ「違いますよ！なんで僕達なんですか！？」

エムリット「じゃあ誰だと言うの！？」

？？？「それはたぶん……俺の事じゃないかな？」

後ろから声が聞こえた

振り向くと

エムリット「お前は！？」

シルム「ジュ…ジュプトル！！」

腕についた細い葉、長くて細い頭についてる葉、そして目つきが悪い

ドルク「あ、あいつが……ジュプトル！！」

ジュプトル「悪いが……時の歯車はいただくぞ」

ジュプトルは素早くブレイブメンバー達に襲い掛かった

シルム「うわっ！」

ドルク「くっ！」

ソウ「そうはいきません！m」

ジュプトル「遅い！」

ジュプトルはリーフブレードでソウを斬り付けた

ソウ「うわっ！？」

ソウは倒れてしまった

ネク「トルネド！」

ネクはトルネドを唱えるが

ジュプトル「甘いな」

なんとリーフブレードでトルネドを斬り付けてしまった

ネク「嘘っ！？うわっ！？」

ネクは背中を斬られてしまった

ラース「ネクさん！？うわっ！？」

カザリ「うわっ！？」

全員ジュプトルに斬られてしまって倒れてしまった

ドルク「う……」

メンバー全員かなりダメージを受けてしまっている

ジュプトルはユクシーの前に立つ

ジュプトル「……そこをどいてくれ」

エムリット「い、嫌よ！時の歯車は渡さないッ！」

エムリットは抵抗する

ジュプトル「……ならばしかたがない」

ジュプトルはリーフブレードでエムリットを攻撃

エムリット「うぐっ！」

シルム「エムリット！！」

ジュプトル「お前は先ほどの戦いで……すでに相当ダメージを負っているはずだ、無理をするな」

ジュプトルは先を進もうとする

シルム「その先は行かせない！」

かろうじて立てたドルクとシルムが立つ

ドルク「行かせるか！」

シルム「時の歯車は盗らせないぞ！」

ジュプトル「……そうか、悪いな」

ジュプトルは素早くリーフブレードで二人を斬りつける

シルム「うぐっ……は、早いッ……」

ドルク「ぐわっ……く…そ……」

ジュプトル「お前達に恨みは無い、勘弁してくれ、時の歯車は……もらっていくぞ！」

ジュプトルは水中へ入った

シルム「うう……時の歯車が……取られちゃう……」

エムリット「……す、すまない……ユクシーが言っていたのはお前

達ではなく……アイツだったんだね……疑って……ゴメン……」

エムリットが謝る

すると地震が起きた

エムリット「い……いけない！！早くここから逃げなきゃ！」

シルム「ど、どうして？」

すると地底の湖からだんだんと景色が灰色になっていく

シルム「わわっ！一体何が……」

エムリット「アイツが時の歯車を取ったんで……ここら辺一体の…
…地底の湖の時間も止まる！」

ソウ「ええ～～～～っ！？」

いつの間にかソウ達も立ち上がっていた

カザリ「急ごう！！」

エムリット「力を振り絞って！さあ早くっ！」

みんなは急いで脱出した

……

ギルド地下2階

みんなだけでなく、ジバコイル保安官もいた

ジバコイル「オタズネモノノソウサアリガトウゴザイマス、エムリットハワレワレガブジホゴイタシマシタノデゴアンシンクダサイ、ジュプトルハワレワレモゼンリョクヲアゲテツイセキシマスコンゴモナニカテガカリガアリマシタラオシラセクダサイ、オタガイキョウリョクシテガンバリマショウ、デハ」

ジバコイル保安官は去った

ペラップ「いや〜〜〜〜〜！ホントにもうビックリ！なんと！北の砂漠の地下に湖があって……そこに時の歯車があったとはっ！！」

ペラップは驚いていた

ドルク「すまない、俺達が力不足だったから……ジュプトルを捕まえられなかった」

シルム「結局何もできなかったのと同じだよ……」

ブレイブメンバーは落ち込んでいた

ビッパ「そ、そんなことないでゲスよ?ブレイブのみんなはよくがんばったでゲスよ〜〜」

ビッパが励ます

プクリン「あの実力のあるドルクやソウ達までやられるなんて……」

プクリンも驚く

ヘイガニ「ヘイ！たしかにおいらもブレイブはすごくがんばったと思うぜ！だけどよ……残念なのは……次につながる手がかりが残ってないんだよな、ちょっとでも何か残っていればよかったんだけどよう！ヘイヘイ！」

たしかに、手がかりがない

ダグトリオ「たしかに、ジュプトルが次何処に現れるのか……まったくわからんしなぁ」

キマワリ「シッポを掴みかけたものの……これでまた振り出しですわね」

しかし

ヨノワール「いや、そうでもないですよ」

ペラップ「ヨ、ヨノワールさん！」

ヨノワールがそう言った意味は？

ヨノワール「手がかりはあります、まず霧の湖ではユクシーが時の歯車を守っていたそうですね？」

たしかに、霧の湖はユクシーが守っていた

ヨノワール「そして地底の湖ではエムリットが時の歯車を守ってい

た……」

シルム「そ、そういえばっ！エムリットが言ってた！エムリットは霧の湖の時の歯車が盗まれたことを……ユクシーからテレパシーで聞いてたんだって」

ダグトリオ「なんとっ！」

ドゴーム「そうなのかっ！」

ヨノワール「やはり……」

ヨノワールは何か確信したようだ

ヨノワール「これはある言い伝えにあったものなのですが……それによるとユクシーは知識の神、そしてエムリットは感情の神と呼ばれ……3匹で精神界を司っており……世界のバランスを保っているとされています」

シルム「さ……3匹？それはユクシーとエムリット以外に……もう1匹いるってこと？」

ヨノワール「そうです、残るはアグノム、意思の神と呼ばれています、ユクシー、エムリットは時の歯車を守っていた……ならばアグノムもまた、時の歯車を守っているのではないかと」

意思の神アグノム

それがもう一匹の名

チリーン「そっか！アグノムの居場所を探し出せれば……そこに時の歯車があるかもしれないし……そこにジュプトルが現れる可能性も高いということですね！」

ヨノワール「そうです、ユクシー、エムリット、アグノムの3匹は……それぞれ湖に住むといわれています、現にユクシーとエムリットは湖にいました、ですのでアグノムもまた、何処かの湖にいると思われます、ただし、ユクシーがいた湖は高台の頂上に……そしてエムリットの湖は砂漠の地底深くというように……それぞれ普通ではない場所に湖がありました、ですのでアグノムのいる湖も……常識を超えた場所にあるのではないかと思われます」

たしかに

ヨノワールの言うとおり、それぞれが常識を超えた場所であったのだ

ドゴーム「そっかー！普通に湖を探してちゃダメってことかー！」

その通りである

ペラップ「いやいやいやいやいやっ♪ヨノワールさんはやっぱりスゴイ！改めて尊敬しちゃいましたよ～♪」

ヨノワール「そんなあ……テレますよ……」

ヨノワールはテレる

ダグトリオ「いや、私達も尊敬しちゃってるぞ、元々北の砂漠を調査してくれって言ったのもヨノワールさんだ、実際砂漠の地下に時の歯車があったわけだから……ヨノワールさんの判断は正しかった

ってことになる」

キマワリ「そっか！じゃあ私達が調べた東の森や水晶の洞窟にも…
…もしかしたらまだ謎が残ってるのかもしれませんわ！」

たしかに

ヨノワール「そうだ！ビッパさん」

ヨノワールは突然ビッパを呼ぶ

ビッパ「へ？あっしでゲスか？あっしに何か？」

ヨノワール「一つお願いがあります、以前あなたが拾ってきた水晶
なんですが……ちょっと貸していただけないでしょうか？」

そう、ビッパがおみやげと言って持ってきたあの水晶だ

ビッパ「ええ！？あの水晶でゲスか！？い、嫌でゲス！あれはあっ
しの大事な宝物でゲス……」

嫌がるビッパ

ヨノワール「……い、いや（汗）別に取ったりはしないですからご
安心ください、ドルクさん」

今度はドルクが呼ばれる

ドルク「俺か？」

ドルク「ドルクさん、あなたにビッパさんの水晶をさわってみてほしいのです」

つまり、時空の叫びだ

ヨノワール「もし水晶の洞窟に謎が残されてるならば……ドルクさんが水晶に触れた時……時空の叫びが発動し、何か見えるかもしれません」

ドルク「なるほど、そういうことか」

しかし他のギルドの面々は疑問を持つ

ドゴーム「時空の叫び？なんだい？それは？」

ソウ「師匠が持っている能力です」

ドルク「ドルクは物に触れるとたまに……そこの過去や未来に起こった出来事が見えたりするんだ」

キマワリ「ええ～～～～っ！？」

みんな驚く

ヘイガニ「そんな能力が！？ヘイヘイヘーイ！」

ヨノワール「ですのでぜひ水晶をお借りしたいのです、どうでしょうか？」

ビッパはみんなを見渡し、暗い表情を見せながら、ドルクに水晶を

手渡した

ドルク「（こいつから……一体何が見えるんだ？）」

ドルクがみんなを見渡す

ドルク「（注目してるな（汗）見えるかどうかわからねぇが集中してみるか）」

ドルクは集中した

シルム「どうお？ドルク」

すると

ドルク「（……きた……めまいが始まった）」

閃光が走り出す

……

それは一匹のポケモン、しかもユクシーやエムリットと同じクラゲのようだが、こっちは青くて三角のような頭だった

そしてそのポケモンの目の前にはジュプトルが

？？？？「うぐぐっ……うおっ……」

ジュプトル「もらっていくぞ、時の歯車を」

ジュプトルが時の歯車に近づく

？？？「だめだ……あれを取っては……絶対に……」

……

ドルク「（今のは、ジュプトルが時の歯車を盗もうとしていたみたいだな……後もう一匹別のポケモンがいたが、あれがアグノムか？だがこの水晶からさっきの光景が見れたってことは……）」

シルム「！！ドルク！何か見ることができたの！？」

ドルク「ああ、みんなよく聞いてくれ！」

ドルクは時空の叫びによって見えた光景をみんなに説明した

ドゴーム「な…なんだってぇ～～～っ！？」

ペラップ「ジュプトルが……見知らぬポケモンを倒して……時の歯車を盗もうとしてたってぇぇぇ～～～～～！？」

キマワリ「きゃー！すごいですわー！」

ビッパ「なんだってそんなもんが見えちゃったんでゲスか～！？凄すぎでゲスぅ～！」

みんな驚く

ヘイガニ「ヘイ！ドルク！その見知らぬポケモンがアグノムだったかどうかは……わからなかったんだよな？ヘイヘイ！」

ドルク「あ、ああ」

チリーン「わ、私もドルクさんに質問が……」

チリーンがドルクに質問する

チリーン「ドルクさんが見えたものは過去のものだったのでしょうか？それとも未来の光景だったのでしょうか？」

ドルク「そういえば…見えたのが過去なのかそれとも未来なのかはいつもわからねぇ、すまないな」

チリーンは残念そうになる

チリーン「そうですか……どっちもわからないんですか……」

ダグトリオ「なるほど……見えた出来事が過去のものか未来のものかわからないということは……ドルクが見た光景は過去のものということもありえる、その場合はつまり……もうすでに盗まれた後のことなのかもしれんな」

ペラップ「ええ～～～～～っ！？それじゃもう手遅れってこと！？」

みんなが焦る

しかし

ヨノワール「みなさん！ちょっと待ってください！たしかに過去に見えたのかもしれませんが、未来が見えた可能性だってあります、シルムさん、エムリットが言ったことを思い出してほしいんですが……エムリットに時の歯車が盗まれたコトヲテレパシーで教えたのは……ユクシーだと……そうおっしゃったんですよね？」

シルム「うーん……」

……

エムリット「とぼけるなッ！私はユクシーからテレパシーで聞いてるんだよ！霧の湖の時の歯車が盗まれたことを！」

……

シルム「うん、間違いないよ」

ソウ「僕達も聞きましたから間違いないかと」

ヨノワール「アグノムの名前は？」

そういえばアグノムの名前は

シルム「聞いてないよ、オイラアグノムの名前はヨノワールさんからここで聞いて初めて知ったぐらいだし」

ヨノワール「それなら！可能性はあります！」

みんながヨノワールに注目する

ヨノワール「エムリットがアグノムから教えてもらったというのであれば……ドルクさんが聞いた時空の叫びは過去のものとして間違いないのですが……でもそうではなかった、エムリットはアグノムの名前を口にしなかった……ということは未来である可能性はあります！」

たしかにそうなら未来の可能性だろう

ヨノワール「それともう一つ、確実に言えることがあります、水晶を手にしたとたん、ドルクさんは時空の叫びを聞いた……そしてそこには時の歯車があった……ということは水晶の洞窟の何処かに時の歯車の場所に通じる道がある……ということじゃないでしょうか」

たしかに確実にそうだ

ドゴーム「おおっ！そうだ！」

ヨノワール「たしかにもう手遅れかもしれません、でもまだ間に合う可能性だってあるんです！であればその可能性に賭けてみてもいいんじゃないでしょうか！」

そう、まだ可能性は残っている

全員は団結して水晶の洞窟へ

もちろんヨノワールも行くらしい

ギルドメンバーとブレイブは水晶の洞窟へ！！

第２９話　ＶＳエムリット～残された可能性～（後書き）

次回、水晶の洞窟へ！！

そして時の歯車編が終わりへ！！

第３０話　最後の歯車へ！！（前書き）

ついに水晶の洞窟です

ドルク「今度こそあいつを捕まえる！！」

負けたこと気にしてるようだね

ドルク「当たり前だ！ここで俺がくたばるわけにはいかねぇよ！」

そうだね、それじゃあ第３０話をどうぞ！！

第３０話　最後の歯車へ！！

水晶の洞窟入口

シルム「ここが水晶の洞窟だな」

ソウ「この洞窟の何処かに、アグノムの湖に繋がる道があるはずですね」

カザリ「とりあえずいける所まで行ってみよう」

ブレイブメンバーは水晶の洞窟へと入った

……

水晶の洞窟の奥底

ネク「ここが洞窟の一番下だよね？」

ソウ「あっ！師匠！みんな！あれを！」

彼等の目の前には

色が違う水晶が３つも立っていた

カザリ「水晶が３つもある、それぞれ色は違うけど」

シルム「ドルク！この3つの水晶に、何か秘密が隠されてるんじゃないかな！？」

ドルク「たぶんそうだとは思うが（たしかにな…ユクシーがいた霧の湖に行くときも）」

ユクシーの霧の湖ではグラードンの心臓である日照り石により霧は晴れた

ドルク「（あの時はグラードンの石像に秘密があった、エムリットのいた地底の湖に行くときも）」

エムリットの地底の湖は流砂の奥に洞窟があった

ドルク「（流砂の中から地底の湖へと繋がっていた、ここがもしもアグノムのいる湖へ繋がっているのなら、あの2つの場所は同じように、ここにも何か秘密があるはずだ」

シルムは水晶に触ってみた

すると

シルム「わわっ！この水晶、触ると色が変わるぞ！？」

ソウ「えっ！？」

ソウは左の水晶に触った

ソウ「こっちの水晶も変わりましたよ」

ラース「もしかしたらこれが秘密を解く謎に関係があるのかもしれませんね」

たしかに、しかし一体どうやって道を開くのか？

シルム「ドルクも触ってみなよ」

ドルク「ああ」

ドルクは右の水晶に触ってみた

2回触ってみるとやっぱり変わっていく

ドルク「（たしかに触ると変化するな、しかも色んな色に変わってるな）」

ドルクは他の2つの水晶を見渡す

ドルク「（3つの水晶、そして変化する色、これが一体何を意味するんだ？）」

すると

ドルク「（うっ……始まった……時空の叫びだ）」

閃光が走り出す

……

なるほど

知識・感情・意思という3つの精神のうち……アグノムは意思を司る神だ

意思とはなしとげようとする心、つまり意思の色を……水晶の色を一つに合わせれば……

道は開くのか

問題はアグノムの心の色だな

アグノムは水晶の湖に住んでいる

ならばアグノムの心もまた、水晶に……

……

ドルク「（い、今のは!?今まで見たものとは違う?……声しか聞こえなかった……だがこの声……何処かで聞いたことがあるような気がするが?）」

ドルクは少し疑問に思ってしまったが

ドルク「（いや、たしかユクシーの時もだったな……あの時もそうだが今回も声だけだ……）」

シルム「……ん?あれ?ドルク、どうしたんだ?」

ドルクが振り返る

シルム「あっ！もしかして聞こえたのか？時空の叫びが！」

ドルク「ああ、聞こえた、どうやら何かあるようだ」

ソウ「さすが師匠！」

さすがのシルムもご名答だ

シルム「そ、それで……どんなものだった！？」

ドルク「（たしかあの声によると……アグノムは意思を司る……つまり意思の色を一つに合わせれば……とか言ってたな……意思の色を一つに……）」

ドルクは何かをひらめいた

ドルク「（そうか！つまりはこの水晶の色を、３つの水晶の色を一つに合わせれば！）」

カザリ「どうやら何かつかめたようだね師匠」

ドルク「ああ（後は何色に合わせるかだな……意思の色……それはつまりアグノムの心の色……アグノムは水晶の湖に住む、水晶の洞窟……そして水晶の湖……アグノムの心もまた、水晶のように……透き通っている？いやあるいは……冷たい水のような色なのかもな）」

その色は何なのかだ

シルム「やっぱり何かつかめたようだな」

ドルク「ああ、ここは俺に任せてくれないか？」

ドルクはメンバーたちに頼んだ

シルム「わかった、ここはドルクに任せたよ、がんばって水晶の謎を解いてみてくれ！」

ドルクは水晶を見た

ドルク「（たしか……ビッパ先輩の持ってきた水晶に映っていたのは……一匹のポケモンとジュプトル……その一匹のポケモンがアグノムなら……そうか！？それなら色はわかった！）」

ドルクは何かわかったようだ

ドルク「ここをこうしてっと」

ドルクは３つの水晶の色を青色へと変えた

ドルク「これでどうだ？」

すると

３つの水晶は輝きだし、そこから地響きがする

シルム「わわっ！地響きがっ！」

3つの水晶が中央に光りを放ち、電気を流れたように中央に光が集まる

シルム「ドルク！危ない！避難しよう！」

ブレイブメンバーはその場を離れた

すると

中央から水晶がでかく出てきて、そこから洞窟が現れた

シルム「わわっ！！こ、これは！？」

カザリ「どうやら正解だね、真ん中に大きな裂け目があるから間違いないね」

ネク「ここから先に行けるみたい、ここにアグノムのいる湖と繋がってると思う」

これにより先には進めるみたいだ

シルム「ドルク！やっぱりさっきの水晶は……時の歯車へ導く扉だったんだ！行こう！みんな！」

全員が水晶の中へと入っていった

……

水晶の湖

ブレイブメンバーは何とか湖へ到着した

シルム「あっ！」

シルムは駆け出した

ソウ「何か見つけたんですか！」

みんなもシルムについていく

シルム「ドルク！みんな！見ろ！湖だ！」

辺りは水晶だらけだ

湖に水晶が突き出している

シルム「やっぱりここが……アグノムの湖なのかな？」

すると

シルム「……あっ！ドルク！あそこを見てよ！」

広い水晶の島の前、つまり湖の真ん中には青緑の光が

ドルク「ここだな」

シルム「ドルク！あの水晶の島に誰かいるみたいだぜ！行ってみよう！」

彼等は島の方へ

すると

シルム「ああっ！あれはっ！？」

島の架け橋付近で彼等は見た

ドルク「！！あれは！ジュプトルッ！！」

その先には

？？？？「うぐぐっ……うおっ……」

それはドルクの時空の叫びと同じ光景だった

ジュプトル「もらっていくぞ、時の歯車を」

ジュプトルが時の歯車へと向かう

？？？？「だめだ……あれを取っては……絶対に……」

そしてこちらブレイブの方

ドルク「まさに……まさに時空の叫びで見たものと同じだ！あの時見た光景は未来の出来事だったんだ！」

シルム「あそこにいるの！アグノムかな！？」

ソウ「だとするとアグノムが危ないです！急ぎましょう！！」

急いで駆け出すブレイブメンバー

……

ジュプトル「あそこに沈むのが……時の歯車だな」

ジュプトルはアグノムに振り返る

ジュプトル「ではアグノムとやら、悪いが……時の歯車はもらっていくぞ」

と、湖に振り返る

アグノム「……ううっ……ま、待て……待つんだジュプトル……」

ジュプトル「……俺の名前を……知っているのか？」

アグノム「盗賊ジュプトル……お前がここに来ることは……ユクシーとエムリットから聞いていた、本当は僕の手でお前を倒せればよかったんだけど……もしダメだったときのためも考えて……ある仕掛けをしておいたんだ」

ジュプトル「何ッ！？」

ジュプトルは振り返って驚く

アグノムの目が光る

ジュプトル「何を……何をした！」

その頃ブレイブは

水晶の橋の中間地点まで来ていた

シルム「わわっ！地響きが！？」

湖から水晶が突き出てくる

もちろん時の歯車の周りにも水晶が突き出て、湖に入れない

ジュプトル「こ、これは……湖が水晶に覆われて……時の歯車を取ることができない……」

これでは取るのは不可能だ

アグノム「ジュプトル……時の歯車は……絶対に渡さない……」

苦しまぎれにアグノムは言う

アグノム「僕の命に代えても……絶対に……」

ジュプトルは振り返る

ジュプトル「き、貴様ッ！俺はなんとしてでも手に入れる！時の歯車を！アグノム！貴様を倒してでもなッ！」

その時

ドルク「待てっ！」

ドルク達が到着

シルム「ジュプトル！お前に時の歯車は渡さない！」

ジュプトル「お前達に用は無い、そこをどけッ！」

ドルク「どかせるか！！絶対にな！！」

ソウ「そうです！僕達もどかせません！！」

と、徹底抗戦

ジュプトル「本気で言ってるんだな！」

ジュプトルは構える

ジュプトル「どうしてもどかぬと言うのなら……しかたがない！お前達から倒してやるッ！！行くぞッ！！」

ジュプトルは迫ってきた

第３０話　最後の歯車へ！！（後書き）

次回はジュプトルとの対決です

ドルク「絶対倒して捕まえてやる！！」

意気込んでる悪魔亀大王ドル君とその仲間達ははたして！！

第３１話　敗北とヨノワールの秘密（前書き）

ジュプトル戦です、そして物語は急展開を向かえます

ではどうぞ

第３１話　敗北とヨノワールの秘密

ネク「ツイストルネード！！」

ネクはツイストルネードでジュプトルに攻撃

ツイストルネードは飛行で風属性だ

なので効果は抜群だが

ジュプトル「風の攻撃か…だが！」

ジュプトルはリーフブレードで斬りつけた

ネク「コンプレッサンダー！！」

今度はコンプレッサンダーを繰り出した

ジュプトル「無駄だ！！」

ジュプトルは電光石火（でんこうせっか）で回避してネクに攻撃

ネク「うわっ！？」

ネクは飛ばされ水晶にぶつかる

ネク「うっ……」

ネクは気絶した

カザリ「ネクちゃん!?よくもネクちゃんを!!」

カザリは炎の牙でジュプトルに迫るが

ジュプトル「遅い!!」

ザクッ

カザリ「うっ……」

カザリはリーフブレードで斬り付けられ倒れてしまった

ラース「ライトテッカー!!」

ラースはライトテッカーで突進する

ジュプトル「エナジーボール!!」

ジュプトルはエナジーボールでラースを攻撃

攻撃が当たり、煙が包まれた

煙が晴れるとラースはボロボロに倒れた

ソウ「ラースさん!!」

ドルク「ここまでやるなんてな……」

残っているのはドルク・シルム・ソウだ

ソウ「ホーリーシュート！」

ソウはホーリーの魔法を連発してジュプトルを向かえ打つが

ジュプトル「そんな攻撃は効かないぞ」

ジュプトルはリーフブレードで光弾をはじき返した

ソウ「ブレイクカッター！！」

ソウはさらに８枚刃の真空波を繰り出した

ジュプトル「無駄だ！！」

ジュプトルは体を回転させてリーフブレードを繰り出した

ソウのブレイクカッターは無残にも斬られてしまった

ソウ「そんな！？」

そこから

ソウ「うわっ！？」

ソウはジュプトルの電光石火で吹っ飛ばされた

ドルク「シルム！俺達も連携技で行くぞ！」

シルム「うん！」

二匹はジャンプした

ドルク「エナジーバスター！！」

シルム「大文字！！」

二人の技が組み合わされ、強大になった

ドルク・シルム「エナジーフレアバスター大！！」

二人の連携技、エナジーフレアバスター大が繰り出された

この技は大文字＋エナジーバスターの連携技だ

大文字がエナジーバスターを包み込んでさらに強大になるが

ジュプトル「フッ」

だがジュプトルは余裕だった

それがジュプトルに当たる

ドルク「よしっ！」

しかし

シルム「いない！？」

なんといなかった

ドルク「一体？」

ジュプトル「中々だったが残念だな」

ドルク・シルム「！？」

二人はリーフブレードで斬りつけられた

ドルク「ぐわっ！？」

シルム「うぐぐっ！？」

二人はリーフブレードで斬り付けられ倒れた

それぞれ四方に散らばって倒れてしまった

シルムはアグノムと共に

しかしシルムは立ち上がる

ジュプトル「そこを退くんだ！」

しかしシルムの様子がおかしい

シルム「！！（こ、声が出ない……でも……絶対に退くもんか！）」

シルムは退かない

ジュプトル「退かぬというのか！ならば！しかたがない！」

ドルク「（い……いけねぇ！このままだとシルムがやられる！…動け！俺の体！）」

しかしドルクは動けない

ドルク「（くそっ！シルム！！？）」

ドルクも声が出ない

ドルク「（くそっ！俺もなのか！？シルム！！？）」

シルムピンチ！？

シルム「……（ううっ……）」

ジュプトル「すべては時の歯車を取るためだ！許せッ！」

ドルク「（シルムッ！！！？）」

シルム「……（うわあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！？）」

ジュプトルがシルムに迫る

待てっ！！

閃光が晴れると

ドルク・シルム「！？」

ジュプトル「くッ！」

ドルク「！！（ヨ、ヨノワールさん！！）」

ヨノワールだった

ヨノワール「大丈夫ですか！？シルムさん！ここは私に任せてください！」

ヨノワールはジュプトルの掴んだ腕を離して吹っ飛ばした

ジュプトル「うおっ！！」

ジュプトルは立ち上がる

ジュプトル「き、貴様は！？」

ヨノワール「久しぶりだな！探したぞ！ジュプトル！」

シルム「！？（えっ？どういうことそれは！？ヨノワールさんはジュプトルを知ってるってこと！？）」

ドルク「（なん…だと！？）」

二人は驚く

ジュプトル「クッ！ここまで……ここまで追って来たというわけか……随分（ずいぶん）と執念深いんだな」

ヨノワール「ジュプトル！もう逃がさんぞ！」

ジュプトルは目を瞑る

ジュプトル「ヨノワール……貴様がこの世界に来たのは驚いたが……」

ジュプトルは目を開く

ジュプトル「しかし！」

ジュプトルは構える

ヨノワール「戦うのか、いいだろう」

ヨノワールは構える

ヨノワール「しかし勝てるかな？この私に？」

お互いが攻撃する

そして閃光が出る

しかしそこにはジュプトルの姿はなかった

シルム「！？（ジュプトルが消えた！？）」

ドルク「（なっ！？）」

ヨノワール「ジュプトルめ！始めから戦うつもりなどなかったな！

逃がすものか！」

ヨノワールは消えた

シルム「……（ヨ、ヨノワールさんも消えた！？）」

ドルク「……（シルムが…無事で……よかっ…た…ぜ……）」

ドルクはそのまま疲れたように倒れた

シルム「（何がなんだかさっぱりわからないけど……ぐっ……動こうとしても体が……だめだ……意識が……）」

シルムも体力が限界となって倒れてしまった

キマワリ「あっ！あそこですわー！」

ヘイガニ「ヘイ！みんな早く！」

キマワリ・ヘイガニ・ビッパ・ダグトリオ・ドゴームが駆けつけた

ビッパ「わわっ！倒れてるでゲスよ！」

ヘイガニ「だ、大丈夫か！」

ダグトリオ「かなり傷ついてるぞ！」

キマワリ「早くギルドに運んで手当てしましょう！」

ドゴーム「よし！」

五匹はブレイブメンバーとアグノムを運んだ

……

チリーン「あっ！気が付きました？」

ドルクとシルムは目を覚ました

ドルク「こ…ここは……」

チリーン「ギルドのお部屋ですよ、ソウさん達は軽い怪我で今は休んでますが、あなた達二匹とも傷ついてずっと寝てたんですよ」

ドルクには頭には包帯と顔には湿布などが貼っていた

シルムは両腕に包帯が巻きついていた

ドルク「シルム！大丈夫か！」

心配そうにシルムに言った

シルム「う、うん大丈夫だよ」

ドルク「そ、そうか…よかった……（泣）」

ドルクは涙を流した

これまでドルクが涙を流したのは初めてだった

シルム「ドルクも無事でよかったよ……オイラ達、水晶の湖で意識を失って……そういえばいつの間にか声も出るように……」

ドルク「俺もだ……」

二人の声は出ている

シルム「そうだ！アグノムは？」

アグノムもジュプトルに相当ダメージを与えているはず

ドルク「チリーン！アグノムは大丈夫なのか？」

チリーン「大丈夫です、シルムさん達に比べればダメージもそんなには受けなかったようで……先ほど気が付いて今はギルドにいらっしゃいますよ」

シルム「そっか！よかった！」

シルムは安堵する

チリーン「シルムさんやドルクさんも無事でよかったです！ギルドのみんなにも知らせましょう」

チリーンは鳴らした

チリーン「みなさーん！二匹とも起きましたよー！」

するとそこからほぼ全員が駆けつける

ドゴーム「ほ、ホントかああー！！うおおおおーーーーーーーー！！」

ドルク「うるせぇ！！（怒）」

ドルクはエナジーバスターでドゴームを鎮圧する

ドゴーム「ピクピク」

全員は唖然する

キマワリ「でもよかったですわー！きゃー！」

ビッパ「ううっ……よかったでゲス、もしものことがあったら……あっしは……あっしは……ううっ……」

ビッパは涙を流す

ドルク「みんな大げさすぎだぜ」

シルム「あっ！そうだ！オイラみんなに話したいことが……」

ヘイガニ「ヘイ？」

キマワリ「なんでしょう？」

……

ペラップ「ええっ！？なんだってっ！？ヨノワールさんはジュプト

ルを……実は前から知ってたんじゃないかってぇ～っ！？」

驚く駄鳥

ペラップ「ペラップ舐めんな！！（怒）」

ナレーションに怒るペラップ

シルム「うん（汗）二匹が戦う時にそんな話をしてたんだ」

ダグトリオ「それで……ヨノワールさんは今どうしてるのだ？」

そうだ、感心のヨノワールの方だ

シルム「ジュプトルが逃げたんで……たぶんその後を追って行ったと思うんだけど……」

その時何かサイレンがなる

ドゴーム「おや？緊急のサイレンだ！」

ダグトリオ「おい！ディグダ！どうしたのだ？」

父親であるダグトリオがディグダに声を掛ける

ディグダ「コイルさんからです、ジバコイル保安官より、至急の連絡だそうです、コイルさん、見張り穴からお話してくださいどうぞ」

穴から声が

ここからはカタゴトになるので普通にします

コイル「えー聞こえますか?ジバコイル保安官より伝言です、今からすぐにみなトレジャータウンの広場に集まって欲しいとことです、そこで重要なお話があるそうです、ギルドだけでなく、周辺に住むすべてのポケモン達にも集まるよう、声が掛けられてます、以上よろしくお願いします、では」

伝言は以上だ

シルム「何かあったんだろう……」

キマワリ「重要なお話ってなんでしょうね?」

ヘイガニ「ヘイ!とりあえず行ってみようぜ!トレジャータウンの広場にさ!ヘイヘイ!」

……

トレジャータウン広場

ギルドメンバーはやってきた

ヒメグマ「あっ!ギルドのメンバーよ!」

みんなギルドのメンバーを見る

もちろんその中にはユクシーとエムリットの姿も

リングマ「ギルドのポケモン達もやってきたのか！」

ヤルキモノ「彼等も呼ばれるということは……やっぱり大変なことが起こってるのかなぁ……」

ちなみにギルドのメンバーの中でいないのはラースだ

ラースはエナジーボールのダメージが回復していないためギルドに残っている

他はなんとか合流して広場に行った

さらにアグノムも一緒だ

ユクシー「アグノム！」

アグノム「ユクシー！エムリット！」

3匹は駆け寄る

エムリット「大丈夫？怪我はない？」

アグノム「うん、大丈夫」

ユクシー「時の歯車は？」

ユクシーは心配そうに言う

アグノム「水晶の湖にあるよ」

エムリット「放っておいても大丈夫？取られたりはしないの？」

アグノム「うん、とりあえずは平気だよ、時の歯車は水晶が覆うように守っている、簡単には奪えないよ」

たしかに、あんなに水晶があるなら取る心配はないだろう

ドルク達も来た

シルム「あ！ヨノワールさん！」

ヨノワール「おおっ！シルムさんにドルクさん！無事だったのですね！よかった！」

ドルク達は駆け寄る

シルム「ヨノワールさんも帰って来てたんだ！あの時は助けてくれてありがとう！」

シルムはお礼を言った

シルム「それで……あの後はどうなったの？ジュプトルは？ジュプトルはどうなったの？」

聞くと

ヨノワール「あの後私もジュプトルを追ったのですが……残念ながら逃がしてしまいました」

逃げられたようだ

シルム「あのヨノワールさん、水晶の湖でジュプトルと戦った時…
…ヨノワールさんはジュプトルの事を知ってたみたいだけど……あ
れは」

ドルク「俺も気になるんだ」

二匹は気になる

ソウ「僕達が倒れてる間にそんなことがあったんですね」

ソウ達は気絶していたため聞き取れなかったようだ

カザリ「たしかにね」

ジバコイル「ああ！その話なら！それも含めてこれからヨノワール
さんがみんなに説明するそうです、なのでみなさんこっちに集まっ
てください」

……

みんな輪を囲むように整列した

ビッパ「一体なんの話でゲスかねえ？」

ドゴーム「さ、さあな……ワシに聞くなよ……」

ジバコイル「えーみなさん、集まってようなので」

みんな静まる

ジバコイル「これから話を始めたいと思います、話とは……最近時の歯車が盗まれる事件についてです、時の歯車はジュプトルというポケモンが盗み続けており、時の歯車が盗まれた地域は時間が止まってしまい、とても問題になっていたのはみなさんもご存知かと思いますが、今回！ジュプトルの魔の手から時の歯車を初めて守ることができました！」

みんな拍手する

ジバコイル「守ったのはそこのアグノムさん！そして……そのアグノムさんを救い、ジュプトルを追い払ったのが……ここにいる……ヨノワールさんです！！」

再び拍手が出る

ヨノワール「ジバコイル保安官、すみません、ここからは私がお話を……」

ジバコイル「わかりました、よろしくお願いします」

ここからはヨノワールが話した

ヨノワール「みなさん！時の歯車を守れたのはたしかによかったのですが……しかしジュプトルには逃げられてしまいました、ですのでまったく安心できません、ジュプトルはまたかならず時の歯車を奪いに来ます」

全員がざわざわする

ヨノワール「そしてまた……私はみなさんに……」

みんなが静まる

ヨノワール「ある重大なことを伝えなければなりません、それを今からお話しますまず……」

その話とは、まずはシルムに目を向けるヨノワール

ヨノワール「先ほどシルムさんが私に聞いた質問、私がジュプトルの事を知ってるんじゃないかという質問ですが……その通りです、私は前からジュプトルを知っています」

みんな「ええっ！！？」

みんなが驚く

ヨノワール「今からするお話は、みなさんにはとても信じられないものかもしれません、しかし事実です、しかもこのまま放っておくととんでもないことになるのです、ですので真剣に聞いてください、まずジュプトルは……ジュプトルは未来からやってきたポケモンです」

みんなが驚く

キマワリ「み、未来ですって！？」

ディグダ「お父さん、未来ってなあに？」

ダグトリオ「1年ごとか2年ごとか……これから先の時間のことだ」

ドゴーム「でもありうるのか？そんなことが！？未来からポケモンが来るなんてよぉ！」

たしかにそうだ

ヨノワール「未来世界でのジュプトルはやはりものすごく悪党で、指名手配中のポケモンです、そして未来世界から逃げ延びるために……この過去の世界へとやって来たのです、そしてこの世界にやってきたジュプトルは、ある悪巧みを企てました」

その悪巧みとは？

ヨノワール「それは……星の停止です」

ペラップ「星の……停止？」

ペラップの頭にハテナマークが浮かぶ

ヨノワール「そうです、星の停止とは星自体の動きが止まってしまうことです、時の歯車を取ると、その地域の時間も止まりますよね？色んな地域の時が止まっていき……ついにはこの星自体の動きも止まってしまう……その成れの果てが星の停止なのです」

だがこの星が停止するとこの世界はどうなってしまうのか？

ヒメグマが質問した

ヨノワール「星が停止した世界は……風も吹かず……昼も来ないし、春も夏も来ない、まさに暗黒の世界、世界の破滅と言ってもいいいすぎではありません、」

ヤルキモノ「せ…世界の破滅だってぇ！？」

世界の破滅

それが未来ってことだ

ヨノワール「最近時が狂い始めたのも、すべては時の歯車が盗まれた影響です、このまま時の歯車を奪われ続けたら、世界は破滅してしまうのです」

世界の破滅

運命はすでに狂いだしていた

星の停止に

ヘイガニ「ヘイ！質問！」

ヘイガニが質問してきた

ヘイガニ「ちょっとわからないことがあるんだけど……」

ヨノワール「なんでしょう」

ヘイガニ「今は大変なのはよくわかったんだけど、でもわかんないのはヨノワールさんのことだよ、ヨノワールさんはなんでそこまで

詳しく知ってるの？」

たしかにヘイガニの言うとおり

ヨノワールは詳しいことを知っているしかし一体どうしてなのか？

ヘイガニ「でもいくら物知りだってさ……未来のことまではわからないんじゃないの？ヘイヘイ！」

いくら物知りでも未来のことはわからないはずだ

ヨノワール「いやヘイガニさんのおっしゃるとおりです、普通なら知りようがない、でもなぜ私がそんなことを知っているのか？それは……私も……未来からやってきたポケモンだからです」

みんな「ええ～～～～～～～～～～～っ！？」

なんとヨノワールも未来からやってきたポケモンだったのだ！？

シルム「ヨノワールさんも……未来から来たポケモンだってぇ～！？」

ビッパ「ひゃー！あっしにはややこしくて頭が変になりそうでゲス！」

ヨノワール「私の目的、それはジュプトルを捕まえることなのです、そのために……私は未来からやってきたのです、また私はジュプトル捕獲を成功させるため……未来でこの世界の事を色々調べました、私がこの世界に詳しいのもそのおかげなのです」

リングマ「な、なんで今まで黙ってたんだよ?」

たしかに

今まで黙っていたのだ

ヨノワール「す、すみません」

ヨノワールは謝った

ヨノワール「それについては私も心苦しかったのです、今まで黙ってホント申し訳ない気持ちでいっぱいです、ただ……もしいきなりそんなこと言ったとして、私は未来から来ましたといきなり言ったとして、一体誰が信用してくれたのでしょうか?」

リングマ「うぐっ（汗）」

言われてみればたしかに誰も信じないだろう

ヨノワール「またジュプトルに感づかないようにするためには、この話は秘密にしたまま行動したほうがいいと思ったのです」

ペラップ「た、たしかに」

ヨノワール「しかし今までみなさんに隠したことも事実です、みなさんにはずっと黙ってて本当に申し訳ありませんでした」

ヨノワールは謝った

ペラップ「いやいやいやいやいやいやいやいやっ!謝らないで

ください！そういうことならしかたがないでしょう！」

ジバコイル「そうですよ、ヨノワールさんは間違っていない、憎むべきはジュプトルです、何とかして捕まえてください！」

ドゴーム「そうだ！ジュプトルをこのままにしておいては危ない！」

キマワリ「世界が大変なことになる前になんとしてでも捕まえなくちゃ！」

チリーン「ヨノワールさん！私ヨノワールさんに協力します！」

みんなが協力の声をする

ユクシー「私達も協力します！」

エムリット「盗まれっぱなしじゃ納得いかないしね！」

アグノム「もう盗ませないよ！絶対に！」

ヨノワール「みなさん、ありがとうございます、みなさんの……ポケモン全員の力を合わせて……ジュプトルを捕らえ、ジュプトルの悪巧みをなんとしてでも阻止しましょう！！」

みんな「おおーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

みんながワイワイと騒ぐ

アグノム「ヨノワールさん、水晶の湖にある時の歯車を手に入れるためには、僕を倒せばいいことをジュプトルは知っている、だから

もし手に入れようとするなら……ジュプトルは僕を倒しに来るんじゃないかな」

ユクシー「そこで、私とエムリット、アグノムの3匹が水晶の湖に行き……時の歯車を二度と奪われないように封印するという噂を流せば……」

エムリット「ジュプトルはまたかならず現れるんじゃないかな?」

たしかにいいさくせんだ

ヨノワール「なるほど、囮作戦ですね」

アグノム「うん」

ヨノワール「しかしそれだとあなたたちが危険な目に合ってしまいますが」

だが3匹の決心はかたかった

エムリット「望むところだわ!」

アグノム「それでジュプトルを止められるなら……」

ユクシー「私達、覚悟はできてます」

3匹は覚悟ができている

ヨノワール「……わかりました」

ヨノワールはみんなに向ける

ヨノワール「みなさん！今から作戦を言います！」

みんながヨノワールに目を向ける

ヨノワール「ですのでしっかり守ってください！まずみなさんは色んな場所に噂を広めてください『ユクシーさん、エムリットさん、アグノムさんの３匹が時の歯車を封印するために水晶の湖に帰って行った』と、とにかくその噂をできるだけ広めてください」

ペラップ「なるほどー、ジュプトルの耳に入るようにするわけですね」

ヨノワール「そうです、でもジュプトルは噂だけじゃだまされない、ですのでユクシーさん、エムリットさん、アグノムさんの３匹には……本当に水晶の湖に行ってもらいます」

シルム「そっか！そしてジュプトルがアグノム達に近づいた所を捕らえるってわけだね！」

彼等はみんなはついに作戦を決行することに張り切るが

ヨノワール「いや、せっかくなんですが……ジュプトルの捕獲は私１匹でやらせてください」

シルム「ええ～～～っ！？ど、どうして～～っ！？」

ヨノワール「ジュプトルは非常に用心深い性格です、アグノムさん

達が本当に水晶の湖に帰ってることがわかったとしても、相当警戒するはずです、なのでそこでもし水晶の湖に、たくさんのポケモンが見張っているのを知ってしまったら、ジュプトルはアグノムさん達には決して近づかないでしょう、ですのですみませんが、ここは私1匹でジュプトルを捕まえます」

ドルク「残念だな…」

ヨノワール「すみませんドルクさん、今度こそジュプトルを確実に捕らえたいのです我慢してください」

ペラップ「そういうわけでギルドのみんな！これまでは……ジュプトルを捕まえるよっ！たあーーーーーーーーーっ！！で来たわけだが、今回は我慢して裏方の徹してくれ♪」

ヘイガニ「まあ……」

ドゴーム「そういうことなら」

キマワリ「しかたないですわね」

ということになった

ペラップ「それでよろしいですよね？親方様」

プクリン「うん♪」

ペラップ「かしこまりました（フ～ッよかった～！今度はちゃんと起きてたよ～～！）」

ヨノワール「それではみなさん、色々お願いしてすみませんがよろしくお願いします！そして……なんとしてでもジュプトルを捕まえましょう！」

みんな「おおーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

かくして

ヨノワールはユクシー、エムリット、アグノムと共に

水晶の洞窟に向かいました

またその他のポケモン達は

アグノム達が時の歯車を封印するという噂を必死に広めようとするのでした

そしてプクリンのギルドのポケモン達は

……

ペラップ「そういうわけで、みんなは通常通り仕事にはげんでくれ、まあできるだけ噂を流してほしいところだが、あまり無理に流してジュプトルに警戒されるのも嫌なので、そこは自然に♪普通に仕事しつつ、できるようであれば噂も流す……とりあえずここ数日間はそんな感じで振舞うようにしてくれ以上だ♪ではみんな♪今日も仕事にかかるよ♪」

みんな「おおーーーーーーーーーーーっ！！」

しかし彼等は気が付かなかった
時の歯車のことを
まだ知らない
これが
後に大変なことになるとは
そして
さらに
それが未来に何があったのか
彼等は知る由もなかった

第３２話　捕まる、そして連れてかれる（前書き）

ついに物語も急展開が！？

ドルク「それより作者！！（怒）俺負けたじゃねぇか！！どうしてくれんだよ！！（怒）」

落ち着けドルク、負けもたまにはある、勝てるようにがんばればいいんだ

ドルク「たしかにな、あの野朗とかに負けて修行して倒したしな」

そうそう、第３２話をどうぞ

第３２話　捕まる、そして連れてかれる

それから2日後

ペラップ「えージュプトル捕獲についてだが……ジュプトルが捕まったという知らせは今だ来ていない、みんなやきもきしてると思うが……ここは我慢して……いつもどおり仕事にはげんでくれ♪」

するとサイレンがなる

ペラップ「おや！このサイレンは！？」

ディグダ「コイルさんからです」

コイル「ジバコイル保安官より連絡です！このたび……ジュプトルをついに捕まえることができました！！」

ソウ「とうとうやりましたね！」

カザリ「やっとだね」

ネク「よかった～」

ラース「ホントよかったです」

みんな喜びにしたむ

コイル「それで……ジュプトルを捕らえたヨノワールさんは、ジュ

プトルを連れて未来へ帰って行くそうです」

チリーン「ヨ、ヨノワールさんが」

シルム「帰っちゃうんだ」

ドゴーム「でも……未来に帰るって……どうやって帰るんだろうな？」

某ネコ型のロボットみたいにタイムマシンなのか？それともどうなのか？

コイル「それは私もよくわからないんですが、なんでも時空ホールというトンネルをくぐって行くそうです、そしてその時空ホールをトレジャータウンの広場に開いたそうです、ヨノワールさんは帰る前にみなさんにお別れをしたいとおっしゃってます、ですのでぜひトレジャータウンの広場に来てほしいとのことです」

ヘイガニ「ヘイ！こうしちゃいられねえ！」

シルム「早く行こう！トレジャータウンへ！」

メンバーはトレジャータウンへ

……

トレジャータウンの広場

その広場の所でなにやら未来を思わせるようなトンネルがあった

チリーン「みなさん、もう集まってますわ！」

ヘイガニ「でもヨノワールさんはまだいないみたいだなヘイヘイ！」

たしかにヨノワールはまだきていない

ドゴーム「おっ！なんだあれは？」

みんなはトンネルに気付いた

ジバコイル「これは時空ホールです」

キマワリ「時空ホール？ああ、さっきコイルが説明してたものですわね」

ビッパ「へえ～！これが！なるほど～！この中に入ると未来に行けるんでゲスかね？」

ビッパは時空ホールに近づくがジバコイルが止める

ジバコイル「危ない！近づいてはいけません！ここに入ったら最後、未来へ飛ばされてしまいます！注意してください！」

ビッパ「ううっ……」

シルム「あっ！ユクシー！エムリット！そしてアグノムも！」

３匹も来ていた

ユクシー「シルムさん！」

ドルク「無事だったみたいでよかったぜ」

エムリット「当然よ♪」

シルム「それで……作戦は成功したの」

作戦は成功したのだろうか？

アグノム「うん、さすがヨノワールさんだ、完璧だったよ、ジュプトルは捕まえた、それにアイツに盗まれた時の歯車も全部奪い返したよ」

ソウ「やった！よかったです！」

ユクシー「まもなくヨノワールさんもここにつくと思いますよ」

すると

リングマ「おっ！あれは！？」

みんなが注目する

ヨノワールが来た

みんなは道をあける

そこには目がダイアのようで紫の体色のポケモンが二匹そして口と縄で縛られたジュプトルが歩いていた

みんながヨノワールを悪いという感じに言っている

そして時空ホールの前に

ヨノワール「みなさーん！今日はみなさんにいい報告があります、このたびようやく……ようやくこのジュプトルを捕まえることができました！」

みんなが拍手する

ヨノワール「これもみなさんが協力してくれたおかげです！ありがとうございました！」

みんながまた拍手する

ヨノワール「ジュプトルは見ての通り、凶悪なポケモンです、みなさんの世界の平和もこれで守られるでしょう」

ジュプトル「！！……！！！！！ーーーーーっ！！」

ジュプトルは何かあわただしい感じに何か言いたそうだった

しかし口が縛られて何も言えない

シルム「ジュプトル……口を縛られてるみたいだ、あれじゃ何もしゃべれないよな」

ドルク「たしかにな……（コイツのあの反応？一体？）」

ドルクは疑問に思っていた

ジュプトルは何を伝えたいのだろうか？

ヨノワール「しかし……同時に悲しいお知らせもあります、それは私も未来へ帰らねばならないことです、みなさんとは……ここでお別れです」

ヘイガニ「やっぱりそうなのかあ……ヘイヘイ……」

ビッパ「か…悲しいでゲス……もっと色々教わりたかったでゲス」

みんなしょんぼりとする

ヨノワール「ユクシーさん、エムリットさん、アグノムさん、後の事はお任せしました」

アグノム「うん」

エムリット「わかってるわ」

ユクシー「取り返した時の歯車は私達3匹が手分けしてかならず元の場所に戻します」

ヨノワール「よろしくお願いします」

ジバコイル「色々とありがとうございました、おかげで助かりました」

ジバコイルはお礼を言う

ヨノワール「いやいや、こちらこそ本当にお世話になりました、これからも平和のためにがんばってください」

ジバコイル「はい！任せてください！」

ヨノワール「では、そろそろ」

ジュプトルとヤミラミの二匹は時空ホールへと入っていった

ヨノワール「それではみなさん……名残おしいですが」

キマワリ「ううううっ……寂しいですわ（泣）」

ディグダ「ううう……また会いたいです……（泣）」

しかし一番泣いていたのは

ペラップ「うわーーー

そしてドルクさん」

ドルク「俺達？」

シルム「行こう」

二人はヨノワールに近づく

シルム「これでお別れだね、ヨノワールさん……今まで本当に……本当にありがとう！」

しかし

ヨノワール「……これで……お別れ…か……それはどうかな？」

シルム・ドルク「えっ！？」

ヨノワールは構える

ヨノワール「別れるにはまだ早い！」

なんとヨノワールは二匹を掴んだ

シルム「うわっ！」

ドルク「なっ！離せ！」

ヨノワール「お前達も……お前達も一緒に来るんだッ！！」

ヨノワールはドルク達を時空ホールに引きずりこんだ

シルム「うわあああああああっ！！！！！！！！！！！？」

ドルク「うわあああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！？」

ソウ「師匠！！？」

ソウは時空ホールに入った

ネク「ドルク！シルム！！」

ネクもソウと共に時空ホールへ

カザリ「待って！！ネクちゃん！！？師匠！！」

カザリも時空ホールに入った

ラース「師匠！！みんな！！」

ビッパ「わわっ！」

チリーン「シルムさん！！ドルクさん！！」

みんなが近づくが

時空ホールはしまってしまった

ラース「師匠！！みんな！！？」

カクレオン（緑）「い、今のは……」

キマワリ「何が起こったのでしょう……」

ラース「師匠おおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！

第３２話　捕まる、そして連れてかれる（後書き）

次回からは新章へ！！

第３３話　脱走と荒れた未来（前書き）

ヨノワールはついにジュプトルを捕まえ、未来へと帰ろうとしたが
チームブレイブのドルクとシルムはヨノワールに掴まれ未来へと連れていかれてしまった

それに続けてソウ、ネク、カザリの３匹も未来へ

取り残されたラースは現代に

ヨノワールがブレイブまで巻き込む意味とは？

第３３話　脱走と荒れた未来

ドルク「……うう……何処だ…ここは……たしか……あいつに引きずられて……だめだ……また意識が……」

ドルクは苦しみながら意識を失った

……

ここは未来の世界

大地は枯れ、荒れ果てていた、太陽は暗くて出ず、植物などは枯れていた

そんなある場所にまるで崩壊したような塔があった

……

そんな塔の中にヨノワールはいた

ヨノワール「お待たせいたしました、ディアルガ様……」

ヨノワールは誰かと話していた

ディアルガ？

一体何なのか？

ヨノワール「少し苦労はしましたが……ようやく……捕まえることができました」

するとその崖から二つの赤い何かが現れた

グルルルルルルルルルルルルルル……

それはまるで獣のようだった

ヨノワール「……十分心得ております、歴史を変えようとする者は……消すのみ、すぐに排除します」

グルルルルルルルルルルルルルル……

ヨノワールの歴史を変えようとする者それは一体誰なのか？

ヨノワール「わかりました、かならず……では」

その赤い何かは姿を消した

……

シルム「……なあ……ドルク、ドルク起きて、起きてくれよ」

シルムとドルクの二人は何処かの牢屋に閉じ込めていた

ここにいるのはドルクとシルムの二人だけだ

ドルク「ううう……」

ドルクは目を覚ました

ドルク「シルム……ここは？」

シルム「気が付いた！」

シルムは喜ぶ

シルム「ここはどうやら……牢屋みたいだぜ」

ドルク「ろ、牢屋だと！？」

そう、二人は牢屋にいるのだ

シルム「オイラもさっき起きたばかりでよくわかんないけど…でも……」

どうやらシルムも起きたばかりらしい

シルム「あの扉を開けようとしたけど、しまったままなんだ、他に出口はなさそうだし……オイラ達、たぶん閉じ込められたんじゃないかな……ううっ……」

シルムは悲しむ

ドルク「ここは俺の魔法で…アルテマ！！……あれ？」

ドルクはアルテマを唱えようとしたがアルテマが出なかった

ドルク「どうなってるんだ！？俺の魔法が出ない！？」

シルム「ドルクの魔法が出ないなんて……」

たしかにアルテマなら出るはずだが

それが出ないとは

ドルク「（俺の魔力は十分なんだが……こうに限って魔法が出ないのはおかしいな……何かトリックでもあるのか？ならあの扉を調べてみるか）」

ドルクは扉を調べてみた、しかし扉は開かなかった

ドルク「だめだ、シルムの言うとおり開かないな、閉じ込められたしか思えないな」

二人はもう閉じ込められてしまった

一体何が起きたのか？

……

数分後

シルム「うーん……しかし……どうしてこうなっちゃったんだろうな？」

ドルク「あの時はたしかヨノワールに掴まれて、そのまま時空ホールに引きずられていったな」

そうだ、二人はヨノワールに掴まれてそのまま時空ホールへと引きずられたのだ

シルム「ええっ!?ということはもしかして……ここは……未来の世界ってこと!?」

ドルク「たぶんそうだろう」

シルム「そんな!信じられないよ!だって未来だぜ!?オイラ達なんだってそんなところに……」

たしかに信じられないだろう

二人は現代からここに来たのだ

シルム「ううっ……でも……この部屋もよく見ると……今まで見たことがない作り出し……そう考えるとやっぱりここは……未来なのかな」

たしかに部屋は見たことがない作りだ

シルム「うわぁ!ドルク!オイラ達ホントに未来に来ちゃったのかも!?」

ドルク「たしかにそうだな、だが一体?」

ドルクにもわからなかった

シルム「ううっ……まいったね……どうしよう……もしも……もしもここが本当に未来なら……オイラ達どうやって元の世界に帰れば

いいんだろう……」

ドルク「たしかに、俺達一体どうすれば……」

バタン！

ドルク・シルム「！？」

突然扉が開き、ヤミラミ達がぞろぞろ出てきて目を光らせる

ヤミラミ１「起きてたのか、ちょうどいい」

ヤミラミ１は後ろの３匹に声をかける

ヤミラミ１「おい、手っ取りばやくやるぞ」

シルム「て…手っ取りばやくって何を？」

すると二人を掴む

ドルク「なっ！？何をする！？やめろ！！？」

シルム「うわっ！目隠しされた！何も見えないぞ！」

ヤミラミ１「こっちに来るんだ」

シルム「イテ！押すなよう！」

ドルク「テメェら！イテェじゃねぇか！」

シルム「ううっ……目隠しされてるからわかんないけど……何処に連れて行かれるんだろうな……」

二人は何処かに連れてかれた

……

ヤミラミ1「着いたぞ」

目隠しが取れた

しかし

シルム「……こ、ここは!?」

シルムは縄に縛られている

シルム「ううっ縛られて動けないよ……ど、どうしてこんなことに……」

すると隣にスポットライトが照らし出す

そこには

ドルク「くそっ!動けねぇ!」

シルム「あっ!」

ドルク「シ、シルム!!無事か!」

シルム「よかった！無事だったんだな！」

二人は無事だ

？？？？「フンッ！これからどうなるかもわからないのに……随分とのんきなんだな」

ドルク・シルム「えっ！？」

ドルク「たしか今俺の横から声が聞こえるぞ？」

その隣には

ドルク・シルム「ジュ、ジュプトルーーーーッ！！」

隣にはジュプトルが

ジュプトル「お前達、ここが何処だか知ってるのか？」

シルム「し、知らないけど……」

二人は知る由もない

ジュプトル「ここは……処刑場だ」

ドルク・シルム「ええーーーーーーーーーーーっ！？しょ…処刑場だとおおお

二人は驚く

シルム「ちょっと待ってくれ、ジュプトルが処刑されるのはわかるよ？でもなんでオイラ達が！オイラ達何もしてないぞ？」

ドルク「ちょっと待て！？俺達までかよ！？」

二人は驚く

ジュプトル「フン！そんなの俺の知ったことか、どうせろくでもないことやっちまったんじゃないのか？」

すると二人は怒る

ドルク・シルム「なんだとっ！俺達（オイラ達）悪いことは何もしてないぞ！お前（アンタ）と一緒にするな！（して欲しくないよ！）」

ジュプトル「どっちでもいい、そんなこと言ってる間にホラ……お出ましだ」

辺りが明るくなる

そこからヤミラミ達がやってくる

シルム「わわっ！アイツらは！？」

ジュプトル「奴等は処刑場の執行人であり……そして……ヨノワールの手下だ」

ドルク「何っ!?ヨノワールのか!?」

そこにヨノワールが現れる

シルム「あ!ヨノワールさん!」

ヤミラミ1「ヨノワール様、3匹を柱に縛り上げました」

ヨノワール「よろしい」

シルム「ヨノワールさん!オイラだ!シルムだよ!」

だがヨノワールは前に出る

ヨノワール「ではヤミラミ達よ、これから3匹の処刑を始める」

シルム「ええーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!?」

シルムは驚く

ヨノワール「それでは……処刑準備用意!」

ヤミラミ達「ウイイイーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!」

ヤミラミ達は目を光らせ、ドルク達の元へ

シルム「ちょっと待ってくれ!ヨノワールさん!一体どうしちゃったの!?オイラ達どうしてこんなことに!」

シルムはヨノワールに向かって言うが

ジュプトル「アイツに何を言っても無駄だ！それより……」

このままでは3匹はピンチ！？

どうなってしまう！？

ドルク「（クソッ！どうすりゃあいいんだ！？このままだと！？）」

その時！？

？？？？「サウザントカッター！！」

ドルク・シルム・ジュプトル「！？」

真空波が3匹の縄を切り裂いた

そこから

？？？？「師匠！！」

なんとソウだった

ドルク「ソウ！！」

ソウ「よかった！なんとか間に合いましたね！」

すんでの所でソウが助けに来てくれた

ジュプトル「助かった、そこの銀イーブイ！」

ソウが呼ばれる

ソウ「あなたみたいな人(ポケモン)を助けるつもりないですが何ですか？」

ソウは呼ばれ少しムッっとする

ジュプトル「こっちに来い！」

ソウ「でも！」

ジュプトル「いいから来い！」

ジュプトルは大声で怒鳴るように叫ぶ

ソウ「わかりました」

ソウはすぐさまドルク達のそばに

だがヤミラミ達が迫る

ジュプトル「攻撃するんだ！」

なんとジュプトルが攻撃を指示

ドルク「言われなくても！！エナジーバスター！！」

ドルクはエナジーバスターをヤミラミ達に放つ

ヤミラミ達「ウイイイーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！！？」

ヤミラミ達はすぐさま回避して、ドルク達から離れる

ジュプトル「３匹とも！目を閉じてろ！！それっ！」

ジュプトルは光の玉を地面に向かってたたきつけた

すると辺りがまぶしくなる

ヤミラミ１「うわあああああぁぁ！ま、まぶしいっ！！」

ヨノワール「うろたえるな！ただの光の玉だ！すぐに元に戻るッ！」

光が収まると

そこには４匹の姿はなかった

ヨノワール「し、しまった！ジュプトルめ！光の玉のフラッシュのみ利用してこの場から逃げたな！逃がすものか！行くぞ！」

ヤミラミ達「ウイイイーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！」

ヨノワール達は処刑場を出た

だが彼等は油断していた

ボコッ

地面からジュプトルが
さらに
ボコッ！ボコッ！ボコッ！
なんとドルク、シルム、ソウの三人が出てきた
シルム「げほっ！げほっ！」
ソウ「土が口の中に」
ドルク「げほっ！助かったのか……（しかしジュプトルが穴を掘るが使えるとはな……色んな技を持っているようだな…まさか！？俺とシルムの連携技がはずれたのは…穴を掘るだったんだな！？）」
ドルクは前の戦いの時シルムとの連携技でいなくなったことを思いだした
ジュプトル「とりあえずはしのいだが……危険が去ったわけではない、早くここを脱出しよう」
４匹は脱出した
……
ジュプトル「おい！こっちだ！出口まで一気に走るぞ！」
４匹は走っていた

ジュプトル「おい！もっと全力で走れ！」

ソウ・シルム「これでも全力ですよ！！（なんだよ！）」

ドルク「一々命令すんな！（怒）」

かなり走っているようだ

シルム「それよりジュプトル！」

走りながらシルムは質問する

ジュプトル「なんだ？」

シルム「ここはもしかして……未来なの？」

ジュプトル「そうだ、よくわかってるじゃないか」

やっぱり未来だったのだ

ソウ「僕も確認しましたが、間違いなく未来でした」

ソウも言ってるなら間違いないだろう

シルム「ううっ……やっぱりそうなんだ……オイラ達……元の世界に帰れるのかなあ……」

ジュプトル「さあな、それより今は逃げることだ！捕まったら元の世界も何も無い！もっと早く走れ！」

シルム「無理だよ！もう疲れたよ……はあはあ……」

ドルク「俺もナエトルだから遅いんだよ！無理いうな！（怒）」

というが

ジュプトル「もう少しだ！ホラッ出口が見えてきた！」

シルム「はあはあ……はあはあ……」

ドルク「はあはあ……はあはあ……」

ソウ「はあはあ……はあはあ……」

ついに外へ

シルム「やった！やっと……外だぁ！！」

バタン！！

外に出たドルク達

そこには

シルム「わっ！こ…これはっ！！」

外を見ると、大地は枯れ果て、緑も何もなく、太陽も照らされない

真っ暗な世界だ

シルム「ここが……ここが未来の……世界なのか？岩とか浮いていて……ずいぶん不思議な所だけど……なんか……真っ暗だし……風も吹いていない」

ソウ「僕もこっちに来て見てきましたが太陽も照らされてなく、植物も枯れたままでした」

ソウもこっちに来たのだから事情はわかっているみたいだ

ドルク「まるで……すべての動きが止まってるようだ」

ジュプトルをシルムに向いて

ジュプトル「そのとおりだ」

シルム「えっ！？」

すると

ウイイーッ！

ヤミラミ達の声が聞こえる

シルム「わわっ！ヤミラミ達の声が……」

ジュプトル「早く逃げるぞ！」

ドルク達は急いで逃げた

……

シルム「……はあはあ、はあはあ、なあジュプトル、オイラもう疲れたよ」

ドルク「俺もだ」

ソウ「僕もです」

しかし

ジュプトル「休んでる暇はない！捕まったらおしまいだ！根性で走れ！」

ドルク「無理言うな！！はあはあ……」

シルム「だめだ、オイラ休むよ」

ドルク達は疲れた表情をする

ジュプトルは呆れて

ジュプトル「しかたがないな」

あるダンジョンの入口前へ

シルム「はあはあ……はあはあ……」

ドルク「ぜえぜえ……ぜえぜえ……」

ジュプトル「ここは岩陰になっている、ここだと奴等も発見しにくいだろう、少し休んだらすぐに出発するぞ」

シルム「ちょ…ちょっと待ってくれ、処刑場から脱出する時はしかたなくついてきたけど……でもその後もお前と一緒に行くって約束したわけじゃない！お前みたいな悪い奴、オイラは信用できないぞ」

ドルク「シ、シルム……はあはあ……」

まだ疲れているドルク

ジュプトル「フン！俺が悪い奴で……あのヨノワールがいい奴なのか？じゃあさっきのヨノワールの行動はなんだ？」

ソウ「たしかにそうですね、あの行動はおかしいですよシルムさん、師匠達を消そうとしたんですよ！？」

シルム「ううっ……」

たしかにソウやジュプトルの言うとおりだ、反論できない

シルム「でも……かといってオイラはジュプトルも……」

辺りが沈黙する

ジュプトル「……どうも信用してもらうのは難しそうだな、仲間は少しでも多いほうがいいと思ったが……信用がなければ一緒にいてもしかたがない、ここで別れるしかないだろう、俺は先を急ぐ、お前達もなるべく早くここを出ることだな」

ジュプトルは振り返る

ジュプトル「じゃあな」

ジュプトルは行こうとするが

ドルク「ちょっと待てよ！早くここを出ろって言われてもよ、今は辺りが暗くて見通しも悪いぞ、だからって今すぐ動くのはやばいんじゃないか？朝になってから出発するべきだ」

たしかにそうだ

しかし、それははかなくも打ち砕かれた

ジュプトル「それは無理だな、残念ながら朝は……朝はこないんだ」

ドルク・シルム・ソウ「えっ！？」

朝が来ない……

ジュプトル「この未来は暗黒の世界……日がのぼることはなく、したがって朝も来ることはない、ずっと暗いままだ」

シルム「……ど、どうして？」

その理由も驚くべきものだ

ジュプトル「それは……星が停止しているからだ」

シルム「星が……停止？星の停止って……」

ソウ「それって!?」

彼等はわかっていた

シルム「星の停止!?そうだ!思い出した!星の停止って前にヨノワールさんが言ってた……」

……

ヨノワール「それは……星の停止です」

ペラップ「星の……停止?」

ヨノワール「そうです、星の停止とは星自体の動きが止まってしまうことです、時の歯車を取ると、その地域の時間も止まりますよね?色んな地域の時が止まっていき……ついにはこの星自体の動きも止まってしまう……そのなれの果てが星の停止なのです」

ヒメグマ「星が停止すると……この世界はどうなるの?」

ヨノワール「星が停止した世界は……風も吹かず……昼も来ないし、春も夏も来ない、まさに暗黒の世界、世界の破滅と言ってもいいすぎではありません」

……

シルム「星の停止……たしかにヨノワールさんの説明と同じ感じだけど……しかしそれにしても……」

シルムは辺りを見渡す

シルム「未来では……星が停止してたなんて……」

ジュプトル「俺の話を信用するかどうかはお前達の自由だ、とにかくここからは早く出ることだ、じゃあな、ヤミラミ達に捕まるんじゃないぞ」

ジュプトルは洞窟に入った

シルム「ううっ……ドルク、ソウ、オイラなんだかよくわからなくなってきたよ」

ソウ「僕も最初疑いましたが……ジュプトルの言ったことに間違いはないですね」

ソウも見てきたので確信はついていた

だが疑問が

シルム「でも星の停止は時の歯車がなくなることで起きるんだったよな?だからオイラ達はジュプトルが時の歯車を盗むのを防ごうとした、そしてそれは成功したはずだよな?」

たしかに、それなら未来はこうはならないはずだ

ドルク「たしかにな、時の歯車はユクシー達が元の場所に戻すと言ってたしな、それで星の停止は防いだはずだな」

シルム「でもそれなのに……どうして未来では星が停止してるんだろう……ああもうオイラ何を信用していいのかわからなくなってきたよ！」

すると

ウイイーーーッ！

ソウ「ヤミラミ達です！？」

ドルク「こうしちゃいられねぇ！早く準備してここから逃げるぞ」

ドルク達は準備をしてから早くここから洞窟に入り、立ち去った

第３４話　真実を求めて（前書き）

彼等はソウによってなんとか脱出した、だが未来はすでに星の停止となっていた

ジュプトルは先に行ってしまい、残された彼等は追ってから逃げるように空間の洞窟へと入っていった

第３４話　真実を求めて

ドルク「だいぶ歩いたな」

ソウ「それにしても…ネク君とカザリ君何処だろう？」

シルム「二人も来てたんだ」

３匹は洞窟から急いで脱出しようとただいまダンジョンを捜索

ドルク「だが二人も何処かにいるはずだ、捕まってなければいいが」

ドルクは心配する

ソウ「大丈夫ですよ師匠！あの二人は強いですから捕まるわけありません、だから僕達は早くここを脱出しましょう」

ドルク「そうだな」

シルム「急ごう」

三人は急いで洞窟を抜ける

……

シルム「あっ！ドルク！ソウ！あっちに見えるの出口じゃないかな？」

ドルク「ホントだ！行くぞ！」

３匹はなんとか洞窟を出た

シルム「はあはあ……はあはあ……」

ソウ「だいぶヤミラミ達を引き離しましたね」

ドルク「ここで休むか」

３匹は辺りを見渡す

すると

シルム「あっ！あそこに水がある！」

向かうと

ソウ「この滝、水の流れが止まってますね水しぶきも跳ねたまま固まってますし」

シルム「やっぱりジュプトルの言うとおり……未来では時が止まっているのかな……ヨノワールさんはなんでオイラ達を連れ込んだんだろう、あんなに親切だったヨノワールさんが……オイラもう何を信じていいかわかんないよ」

ドルク達は滝に向ける

シルム「せめて真実を解く手がかりがあればいいんだけど……そ、そうだ！」

シルムはドルクに向く

シルム「ドルク！真実を突き止める方法があるぞ！」

ドルク「えっ？」

ソウ「それって……」

そのまさかだ

シルム「時空の叫びだよ！ドルクの時空の叫びを使うんだよ！」

ソウ「なるほど！たしかにそれなら！」

ドルク「わかった……この水しぶきにさわってみる」

シルム「のんびりしてるとヤミラミ達が来ちゃうよ」

ドルク「わかってる」

ドルクは水しぶきに触れた

シルム「……ドルク、どうお？何か見える？」

しかし

ドルク「……だめだ、何も感じねぇ」

あのめまいが来なかった

ソウ「そんな!?」

シルム「だ…だめかあ～ううっ残念……少しでも何かわかることがあれば安心できたんだけど、結局何もわからないままかあ……」

時空の叫びが発動しない

なぜなのかもわからない

ドルク「大分時間くったな、急ぐぞ」

彼等は次のダンジョンへ

……

シルム「はあはあ……大分登ってきたよな」

ソウ「かなりのぼりましたから」

3匹は先に進む

すると彼等の目に飛び込んできたのは

シルム「うわっ!見ろよ!ドルク!ソウ!」

丘の下は真っ暗だった

シルム「やっぱり……未来は真っ暗な世界なんだな……真ん中あた

りに明かりが集まっていて……とても綺麗なんだけど……でもあの明かりは……もしかしてあそこが……処刑場だったりするのかなあ……」

不安が募る

ドルク「たしかにそうかもな……」

ソウ「師匠……」

二人は暗くなってしまう

シルムもやっぱり暗くなってしまう

シルム「なあドルク、ヨノワールさんは今までオイラ達を助けてくれたし、色々なことを教えてくれた……だからオイラも……ヨノワールさんのことはすごく尊敬してたんだけど……でもヨノワールさんはやっぱりオイラ達のことを……だましてたのかなあ……こうなった今も……まだ信じられないよ、オイラもう何を信じていいのか、頭の中がグチャグチャだよ」

ソウ「シルムさん……」

ドルク「シ、シルム……」

シルムは丘の下に見える風景を再び見る

シルム「オイラ達……これからどうすればいいんだろうな……何処まで逃げ続ければいいんだろう……元の世界に帰れるのかなあ……ギルドのみんなは……今頃どうしてるのかなあ、オイラ達がい

なくなって心配してるのかなあ……プクリンやペラップやビッパ達……みんな元気にしてるのかなあ」

するとシルムの目に涙が

シルム「ううっ（泣）ギルドのみんなに……会いたいよう……（泣）」

ソウ「シルムさん……」

ドルク「（シルムも大分参ってるみたいだ、無理もないな）」

ドルクも落ち込む

探検隊のリーダーである彼には珍しかった

ドルク「（これまでに起きたことは、とても信じられないようなことばかりだったからな……俺だって……不安でいっぱいなんだよ……でもここでくじけていては何も始まらねぇ！今がんばらないとヤミラミどもに捕まっちまう、何とかしてシルムを元気づけないとな！だがただの慰めじゃ塞ぎこむ、こんな時……何か突破口があれば、何か光が見えればそれに向かってがんばっていけるはずだ一つでいい！何をするべきかを……）」

ドルクは考えた

自分は探検隊ブレイブのリーダー

リーダーである責任だ

なんとかしないといけない
それがリーダーである彼のつとめだ

ドルク「（そういえば…ジュプトルの行動と言葉には何か違和感があったな……）」

ドルクは思い返した

……

エムリットの時

ジュプトル「お前は先ほどの戦いで……すでに相当ダメージを負ったはずだ、無理をするな」

さらに俺達を傷つけた時も

ジュプトル「お前達に恨みはない、勘弁してくれ」

……

ドルク「（あの時は何か意味があったように見えた、だがアグノムの時はシルムとか倒そうとしてたしな……だけど気になるのは……未来に飛ばされた時にヨノワールが言ってた言葉に反応してたな……）」

……

ヨノワール「ジュプトルは見ての通り、凶悪なポケモンです、みな

さんの世界の平和もこれで守られるでしょう」

ジュプトル「！！……！！！！！！！！！！！っ！！」

……

ドルク「（あの言葉で何か言いたそうだった、ならジュプトルは……）」

ドルクはシルムに声を掛ける

シルム「ん？どうしたの？ドルク」

ドルク「シルム、ソウ、ジュプトルを追いかけるぞ！」

シルム「ええっ！？ジュプトルを追いかけるだって！？ど、どうして！？」

ドルク「俺は……あいつに聞きたいことがある」

ドルクはそう答えた

シルム「聞きたいことって？」

ドルク「あいつは色々と理由があったんじゃないかと思う、それを突き止めれば何かあるはずだ、それにあいつはここからシルムの世界に行ったんじゃないのか？なら帰る方法があると思うんだ」

ソウ「たしかに、僕もジュプトルにそんな悪意は感じられませんでした、それならジュプトルなら帰る方法を知っているはずですよ」

ソウはジュプトルに悪意はないという

シルム「でもジュプトルは悪い奴だぜ!?あいつは……時の歯車を盗むためにオイラ達の世界に来たんだぜ?そんな奴の言う事なんか信用できないよ、ソウもそうなの?」

ソウ「たしかに……」

ソウは黙り込む

シルム「ドルクはどうなんだ?ドルクはジュプトルの事信用してるのか?」

ドルク「それはわからない……だが何か理由でもあるんじゃないか?」

シルム「理由?それでもジュプトルに会って話を聞きたいんだよな?」

理由

それだけわかればきっと

ドルク「話が本当なのかはジュプトルとか色々と聞いてみればこの世界に何が起きているのかわかるはずだ」

しかし

シルム「……オイラは嫌だぜ!(怒)あんな奴を信用するなんて!

絶対に！あんな奴！信用するなんて……」

だんだん怒りから悲しむ表情になるシルム

シルム「嫌だけど……でも……今は……そうするしかないのかな」

ソウ「そうするしかないですね、なぜヨノワールが僕達を狙ってるのかわかりませんし、追いかけてますから、そうなるとこの未来で他に知ってるポケモンは、ジュプトルしかいないです」

そう、ジュプトルしかいないのだ

シルム「今はジュプトルに頼るしか……他に方法がないよな……」

シルムはしばらく黙り込んだ

数分後

シルム「……うん」

シルムはドルクの方へ向く

シルム「わかったよドルク、ジュプトルを追いかけよう！ジュプトルに会って、元の世界へ帰る方法を聞きだそう！」

ドルク「シルム！（泣）」

ドルクはうれし泣きした

シルム「ドルク！？ごめん！？オイラが泣かしたんだよな？」

ドルク「お前のせいじゃねぇよ、それでも俺は……」

ソウ「行きましょう！ジュプトルの後とネク君達を探しに！」

ドルク「ああ！」

ドルクは歩き出した

シルム「ドルクありがとな」

ドルクはシルムの言葉で止まり、シルムの方を向いた

シルム「オイラが元気がないから心配してくれたんだよな、ドルクだって不安なはずなのに……ごめんな、一番大切な友達が近くにいるというのに、オイラは1匹で悩んで……1匹でくじけそうになっちゃった」

ドルク「いいんだ、俺はお前を心配してたし、ほとけなかった……でも俺も悩んでた……お前の悲しい姿はもう見たくねぇ……一人で抱え込むな」

そうだ

シルムはもう一人じゃない

ソウ「シルムさんは一人ではありません、僕もですよ」

二匹はソウの方を向く

ソウ「僕だって、元々は寂しかったですよ、色違いで弱かったですから……でもある方に助けてもらって僕は強くなった、いたずらしたり、黒いこと考えたりと……それでも僕は楽しかった、それにドルク師匠に会って、僕は色々と教わりました、僕には師匠やシルムさん、ネク君にカザリ君、そしてラース君も、僕にはかけがえのない友達です、師匠は僕の憧れですし、僕はこの探検隊にいたことが嬉しいんです」

ソウは自分の本音を語った

ソウだって、色違いのイーブイでも辛いことはある

一人だけ悩んでるんじゃないのだから

シルム「ソウ……そうだね」

シルムはドルクの方に駆け寄る

シルム「オイラ、もうあきらめないよ、ドルクやソウがそばにいてくれるから勇気が出てくる、オイラはもう大丈夫だから……だからがんばろうなドルク、ソウ、まだいないけどネクやカザリも一緒だよ、かならず一緒に……元の世界に帰ろうな！」

ドルク「ああ！」

ソウ「はい！」

3匹は丘を降りた

……

そして何処かの洞窟の入口についた

シルム「ジュプトルと別れてからここまではずっと一本道だったよな」

洞窟の入口に振り返る

シルム「だからジュプトルはきっとこの先を行ってるはずだ」

ドルク「なら行くぞ！」

３匹は洞窟へと入った

……

中間地点

ソウ「ようやく半分ですね」

ドルク「だがジュプトルはみつからないな」

シルム「この先なのかな？」

３匹は休憩していた

ドルク「とりあえず休めたから行くぞ」

シルム「うん！」

ソウ「はい！」

3匹は先へと進んだ

シルム「そろそろ一番奥にいけるんじゃないかな？」

ドルク「そうだな、急ぐぞ！」

その後から

ネク「やっと到着だよ」

ネクと

カザリ「何処に行ったんだろう？師匠達は？」

カザリだった

ネク「ここにいないのならこの先なのかな？」

カザリ「そうならこの先ってことだね、行こうネクちゃん」

ネク「うん」

二人は先へと進んだ

……

ジュプトル「大分深くまで来たな、もう少しだ」

一方ジュプトルは

封印の岩場の奥地に到着していた

ジュプトル「どうやらここを抜ければ……森に出られそうだな、ヤミラミ達が追ってくる、グズグズしてられないぞ」

ジュプトルは後ろを振り返る

ジュプトル「……そういえば……あの3匹は無事なんだろうか……ヤミラミ達に捕まったりしてないのかな……」

ジュプトルは首を横に振る

ジュプトル「いや！それより……今は自分の使命を優先させなくては！犠牲を払ってでもやり遂げると誓ったではないか！行こう」

ジュプトルが歩こうとしたその時

？？？？「オイ！待て！」

何処からか声が聞こえた

ジュプトル「むっ！誰だっ！？」

ジュプトルが辺りを見渡す

？？？？「我の縄張りに勝手に入り……眠りを妨げたにも関わらず……そのまま立ち去ろうというのか！」

ジュプトル「誰だ！お前は！？」

だが声は何処に？

？？？？「我を怒らせたのだ、それなりの償いはしてもらおう」

ジュプトル「何処にいるんだ！？隠れてないで出て来い！」

ジュプトルはまた辺りを見渡し、声の主を探す

？？？？「我が隠れてるだと？我は隠れてなどいない、我は……我はここにいるっ！」

その声の主は

？？？？「我の名はミカルゲ！我の縄張りを侵すものは許さんっ！！」

ザシュッ！

ジュプトル「ぐわあああああああ

第３５話　合流（前書き）

ドルク、シルム、ソウはジュプトルの後を追うため、封印の岩場へと入っていった、その頃ジュプトルはミカルゲの不意打ちに襲われてしまう

第35話　合流

封印の岩場奥地

ドルク達はなんとか到着したが

そこには苦しそうな表情をして、さらに何かに呪われたようになったジュプトルの姿があった

シルム「あっ！ジュプトル！」

ジュプトル「うぐ……お前達……」

呪いをかけられたようにジュプトルは苦しんでいた

ソウ「ジュプトル！大丈夫ですか！？」

ドルク達はジュプトルに近づくが

ジュプトル「く、来るなっ！！」

シルム「えっ？ど、どうして！？」

それは

ジュプトル「気をつけろ！敵がいるッ！」

ドルク「何っ！？ど、何処だ？」

ドルク達は警戒しながら辺りを見渡す

ジュプトル「お前達の……すぐ隣だ！」

シルム「すぐ隣って……」

ドルク達は隣に置いてある変な石に注目した

シルム「……ま、まさか……」

そのまさかだ

その石は「コトッ」っと動いた

シルム「わーーーっ！」

ミカルゲ「ヒッヒッヒッヒッヒッ！ここにあしを踏み入れる者は……すべて許さん！お前達もな！」

その石から声が聞こえた

ドルク「誰だ！お前は！」

ミカルゲ「我の事か？我の名はミカルゲ、１０８個の魂が合体して……」

石の割れ目から紫の不明なものが現れた

ミカルゲ「生まれたものだ！！」

ジュプトル「気をつけろ！お前達！ソイツは強いッ！」

ミカルゲは構える

ミカルゲ「ヒッヒッヒッヒ！覚悟しろッ！」

だが

ネク「エアロソニック！」

カザリ「ブレイドウィンド！」

突然ミカルゲの方から風の攻撃が

ミカルゲ「ぐわっ！？」

ミカルゲは突然の不意打ちでダメージを受けた

ドルク「ネク！カザリ！」

ネク「みんな無事！」

カザリ「師匠！ソウちゃん！シルムちゃん！」

シルム「ネク！カザリ！」

なんとかみんな合流

ミカルゲ「グググ、おのれ～！！」

ミカルゲは怒るが

ドルク「テメェは黙ってろ！！エナジーバスター&アルテマ！！（怒）」

ソウ「成仏してください！！アルテマ！！（怒）」

ネク「うるさいよ！！ツイスエアロバスター！！（怒）」

カザリ「黙ってよ！！サンダーエアロバスター！！（怒）」

腹黒４人の総攻撃がミカルゲを襲う

ミカルゲ「ぎゃあああああああ

ァァァーーーーー！」

するとミカルゲはかなめ石に引っ込まれた

ミカルゲ「ヒャ！」

するとジュプトルの体から呪いが解かれ、その呪いは紫の煙となってミカルゲに戻っていった

ミカルゲ「ヒャ！に、逃げろ～～～～～～～ッ！！！！！！うわあああああああああああああああああああああああああああああん！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！（泣）」

かなめいしに入ったミカルゲはピョンピョンして逃げた

しかも泣きながら

ドルク「なんだったんだ？今のは？」

ジュプトル「急に弱気になって逃げただけだ……」

シルム「ジュプトル！」

ドルク達はジュプトルに駆け寄る

ネク「なんでジュプトルがいるの？」

ソウ「説明は後です！とにかく今は」

ジュプトル優先だ

シルム「だ、大丈夫？」

ジュプトル「ああ……大丈夫だ……」

苦しそうだが大丈夫のようだ

ドルク「立てるか？」

ジュプトル「……なんとかな……うう……」

ジュプトルは何とか立った

ジュプトル「しかし……手強い奴だった、俺の鼻の穴から潜り込んで体をのっとりやがった」

ネク「あのミカルゲというポケモン、悪い奴だったんだな」

しかしジュプトルは

ジュプトル「いや、そうじゃない、おそらくミカルゲは自分の縄張りが荒らされたんで怒っただけだ、怒ると見境（みさかい）がつかなくなるし、恐ろしい奴だったが……さっきのようにいったんはたいろが悪くなると逃げて行ったように本当は臆病なポケモンなのだ、本来はとてもいいポケモンなのに……世界が闇に包まれてるせいで心もゆがむ、未来にはそんなポケモンがほとんどなのだ」

シルム「……そっかあ……この世界のせいでいいポケモンも悪くなるのって、なんか悲しいよな……」

星の停止によって、ポケモン達の心にも影響が出てきていた

ジュプトル「……！お前達！」

ジュプトルは突然声を掛けた

ジュプトル「お前達は俺の言うことを信用するのか？」

みんなが答える

ネク「俺はまだ知らないけど……まだ信用はないかな？」

カザリ「僕は少しかな？でもなんで？」

この二匹はわかってないようだ

ドルク「実はな……」

ドルクは二人を連れて声が聞こえないように話した

ネク「えっ！？そうだったんだ」

カザリ「たしかにいえてるね」

納得したので3匹は戻った

シルム「うーん……半分ぐらい……かな」

ソウ「僕もです」

二匹の信用は半分ぐらいだが

シルム「正直言うと、まだ信用してるわけじゃないんだけど……」

ジュプトル「フン！前に言ったはずだ、信用がなければ一緒にいてもしかたない…と」

たしかに前にそう言った

ジュプトル「じゃあな」

ジュプトルは去ろうとしていた、しかし

シルム「あ、待ってくれ！」

ジュプトルは足を止める

シルム「信じないとも言ってないよ！……正直言うとオイラ達……もう何がなんだかよくわからないんだよ、だから少しでも情報が欲しいんだ、それに……ジュプトルの事、たしかにまだ疑ってるところもあるけど……でもジュプトルの言うことも納得がいくっていうか……なんか筋が通ってる気がするんだ、だからお願い！ジュプトルの知ってることを聞かせて！未来のことや……なぜジュプトルがオイラ達の世界に来たのかも！」

ジュプトルは振り返る

ジュプトル「俺の言うことがすべてデタラメだったらどうする？」

シルム「大丈夫、うのみにはしない、自分で判断するよ」

しばらくジュプトルは考え…答えた

ジュプトル「……わかった、着いて来い」

みんなはジュプトルに着いていった

第３５話　合流（後書き）

次回は星の停止の真実が明らかになっていきます

第３６話　星の停止の真実（前書き）

ジュプトル「さて、ついに３６話か」

って！？なんでいるの！？

ジュプトル「どうせだから俺もここに来たほうがいいしな」

そうなのね（汗）

ジュプトル「それじゃあ第３６話だ」

ちょっ！？

第３６話　星の停止の真実

ジュプトルとブレイブメンバーはとりあえず岩場に隠れていた

ジュプトル「よし、ここがいい、ここならヤミラミ達も見つけにくいだろう」

シルム「教えてくれ、ジュプトル、未来では……なぜ星の停止が起こったんだ？」

ジュプトル「星の停止が起きた原因……それは……」

ジュプトルは星の停止が起きた原因を言った

ジュプトル「お前達が住んでいた過去の世界で……ディアルガが司る……時限の塔が壊れたからだ」

シルム「ディ、ディアルガ？何なの？それは？」

ディアルガ

時間を司る伝説のポケモンだ

ジュプトル「時間を操る伝説のポケモンだ、ディアルガは時限の塔で時を守っていた、しかし時限の塔が壊れたのをきっかけに……少しずつ時が壊れ始め……ついには星の停止を迎えたのだ」

ソウ「聞いたことがありますが……そのディアルガは一体どうなる

んですか？」

時限の塔の崩壊

それが原因らしいが

星の停止を迎えたディアルガはどうなっていくのか？

ジュプトル「ディアルガは時が壊れた影響で暴走した、そして星の停止を迎えた未来世界のディアルガにいたっては……ほとんど意識もなく……今は暗黒に支配されている、もはやあれをディアルガとは言えないだろう、まったく別の存在……そう……『闇のディアルガ』と言うべき存在になっているのだ」

ネク「そうなんだ……ディアルガの事は俺もわかってるけど……まさかこんなことが」

ネクは別の世界のため、ディアルガの事はわかっているが

世界の事情があるためか、知らないことばかりだ

ジュプトル「『闇のディアルガ』は感情を失ったまま……ただ歴史が変わるのを防ごうと働く、だから俺はディアルガに狙われてるのだ、俺は歴史を変えるため……つまり星の停止を防ぐために……未来からお前達の世界へタイムスリップしたのだから」

みんな「ええ～～～

だよ！？」

ドルク達が聞いたのは

シルム「ジュプトルは星の停止を起こすために未来から来たんじゃないのか！？だってジュプトルは……時の歯車を盗んでたじゃないか！？」

時の歯車の治める地域の時間は止まる、だが時の歯車を盗んだのはなぜなのかわからない

しかしジュプトルは反発する

ジュプトル「冗談じゃない！俺が時の歯車を集めてたのは……星の停止を防ぐのに必要だったからだ、時限の塔に時の歯車を納めれば……壊れかけた時限の塔も元に戻る、また時の歯車を取るとたしかにその地域は時間が停止するが……それも一時的なもので、時限の塔に時の歯車を納めさえすれば、また元に戻るのだ」

時の歯車は、時限の塔を直すための物だった

シルム「……ううっ……じゃあヨノワールさんが言ってたことは？ジュプトルは未来で指名手配中の悪者だったとか……ジュプトルが未来から逃げ延びるために……過去の世界へやってきたとかの話は」

全部デタラメってことだろう

ジュプトル「当たり前だ、ヨノワールは……この俺を捕らえるべく……『闇のディアルガ』が未来から送り込んだ……刺客だからな」

シルム「ええ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ！！？」

ソウ「あのヨノワールが、『闇のディアルガ』の刺客ですか！？」

ヨノワールはだましたのだ

みんなを

ジュプトル「そうだ、さっきも言ったように『闇のディアルガ』は……歴史を変えようとする者がいるとそれを防ごうと働く、だから俺がタイムスリップしたことを知ると……ヨノワールを刺客として、その後を追わせたのだ」

シルム「ヨノワールさんが……そんな……」

シルムはショックを受ける

カザリ「そんなことが……」

ジュプトル「お前達には信じられないだろうが」

シルム「全然信じられないよ！だってあのヨノワールさんだよ！？たしかに今のヨノワールさんはよくわからないけど……でも……オイラが尊敬していたあのヨノワールさんが……そんな……」

シルムには信じられないが現実はそう甘くない

シルム「やっぱり……信じられないよ（泣）」

シルムの目に涙が出る

ドルク「たしかに信じられないな……」

ドルクの若葉がしおれる

ドルク「だが未来世界でこれまで起こったことを振り返ると……ジュプトルの言うことは筋が通っているし納得がいく」

ソウ「たしかに師匠の言うとおりですね、この出来事がそうなら」

師弟コンビは納得する

シルム「くすん（泣）」

ドルク「（そしてそれはシルムも……本当はわかってるけど納得できない、受け入れたくないと思っているんだな……でも）」

するとシルムは何処かに歩くが

ジュプトル「おい！何処に行くんだ？」

シルム「オイラヨノワールさんに会いに行く」

ジュプトル「なんだと！？」

ドルク「待てっ！？」

ドルクが止める

シルム「離してよ！ヨノワールさんに会って、ジュプトルが言った

ことが本当かどうか確かめてくる」

しかし

ジュプトル「そんなことしてどうする！捕まってまた処刑されるだけだぞ！お前が敵う相手じゃないッ！（怒）」

ジュプトルは怒鳴った

ドルクはシルムを離した、そしてシルムはジュプトルに振り返る

シルム「じゃあ……オイラはどうすればいいんだ！？」

ジュプトル「どうすればいいだと！？さっきお前は言っただろう！？自分で判断すると！何を信じていいかわからないからこそ……話をうのみにせず……自分で考えると！」

シルムはたしかにそう言った

信じられないかもしれない

でも自分で判断できるほど信じられないかもしれない

シルム「ううっ……」

ジュプトル「苦しい時だからこそ気持ちを強くもつのだ、後は自分達で考えて行動してみろ」

ジュプトルは歩いていく

シルム「ジュプトルは……どうするの？」

ジュプトル「俺はまた星の停止を食い止めるために過去に行く、そしてそのために……セレビィを探す」

ソウ「セ、セレビィって！？」

シルム「セ、セレビィ」

ジュプトルはシルムに振り返る

ジュプトル「そうだ、俺に付いてきてもいいし付いて来なくてもいい、お前達はお前達で自分の道を決めろ、じゃあな」

ジュプトルは去った

シルム「ううっ……」

ドルク「（俺も、何を信じていいのかわからない……でも……一つだけはっきり言えるのは、この暗黒の未来世界では……星が停止してるってことだ、そしてこの星の停止は、俺達の世界で起こったことだ、だからそれを食い止めるためには……）」

ドルクは表情を変えて

ドルク「（過去に戻る！いや戻らなきゃいけねぇんだ！！絶対に帰るぞ！俺達の世界へ！）」

過去に戻る

星の停止は過去の自分達の世界の原因だから

ドルクは責任を感じた

俺が関わっているのだから俺達の責任だ

だから戻ってなんとかしないと

そんな思いを胸にしまっている

ドルクは歩き出し、シルムに向けた

ソウ達も表情が変わる

シルム「ドルク……」

ドルク「わかってるだろ?俺達だってこのままにするわけには行かない、俺達は過去に戻っていかないと……先がない」

シルム「うん……わかってる、ジュプトルの……ジュプトルの言うとおりだよな、こんな時だからこそ……気持ちを強く持たなくちゃ」

カザリ「そうだよ、僕達に起こったことなんだ、ここで泣かないで、僕もいるし、みんないるんだから」

そうだ、仲間がいる

探検隊ブレイブの仲間達が

ソウ「ラースさんをこっちに残してしまってますが、僕達がいるん

です！」

シルム「ソウ……みんな……」

みんなが励ましあう

絆

希望の絆が彼等を強くした

シルム「オイラはもう大丈夫だから……みんな行こう、ジュプトルの後を追いかけよう」

みんなは頷き歩いた

シルム「ドルク」

シルムはドルクに声を掛けた

ドルクは振り向く

シルム「絶対に……絶対に帰ろうな！自分達の世界へ！」

ドルク「ああ！俺やソウ達もいる！行くぞ！」

ブレイブメンバーは歩き出した

……

一方時限の塔

二つの赤いものが光る

グルルルルルルルルルルルルルル……

ディアルガ、いや闇のディアルガだ

ヨノワール「ディアルガ様、あの者達を捕らえる手はずはすべて整っております、そして時が来たら……ディアルガ様のお力も必要になるかと……」

グルルルルルルルルルルルルルル……

闇のディアルガが唸りをあげる

ヨノワール「……かしこまりました、では予定通りに」

闇のディアルガの姿が消えた

第37話　セレビィ（前書き）

事実を受け止められないシルム

だがジュプトルの言うとおりだ

彼等は星の停止の原因がディアルガの時限の塔だとわかった

ドルク達は決断する

元の世界に絶対帰ると！！

第37話　セレビィ

ドルク達は黒い森へと到着した

ドルク「……！（あれ？なんだ？今の感覚……前にも感じたようだが……）」

ドルクはここに来て何かを感じたようだった

ソウ「ここは何処なんですか？」

前にいるジュプトルに言う

ジュプトル「ここは黒の森、絶えず黒い霧がかかっているのでそう呼ばれている、そしてこの森の奥深くに、セレビィがいるはずだ」

シルム「ねえジュプトル、さっきの言ってたけど、セレビィって何なの？」

シルムはセレビィのことがわからなかった

ジュプトル「セレビィは伝説の時渡りポケモンであり……時間を越える力を使う、まあ……ちょっと変わった奴ではあるんだけど……とにかく俺が過去に行けたのもセレビィの力を借りたからなのだ」

それでジュプトルは過去に行けたのだ

カザリ「じゃあそのセレビィに会えば」

シルム「オイラ達も元の世界へ帰れるってこと？」

ジュプトル「ああ、帰れる、ただし……セレビィは俺を過去に送ったポケモンだ、つまりセレビィもまた歴史を変えることに協力したことになる」

たしかに、セレビィは時渡りができる

だがセレビィもまた、歴史を変えることに協力しているポケモンなのだから

シルム「それは……じゃあもしかしてセレビィも！？」

ジュプトル「そうだ、セレビィもまた『闇のディアルガ』に狙われているのだ、グズグズしてはいられない、早く準備してセレビィを探しに行こう」

カザリ「どうもせっかちなんだねジュプトル」

だがジュプトルは

ジュプトル「ん？なんだ？」

カザリ「いや、なんでもないよ（鈍感なのかな（汗））」

せっかちな彼も早くしたいため早く準備して彼等は出発することとする

……

ドルク「準備できたぞ！」

ジュプトルか駆け出す

ジュプトル「どうやら準備ができたようだな、では出発しよう、セレビィに会って、過去に戻るんだ、行くぞ」

ジュプトルは歩き出す

シルム「ちょっと待ってくれ！」

そこにシルムが声を掛ける

ジュプトル「どうした？」

シルム「もしオイラ達６匹が元の世界に戻れたら……ジュプトルはやっぱり前のように……時の歯車を盗むの？」

ジュプトル「……ああそうだ、そうしないと星の停止は止められない」

シルムが叫ぶ

シルム「オ、オイラは！オイラはまだジュプトルの事を……信用してるわけじゃないからな、元の世界に帰りたいから一緒に行動してるだけで……オイラ達やジュプトルが元の世界に戻れた時……時の歯車を盗むことが星の停止とは関係なく……やっぱりジュプトルが間違ってるようだったら……オイラはジュプトルを止めるからな！」

もしそうなら止めるだろう

ドルク「俺ももしそうなら俺もお前との決着をつけたいしな、負けちまってるからな」

するとジュプトルは

ジュプトル「……フン、好きにしろ、ただし……今大切なのはお互い無事に過去へ行けるかどうかだけだ、だったら今は……そのためだけに集中しろ、行くぞ」

ジュプトルは先に進む

そして次にソウ、ネク、カザリが先に進む

ドルク達も先に進もうとしたとき、ドルクの足が止まる

ドルク「（……やっぱり何か感じる）」

ドルクは何か感じていた

シルム「ん？……ドルクどうした？」

ドルク「（そうだ……たしか以前にも似たような感じだったな、あれは……そうだ！あれはあの時の」

……

それは遠征の時だった

シルム「ん？……ドルクどうした？」

ドルク「（なんかここに来てたら感覚が…なぜそうなったのかわかんねぇが、俺は…この場所を知っている！ここに来たことがあったのか？）」

……

ドルク「（遠征の時の濃霧の森と同じ感覚に似てる！？）」

ジュプトル「おい！何やってるんだ！」

ジュプトルの声が聞こえる

ソウ「師匠！」

ジュプトル「早くしろ！」

シルム「早く行こうドルク」

ドルク「あ、ああ」

ドルクとシルムも先に進んだ

そんな彼等は気付いていなかった

ヤミラミ「ウイィッ！」

追っ手がいることを

……

ジュプトル「フン！」

ジュプトルはリーフブレードで斬りつける

ドルク「エナジーバスター！！」

ドルクは十八番（おはこ）のエナジーバスターで次々と倒す

ソウ「だんだん敵も強くなってきましたね」

ソウはサウザントカッターで敵ポケモンを倒す

ジュプトル「とりあえず片付いたな、急ぐぞ」

ジュプトルは進んだ

シルム「待ってよ！」

ドルク「リーダーは俺だ！勝手に行くなよ！」

みんなはジュプトルの後を追う

……

黒の森奥地

シルム「ここに……セレビィがいるの？」

ジュプトルはシルムに向ける

ジュプトル「そうだ、前に出会ったのもここら辺だった、『闇のディアルガ』にこの場所を知られていたら……セレビィはここからもう逃げてるだろうが……まだ知られてないようであれば……セレビィはきっとまだここにいるに違いない」

ジュプトルは叫んだ

ジュプトル「おーい！セレビィ！俺だ！ジュプトルだ！いるなら姿を現してくれ！」

しかし出ない

シルム「……出て…来ないね……」

ソウ「まさか……」

ありえるのかどうなのか

それはわからない

シルム「やっぱり……『闇のディアルガ』に襲われて……逃げちゃったのかな……ま、まさか……もうディアルガに……捕まってたりしたら……」

その時

？？？「捕まるですって？」

シルム「わっ！どっからか声が！？」

みんな辺りを見渡す

シルム「何も聞こえないな、さっきのは……気のせいだったのかな……」

すると

？？？？「ウフフッ！気のせいじゃないわ！」

ブレイブメンバー『！？』

？？？？「私が捕まるですって？失礼ね！私が捕まるなんて……絶対ありえないわ！ウフフッ！」

するとジュプトルの目の前で光が現れ、そこから妖精のような一匹のポケモンが現れた

伝説のポケモン、セレビィだ

だが普通のセレビィとは違って、彼女の体の色はピンク色だった

ソウ「僕と同じ色違い！？」

ソウは驚いていた

ソウは銀色のイーブイなので色違いに驚いていた

自分と同じ色違いなので（汗）

セレビィ「お久しぶりです、ジュプトルさん」

ジュプトル「ああ、久しぶりだな、セレビィ」

シルム「ええっ!?こ、これがセレビィ!?」

その言葉にセレビィはムッとした

セレビィ「ちょっとー君ねー（怒）私あなたにコレ呼ばわりされる筋合いはないんだけど……（怒）」

コレ呼ばわりはさすがにだめだろう

伝説のポケモンだから（汗）

シルム「あ……ああゴメン、時間を越える力を使うって聞いてたから……なんかものすごいポケモンを想像してたんだけど……」

シルムの想像がよくわからない（汗）

セレビィ「失礼ね、見た目で判断するのはよくないわよ」

そりゃごもっともです（汗）

セレビィ「でも……許してあげる、だってそれって……私が思いのほかかわいくて特別ってことでしょ？ウフフ！」

と、笑顔になるセレビィ

ソウ「まあそうですね、僕も色違いですし」

セレビィ「ふ～ん、君も同じ色違いなのね、銀色なんてめずらしいわね」

まあたしかに

ジュプトルが一歩前に出る

ジュプトル「セレビィ、また力を貸してほしいんだ」

セレビィ「わかってます、こうやってジュプトルさんがまたやってきたってことは……過去の世界で失敗したから戻ってきたんでしょ？」

ジュプトル「うっ……まあそうだが……」

図星だ

セレビィ「しっかりしてくださいよね、私もう嫌ですから、こんな暗い世界で生きていくのはもう」

ジュプトル「悪いが無駄口叩いてる暇はないんだ、ヤミラミに追われている、早く行かないとここにも迷惑をかけてしまう」

だがセレビィは慌てる様子もなく

セレビィ「ウフフ！大丈夫ですよ、心配しないで、私ヤミラミが来たってどうってことないですから」

ネク「ずいぶんと余裕なんだね（汗）」

余裕な感じのセレビィ

セレビィ「大丈夫ですよ、それにもし星の停止を食い止めることができて……この暗黒の世界が変わるなら……私も命をかけて……ジュプトルさんに協力します」

ジュプトル「それで……時の回廊は？」

時の回廊？

セレビィ「はい、近くにあります」

セレビィは前を向く

セレビィ「この森を越えた高台の上に時の回廊はあります」

ネク「でもそれなくてもセレビィの時渡りの力でなんとかなるんじゃないのかな？」

たしかにそうだ

時の回廊がなくてもいけるはずだが

セレビィ「ごめんなさい、それだとディアルガに感づかれるから無理なの」

だ、そうだ

ネク「そうなんだ、ごめんね」

ネクは謝った

セレビィ「いいの、大丈夫」

大丈夫のようだ

ジュプトル「よかった、なら早く案内してくれ」

セレビィは笑顔になる

セレビィ「はい！今回時の回廊を渡るのはこの６匹ですか？」

ジュプトル「ああ、そうだ」

するとセレビィはドルクを見て何か反応した

セレビィ「あら？そっちの子は？」

ドルク「ん？俺？」

セレビィはドルクをじっと見た

セレビィ「……いえ、まさかね……」

ジュプトルはセレビィとドルクを見る

ジュプトル「どうかしたのか？セレビィ」

セレビィ「ううん、なんでもないです」

セレビィはみんなを見渡し確認

セレビィ「ではみなさん、行きましょう、時の回廊へ」

7匹は時の回廊へと向かう

シルム「なあジュプトル、その……時の回廊ってなんなの？」

シルムは歩きながら質問した

ジュプトル「時の回廊はセレビィの時渡りに使われる回廊で……時空を超えることができる秘密の道だ」

セレビィ「小さな時渡りだったら私だけでもいけるんだけど……時代を大きく超えるような時渡りは……時の回廊を使わないといけないの」

ソウ「なるほど、だからここでは使用できないってことですね」

どうやらそうらしい

こんな大人数で（汗）

シルム「じゃ、じゃあオイラ達もその回廊を通れば……」

ジュプトル「ああ、過去へ戻ることができる」

セレビィ「あっ！見えてきました！」

森の高台へと到着した

セレビィ「あそこが高台へ通じる入口です」

セレビィはみんなに振り向く

セレビィ「時の回廊はあそこの上にあります」

ジュプトル「よし、準備が出来たらすぐに出発しよう」

……

準備してる間

彼等は話していた

セレビィ「ねえねえ、君」

ドルク「俺？」

セレビィ「うん、ちょっと内緒の話なんだけど……」

ソウ「内緒の話？」

内緒の話が気になるドルクとソウ

セレビィ「ジュプトルさんって実はすごくせっかちなの知ってた？」

ソウ「そういえば急いでるように見えますね」

たしかに

セレビィ「急ぐのはわかるんだけど、もうちょっとゆっくりしてくれた方が、私も嬉しいんだけどなあ……」

ドルク「たしかにな、俺もそれで走らされたからな（汗）」

ソウ「そうですよね～」

せっかちはわかるが急ぎすぎだ（汗）

セレビィ「できるだけ長い時間一緒にいたいし……」

その言葉を言ってハッとしたセレビィが赤くなる

セレビィ「あ……あっ！そういう意味じゃないからね！私特に何も思ってないからね！」

ドルク「（ある意味ツンデレだな）」

ソウ「（伝説は性別ないのに性別ある感じですね、あのセレビィ、♀だからジュプトルの事が好きなんですね、でもツンデレってなんですか？）」

ドルク「（後で覚えたほうがいいと思うぞソウ）」

ソウ「（そうですね）」

ツンデレを知らないソウ君だった（汗）

……

ドルク「準備できたぞ！」

みんなが集まる

ジュプトル「よし、出発だ、時の回廊までたどり着こう、行くぞ」

7匹は時の回廊へと向かう

第37話　セレビィ（後書き）

次回、ドルクの事がわかります

第３８話　ドルクの真実（前書き）

はい！これで暗黒未来編も終わりです

今回はドルクの事がわかります

ではどうぞ！

第３８話　ドルクの真実

セレビィ「あっ！見えてきました！あそこです！」

先には水色のゲートがあった

シルム「あれが……時の回廊なの？」

ジュプトルがシルムに振り返る

ジュプトル「そうだ、あれが時の回廊だ、あそこを通って俺は過去に行ったんだ、時の回廊の扉を開けられるのはセレビィだけだ、早速扉を開けてくれ」

セレビィ「はい」

セレビィが時の回廊の扉を開けようとし、扉に向かうその時

？？？？「待てッ！そこまでだッ！」

ジュプトル「こ…この声は！？」

シルム「ま、まさか……」

？？？？「お前達、久しぶりだな」

時の回廊の前には

ドルク・ジュプトル「ヨ、ヨノワール！」

シルム「ヨノワールさん」

ソウ・ネク・カザリ「ヨノワール！」

ヨノワールが7匹に近づく

ヨノワール「大分逃げ回ったようだが……残念ながら……もうおしまいだ」

7匹は後ろに後退するが

ヤミラミ「ウイイイーーーーーーーーーーッ！」

さらにヤミラミ達まで出てきて囲まれてしまった

シルム「ヤ、ヤミラミ達も……」

ネク「囲まれた！？」

ジュプトル「フン、そういうことかヨノワール、俺達をわざとおよがせて……セレビィまで捕らえたかったってことか……」

まさか奴等もわかっていたってことなのか！？

前にはヨノワール、左右にはヤミラミ達

逃げられる感じではない

シルム「ええっ!?じゃあオイラ達、ずっと後を付けられたってこと?」

ネク「うかつだった、俺の能力で感づいたというのに」

ネクの能力が発動していたのだが

ネク「まさか俺の能力を打ち消していたなんて」

そうとしか考えられない

ジュプトル「フン、こんなことになるとはな、悪いなセレビィ」

ジュプトルはセレビィに謝る

セレビィ「あら?謝るなんてジュプトルさんらしくないですよ、それに私が捕まると思います?ウフフ!」

余裕な感じなセレビィ

ぞろぞろとヤミラミ達が迫る

7匹は下がる

ジュプトル「お前達!戦う準備はできてるか!」

シルム「えっ!?あ……も、もちろん!」

ドルク「大丈夫だ」

ソウ「僕もいけます」

ネク「俺も能力打ち消されるなんて…許せない！」

カザリ「僕も戦うよ」

全員が構える

ジュプトル「ここは強行突破するぞ！アイツらを蹴散らし……時の回廊に飛び込む！」

シルム「わ、わかった！」

ヨノワール「フッ、抵抗するのか？無駄なことはやめろ、お前達に勝ち目はない」

余裕の表情を見せるヨノワール、さらにヤミラミ達が迫る

ジュプトル「そんなこと……やってみなきゃわからないだろ！ヨノワール！お前が相手だろうがな！」

だがヨノワールはニヤリとする

ヨノワール「ジュプトル、ここに来たのは私だけだと思ってるのか？」

ジュプトル「な、何っ！」

その意味はすぐにわかった

ヨノワール「ディアルガ様」

すると目の前が真っ暗になる

シルム「うわっ！辺りが急に真っ暗に！？」

グオオオオオオォォォォォォォォーーーーーーーーーーーーーーッ！！！！

赤い何かが光る

そして上には

一匹のポケモンがいた

固い皮膚に胸にはオレンジ色の宝石が埋めこまれていた

体は青黒い

グオオオオオオォォォォォォォォーーーーーーーーーーーーーーッ！！！！

シルム「うわあああぁぁっ！」

シルムはビックリする

ジュプトル「あ…あれはッ！」

シルム「ジュプトル！あれは何なの！？」

シルムが質問してきた

ジュプトル「あれは……闇の……闇のディアルガだ……」

シルム「ええーーーーーーーーーーーーっ!?あれが……あれが……闇のディアルガなの!?」

そう、このディアルガは色が違う

普通のは透き通った青い色なのだが

ネク「色が違う……」

ソウ「ありえません……こんなの……」

7匹にプレッシャーがかかる

相手が違いすぎる

ヨノワール達には最終手段としかいいようがない

ジュプトルはガックリと肩を落としてしまう

ヨノワール「どうした?ジュプトル、さっきの威勢のよさは?」

ジュプトル「ぐっ……」

セレビィ「ジュプトルさん……」

セレビィが心配する

ジュプトル「……ううっもはや……ここまでか……」

苦い表情になってしまう

シルム「ええっ！どうして！？戦うんじゃなかったのか！？」

ジュプトル「む、無理だ……ヨノワールだけならともかく……ディアルガ相手ではとても敵わない……」

ヨノワールだけならなんとかなる

だが、格が違いすぎる

ジュプトル「お前達もよくがんばってきたが……すまないな、ここでおしまいだ」

ここに来て降参だった

シルム「そ、そんな！」

ソウ「そんな！嫌ですよ！」

ジュプトルが一歩歩く

ジュプトル「降参だヨノワール、好きにしろ」

セレビィ「ジュ、ジュプトルさん！」

ドルク「ジュプトル！？」

ヨノワール「どうしたジュプトル、お前にしてはやけに諦めが早いな」

ジュプトルは表情を戻す

ジュプトル「まあな、たしかに俺は諦めたが……しかし……まだ希望はある」

セレビィに向ける

ジュプトル「セレビィも知ってると思うが……」

再びジュプトルに向ける

ジュプトル「あの時……星の停止を食い止めるため過去に行ったのは……俺だけじゃない、もう一人いる」

シルム「ええ～っ!?オイラ達の世界に行ったのは、ジュプトル１匹だけじゃなかったの!?」

ネク「嘘っ!?」

ジュプトルはドルク達に振り向く

ジュプトル「そうだ、俺には相棒がいた、俺はそいつと一緒に過去へ向かったのだ、ただ時の回廊を通っているときにトラブルがあり……俺達は互いにはぐれてしまったのだ、アイツはまだ過去の世界にいるはずだ、だからたとえ俺がいなくなっても……アイツがきっと俺の変わりに指名を……星の停止を食い止めてくれるに違いない」

だが

ヨノワール「……フフッフフフフ……」

ヨノワールは笑っていた

ジュプトル「……な、何がおかしい？」

ヨノワール「フッ、お前の他にも過去に行った奴がいるというが…
…ちなみにソイツの名前は？ソイツの名前を言ってみろ」

名前を聞いてくるヨノワール

ジュプトル「聞いてどうすんだ？」

ヨノワール「なんだ言えぬのか」

ジュプトル「そんなことはない……」

ジュプトルは名前を口に出した

だがそれは信じられない名前だった

ジュプトル「名前はドルク、俺の親友だ」

ドルク「なっ！？」

シルム「なんだって！？」

ソウ「し、師匠の!?」

ネク「ドルク!?」

カザリ「嘘っ!?」

ブレイブメンバーは驚いていた

シルム「ジュプトル!ドルクだってっ!?」

シルムはドルクを指す

シルム「ここにいるのがドルクだよ!?」

ジュプトル「なんだって!?お前が……ドルクだと?」

ドルク「そうだが?」

ナエトルであり、元人間であるドルク

一体?

ジュプトル「……いや、違う、俺の知っているドルクはポケモンじゃない、俺の知っているドルクは……人間なんだ」

シルム「ええーーーーーーーーーーっ!!?」

ヨノワール「ワハハハハハハハハハハッ!その通りッ!ジュプトルよ!そこにいるのはドルクに間違いない!」

ジュプトル「何ィッ！？」

ジュプトルはドルクに振り返る

ヨノワール「そいつは元々人間だったのだ！」

ジュプトル「な、なんだとッ！？」

ヨノワール「ディアルガ様が私に与えた指名、それは過去に行ったジュプトルとドルクを消すことだった、そしてお前達二匹を追ってタイムスリップしたのだ、過去の世界に行った私は情報を集めながらお前達を探していた」

……

そしてある時ブレイブに出会った

ヨノワール「おお、あなた達はたしかギルドの」

ドルク「ああ、俺達はブレイブ、ギルドで働く探検隊だ、よろしくな」

ただあの時は何も感じなかったが……

……

シルム「偶然夢を見て……」

ソウ「僕の時もそうでした、あの時師匠が駆けつけてくれなかったら僕はここにいませんし」

ヨノワール「ん？夢？夢ってどういうものなんですか？」

時空の叫びの話を聞いたとき、まさかとは思ったが……私の中にある考えが芽生え始めたのだ、そして……

……

ドルク「ああ、その時覚えているのは俺の名前と、元々はポケモンじゃなくて人間だったことだ」

ヨノワール「ええ～っ！？に、人間ッ！？」

なんと元々は人間で……しかも記憶が無いというじゃないか、時空の叫びを持つ人間……私は確信した！

ヨノワール「して……その……その名前は？……」

ドルク「俺はドルクっていうんだ」

ヨノワール「！！……ドルク……さん……」

シルム「どうお？何かわかったの？」

ヨノワール「……いや、残念ながら何も……」

ドルク「（ん？今かすかにヨノワールが笑ったように見えるが？気のせいか？）」

間違いない！

こいつこそ私が追っていたドルクだったのだ！

……

ヨノワール「ドルクが記憶を失い……ポケモンになってしまったのは……おそらくタイムスリップ中の事故か何かでそうなったのだろう、とにかくドルクが記憶を失ったのはラッキーだったよ、私を見てもわからないわけだからな、こいつらはこのまま信用させておけば……いつでも未来へ連れて行ける」

ドルク「だから……俺をここまで連れて……さらにシルムなど関係ない者まで巻き込んだっていうのか！！（怒）」

ドルクは叫んだ

ヨノワール「そうだ、関係なくてもな」

シルム「ううっ……ヨノワールさんはやっぱり（泣）」

ソウ「（師匠が……ジュプトルのパートナーだったなんて！？）」

ドルクがジュプトルのパートナー

そしてドルクがなぜシルムの世界に来たのか

それが今……ようやくわかってきた

ヨノワール「後はジュプトル、貴様さえ何とかすればよかったのだ」

ジュプトル「……」

ドルク「俺が…ジュプトルのパートナー…俺が来たのは……星の停止を食い止めるため、シルムの世界に俺はジュプトルと来たんだ……」

ドルクの目には涙が浮かぶ

ソウ「師匠……」

ソウは心配する

ヨノワール「ジュプトルとドルク、二匹は今ここにいる……お前達を倒せばすべてが終わる、ジュプトル、お前のはかない希望も含めて……すべてがなッ！ワハハハハハハハハハハハッ！」

勝利を確信したヨノワール

だがまだ終わっていなかった

シルム「うう……ヨノワールさん……いや……」

シルムは涙はなく覚悟の表情だった

シルム「ヨノワール！」

ドルク「俺だけならまだしも……関係ないシルム達を巻き込みやがって！！」

ソウ「あなただけは許しません！！」

ネク「俺達を未来に連れてきたこと後悔すんなよ！！」

カザリ「師匠やみんなの気持ちを踏みにじったお前を許さない！！」

ヨノワール「フッ、覚悟はできてるようだな」

シルム「ジュ、ジュプトル！ドルク！」

ソウ「師匠！」

カザリ「師匠！」

ネク「ドルク！」

みんなが声を掛け合った

ヨノワール「消えるがよい！これがお前達の……最後だッ！」

ヤミラミ達「ウイイイイイイイイイーーーーーーーーッ！！」

ヤミラミ達が近づく

ソウ「師匠をやるなら僕達が相手ですよ！」

ソウは構える

シルム「ううっ……ドルク！ジュプトル！あきらめちゃだめだ！」

ドルク「シルム！」

ジュプトル「くっ……あきらめるなというが……この状況をどうするというのだ！？」

だがシルムは叫ぶ

シルム「だから何か考えなきゃ！」

ぞろぞろとヤミラミ達が近づく

ドルク「そうだ！セレビィ！時渡りで時の回廊に飛び込むことはできるか？」

セレビィ「ディアルガがいるから難しいわ、ディアルガは時間ポケモン、時渡りを使ってもすぐに破られてしまうわ」

ぞろぞろとヤミラミ達は近づく

ドルク「それでもかまわねぇ！やってくれ！」

シルム「ちょっとだけでも十分だよ！お願い！」

ヨノワール「かかれぇーーーーーーーーーーーッ！！」

ヤミラミ達「ウイイイイイイイイイイッーーーーーーーーッ！！」

セレビィ「わかったわ！時渡りッ！」

閃光が光った

そこにはドルク達の姿はなかった

ヤミラミ「ウイイィ？……」

辺りを見渡すがいない

ヨノワール「き…消えたっ！？」

ヨノワールはすぐさまディアルガに振り返り

ヨノワール「ディアルガ様ッ！」

グオオオオオオオオォォォォォーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！

ディアルガは咆哮をあげた

背中の突起が大きくなり、胸の宝石が光る

ディアルガは咆哮をあげた

するとディアルガの周りから一帯から強力な衝撃波が出る

するとガラスが割れるような音が聞こえた

時の回廊前には7匹の姿が

シルム「ああっ！時渡りが破られたっ！」

ヨノワールは後ろを振り返る

ヨノワール「そこかッ！」

ソウ「時の回廊までもう少しなのに！」

セレビィ「今飛び込めば間に合うわ！さあ！時の回廊に早くっ！」

ネク「でもセレビィは！？」

セレビィ「私なら大丈夫！絶対に捕まらないって言ったでしょ！？かならず星の停止を……歴史を変えてね！」

ジュプトル「すまない」

ソウ「すみません」

ネク「絶対捕まらないでね！」

カザリ「絶対に星の停止を止めるからね！」

シルム「ありがとう！セレビィ！」

ヨノワール「逃がすかっ！」

ヨノワール達が来る

ドルク「この分の倍返しだ！！メテオ！！」

ヨノワールの周囲に隕石が降り注ぐ

ヨノワール「ぐわっ！」

全員が時の回廊に飛び込む

セレビィはその場で時渡りし、辺りに閃光が光った

光が収まると

時の回廊はバチバチと小さい電気球だけ残ってあとは何もなかった

ヨノワール「くっ……」

ヨノワールは悔しそうに見ていた

……

みんな「うわあああああああ

第３８話　ドルクの真実（後書き）

暗黒未来編終わりです

ジュプトル「まさかあいつが」

まあでも悪魔亀大王だしね

ジュプトル「あいつそんな異名を（汗）」

まあ魔法使えるし

ジュプトル「なんで魔法使えるんだ？」

それは俺の設定だから

ジュプトル「作者（汗）」

次回は新章に入ります

第３９話　帰ってきた！俺達の世界に！！（前書き）

ついに過去の世界に戻ります！

ジュプトル「そうだな」

ドルク「ってか俺達どうなる？」

それは見てからね、では第３９話

ドルク・ジュプトル「行くぜ！！」

第３９話　帰ってきた！俺達の世界に！！

海岸

そこに６匹は倒れていた

しかし

ドルク「う……」

ドルクはなんとか立ち上がった

ドルク「こ…ここは……」

辺りを見渡すと

ドルク「元に…戻った……」

そこから

シルム「……うーん」

シルムが起き上がる

シルム「……あれ……ドルク、ここは……」

ドルク「ああ……」

シルムは辺りを見渡す

シルム「ここは……前にドルクと出会った……浜辺のような……ということは……もしかして……」

するとジュプトル以外、目を覚ました

ソウ「ここは……」

ネク「俺達……」

カザリ「ううう……」

シルム「やっぱりそうだよ！オイラ達……元の世界に……オイラ達の世界に戻って来れたんだ！」

そう、彼等は戻ってきたのだ

ソウ「やりましたね！」

ネク「うん！」

カザリ「やったあ！」

シルム「やったあ！やったな！ドルク！」

ドルク「ようやく戻って来たぜ！俺達の世界に！」

みんな喜んだ

元の世界に戻れたことが

すると

ジュプトル「うう……」

ジュプトルが目を覚ます

シルム「あっ！ジュプトル！」

みんなはジュプトルに駆け寄る

シルム「なあ見てよ！オイラ達帰って来れたんだ！元の世界に！」

ジュプトル「そ、そうなのか……来れたのか……俺達は……またこの世界に……」

シルム「うん！」

ソウ「夢ではありませんよ！」

ネク「こうやってみんな戻れたことだし♪」

カザリ「そうだよ♪」

ネクとカザリはニッコリと笑う

シルム「ここは、ドルクとオイラが出会った場所なんだ」

するとシルムは辺りを見渡して

シルム「えーと……」

ちょっと歩いて

シルム「この辺かな」

ドルク達に向ける

シルム「丁度ここら辺にドルクが倒れてたんだよ？」

ジュプトル「……そうだったのか、俺がタイムスリップでついたのは東の森だったから……ドルクとは大分離れたところに降りてしまったんだな……」

そう、ドルクは元はジュプトルのパートナー

一緒だったが、タイムスリップの事故で二人は離れ離れになっていた

シルム「そうだ！そのタイムスリップの事も含めてわからないことがまだたくさんあるから……色々聞かせてよ」

ネク「たしかに、ドルクの事、まだ色々とわからないことだらけだし」

ソウ「師匠の事、もっと知りたいですし」

カザリ「うん」

他三人も知りたいようだ

ドルク「だがここで話すのもな」

たしかに

海岸は今は人目がいないが、いつ何処で誰かが来てもおかしくはない

シルム「そうだね、プクリンのギルドに行って話そうか、オイラ達、そこに住み込みで修行してたし、丁度いいかも、じゃ、行こうプクリンのギルドに」

シルムは行こうとしたが

ジュプトル「ちょっと待て、そのギルドは俺が行っても大丈夫なのか？俺はこの世界ではお尋ね者だ、俺がそのギルドに行ったら……みんな驚いて……俺の事をまた捕まえようとするんじゃないのか？」

ソウ「言われてみればそうですね」

この世界でジュプトルはお尋ね者

今行けばみんな疑われ捕まってしまう

シルム「どうしよう……あ！それなら！いい場所がある、ただ」

ドルク「ただなんだ？」

シルムは落ち込む

シルム「ただトレジャータウンを通らないと行けないんだけど……」

ネク「それなら、インビシブリーズを全体にやればなんとかなるよ」

インビシブリーズは自分の姿を風に変える技

ネクが覚えてる技だ

前回の下品組ことドクローズに使用した技だ

ネク「全員が風になって、誰も気付かないから大丈夫だよ♪」

ドルク「さすがネクだ♪早速頼む」

ネク「うん、風よ…みんなの姿を消して、インビシブリーズ！」

すると全員の周りに風が包み込んだ

すると

ジュプトル「驚いたな、ポケモンでもない感じじゃないのにこんな技を使うとはな」

一応ネクはオリポケです（汗）

オリポケです

大切なので2回いいました

ドルク「それじゃあ行こうぜ、シルム、案内を頼む」

シルム「うん！オイラに着いて来て」

みんなはシルムの案内である場所へと向かった

第３９話　帰ってきた！俺達の世界に！！（後書き）

次回はドルクの事など色々とわかってきます

第４０話　夜明けの思い（前書き）

彼等はある場所へ

第４０話　夜明けの思い

サメハダ岩

ドルク達はサメハダ岩についた

シルム「この崖はサメハダ岩って呼ばれてるんだけど……」

ジュプトル「サメハダ岩？」

シルム「うん、岩の形がサメハダーというポケモンに似ているからそう呼ばれているらしいんだ」

ソウ「へえ～たしかにそうですね」

たしかに崖の岩はサメハダーに似ている

シルムは振り向いた

シルム「とりあえず……見た目は変わってはいないかな」

ドルク達はたくさんの枯れ葉の所に集まる

シルムはその枯れ葉をどかした

すると

カザリ「こんな所に階段が！？」

そう、階段だった

シルム「この下だよ、オイラギルドに入る前はここに住み着いてたんだ、さあ、中に入って」

ドルク達は中へと入った

中は空洞で樽もおかれていて、さらに水も管理していた

ジュプトル「なるほど、崖の中にこんな空洞があったのか」

ドルク「俺も驚いたな」

シルムが入ってきて中を見渡す

シルム「よかった、誰にも荒らされてないや、ここなら目立たないし……しばらくはここにいた方がいいかもね」

ジュプトル「そうだな」

……

夜

6匹は囲んで焚き火をしていた

ジュプトル「しかしドルク、まさかお前があのドルクだったとはな……」

ドルク「俺も知らなかった、お前と戦って気付いてなかった」

ソウ「師匠……」

みんな黙る

シルム「詳しく話してよジュプトル」

ジュプトルは話した

ジュプトル「俺とドルクは……星の停止について一緒に調査してたんだ」

シルム「ポケモンと人間の……ペアで？」

ジュプトル「そうだ、ドルクは誰にも無い特別な能力を持っていた、その特別な能力が星の停止を調査するために……ある重要な役割を担って（になって）いたのだ」

時空の叫びのことだろう

シルム「特別な能力って…時空の叫びのことだよね？」

ジュプトル「その通りだ」

ソウ「たしかに師匠の時空の叫びはすごいですね」

ソウは自分の師匠に納得する

ジュプトル「ただ時空の叫びには問題があった」

ネク「問題？」

その問題とは

ジュプトル「時空の叫びは……信頼できるパートナーポケモンが一緒にいないと……発動しないのだ」

シルム「信頼できる……パートナー……」

信頼できるパートナーがいないと時空の叫びは発動できない

ジュプトル「だから俺達は一緒に行動したのだ、時空の叫びは時の歯車が存在する場所に反応して起こる、俺達は過去の世界での時の歯車が何処にあるのかを探るために……時空の叫びを使ったのだ」

時の歯車が存在する場所

しかし

シルム「ちょ、ちょっと待ってくれ！時空の叫びは信頼できるパートナーが必要だって言ってたけど……オイラ達が出会って間もない頃からも時空の叫びは起きてたよ？」

そうだ

たしかに間もない頃から時空の叫びは起きていた

しかし

ジュプトル「何を言う、それだけお前達が始めから信頼しあってたってことじゃないか？」

シルム「うっ……そんなストレートに言われちゃうと……ちょっと恥ずかしいけど／／／／」

ドルク「お、俺もだ／／／／」

二人は恥ずかしがる

ジュプトル「それにドルクは記憶をなくしていた、頼る者がいないときシルムに出会ったことで……ドルクの信頼もより深くなったのではないかな」

ドルク「たしかにな……」

ソウ「師匠、誰よりもシルムさんと信頼していて」

ネク「腹黒同盟に入っても誰よりもシルムの事を思っている感じなんだよね～」

カザリ「うん、たしかにね」

ドルク「お前等／／／／」

ドルクは恥ずかしがって赤くなる

別に恋ってわけで恥ずかしがってるわけではありません

シルム「あっ、あとまだわからないことが……時空の叫びは時の歯

車に反応して起きるの？」

ジュプトル「そうだ、逆に時の歯車のない場所では時空の叫びは発動しない」

しかし

シルム「うーん……そうかなあ……そんなことはなかったような……なあドルク、スリープの時とか……初めて探検に行ったときとか……他にも」

ソウ「それに僕の時もそうでしたよ？」

ネク「あきらかに時の歯車と関係ない場所でも時空の叫びが聞こえたことあったよね」

ドルク「ああ、たしかにそうだな、あの時はドーピー3分クッキングとかやったりしたな」

ジュプトル「なんだそのドーピー3分クッキングって（汗）」

ジュプトルはつっこんだ

ドルク「フルボッコだ」

ジュプトル「俺に負けたのにか？」

すると

ドルク「いますぐテメェをぶちのめそうか（黒怒）」

ドルクはエナジーバスターをジュプトルに向かって発射しようとした

ジュプトル「待て！？ここで暴れたらばれる！？」

シルム「ってかここが崩壊しちゃうよ！？」

ドルク「そうだな」

ドルクはエナジーバスターを威力をだんだんよ弱らせた

ジュプトル「（汗）とりあえず話を戻すがそうなのか……しかし未来では時の歯車に関係しない所で……時空の叫びが発動したことはなかったぞ……だとしたらなぜそうなるのかはわからないが……もしかするとこの世界で発動する時空の叫びは……またちょっと性質が違うかもしれない」

ドルク「たしか……あの時もだったな」

……

シルム「時空の叫びだよ！ドルクの時空の叫びを使うんだよ！」

ソウ「なるほど！たしかにそれなら！」

ドルク「わかった……この水しぶきにさわってみる」

シルム「のんびりしてるとヤミラミ達が来ちゃうよ」

ドルク「わかってる」

……

シルム「……ドルク、どうお？何か見える？」

ドルク「……だめだ、何も感じねぇ」

ソウ「そんな！？」

……

ドルク「あの時は何も見えなかったのは未来だったからか、それに時の歯車とは関係ない場所だったから時空の叫びが聞こえなかったんだな、ジュプトルのいうとおり、未来と今の世界とでは、時空の叫びの性質も変わってしまってるかもな」

ジュプトル「そうだったのか、とにかく、俺達は星の停止について調査を続けた、そしてこの世界にある時の歯車の場所を……未来から時空の叫びを使って探し出したのだ」

……

そうか！

ここにっ！！

ここに時の歯車があるのか！！

……

なるほど

グラードンの心臓に日照り石をはめる

それで霧は晴れるのか！

さすがだな！やっぱり俺のパートナーだ！

……

ドルク「（あの時の時空の叫びの声はジュプトルだったのか！？）」

ジュプトル「そうやって俺達はこの世界で時の歯車がある場所をつきとめた後……時の回廊を渡り……未来からこの世界へ向かったのだが……しかし……」

ピシャーーーーン！！

？？？？「……うおっ！……だ、大丈夫か？！」

？？？？「あ…ああ」

ピシャーーーーーーーーーーーーーーン！！

？？？？「は、離してはだめだ！もう少し……なんとかがんばるんだ！」

ピシャーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！

？？？？「くっ？！」

？？？？「だ、だめだ……こ、このままだと……」

ピシピシッ…ピシャーーーーーーーーーーン！！！！

？？？？・？？？？「うわあああああぁぁぁぁぁっ！？」

ジュプトル「タイムスリップ中に事故があり……俺とドルクは離れ離れになってしまったのだ、なぜかはわからないが、ドルクがポケモンになり、記憶を失ったのは……その事故が原因じゃないかと思う」

ドルク「（俺は……未来からやってきた……しかも星の停止を食い止める使命までおって……なんかまだピンとこねぇというか実感がわかないな）」

ドルクは未来から来た人間で事故によりポケモンとなり、記憶を失った

ドルクはその使命にまだピンと実感がわかなかった

ジュプトル「ドルク、今のお前は覚えてないかもしれないが……お前は俺の親友だったのだ」

ドルク「親友！？」

ドルクは驚く

ジュプトル「離れ離れになったあと、とても心配したが……元気でよかった」

ドルク「あ…ああ……」

なんか少し暗くなるドルク

ジュプトル「たとえ姿が変わり……記憶をなくしたとしても……お前はお前だ、友達なのは変わらない、ドルク、また会えてよかった」

ドルク「……俺は記憶ねぇけど……ただお前と戦ってみて思った…こいつは何かあるってな」

ドルクは語りだした

ドルク「ジュプトル、俺は最初お前がお尋ね者だった時にはこいつを倒してやるとかそんな思いがあった、だがお前は強かった、俺やみんなの攻撃をよく見て避けていた、俺はそれでも負けた、でも感じたのは悪い感じがなかったんだ」

ネク「えっ!?」

ソウ「師匠……」

ドルクはわかっていた

ジュプトルは敵じゃない

そう感じた

ドルク「お前の言った言葉には少し優しさもあった、エムリットの時」

……

ジュプトル「お前は先ほどの戦いで……すでに相当ダメージを負ったはずだ、無理をするな」

……

ドルク「その時俺はわからなかった、普通の奴だったらそんな言葉をかけない、それにそうしたら本当に悪者に思えてくるって、そう思ったんだ」

ジュプトル「そうか……でもそう言って俺は嬉しい」

ジュプトルは少し赤くなる

ソウ「さすが師匠です！相手を見てるんですね！」

ネク「俺もまだまだだな、色々と相手にも理由があるから、ジュプトルの場合は別に悪気があって時の歯車を盗んだわけじゃないでしょ？」

と、ネクは言う

ジュプトル「そうだ、さて、これからのことだが……俺は前にも言ったとおり……また時の歯車を集めに行く、お前達はどうするのだ？」

シルム「うーん……時の歯車を取ると、その地域の時が止まっちゃうのが気になるんだけど……」

ソウ「でも一時的ですよね？」

時の歯車の納める地域は時の歯車を取ると止まってしまう

しかしそれは一時的なものだ

ジュプトル「そうだ、時限の塔に時の歯車を納めさえすれば……また元に戻る」

シルム「だったら！オイラ達も行くよ、ジュプトルと一緒に、時の歯車を取ることで、そこのポケモン達には少し迷惑かけちゃうけど……でも星の停止は絶対に食い止めないと！」

ソウ「なら僕も！」

ネク「俺も！」

カザリ「僕も！」

メンバー全員が賛成した

ジュプトル「わかった、じゃあ一緒に行くことにしよう、ただ今日はもう遅い、それに今までずっと逃げっぱなしで疲れている、とりあえず今日は休んで……明日出発することにしよう」

全員は寝る準備をして寝た

……

ドルク「Ｚｚｚ……」

ソウ「Ｚｚｚ……」

ネク「Ｚｚｚ……」

カザリ「Ｚｚｚ……」

全員よく寝ているが

ジュプトルは起きた

だが

ジュプトル「おや？シルムがいないな」

シルムがいなかった」

辺りを見渡すがいない

ジュプトル「外にいるのかな」

ジュプトルは外へと出た

……

外ではシルムが風にあたっていた

ジュプトルが駆けつけ声をかけた

ジュプトル「どうした？眠れないのか？」

シルム「……うん、なんとなくね」

ジュプトル「ヨノワールの事を考えてたのか？」

しかしシルムは

シルム「いや、違うよ、そりゃ裏切られたのはショックだったけど……でもさっきのジュプトルの話を聞いて……未来でヨノワールが言ってたことは……あらためて本当だったんだなって……そしてドルクは未来から来たんだなあって、そんなことをなんとなく考えてたんだ……」

するとシルムは何かに気がつく

シルム「あっ！見てよ！ジュプトル！朝日だ！日が昇ってきた！」

すると朝日が昇ってきた

1日が始まる

シルム「……綺麗だね」

ジュプトル「ああ……」

二人はそんな朝日の景色を見ていた

シルム「今までずっと未来にいたせいか……夜が明けることが……こんなにも新鮮に感じるとはオイラ思わなかったよ、日が昇り……

そして沈んでいく……とても当たり前の事なんだけど……でもその当たり前の事が……実はものすごく大切だったんだね……」

ジュプトル「俺は暗黒の未来世界しか知らなかったから……この世界に来て……初めて太陽を見て……衝撃を受けた……そしてだからこそ……暗黒の未来を変えなくてはいけないと強く思ったんだ」

ジュプトルはシルムに向く

ジュプトル「シルム、お前に一つ聞きたかったことが……あの時……未来でディアルガ達に囲まれ……絶対絶命の状況だったあの時……」

……

ヨノワール「消えるがよい！これがお前達の……最後だッ！」

ヤミラミ達「ウイイイイイイイイーーーーーッ！！」

ソウ「師匠をやるなら僕達が相手ですよ！」

シルム「ううっ……ドルク！ジュプトル！あきらめちゃだめだ！」

ドルク「シルム！」

ジュプトル「くっ！あきらめるなというが……この状況をどうするというんだ！？」

シルム「だから何か考えなきゃ！」

……

ジュプトル「あの状況の中であの時お前は最後まであきらめなかった……俺でさえあきらめかけたというのに……あれはどうしてだ？どうしてあそこまで……気持ちを強くもてたのだ？」

しかしシルムは考える

シルム「うーん、どうしてだろうな……オイラにもよくわからないけど……」

シルムは水平線に向ける

シルム「でも……もしかしたら……ドルクがそばにいてくれたからかもしれない……」

ドルク「ドルクが？」

シルム「これ、見てよ」

シルムはジュプトルに自分の大切なあの石を見せた

ジュプトル「これは……なんだろう……何か不思議な模様がかかれてるな、初めて見たな……こんな模様は……」

シルム「これは遺跡の欠片、オイラの宝物で……この欠片の謎を解くことがオイラの夢なんだけど……オイラいくじなしでさ……ギルドに弟子入りすることすらできなかったんだ、でもそんなとき……ドルクに出会った、ドルクは……」

……

シルム「……わかった、オイラ、ドルクを信じる！ドルクを信じるよ！」

……

シルム「ドルクはいつもオイラを励ましてくれた、そして……」

……

シルム「ううっ怖い……」

ドルク「シルム、怖がるな！俺達がついてる！」

ソウ「そうですよ！ここで師匠の手がかりがつかめなくなります！」

ネク「それでも俺達は負けない！」

ラース「僕もです！」

ラッシュ「そうだ！ここで怖がるな！」

シルム「勇気だ！勇気を出さなきゃ！みんな！がんばろうな！」

……

シルム「いつもオイラに勇気を与えてくれた、みんなもそうだけど、一番励ましてくれたのはドルクなんだ、一緒にいればどんなことだって乗り越えていける……いつしかそんな風に思えるようになった

んだ、だからあの時も……オイラは最後まであきらめずにがんばれたのかもしれない……」

ジュプトル「……なるほど……なんとなくわかる気がする、あいつには……ドルクにはそう思わせる何かがあるんだ、俺がドルクを大切に思うように……シルムもドルクが大切なんだよ、あいつは……幸せだな、お前のような友達がいて……」

ジュプトルが辺りを見渡す

ジュプトル「……もう朝だ、そろそろ出発するか」

シルム「うん」

シルムは遺跡の欠片をしまい

二人は戻っていった

……

ジュプトル「さてと、時の歯車を取りに行くわけだが……まず最初に……何処の時の歯車を狙うかだな」

シルム「不思議な地図を見てみよう」

みんなは不思議な地図を取り出した

ソウ「ここからだと、地底の湖が近いですね」

カザリ「でもあそこはエムリットいるからそれは無理だと思うよ？」

たしかに

あそこはエムリットが守っている

さすがにそれは無理だろう

ジュプトル「キザキの森はどうだ?俺が最初に時の歯車を取った場所だ」

シルム「何処にあるの?」

ジュプトル「ここだ」

キザキの森はここから北東にある深い森だ

ジュプトル「ここからはちょっと遠いが……そのかわり、ユクシーのように時の歯車を守る番人がいない」

シルム「そっか!時の歯車をめぐってへたに戦ったりすると騒ぎが大きくなるけど……」

ドルク「ここではそんな心配はないってことだな?」

ジュプトル「その通りだ」

みんなは地図をしまった

ソウ「決まりですね」

ドルク「行くぞ！キザキの森に！」

……

キザキの森入口

ジュプトル「ここだ、キザキの森の入口はおや？」

シルム「どうした？ジュプトル」

ジュプトル「なんか前に来た時と雰囲気が違うような……」

ジュプトルはみんなに向ける

ジュプトル「いや、多分気のせいだろう、準備ができたら行くぞ」

……

ドルク「準備できたぞ」

みんなが集まる

シルム「うん、準備ができたみたいだな！じゃ出発しよう！」

６匹はキザキの森へと入っていった

第４１話　それぞれの道へ（前書き）

ドルク達は最初の時の歯車を手に入れるためキザキの森へと入っていった

第41話　それぞれの道へ

キザキの森奥地

ジュプトル「こ、これは！？」

そこは時が止まっていた

ジュプトル「時が……止まっている……」

シルム「でも……たしかあの時……ジュプトルやオイラ達が未来へ連れてかれる前のあの時……」

……

ヨノワール「ユクシーさん、エムリットさん、アグノムさん……後のことはお任せしました」

アグノム「うん」

エムリット「わかってるわ」

ユクシー「取り返した時の歯車は私達3匹が手分けして……かならず元の場所に戻します」

ヨノワール「よろしくお願いします」

……

シルム「ユクシー達はたしかに言ってたよね？」

ドルク「ああ、言っていた、時の歯車を元の場所に戻すと」

ジュプトル「しかし……ここの時間は止まったままだ」

ソウ「ということは……時の歯車はまだ元の場所に戻されてないってことも」

ジュプトルはみんなに振り返り

ジュプトル「見に行こう、時の歯車があった場所はこっちだ！」

ドルク達は時の歯車が納まっている場所へ

……

シルム「これは？……」

時の歯車はちゃんと納まっていた

ジュプトル「時の歯車だ、間違いない」

シルム「でも……」

シルムが辺りを見渡す

シルム「ここの時間は止まってそうだよ……」

カザリ「うん、風も吹かないし」

ソウは木を見た

ソウ「ここの木の葉も固まってます！」

シルム「やっぱり時は止まってるんだよ！でも時の歯車は戻ってるのに……どうして！？」

ジュプトル「……」

ジュプトルは何も言わず、無言のまま時の歯車を取った

時の歯車の周りの文様は消えてしまった

シルム「ああっ！何をするんだ！？」

ジュプトルはシルムに顔を向ける

ジュプトル「すでにここの時は止まってるんだ、今更時の歯車を取ったところで変わりはない」

ジュプトルは時の歯車が納まってる壁に向ける

ジュプトル「それに……もっと気になることが……」

シルム「き、気になること？」

気になることとは？

ジュプトル「とにかくここは引き上げよう」

ネク「そうだね、たしかにここにいては何も解決しないし」

みんなは引き上げることに

ジュプトル「後シルム、ネク、カザリ、お前達に頼みがあるんだが……」

シルム・ネク・カザリ「何？」

その頼みとは

ジュプトル「サメハダ岩に戻る前に……トレジャータウンで少し情報を得てきて欲しいんだ」

シルム「トレジャータウンで？」

ジュプトル「ああ、そこで探ってきてほしい、今この世界で何が起きてるのかを」

すると

シルム「わかった、探ってみるよ」

ネク「それじゃ俺もインビシブリーズとかで姿を消して情報を探ればいいんだね」

ジュプトル「その通りだ、カザリもいいか？」

カザリは

カザリ「うん、ネクちゃんと一緒なら僕はいいよ♪」

ジュプトル「ありがとな、みんなはお前達は未来へ行ったものと思っているはずだ、だから」

シルム「わかってるって、みんなに見つかると面倒だから隠れて探ってくるよ、ネクのインビシブリーズで隠れて」

ジュプトル「頼んだぞ」

ドルク達はサメハダ岩の隠れ家に戻った

……

ドルク「遅いなシルム達」

すると

シルム「おまたせ」

ネク「情報が集まったよ」

カザリ「どうやら大変なことになったみたい」

と、カザリは言う

ジュプトル「どうだった?」

シルム「それが……あまりよくない感じだよ」

ネク「俺達が未来に行った後」

カザリ「ユクシー達は時の歯車を元の場所に戻したみたい、そしてそれでまた元に戻るってみんなは喜んでいたんだけど」

だけど？

シルム「でもそれでも時は止まったまま、それどころか時が止まる場所が他にもどんどん増えてったらしいんだ」

ドルク「何っ！？」

ジュプトル「それは本当か？」

ネク「うん、みんなもさすがになんでそうなったのかわからなくてうろたえてたよ」

時が止まる場所が増えた

その意味とは？

シルム「ジュプトル、何かわかるかい？」

ジュプトルは考えた

すると

ジュプトル「時が止まる場所がどんどん増えてるということは……

ただ一つ……時限の塔が壊れ始めたのだ」

シルム「時限の塔が……壊れ始めた」

ジュプトルが星の停止となった原因だ

ジュプトル「そうだ、つまり時間を司る時限の塔が壊れ始めることによって……各地の時も破壊され……星の停止に向かって……世界が急速に動き始めたのだ」

シルム「ええ!?そんな!」

ソウ「これは急がないといけませんね」

たしかに、時限の塔に急がないと時は止まったままの暗黒の世界へと変わってしまう

ジュプトル「そうだ、早くしないとこの世界は星の停止を迎えることになる、時の破壊を止める方法はただ一つ、時の歯車を集め……ディアルガのいる時限の塔に時の歯車を納めることだ、ただし問題がある」

ドルク「問題?なんだ?」

それは……

ジュプトル「時限の塔は幻の大地と言われるところにあるのだが……幻というその名の通り……何処にあるのかまったくわからないのだ」

シルム「でも……時間がないよね」

たしかに時間はだんだんと迫ってきている

ジュプトル「そうだ、だからここは手分けしていこう、俺は時の歯車を集める、その間にお前達は幻の大地を探してくれ」

ソウ「わかりました」

シルム「わかった、ドルクもそれでいいよな？」

ドルク「ああ、その方が手っ取り早い」

みんな賛成のようだ

ジュプトル「よし、では頼んだぞ、幻の大地はこの世界の何処かにあるはずだが……残念ながら手がかりがない、まだ誰にも発見されてないことを考えると……かなり遠くにあると思った方がいいかもしれない、海の向こうに渡る手段も考えておくべきだろう」

シルム「海の向こうかあ……」

情報はあまりないこの状況ではたして見つけられるのか？

ジュプトル「情報がなくてすまないが……頼んだぞ、では俺は時の歯車を集めに行って来る、じゃあな」

ジュプトルは時の歯車を集めに隠れ家から出た

シルム「さてと、オイラ達も探しに行こうか、幻の大地を！」

ソウ「と、言われても何処から探したほうがいいのでしょうか（汗）」

たしかに（汗）

シルム「うーん……とりあえずは海を渡る手段でも考えてみようか」

ドルク「それもそうだな」

……

海岸

ドルク「なんとなく浜辺に来たんだが」

シルム「うーん、だめだぁ、海を渡る手段なんてやっぱり思いつかないな……」

ソウ「船とかもないですし」

この世界には船という存在はない

シルム「幻の大地を探すなんて引き受けちゃったけど……どっから探っていけばいいんだろう……急がなきゃいけないのにううっ……」

ドルク「（たしかに情報がなさすぎだな、だがのんびりしてるわけにもいかねぇ、一刻も早く幻の大地の場所を突き止め……そこにある時限の塔に時の歯車を納めないと、星の停止がおきちまう、それだけは食い止めねぇと、そしてそのためには……やっぱり、みんな

の協力が必要だ、なら話すか、そのとこをシルムに）」

ドルクはシルムに向けた

ドルク「シルム！みんな聞いてくれ！」

シルム「ん？なあに？ドルク」

ソウ「師匠？どうしたんですか？」

ドルクは話した

ドルク「なあ？ここで言ってもしかたない、ここはプクリン親方のギルドに行こうぜ」

シルム「ええっ！？プクリンのギルドに行こうだって！？ど、どうして！？オイラ達いきなり消えたことになってるんだぜ！？そりゃみんなすごく心配してると思うし」

ソウ「僕も残したラースさんやみんなには会いたいですけど……」

ネク「でも今まで俺達が未来で見てきたこと……」

カザリ「ジュプトルのことや、ヨノワールのこと」

シルム「そしてドルクの過去の事をギルドのみんなに話したとして……みんなは信じてくれるのかな！？ドルクはどう思うの？みんなは信じてくれると思うかい？」

するとドルクは答えた

ドルク「たしかにな……それは俺にもわからない」

シルム「……そうだよな、事実を話しても信じてくれるかどうかは……わからないよな……」

たしかに

みんなはこの事をどう思っているのかわからない

ドルク「だがそれはみんな次第だけどな……」

シルム「だってこの世界のみんなはジュプトルが悪者で……ヨノワールはすごくいいポケモンだと思っているんだもんな、特にヨノワールはみんなからすごく尊敬されている、未来を見てきたオイラだって……すごいショックを受けたぐらいだから……みんなにホントの事を話しても、受け入れられないんじゃないかなあ」

だがドルクは

ドルク「たしかにシルムの言うとおりかもしれねぇ、真実を話しても誰も信じてくれないかもしれねぇがでも！それでも俺は伝えるべきだと思うぜ、このままそうしていたら何も変わらねぇ」

シルム「ど、どうして！？みんな信じてくれないかもしれないんだぜ？それなのにあえて言うべきなの？」

ドルクは答えた

ドルク「それでも……そう！言うべきだ！」

シルム「ど、どうして!?ドルクはどうしてそう思うの!?」

それは……

ドルク「俺やシルム達だけでは意味がねぇ、ここはみんなの力が必要だ!そうしなければ何も変わらねぇ!俺達だけじゃない、みんなの力を貸すんだ!」

シルム「みんなの……」

ソウ「力……」

ドルク「そうだ、みんなの力を貸すのも俺達の絆だ、このまま俺達が隠れていてはみんなに迷惑がかかるだろ?」

たしかにドルクの言うとおり、そうなってしまう

だからみんなの力が必要だ

絆という力を

シルム「……そっか、幻の大地を探すにはオイラ達だけでなく……みんなの協力が必要だよな……」

ドルク「そうだ」

カザリ「そうしないと、星の停止を食い止めることができずに間に合わないってことですね?」

ドルク「ああ」

そう

そうでないと星の停止は食い止められない

シルム「……」

シルムは少し黙った…・・・

シルムはドルクに向けて

シルム「ドルク……わかったよ！行こう！プクリンのギルドへ！」

ドルク「シルム！！それでこそだ！」

ドルクは少しうるうるする

シルム「ギルドに行って本当の事を話そう！みんな驚くと思うけど……でも……きっとわかってくれるよ！」

ソウ「師匠！帰りましょう！」

ネク「プクリンのギルドへ！」

みんなはプクリンのギルドへと向かった

彼等が信頼することを信じて！

第４１話　それぞれの道へ（後書き）

それぞれ分かれていきましたが

ドルク「こっちも早く食い止めねぇとな」

そうだね、次回はついにギルドへ！

第４２話　ギルドの仲間達（前書き）

ドルク「信用してくれればいいが」

第４２話　ギルドの仲間達

夕方のプクリンのギルド入口

シルム「プクリンのギルドだドルク」

ドルク「やっと帰ってきたな」

ソウ「ずいぶんと久しぶりなように思いますね」

ネク「まあ俺達がいなかったから」

カザリ「そうだね」

シルム「でも……ううっ……いざ来て見るとなんか入りづらいよな……」

シルムが緊張するも無理はない

初めての時もそうなのだから

シルム「だってオイラ達突然いなくなっちゃったわけだし……いきなりただいまって入っていくのもなんか恥ずかしいような……」

ドルク「たしかにな……俺もだ」

みんな恥ずかしがる

シルム「いや、恥ずかしがってちゃだめだよな、みんなに会って事実をちゃんと話さないと」

ドルク「そうだ、よし！まずは誰が見張り穴に行くんだ？」

シルム「よし！オイラが見張り穴の上に乗るな……」

シルムは見張り穴に乗った

下からディグダの声が聞こえる

ディグダ「ポケモン発見！！ポケモン発見！！」

次にドゴームの声が聞こえる

ドゴーム「誰の足型？誰の足型？」

ディグダ「足型は！足型は……こ、この……足型は……」

下が静かになる

ドゴーム「おい！どーした！ディグダ！応答せよ！」

再び静かになる、すると

ドゴーム「おっ…おいこら！ディグダ！穴掘って何処に行く！？」

ディグダ「だって……あの足型は……シルムさんなんですっ！！」

すると他の声が聞こえる

ビッパ「な…」

キマワリ「な……」

みんな「なんだってぇぇ～～～

キマワリ「ドルク達ですわ！」

ドゴーム「お前達生きてたんだあ！」

チリーン「心配してたんですよ！」

ビッパ「ううっ……あっしは……あっしは……（泣）」

ビッパは泣いていた

ラース「うわあああああああああああああああああああああああああああん！！！！！！！！！！しょおおお

こうしてドルク達はプクリンのギルドに帰ってきた

……

ドルク達はギルドのみんなにすべてを話した

ジュプトルの事

ドルクの事

ヨノワールの事

この世界の危機

そして時の歯車の事

未来での出来事などを

すべてを話した

ペラップ「ええっ！？なんだってぇぇ～～～

ドルク「だって中の人がな～」

ソウ「だからあなたは童貞なんですよ」

ペラップ「ペラップだ！！（怒）」

と、再びツッコミをいれた

シルム「コントやってる場合じゃないから早く話を整理してよ（汗）」

と、シルムがつっこむ

ペラップ「……わかった……えーと、今までの話をまとめると……まず……ジュプトルは実はいい奴で……世界を救うために時の歯車を集めてたと」

シルム「うん」

ペラップ「逆にヨノワールさんは親切そうに見えたのは表の顔で……実は極悪非道な悪者だったと」

シルム「うん……（極悪非道までは言ってないけど……）」

ドルク「（だから駄目鳥なんだよ）」

と、ドルクはそう思ってつっこむ?

ペラップ「ドルクは実はジュプトルの仲間だったと」

ソウ「はい」

ペラップ「ヨノワールさんはそのドルクとジュプトルの命を狙って……未来へ連れてったと」

ネク「うん」

ペラップ「そしてお前達はヨノワールさんから逃げ出し……未来からこの世界へ命からがら帰ってきたと」

カザリ「うん」

ペラップ「そしてこの世界はもうじき星の停止が起きる、だからそれを食い止めるために……ジュプトルは再び時の歯車を集め……お前達は幻の大地という場所を探してると、こういうことだよな？」

シルム「うん、そうだよ」

しかし

ペラップ「……ハハッハハハハハハハハハ！」

突然ペラップが笑い出す

ペラップ「シルムとドルク、そしてソウとネクとカザリ、お前達はきっと悪い夢でも見たのだろう」

なんだか信じてないようだった

シルム「えっ？」

ペラップ「自分の部屋で休んできなさい」

ソウ「ちょ！？ちょっと待ってくださいよ！？」

ドルク「俺達嘘を言ってねぇぞ！」

シルム「今話したことは全部本当なんだよ？」

しかし駄目鳥ごとペラップは

ペラップ「わかってるわかってる♪大分お疲れのようだけど……一晩寝れば治るから♪」

ドルク「（この鳥（怒））」

事実を受け入れないペラップ

ドルク「違うよ！ペラップ！ホントなんだってば！」

だがペラップは

ペラップ「しつこいな！（怒）お前達の話の何処がホントだというんだ！？（怒）幻の大地なんて場所……情報屋の私ですら聞いたことがないよ？（怒）大体！あの親切なヨノワールさんがそんなことするわけないだろう！（怒）」

怒る

シルム「ヨノワールの事はオイラだって信じられなかったし……ショックだったし……受け入れがたかったよ!?でも!」

だがペラップに怒りは納まらない

ペラップ「うるさーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーい!!（怒）とにかくヨノワールさんが悪者なんて……信じられるかあ!!（怒）」

ドルク「（やっぱ実力行使でやるか）」

と、ドルクが構えるが

シルム「（ドルク!ここで暴れたら元もこうもないよ!）」

ドルク「（だってよ!）」

ペラップ「なあお前達だってそう思うだろ?ヨノワールさんが悪者だなんて信じられないよな!」

ダグトリオ「私達もヨノワールさんの事は尊敬している、だからやっぱり信じられない」

ダグトリオは信じられないようだった

ペラップ「だろ?だろ?見ろ、みんなも私と同じ意見だぞ」

だが

キマワリ「でも……」

突然キマワリ姉さんが言う

ペラップ「ん？どうした？キマワリ」

キマワリ「よくわからないことがありますわ、あの時……ヨノワールさんが未来へ帰ろうとしたあの時……」

……

ヨノワール「別れるのはまだ早い！」

シルム「うわっ！」

ドルク「なっ！放せ！」

ヨノワール「お前達も……お前達も一緒に来るんだッ！！」

シルム「うわあああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！？」

ドルク「うわあああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！？」

ソウ「師匠！！？」

ネク「ドルク！シルム！！」

カザリ「待って！！ネクちゃん！！？師匠！！」

ラース「師匠！！みんな！！」

ビッパ「わわっ！」

チリーン「シルムさん！！ドルクさん！！」

ラース「師匠！！みんな！！？」

カクレオン（緑）「い、今のは……」

キマワリ「何が起こったのでしょう……」

ラース「師匠おおおお

落ちたんじゃないの？」

ドゴーム「いや！違う！あの時はあきらかにヨノワールさんがシルム達を引きずりこんでたぞ！」

ヘイガニ「ヘイ！そうだよ！おいらもそう見えたぜ！たしかにあのときゃ妙だったよな、ヘイヘイ！」

ビッパ「ヨノワールさんはなんでそんなことしたんでゲスかね？」

ビッパも疑問に思っていた

チリーン「もし……もしシルムさん達の言うことが本当なら……ヨノワールさんの行動もつじつまが合いますわ……」

ペラップは焦りを見え始める

ペラップ「ちょ…ちょっと待て！じゃあ何かい？みんなはシルム達の言うことを信じると言うのかい？」

みんな「……」

みんなは黙ってしまう

ペラップ「どうなんだい？」

沈黙が続いた

しかし、その沈黙を破ったのは

ビッパ「……あっしは……信じるでゲス……」

ビッパだった

ペラップ「ええ!?なんだってえ～!?じゃあビッパもヨノワールさんが悪者だって思うのかい？」

ビッパ「ううっ……あっしもヨノワールさんのことは尊敬してたんで……それを言われると辛いでゲスが……でもあっしにとってはそれ以上に……ドルクやシルム、ブレイブのみんなの事が大切なんでゲス、だからあっしは……ドルク達のことを信じるでゲス！」

ビッパはそれ以上にブレイブのみんなのことを思っていた

ドルク「ありがとなビッパ」

ペラップ「な、なんと～～～っ！」

シルム「ビ、ビッパ！」

ソウ「ビッパさん！」

すると今度は

ヘイガニ「ヘイ！おいらも信じるぜ！」

ネク「ヘイガニ！」

キマワリ「私も！何と言っても大切な仲間ですもの」

カザリ「キマワリ姉さん！」

ヘイガニとキマワリもだ

ドゴーム「ワシも信じるぜ！」

ディグダ「僕も！」

チリーン「私も！」

ダグトリオ「仲間の事が信用できなくてどうするのだ！」

ペラップ「ひえええっ！」

ペラップは驚いてしまう

たしかにダグトリオの言うとおり

仲間の事を信用しなければ意味は無い

シルム「ううっ……みんなぁ……ありがとう……（泣）」

ドルク「信じてくれて……本当に……ありがとな（泣）」

ドルクの目には涙が出てくる

ソウ「そうですね（泣）」

ラース「僕はもちろん師匠の事を信じています！（泣）」

ネク「そうだよ！みんな仲間なんだ！」

カザリ「うん（泣）」

するとプクリン親方が声をかけた

プクリン「やあっ！どうやら話はまとまったみたいだね♪」

みんな「ええっ！？」

まとまったのかどうか（汗）

プクリン「みんな友達を信じてくれてよかったよかった♪じゃ、早速幻の大地を探しに……」

しかし

ドゴーム「ちょ、ちょっと待ってくれよ！親方！」

プクリン「ん？どうしたの？」

ドゴーム「話はまだまとまってないんじゃないか？」

プクリン「えっ？」

ドゴーム「ワシ達はいいとして……ペラップはまだ納得いってないんじゃないかと……」

たしかにまだペラップだけは納得していない、だが親方様は

プクリン「なあんだ♪そんなこと？ペラップだったら心配ないよ？」

みんな「へっ？」

みんなが唖然とする

プクリン「ペラップだって納得いってるもんね？」

みんな「ええっ！？」

納得してるようなのか？

プクリン「ペラップだってホントはシルム達のこと信じてたんだもんね♪ねーペラップ♪」

プクリンはペラップに声をかける

するとペラップに異変が

ペラップ「フフッ……フフフ……フハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

突然ペラップが笑い出した

ドゴーム「な、なんだぁ？……」

キマワリ「どうしたんでしょう……」

ペラップは笑いが納まり

ペラップ「フッ、さすが親方様、しかたがないな」

みんなに振り向く

ペラップ「私は最初からドルク達を信じていたんだ」

みんな「ええーっ!?（ホントかよー!）」

みんなは心の中でつっこんだ

ペラップ「ただ私が最初に信じるって言っちゃうと……みんなそれについてきちゃうからな」

ドゴーム「……（なんだ?それは!?）」

ブチッ

ドルクの頭から怒りの血管が浮く

ペラップ「フッだからあえて私は……お前達の友情を試してみたのだ」

ビッパ「……（マジでゲスかー??）」

ブチッ

今度はソウの頭から怒りの血管が浮く

ペラップ「でも私は確信していたよ、きっとみんなも……仲間を信じるだろうと♪」

キマワリ「……（よく言う！）」

ブチッ

さらにネクの頭からも怒りの血管が浮く

ペラップ「ハハッ！ハハハハハハハハハハハハ！」

ビシャーーーーーーーーーーーーーーーン！！！

プクリンのギルドに雷が落ちた

ペラップ「ハハハハハハ…えっ？」

そこには異様に黒いオーラをまとったドルク達が

ドルク「テメェ～（黒怒）」

ソウ「最初からそうすればよかったのに（黒怒）」

ネク「そんな態度とって（黒怒）」

カザリ「舐めてるの？（黒怒）」

シルム「オイラ達を笑うなんて（黒怒）」

ラース「師匠をバカにして仲間を馬鹿にして（黒怒）」

ブレイブ全員『舐めてんのかテメェえええええええええええええ

えええええええええええええええええええええ！！！

みんなは共感したというか唖然とした

プクリン「ドルク、そしてシルム、さらにソウ、ネク、カザリ、僕は信じるよ！なんたってギルドの仲間だもん♪みんなも聞いて、今色々な場所で時が止まりはじめてる……そしてシルムの話で……僕達の世界に危機が迫っているのがわかった、であればなんとかしなくちゃね♪だからここは……プクリンのギルドの名にかけて……みんなの力を合わせ……そして……幻の大地を発見するよ！がんばろうね！みんな！」

みんな「おおーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

プクリン「ペラップ！！」

ペラップ「は、はいっ！！」

ミイラ状態（包帯ぐるぐる巻き）なペラップは返事をする

ペラップ「みんな！今からすべての仕事を幻の大地発見にシフトする！また今、この世界で起こっていることもみんなに伝えなくてはならない、忙しくなるがみんながんばってくれ！」

ドゴーム「がんばるさ！」

ビッパ「あっしはトレジャータウンに行って……みんなに真実を伝えるでゲス！」

ディグダ「僕も一緒に行くよ！」

キマワリ「アグノム達にも伝えないと！湖にいるようだったらジュプトルと戦いになりますわ！」

ヘイガニ「ヘイ！じゃそっちにおいらも行くぜ！」

ビッパとディグダはトレジャータウンのポケモン達に真実を伝えることに

キマワリとヘイガニはアグノム達にも真実を伝える

ジュプトルとの戦闘になれば大変なことになる

ペラップ「では他はみな幻の大地の探索にあたってくれ」

ドゴーム「おう！」

ペラップ「ビッパやキマワリ達もそちらが終わったら幻の大地の情報を集めに行ってくれ」

ペラップがミイラ状態だと説得力がない（汗）

ビッパ「はいでゲス！」

キマワリ「急ぎますわ！」

プクリン「みんなで幻の大地を探すよ！たあーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

みんな「おおーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

ドゴーム「みんな！気合いれてくぞ！」

ヘイガニ「ヘイヘイヘーイ！！」

みんなが気合を入れる

プクリン「幻の大地については僕もまったく情報がないんだごめんね、でも……もしかしたらコータス長老なら……」

ドルク「コータス長老って…あの温泉の？」

ペラップ「トレジャータウンに住んでいる物知りなじいさんだ、温泉が大好きでいつもそこにいるから……温泉に行けば会えると思うぞ♪」

ソウ「あの時のですね！」

そう

初めて探検に行ったあの温泉の所にいたポケモンだ

シルム「そっか！あの時のおじいさんだ！」

プクリン「亀の甲より年の功って言うしね♪コータス長老に聞きに行ってみなよ♪」

ドルク「こっからたきつぼの洞窟から行けるな！」

シルム「行こう！温泉に！」

だが

チリーン「その前に！」

チリーンの声にみんなが静まった

チリーン「今日はもう遅いですし、それに……ドルクさん達、お腹もすいたでしょ？」

シルム「えっ？」

ドルクとシルムの腹がなる

ドルク「そうだな／／／／」

シルム「ホントだ、ハハハハ」

ソウ「そうですね、僕達も」

ネク「色々あって大変だったから」

カザリ「お腹すいてきちゃったよ」

チリーン「今日はご飯を食べて、ゆっくり休んで……明日からがんばりましょ！」

グルル……

ドルク「そ、そうだな／／／／また俺の腹がなりやがったから」

ドゴーム「おい！みんな今の聞いたか？ドルクの奴、チリーンにお腹で返事してたぞ！」

ドルク「うるせぇ！／／／／」

みんな「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

……

ドルク「久しぶりだなもぐもぐ」

チリーン「ドルクさん用のおかわりありますのでどうぞ」

ドルク「ありがとなチリーン♪」

ドルクの食欲が爆発し、かなり食っている

ドゴーム「さすが（汗）」

シルム「オイラもおかわり！」

チリーン「はーい♪」

シルムもおかわりを要求

プクリン「さすがブレイブのリーダーだね♪元人間ってわりにはすごい食欲♪」

ペラップ「太るぞ？」

しかし

ドルク「俺は別に太ってねぇし、ペラ八に言われたくねぇよもぐもぐ」

ペラップ「なんだぁ！！私はペラップだ！！（怒）」

キレ芸を見せるペラ八

ペラ八「ペラップだ！！（怒）」

と、つっこむペラ八

……

ドルク「ふう～食った食った♪」

満足そうにお腹をポンポンと叩くドルク

ここは弟子部屋、つまりブレイブの部屋だ

シルム「そうだね、ここの部屋も久しぶりだな、なんかやっと帰って来たって気がするよ」

ドルク「そうだな♪」

ソウ「ふかふかしてるのも久しぶりですしね」

久しぶりの部屋でみんなくつろぐ

シルム「でも……みんなオイラ達の話を信じてくれてよかったよな、オイラ……ちょっと感動しちゃったよ……」

シルムは感動した

そしてドルク達に振り向く

シルム「明日はコータス長老の所に行って話を聞こう、明日からまたがんばろうな！ドルク！みんな！」

ドルク「ああ！」

第４２話　ギルドの仲間達（後書き）

思いっきり中の人ネタを使ってしまった（汗）ジュプトルに使ったらイメージ壊しそうなので（汗）

シルム「もしかして（汗）」

うん、でもペラップは完全に新○にしようと思ってやったけど、グダグダになっちゃったかも（汗）

ドルク「でもペラ八にしとけばいいし」

そうだね、ペラップの場合はいじられキャラにしようと思ってるけどね♪（黒）

ソウ「そうですね♪（黒）」

シルム「（汗）」

第４３話　手がかり（前書き）

みんなの絆が深まる

第43話　手がかり

温泉

コータス「ん？お前さん達か、疲れを癒しに来たのかの？」

ドルク「いや、俺達は癒しにきたわけじゃねぇんだ、実はな……」

ドルク達は相談で来たとコータス長老に言う

コータス「なるほど、相談ごとか、ではこの場でゆっくりと聞くことにしよう」

……

コータス「……なるほど、幻の大地のう……それなら聞いたことはあるぞ」

ドルク「ホントか！？」

知っているようだ

コータス「幻の大地はまさに伝説の場所、もはや言い伝えでしかないのだが……」

ソウ「それでもいいので教えてください！」

ネク「俺達も知りたいんです！」

コータス「わかった、では言うぞ」

コータス長老は説明した

コータス「幻の大地は海の向こうの……隠された場所にあるらしいんじゃ」

シルム「隠された場所？」

コータス「そうじゃ、幻の大地には選ばれた者しか行けん、そこに行くにはある資格がいるんじゃ」

その資格はどんなものかわからない

シルム「資格を持った選ばれた者しか行けない場所かぁ……なあコータス長老、その資格って何なの？」

コータス「それはの……」

しかし

コータス「あれ？あれあれ？何だったかの？すまん、忘れてしもうた」

ドルク「何っ！？忘れた！？すまないコータス長老！思い出してくれ！大事なことなんだ！」

だが

コータス「そうせかされてものう……うーーーーーーーーーーーーーーーーーーーん……」

すると

コータス「そ、そうじゃ！証じゃ！たしか何かしらの証が必要だったような……」

シルム「その証って……どんなものなんだ？」

コータス「それはの……」

また再び

コータス「……あれ？あれあれ？すまん、また忘れた」

ドルク「おいいい

思い出したら知らせるからの」

ドルク「ああ、よろしくな……ありがとなコータス長老」

みんなはギルドへと戻っていった

……

ギルド地下2階

ペラップ「うーん……つまりコータス長老もあまり知らなかったわけだな……残念……」

プクリン「そんなことないよ、証が必要ってわかっただけでも一つ前進だよ♪ねっ♪」

ヘイガニ「ヘイ！おいら達も調べてるんだけど……」

ドゴーム「何もわからんのだけど……」

こちらは進展はないようだ

ビッパ「でも！めげないでがんばるでゲス！」

ディグダ「僕もがんばるよ！」

キマワリ「今日のところはご飯食べて一晩休んで……明日からがんばりましょ！」

シルム「ううっ……みんなありがとう！（泣）」

……

夜

シルム「うーん、中々思ったように進まないよな」

ドルク「そう気を落とすな、少し前進はしたしな」

たしかにそうだ

シルム「でもコータス長老から話を聞いたときはいけるって気がしたんだけどなあ……」

ソウ「また明日がありますし」

ネク「そうだね」

と、みんなはそれでも励ます

シルム「今頃ジュプトルはどうしてるんだろうな……もう時の歯車を大分集めてるのかな……」

ドルク「俺達も急がないとな」

シルム「うん……焦ってもしかたないよな」

ラース「そうですよ、みんなも協力してますし、もっとも僕達もです」

みんながいるから励ましあい、協力しあえる

シルム達はいい仲間にめぐり合えたと思う

みんなは寝た

ドルク「（きっと……答えはあるはずだ）」

ドルクはそう思い、寝た

第４４話　遺跡の欠片（前書き）

幻の大地

その証ってなんだろうな……

第４４話　遺跡の欠片

次の朝

ペラップ「えー……というわけで……幻の大地についてはいぜんとしてわからないことばかりだが……でも私達はあきらめないよ！」

みんな「おおーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

今日もみんなが張り切る

ペラップ「今日もがんばって調べよう！みんな行くよ！」

みんな「おおーーーーーーーーーーーーっ！！」

みんなは解散した

シルム「ドルク、今日は何処を調べに行こうか？」

ドルク「と言ってもコータス長老にはもう話を聞いたしな、他にあてがないな」

ソウ「たしかにそうですね……どうしたら」

すると

ディグダ「ポケモン発見！！ポケモン発見！！」

来客者だ

ドゴーム「誰の足型?誰の足型?」

ディグダ「足型は……コータス長老!足型はコータス長老!」

ドルク「コータス長老が来たのか!?」

……

みんなは集まった

しかしコータス長老は

コータス「はあはあ……やっと会えたわい、はあはあ……このギルドまでのぼってくるのは年寄りにはこたえるのう」

疲れていた

シルム「どうしたの?コータス長老、もしかして……何か思い出したの?」

コータス「そうじゃ……と言ってもほんのちょこっとのことで申し訳ないんじゃが……昨日ずっと温泉を見つめていたら一つ思い出したことがあったんじゃよ、でも……ホントにちょっとしたことじゃからのう……言ってもいいものかどうか……」

プクリン「大丈夫♪どんな些細(ささい)な情報でも役に立つよ♪だから言って言って♪」

コータスは説明した

コータス「昨日幻の大地に行くには……証が必要だと言ったじゃろう？その証についてちょっと思い出したんじゃよ、証には……ある模様が書かれてたんじゃ」

ドルク「ある……模様？」

ヘイガニ「ヘイ！それってどんな模様だよ？」

その模様とは

コータス「うーん……なんと言ったらいいのやら……口で言うのは難しいのう……とにかく不思議な形をした……あまり見たことのないような模様なんじゃよ……」

ビッパ「あまり見たことのない模様でゲスか……うーん……」

ドゴーム「何かしらありそうだけどな……」

キマワリ「でもいざ思い出そうとすると難しいですわね……」

チリーン「うーん……なんでしょう……」

みんな考える

ドルク「（見たことない模様か……誰も見たことない……不思議な……待てよ！不思議な模様ならあの時……）」

……

シルム「そしてある日……ふとしたことで拾ったのがこの遺跡の欠片なんだ、いっけんガラクタにも見えるけど……よーく見てごらん？」

シルムの遺跡の欠片のことだ

シルム「ホラッ、不思議な模様が書かれてるよな？」

ドルク「たしかに不思議だな…こんな模様見たことないな」

……

ドルク「（そうか！あの遺跡の欠片には不思議な模様が書かれてたじゃねぇか！）シルム！」

ドルクはシルムに叫ぶ

シルム「ん？どうした？ドルク」

ドルク「遺跡の欠片があるだろ？あれには」

そう、書かれていた

シルム「そっか！あの模様か！ねえ、これをちょっと見てくれる？」

シルムは遺跡の欠片を見せた

すると

コータス「おおっ！こ、これじゃ！まさにこのような模様じゃ！」

みんな「ええ～っ！？」

みんなが驚く

コータス「お主これを何処で……」

シルム「いや、何処でって言われても……偶然拾っただけなんだけど……」

キマワリ「すごいですわ！シルムがこれを持ってるってことは……もしかして……シルムは幻の大地に行くための資格を持ったってことなのかしら？」

そうなのだろう、しかし

コータス「それはわからん、そうとも言えるし、そうでないとも言える、幻の大地に行くには証が必要らしいが……それを持つ者が選ばれし資格を持つとはかぎらんからの、たんに幻の大地の扉が開く鍵なのかもしれん、そもそも同じ模様だからと言って……この欠片が幻の大地に通じるともかぎらんぞい」

プクリン「それでも！この模様が幻の大地に関係してるのは間違いないよね？それだけで十分だよ♪」

たしかにかぎりがある

だが関係しているのに間違いないだろう

コータス「そうじゃのう……ってお前さん達、幻の大地は単なる言

い伝えじゃぞ?まさか幻の大地へ本気で行こうと思っとるのか?」

プクリン「うんそうだよ♪」

コータスは驚く

コータス「な、なんとっ!そりゃビックリじゃ!!」

プクリン「ペラップ!この模様は……見たことあるよね?」

みんな「ええっ!?」

なんとプクリンとペラップは見たことあるようだ

ペラップ「は、はい、ここから北西に行った入り江の……磯の洞窟というところに……しかし親方様!あの場所は!」

プクリン「うん、わかってる、あそこにはとても手強い奴がいるよね」

キマワリ「とても……」

ビッパ「手強い奴でゲスか?」

磯の洞窟

同じ模様がそこにあったのだ

プクリン「みんなちょっと聞いて、以前磯の洞窟という場所の奥深くでこれと同じ模様を見たんだ、だからそこに遺跡の欠片を持って

いけば何かしらわかるかもしれない、しかし……困ったことが一つ……そこにはとても手強いポケモンが潜んでるんだ」

だがみんなは

ヘイガニ「ヘイヘイ！そんなのでビビッてなんかいられねえよ！」

ドゴーム「ワシ達は探検隊なんだぜ！？」

キマワリ「勇気を持って行きましょう！」

これで幻の大地に行ける手がかりがそろった

プクリン「みんなありがとう♪でもあそこには本当に手強いから今日の所は準備を整えて……明日磯の洞窟へ出発することにしよう！」

みんな「おおーーーーーーーーーーっ！！」

コータス「ほっほっほっ、幻の大地など昔話だとばかり思ってたが……年を取ると頭が固くなっていかんのう、夢を追ったその先にはロマンがある、ワシにも夢を見させてくれ、がんばるんじゃぞ！ほっほっほっ」

シルム「うん！がんばるよ！」

プクリン「ありがとね！コータス長老！」

コータス「なんのなんの、ほっほっほっ」

コータス長老は帰っていった

プクリン「じゃあみんな！今日は準備してね♪それでは解散！」

みんなは解散した

プクリン「ペラップ！ペラップは明日ギルドで待機ね♪」

しかし

ペラップ「お、親方様！お言葉ですが……私にも行かせてください！磯の洞窟へ！」

だがプクリン親方は首を横に振る

プクリン「だめ、もうあんな危険な目にはあわせられないよ」

過去に何かあったみたいらしい

しかしペラップは

ペラップ「でもだからこそ！だからこそ行きたいのです！磯の洞窟へ！」

プクリン「……わかった、じゃあ明日になったらブレイブと一緒に行動してね、ドルク達を模様の場所に案内した方がいいと思うんだ、でも……十分気をつけてね」

ペラップ「ありがとうございます！がんばります！」

プクリン「後……僕はちょっと思うところがあって今から出かけて

くる、留守は頼んだよ」

思うところとは？

ペラップ「かしこまりました」

プクリンは出かける準備をしに、部屋に入った

ペラップ「というわけで明日は私と行動してもらう！なので……ブレイブの仲間は連れていけないからな！」

ソウ「そうなると……僕達は……」

そうだ、連れていけない

ソウ「でも僕は行きたいです……僕は……」

ソウは行きたいらしい

ペラップ「しかしな……」

ネク「行かせてやったら？俺達はここで留守番してるよ、だから遠慮しないでソウ」

ラース「僕もここに残ります」

カザリ「一番長くブレイブにいるソウちゃんの方がいいと思うんだ」

たしかにソウは長くドルク達といる

ならここで行くのはソウの方がちょうどいいだろう

ペラップ「わかった、ならソウも加えてだ」

許可した

ソウ「師匠！僕はあなたを絶対に守ります！」

ペラップ「磯の洞窟は強敵がいるからね、油断できないよ！くれぐれも私の足を引っ張るんじゃないよ！」

ドルク「お前がだろ！！」

エナジーバスターでペラップは

ペラップ「ピクピク」

シルム「（汗）」

……

その頃コータス長老のほうは

コータス「ほっほっほっ、しかしいいのう、若いもんは、ワシももっと若ければ幻の大地に挑戦したのう」

だがコータス長老の影から何者かが

？？？「ケッ、待ちな！じいさん！」

コータス「だ、誰じゃ！？」

すると来たのはドクローズだ

コータス「な…なんじゃお主達は！？」

スカタンク「ククククッ俺様達はドクローズ」

ズバット「へへっじいさん、プクリンのギルドに用があったのかい？」

ドガース「ケッ、なんか楽しそうなことつぶやいてたじゃないか？」

スカタンク「幻の大地がどうとかな、ククククッ」

コータス「ワ、ワシはただ……」

大変なことになってきた

ズバット「ん？誰か来るぜ！」

ドガース「ケッ、ギルドの弟子達かな」

スカタンク「じいさんよ、詳しい話はあっちで聞かせてもらうぜククククッ」

コータス「ひぃ～～っ……」

コータス長老はドクローズ達に連れてかれてしまった

……

サメハダ岩

シルム「ジュプトルは帰ってるのかな……」

ソウ「ここなら安心ですからきっと」

三人は隠れ家に入った

シルム「ジュプトルいないな……」

すると

ソウ「何かありますよ？」

シルム「こんな所に紙切れが……足型文字で何か書かれてるけど……これ！ジュプトルからの手紙だ！オイラ達へのメッセージみたいだな、読んで見るよ」

シルムはジュプトルの手紙を読み始めた

ドルク、シルム、そして他のみんな、元気か？幻の大地の探索はどうだ？俺の方は順調だ、すでに時の歯車を３つ集めた

必要な時の歯車はあと２つ、５つ集めたらお前達と合流しようと思っている、こっちはアグノム達も事情を理解してくれていたようでとてもやりやすいぞ

お前達のギルドの仲間が前もってアグノム達に知らせてくれたそうだな、感謝している、他にも俺達の事を信用してくれるポケモン達が増えてきてるようでとても嬉しい

ただ、それでもトレジャータウンやギルドにはまだ近づかないようにしている、この世界のポケモン達に完全に信用されてるかどうか……わからないというのもあるが……ヨノワールがまた未来からやってくることも十分考えられるからだ

シルム「ヨ、ヨノワールが!?……でもたしかによく考えてみると……ヨノワールは未来でオイラ達をしとめそこなってるわけだから……またオイラ達を追って、この世界にやってくることは……十分ありうるよな」

ソウ「たしかにそうですね、続きを読みましょう」

シルム達は続きを読んで見た

ヨノワールが来ることを考えるとこちらも目立った行動はしないほうがよさそうだ、だからトレジャータウンやギルドには近寄らないが……ただこのサメハダ岩や海岸には来ることがあると思う、もし出会うことがあればそこで情報を交換しよう、じゃあな、お互いがんばろう

星の停止を食い止めるために

ー　ジュプトルより　ー

シルム「……そっかぁ……ジュプトルもがんばってるみたいだ

な」

ソウ「僕達も負けずにがんばりましょう」

ドルク「そうだな、この手紙によると……ジュプトルはここか海岸には現れるようだ」

この手紙にはサメハダ岩もしくは海岸に来ると書いていた

シルム「海岸に行けばもしかしたらジュプトルに会えるかもしれないな、ギルドに帰る前に海岸によってみるか」

ドルク達は海岸へ向かった

……

海岸

シルム「ジュプトルがいるかなと思って来てみたんだけど……」

ソウ「いないようですね」

するとシルムは何かに気付く

シルム「……そういえば今日はクラブ達もいないな、夕方になるといつもここで泡を吹いてるんだけど」

そのクラブ達の姿はない

シルム「オイラあの泡の光景が大好きなんだよな、でも……しょう

がないか、みれないのは残念だけど……」

シルムが夕日を見た

シルム「ドルク！ソウ！見ろよ！今日も夕日が綺麗だな」

ソウ「そうですね」

するとシルムが振り向く

シルム「……それにしてもさあ……」

シルムは遺跡の欠片と出した

シルム「元々この遺跡の欠片の謎を解くことがオイラの夢だったんだけど……まさかこの欠片が幻の大地に関係してるとは思わなかったよ、そういえば……遺跡の欠片がドガース達に盗まれたのもこの場所だったよな」

ソウ「えっ！？そうだったんですか……」

ドルク「この時はソウはいなかったな」

シルム「そうだね」

……

ズバット「悪いがこれはもらっておくぜ」

シルム「あーーーーーーーーーーーーっ！！」

ドガース「ケッ、てっきりすぐ奪い返しに来ると思ったが……なんだ？動けねえのか？いがいといくじなしなんだな、さっ行こうぜ」

ズバット「じゃあな、弱虫君、へへっ」

……

シルム「あの時……取り返しに行けない弱気なオイラに……勇気をくれたのがドルクだった、思えばこの欠片を取り返すことが……オイラ達ブレイブの始まりだったんだよな」

ドルク「そうだな、そして今度はこの欠片をキッカケに幻の大地に行こうとしてる」

ソウ「考えてみると不思議ですね」

遺跡の欠片

これがブレイブの始まりでキッカケ

目指す道が

シルム「この綺麗な夕日も……星の停止が来たら失われてしまう……そうしないためにも……早く幻の大地を見つけなくちゃ」

シルムは遺跡の欠片をしまった

シルム「ドルク！ソウ！明日がんばろうな！」

ソウ「はい！」

ドルク「そうだ、がんばろうな！（記憶を失う前の……ジュプトルとの使命を果たすためにも……そしてこの世界や未来のポケモン達のためにもな！）」

すると

シルム「あれ？なあドルク、ソウ……あれは……あれは何だろう？」

すると水平線に一匹のポケモンが泳いでいた

それは横切って通りすぎていった

シルム「なんだろう……夕日を横切るように泳いでるけど……ポケモンなのかな……なんか不思議な光景だよな」

ドルク「たしかにな、もう日が沈むな俺達も帰るか」

3匹はギルドへと帰っていった

その岩陰から

スカタンク「ククククックラブがいなかったのは……俺様達に恐れをなして逃げてしまったからだククククッ」

クラブがいない原因はこの下品組…ドクローズの仕業らしい

ドガース「ケッ、しかし兄貴ーコータスのじいさんから聞き出したことはどうやら本当だったみたいですね」

ズバット「へへっ、あの時盗んだガラクタが……まさかこんな価値のある物だとは思いませんでしたぜ」

スカタンク「とにかく、あの遺跡の欠片は俺様達が奪う！そして幻の大地へ行くのは……俺様達ドクローズだ！クククククッ」

ドガース「ケッ！」

ズバット「へへっ！」

どうやら遺跡の欠片を奪って自分たちだけで幻の大地に行こうとしている

……

夜

シルム達が見たポケモンがある岸辺に到着した

そこにいたのはプクリン親方だった

プクリン「ラプラス！久しぶり♪」

そのポケモンはラプラスというポケモンだ

ラプラス「ご無沙汰してますプクリンさん、本当に久しぶりですね、ペラップさんも元気ですか？」

プクリン「うん！元気元気♪」

ラプラス「よかった！後……あの時約束していただいたこと……本当に感謝してます」

ラプラスはプクリン親方にお礼を言った

プクリン「全然♪たいしたことないよ♪それより……その約束の事なんだけど……それがそうも言ってられない事態になったんだ、だから話してもらえないかな？あの時の……不思議な模様について」

第４４話　遺跡の欠片（後書き）

ついに次回は磯の洞窟です

ペラップ「私の活躍をしかと見てくれ！」

はたしてそうなのかな～（黒）

ペラップ「ってかあんた黒くなってるんですけど！？」

第４５話　磯の洞窟の強敵（前書き）

ついに物語は終盤へ！！

第４５話　磯の洞窟の強敵

ペラップ「えー……というわけで……親方様はまだギルドに帰ってきてないのだが……予定通り、磯の洞窟へ出発しようと思う」

今朝礼ではプクリン親方の姿はなかった

ヘイガニ「ヘイ！親方は何処に行ったんだよ！」

ペラップ「さ、さあ……それは私にもわからないが……」

ドゴーム「親方がいなくて大丈夫なのかよ！？」

みんな不安がる

ペラップ「大丈夫！大丈夫だよ！親方様は自分がいなくても大丈夫だと判断されたからこそ……まだ帰って来ないのだと思う、それに親方様の代わりに……この私がいるではないか！」

シ～ン

全員が異様な目でペラップを見る

気まずい雰囲気になってしまった

ペラップ「えっ？何？なんでみんな黙ってるの？はっ！ま、まさか！みんな私では力不足と思ってるんじゃ……」

ドルク「おいおい勘弁してくれよ、だから駄目鳥なんだよ」

ペラップ「なんだぁ！！駄目鳥言うな！！（怒）」

キレつっこみするペラップ

ペラップ「み、みんなぁ！もしかしてみんなにとって私は……そんなに頼りないの！？」

みんなが互いを見る、そして視線をペラップに向ける

ビッパ「いや、そうじゃないでゲスが……」

チリーン「親方様がいないとやっぱり不安になるというか……」

ヘイガニ「ヘイ！親方っていまいちつかみどころがないけどよ……いざって時にはやっぱりすごいじゃないの！ヘイヘイ！」

キマワリ「でも……その親方様がいないいじょう……私達だけでやるしかないですわ」

ドルク「そうだ！俺達だけでもきっとやれる！親方がいない分、俺達ががんばるしかない！みんな！がんばるぞ！」

そうだ

頼ってばかりでは何も進まない

ドゴーム「……そうだな、親方に頼ってばかりでもな！」

チリーン「そうですよ！がんばりましょう！ペラップさん、親方様がいない今……この中でリーダーシップがとれるのは……ペラップさんしかいないですよ」

ペラップ「へ？わ、私？」

ペラップしかいないのならそうするしかない

チリーン「そうですよ、さっき自分でも言ってたじゃないですか、私がいるから大丈夫だ！……って、がんばってくださいね！ペラップさん！」

ヘイガニ「そうだぜ！がんばれペラップ！ヘイヘイ！」

ビッパ「頼りにしてるでゲス！」

ペラップ「うっ……」

ペラップは後ろを向いて

ペラップ「ううっ……みんなぁ……・・こんなときだけ頼りにしやがって……ううっ……」

性格が変わるバイオレンス鳥

ペラップ「やかましい！！（怒）」

ナレーションにつっこむ

ドゴーム「どうしたペラップ！早く号令頼むぜ！」

ペラップはみんなに振り向いた

ペラップ「わかってるよ！」

ペラップはみんなを見渡す

ペラップ「これより私達は……ギルドをあげて全員で磯の洞窟に出発する！みんな！がんばっていくよーーーーーーーーーーーー！」

みんな「おおーーーーーーーーーーーーーっ！！」

みんなは磯の洞窟へ

……

磯の洞窟入口

ペラップ「みんな聞いてくれ、ここが磯の洞窟の入口だ、このダンジョンの一番奥に……シルムが持っていた遺跡の欠片と同じ模様があるのだが……そこにはある強敵が潜んでいる……」

ビッパ「きょ、強敵でゲスか……おっかないでゲスね……ブルブル……」

ビッパは震えてしまった

ヘイガニ「ヘイ！ペラップ！」

ペラップ「なんだ？」

ヘイガニはペラップに質問した

ヘイガニ「昨日親方がそんな話をしてたけどよう……ペラップはこの洞窟にずいぶん詳しそうだよな？ヘイヘイ！」

たしかに詳しい感じに思える

チリーン「もしかしてペラップさんは前にもここに来たことがあるんでしょうか？」

ペラップ「ああ、そうだ、来たことがある」

どうやら来たことがあるらしい

ペラップ「昔、親方様と一緒にここを探検したのだ、そしてこの奥で不思議な模様を見たのだ、しかしその時……あいつらが……あの手強い奴らが現れて……」

ドゴーム「ごくりっ……そ、それでそいつらはどんな奴らだったのだ？」

見ていたのならわかるはずなのだが

ペラップ「そ、それが……私もよく覚えてないのだ」

ドゴーム「へっ！？覚えてない！？」

覚えていないようだ

ペラップ「……ああ、恥ずかしい話だがな……奴らは現れるなりいきなり襲い掛かってきて……私はあっという間に倒されてしまったのだ、気がつくと親方様に解放されてたのだが……それまでの記憶が一切ないので……奴らがどんな敵だったかも思いだせないのだよ……うむむ……」

ダグトリオ「それじゃ特徴がわからんな……」

キマワリ「どんな敵かはわからないけど、とりあえずは手探りで挑みましょうか……」

だがここで

シルム「ちょっと待ってよ」

シルムが止める

シルム「なあペラップ、奴ら……ってことは……一匹じゃないてこと？」

ペラップ「……そういえば一匹じゃなかったな……何匹かに襲われたような……その時……そうだ！」

ペラップは思い出したようだ

ペラップ「その時一斉に攻撃されて……もうずぶぬれーっ！……って感じだったような……」

ドゴーム「もうずぶぬれーっ！って感じ？それはもしかすると水タ

イプの技かもな」

ダグトリオ「私達は地面タイプだから苦手だな、そんな奴らとは戦いたくないな」

キマワリ「とにかく一匹で挑むのは危険ですわ」

たしかに

ギルドのメンバーではディグダとダクトリオの親子だけ水タイプが弱点だ

ペラップ「そうだな、何匹かグループを作って行動するようにしよう」

ビッパ「了解でゲス！」

ヘイガニ「なるべくタイプがかぶらないようにコンビ作ろうぜ！ヘイヘイ！」

みんなはチームを編成する

ペラップ「おい、お前達、親方様は昨日……ブレイブの二匹は私と一緒に行動するようにと申し付けられた、だからお前達は今回私と一緒にこの洞窟を探索する、いいか、あまり私の足を引っ張るんじゃないぞ」

ソウ「こちらも足引っ張らないでくださいね」

ペラップ「うっ……」

たしかにそれはごもっともだ（汗）

ペラップ「後、あまり私に頼り過ぎないように、自分の事は自分でちゃんとするんだぞ」

ドルク「わかってるというか誰もお前をたよりにはしてねぇから」

さらっと酷いことを言うドルク

ペラップ「（グサッ！）」

ペラップの心に矢が刺さった

ペラップ「うっ……ではみんな！磯の洞窟を攻略するよ！がんばっていこーーーーーーーーーーーーーー！」

心にダメージは受けたが、とりあえずはなんとか号令をかけた

みんな「おおーーーーーーーーーーっ！！」

みんなは磯の洞窟へと入っていった

その後から

ズバット「へへっ兄貴ー、ギルドの奴ら出発したみたいですぜ」

ドガース「ケッ、俺達もそろそろ後を追いますかい？」

スカタンク「ククククッそうだな、奴らには隠れて行動しよう、そ

して洞窟の中でころあいを見て……シルムの持つ遺跡の欠片を奪う！その後は一気に洞窟の奥だ、謎なんて先に解いたもんが勝ちだからな」

ドクローズだ

ズバット「へへっさすが兄貴！作戦も完璧だ！」

スカタンク「ククククッ、ありがとよ、とにかく、幻の大地に行くのは俺様達ドクローズだ！」

ズバット「へへっ」

ドガーズ「ケッ」

スカタンク「ククククッ」

だが彼等は気付いていない

これが

彼等に天罰が下ろうとするとは

ドクローズは知る由もなかった

……

ペラップ「（汗）」

ペラップは唖然とした

ドルク「オラァ邪魔だ！！」

シルム「大文字！！」

ソウ「クレセントカッター！！」

ブレイブが強いためか敵が次々と倒れた

ペラップ「（私の方だった（汗）足を引っ張ってるのは（汗））」

まさにそうだった

そんなこんなで磯の洞窟の中間地点へと到着した

……

磯の洞窟中間地点

ドルク「大分奥まで来たな」

シルム「なあペラップ、不思議な模様の場所はまだなのか？」

ペラップ「もう少しだ、もうちょっと行けばある、ただ……前にも話したが……そこには強敵がいる」

ソウ「油断はできませんね」

そう、油断はできない

シルム「とにかくあと少しみたいだしがんばろうな！ドルク！」

ドルク「ああ！」

すると

ドガッ

シルム「イタッ！」

ドルク「シルム！」

ドルクがシルムに駆けつける

ドガース「おっとごめんよ」

シルム「ああっ！」

ソウ「あなた達！？」

ドクローズだ

ドガース「ケッ、久しぶりだな！」

ペラップ「あ、貴方様達は！？」

スカタンク「これか、遺跡の欠片というのは」

シルム「そ、それは！！」

スカタンクは遺跡の欠片を取ってしまった

スカタンク「ククククッ、これは俺様がもらっておくぞ」

ソウ「返してください！」

しかし

ドガース「ケッ、しかし前と同じ手に引っかかるとは……」

ズバット「お前達相当まぬけだな、へへっ」

ドルク「んだとコウモリ野朗（黒怒）」

ドルクがキレる

だがこの状況を理解してないのはペラップだ

ペラップ「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！よくわからないです私、貴方様達はどうしてまたここに？？大体遠征の時ドクローズのみなさんが急にいなくなったんで……私ずっと心配してたんですよ？」

スカタンク「心配ねえ……ククククッおめえら本当におめでたい奴ばかりだな、ククククッ」

奴らは馬鹿にしている

ペラップ「あれれ？なんか言葉使いも前より悪くなってるような……」

ドルク「ペラップ！こいつらはギルドをずっとだましてきた悪い奴らだ！」

シルム「悪い探検隊なんだよ！ドクローズは！」

と、二人は説明した

ペラップ「ええ～～～～～～～～～～～～～～～っ！？ホントなの～～っ！？それ～～～～っ！？」

ドガース「ケッ、当然のこと」

ズバット「今まで騙されてたお前がまぬけなだけだへへっ！」

スカタンク「とにかく、遺跡の欠片は手に入れた、後は幻の大地へ行くだけだ、あばよ！まぬけども！ククククッ」

ドルク「逃がすか！！」

ドルクはエナジーバスターを放った

スカタンク「おっと！逃げろ！！」

素早く逃げたドクローズ

ドルク「ちっ、あいつら……」

ソウ「急いで追いかけましょう！」

だがペラップは怒りをあらわにしていた

ペラップ「ううう……ううううっ……あいつら……私を騙してたとはっ！うぐー！許せない！絶対とっちめてぶっ殺してやる！！（怒）」

ペラップは怒りが爆発して奴らの後を追った

シルム「あっ、待てよ！ペラップ！」

ソウ「急いで追いかけましょう！」

ドルク「あいつ、すごくキレてバイオレンス鳥になったな」

ドルクは異様なことを言う

シルム「でもこの先には強敵も潜んでいるって言うのに……それにスカタンクから遺跡に欠片も取り返さなくちゃ」

ソウ「そういえばあいつらは強敵の事知らない感じに思いますが」

ドルク・シルム「あっ」

たしかにそう感じていた

ドルク「急ぐぞ！」

3人は先へ進んだ

……

磯の洞窟奥底

シルム「大分深い所まで来たけど……ペラップやドクローズにはまだ追いつかないのかな……」

ソウ「でも目的が同じなら奥まで行ってるはずです」

なんとか3匹は到着した

シルム「……なんか……蒸し暑いところだよな……」

ドルク「そうだな」

すると

？？？「ぐぐっ……」

シルム「あっ！あっちから声が！ドルク！行ってみよう！」

ドルク達が駆け出した

するとそこには

無残にもやられた哀れな奴らが倒れていた

シルム「ああっ！ドクローズが！」

スカタンク「うぐぐ……」

ドルク「おい！テメェらどうしたんだ？」

ソウ「まさかですけど……謎の強敵にやられたってことですか？」

すると

ドガース「ケッ……知ってるなら……最初から言ってくれりゃあ……」

ドルク「無理だろ」

と、ドルクはつっこんだ

ズバット「……って言っても俺達に教えるわけ……ないよな……へへっ……」

ソウ「あなた達…強敵のことわかっていないようですね……どうやら」

そうらしい

完璧といいながら結局はやられたのだ

ドルク「おい！スカンク野朗！大丈夫か？」

酷い言われようで言うドルク

スカタンク「ククク……ここに来て……俺様を心配をするなんて…相変わらずめでたい奴だな……」

ドルク「別に心配してねぇし」

さらっと酷いことを言うドルク

スカタンク「少しは心配してくれても（泣）」

スカタンクはショックで泣き出した

シルム「まあ、倒れてたら誰でも見過ごせないよ」

スカタンク「クッ……あいにく俺様達なら心配無用だ」

ドルク「そんじゃ行こうぜ」

と、ドルクは無視して向かおうとするが

スカタンク「マジでごめんなさい！？マジですんません！？（泣）だから行かないで～！！（泣）」

と、泣きじゃぐるスカタンク

シルム「まだ行かないでドルク（汗）一応話聞いてみようよ（汗）」

ドルク「シルムがそういうなら」

ドルクはしぶしぶ話を聞くことに

スカタンク「ペラップが……俺様の怒りに火をつけたからだ……」

シルム「え！？ペラップが！？」

なぜ火がついたのか？

スカタンク「そうだ、ペラップの奴は後から来て……俺様達が倒れてるのを見ると……散々文句をいいやがったぜ……ククククッ……」

ドルク「当たり前だろ、騙したお前等が悪いしな」

たしかにごもっともな意見だ

スカタンク「そうでした俺達がわるぅございました（泣）」

と、泣いて詫びる

スカタンク「そして一通りしゃべり終わると去っていった……俺様はもう本当にムチャクチャむかついたぜ……正直こんなとこではくたばらねえ……ここを必ずはい出て絶対にペラップを倒す！ってな……」

ドルク「まああの鳥はキレると強いしな、キレツッコミするわ、キレ芸するわだがな」

だがスカタンクはその言葉で

スカタンク「マジでぐりぐりされちまった（泣）」

と、涙目で答える

某アニメのアレか（汗）

スカタンク「……まあ考えようによっちゃあ……あきらめかけた

俺様はペラップに元気をもらったのかもしれないがな……ククククッ……」

ソウ「その割にはまだ大分苦しそうですけど？」

たしかに元気をもらっても、傷が癒えるってわけじゃない

スカタンク「ククククッ……俺様はこれまでお前達にたくさんいじわるをしてきた……散々嫌な思いをしたはずだ……それなのにお前達は……俺様の事を心配するのか？」

ソウ「たしかにあなた達には腹は立ちますよ？」

ドルク「だがお前等が倒れているのは見過ごせないな」

スカタンク「散々無視したのに！？」

しかし

ドルク「いや、あれは冗談だ♪」

スカタンク「（冗談に見えねぇ！？しかも♪つけてる！？ウゼェー！？）」

スカタンクは心の中でつっこんだ

シルム「うん、オイラもそれは見過ごせないし」

スカタンク「ククククッ……ククククッ……」

するとスカタンクは遺跡の欠片を出した

シルム「あっ！遺跡の欠片！」

スカタンク「ククククッ、しまった……俺様としたことが……遺跡に欠片を落としちまった……ククククッ……か、体も動かねえから……これだとシルムに取られちまうなあ……ククククッ」

スカタンクはわざと遺跡の欠片を出してくれたのだ

シルム「スカタンク……」

スカタンク「俺様は遺跡の欠片を落としただけだ……それを拾うかどうかはお前の自由だぜ……」

と、かっこよくいう

悪者の割りにはいいことを言うのであった

シルム「スカタンク……あ、ありがとう」

スカタンク「フンッ、なぜ礼を言う、次に会ったらまたいつもどおりいじわるするから覚悟しておけ……ククククッ……それに今は俺様達より……ペラップの事を心配すんだな……」

ドルク「ああ、お前も次に俺達に会ったら……フルボッコにしてやるから覚悟しとけよ」

ソウ「何度来ようとも僕達はそれを阻止すると」

そう誓う師弟コンビ

シルム「そうだ！ペラップは何処に？」

スカタンク「敵を追って奥へ進んだ……お前達も……早く……行け……」

シルムは遺跡の欠片を拾った

ドルク「ありがとな…スカン…いやスカタンク……俺達は先に行くが、お前等もがんばってここを出ろよな」

スカタンク「フンッ、ドクローズを甘く見るんじゃねぇよ、ククククッ……」

シルム「ドルク行こう！」

3匹は奥へと進んだ

スカタンク「お前達動けるか？……」

ドガース「ケッ……それは無理ですよう……」

ズバット「へへっあれだけ派手にやられちゃあね……」

二匹は動けないようだ

スカタンク「そうか……お互いざまあないな……クククククッ……」

ドガース「ケッ、しかし兄貴ー……兄貴も最後の最後で……ちょっ

とだけいい奴になっちまいましたね……」

何処かでみんないいところはある

ドクローズでもだ

スカタンク「うるせー、ククククッ……」

ズバット「でも俺はそんな兄貴もちょっと好きですぜへへっ……」

スカタンク「うるせー、ククククッ……」

彼等は笑いながら話していた

まあたしかに悪いことをしたが

何処かで……

いいところがあるかもしれない

悪者でも

実は何処かで

優しいところがあるかもしれない

……

ペラップはそこにいた

シルム「あっ！ペラップ！」

ペラップは振り返る

ペラップ「む！お前達か！（怒）油断するなよ！奴らはそばにいる！奴らの姿をチラッと見かけたんで追って来たんだが……ここまで来て見失ってしまったのだ……きっと何処かに潜んでいるはずだ」

みんなは辺りを見渡すが

シルム「でも……特に隠れるようなところはないけどなあ」

ペラップ「（なんでだろう……このいいようのない不安感は……）」

ソウ「周りを見ても岩壁ですし」

たしかに、隠れる所がない

ペラップ「（奴らをチラッと見て……何かを思い出せそうなんだが……そうだ！以前ここで奴らに襲われたとき……奴らは突然現れた……たしかその場所は……）」

ペラップは天上を見た

すると3匹のポケモンが張り付いていた

？？？「グルルルルル……」

ペラップ「シルム！ドルク！ソウ！気をつけろ！上にいるッ！」

ドルク「何っ！？」

シルム「えっ？」

ソウ「まさか！？」

突然ドルク達の目の前でそのポケモン達は降りてきた

シルム「なっ……」

ソウ「誰なんですか！あなた達は！？」

？？？？「ワシはカブトプス！」

？？？？・？？？？「そしてオムスター兄弟！」

彼等はどうやら強敵のようだ

カブトプス「縄張りを荒らす者はたたきのめすのみ！くらえっ！」

彼等の攻撃がドルク達に向かう

シルム「うわあああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！？」

しかし

ソウ「…あれ？僕達…」

目の前には

ペラップ「うぐぐぐぐ……」

シルム「ペ、ペラップ！！」

ソウ「しっかりしてください！？」

なんとペラップがドルク達をかばって攻撃を受けてしまったのだ！？

カブトプス「な、なんだ！？」

ペラップ「うぐぐぐぐ……！お前等に手出しはさせない……」

カブトプス「自分から盾になって後ろの奴らをかばったのか、おろかな奴め」

オムスター1「あ！思い出した！カブトプス！こいつ前にもここに来たことあるぜ！そしてその時もこんな感じでやられたんだぜ！？」

カブトプス「繰り返し同じことを？本当に愚か者だな！グハハハハハハッ！」

だがペラップは

ペラップ「うぐぐ……何度でもいえ……こいつらは……私のかわいい弟弟子なんだ！お前等に手出しさせるかぁ！」

ドルク「ペラップ……」

ペラップ「うぐぐぐ……」

ペラップは倒れてしまった

シルム「ペラップ！！」

ソウ「しっかりしてください！ペラップさん！！」

カブトプス「グハハハハハハハハハッ！次はお前達の番だ！」

しかし

ドルク「おい……」

突然ドルクの表情が

目は赤くなり怖い

カブトプス「なんだ？」

ドルク「聞きてぇか……」

オムスター1「はぁ？」

ドルク「聞きてぇよな……誰が愚か者なのかをよ……」

ドルクの目にはすでに怒りの表情だった

カブトプス「（な…なんだ……体が…震えてるのか…そして恐れてるのか……この亀に！？）」

ドルクの周りに殺気が放つ

オムスター1「カ…カブトプス!?やばいって!?この亀本気だよ!?」

それは彼の逆鱗に触れたことを意味する

ドルク「愚か者は……お前等の方だ!!」

ドルクはアルテマやエナジーバスターなどを放った

カブトプス「ぎゃあああああああ

オムスター2「ひぃひぃ……」

カブトプス「ひえ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ！」

3匹はドルクに恐れをなして逃げていった

すぐさま3匹はペラップに駆け寄る

シルム「ペラップ！！」

ペラップ「ううっ……」

ペラップは苦しそうだ

ドルク「しっかりしろ！ペラップ！！」

すると

？？？？「ペラップ！」

そこからプクリンとジュプトルが駆けつけた

ペラップ「そ…その声は親方様……」

二匹が駆け寄る

シルム「プクリン！それにジュプトルも！」

ドゴーム「親方ーっ！！」

そこからドゴーム達も駆けつけると

ドゴーム「わわっ！ジュプトル！」

チリーン「ジュプトルと親方様がどうして一緒に！？」

プクリン「わけは後で説明するよ！それより！」

プクリンはペラップに駆け寄る

プクリン「ペラップ！！」

ヘイガニ「大変だ！ペラップが！」

ビッパ「た、倒れてるでゲスゥー！！」

ギルドのみんなもペラップに駆け寄る

プクリン「ペラップ！！大丈夫？痛くない？（泣）」

ペラップ「……ハハハ……大丈夫……この通り……ピンピン……して……」

ピンピンしてるわけではない

かなりダメージを負っている

プクリン「ペラップ！ごめんねペラップ、僕がもっと早く来ていれば……（泣）」

ペラップ「そんな……親方様……しかし……情けないですよね……同じ敵に……また……やられるなんて……」

ペラップが苦しそうに答える

プクリン「そんなことないよ！ペラップ！前に僕達がここに来た時……ペラップはすぐにやられちゃったから覚えてないかもしれないけど……あの時……（泣）カブトプス達に襲われた時ペラップは……僕の事をかばってくれたんだよ（泣）」

ペラップ「えっ？……」

それはシルム達と同じだった

プクリン「カブトプス達はその後僕が追い払ったけど……ペラップがかばってくれなければ（泣）僕はやられてた、ペラップは僕にとって命の恩人なんだよ（泣）」

ペラップ「……そう…だったんですか……」

プクリン「ペラップは……僕にとって……（泣）一番大切な相棒だよ……（泣）」

涙を流してプクリン親方は言う

ペラップ「そんなこと……親方様に言っていただけるなんて……とても……幸せ……です……がくっ」

ペラップは倒れてしまった

ドゴーム「うお！ペラップ！」

チリーン「ペラップさん！！」

ジュプトル「みんな慌てるな！」

ジュプトルがペラップの容態を見る

ジュプトル「……うん、大丈夫だ、今すぐギルドに運べば間に合う！」

シルム「じゃあ早くギルドに！」

しかし

プクリン「いや、ペラップは僕達が連れて行く、ドルクとシルムとソウ……そしてジュプトルは先に進んで」

ソウ「でも！」

プクリン「いいから、ここで君たちが先に進まないと……ペラップも君たちをかばった意味がなくなるよ」

シルム「ううう……」

そうだ

それではペラップの気持ちを踏みにじることだ

プクリン「不思議な模様はこの先にある、さあ、早く」

ドルク「わかった親方様！」

ジュプトル「プクリン、すまないが行かせてもらうぞ」

ジュプトルがちょっと進んでドルク達に振り向く

ジュプトル「行くぞ、シルム、ソウ、ドルク」

ドルク「ああ」

シルム「うん」

ソウ「はい……」

４匹は先へ進んだ

プクリン「がんばって！幻の大地を見つけてね！」

……

シルム「それにしてもジュプトルはどうしてここへ？」

ジュプトル「プクリンが連れて来てきれたんだ」

ドルク「親方様が？」

ジュプトル「ああ、プクリンは俺を探していた、そして会うなり幻の大地に行けそうだから来てくれと言ったんだ、俺も合流したいと

思ってたからちょうどよかった」

ソウ「合流したい？……ということはもしかして！？」

それは

ジュプトル「そうだ、必要な時の歯車はすべて集めた」

シルム「やったぁ！じゃあ後は幻の大地へ行くだけだな！とにかく模様の場所に行ってみよう！」

……

ドルク達は磯の洞窟のさらに奥に出た

シルム「わわっ！水がここまできてる！……ってこれ海だよ！」

どうやら海に出たようだ

シルム「見ろよ！ドルク！」

すでに夕日になっていた

シルム「洞窟が大きく裂けて海が見える！外が暗かったんで気がつかなかったけど……」

ドルク「本当だ、岩壁の向こうに海が見える、もう夕方か……時間が立つの早いな」

ジュプトル「岩の裂け目から潮がここまで満ちてきてるんだな」

するとドルクは何かを見つける

ドルク「!?シルム!」

シルム「どうしたの?ドルク?」

ドルクが見つけたのは、不思議な模様の石壁だ

シルム「あっ!これは!」

ソウ「シルムさんの遺跡の欠片と同じ模様の!?」

たしかによく似ていた

シルム「ペラップ達が言ってたのもこの模様のことかもな……遺跡の欠片を出してみよう」

シルムは遺跡の欠片を出した

すると

シルム「あっ!遺跡の欠片が!」

ソウ「師匠!シルムさん!ジュプトル!今度は壁の模様も光ってます!?」

遺跡の欠片は光を放つそれに反応して壁の模様も光った

シルム「すごい!まるで……遺跡の欠片に反応してるみたいだ!」

すると

突然まぶしい光が包み込まれ

シルム「うわーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！」

そしてそこから光がレーザーのように一直線に水平線へと向かった

ジュプトル「……い、今のは一体……」

シルム「光が海へ飛んでいったけど……なんだったんだろう……」

するとこっちから何かが来る

ソウ「あれは……」

ドルク「こっちに向かってくるぞ！」

それはドルク達に向かってきた

その正体はラプラスだった

そう、プクリン親方が夜話していたあのラプラスだ

ラプラス「シルムさんとドルクさん……それにソウさんとジュプトルさんですね？」

シルム「オイラ達の名前を知ってるの？」

ラプラス「はい、プクリンさんから伺ってます」

ドルク「親方様から？」

ソウ「さっきあの模様から光が海に伸びて、そしたらあなたが現れた」

シルム「き、君は……一体……」

ラプラスは自己紹介した

ラプラス「僕はラプラス、幻の大地へいざなう者」

シルム「ええっ！？幻の大地に！？」

ラプラスは説明した

ラプラス「君達は模様の光を放った……それこそが幻の大地へ渡る印なのです、海の向こうにそれはあります、さあ僕に乗って、海を渡りましょう、大丈夫、僕は特別ですからみなさん乗れますよ」

ドルク「海の向こうに……幻の大地が……」

ジュプトル「ドルク！シルム！ソウ！行こう！海の向こうへ！」

３匹は頷いた

第４６話　幻の大地へ（前書き）

それぞれの思い

そして見守る者達

時はこくこくと壊れていこうとしている

第４６話　幻の大地へ

夜

プクリンのギルド

チリーン「あっ！親方様！」

親方が弟子部屋から出てきた

ネク「ペラップは大丈夫だった？」

あの後ギルドに運んでネクとカザリが手当てして後は親方が見ることになった

プクリン「うん♪一晩寝れば明日には元気になってると思うよ♪」

カザリ「よかった！」

ドゴーム「うおー！」

ラース「よかったです！」

ディグダ「よ、よかったー！」

ビッパ「ほっとしたでゲス……」

ヘイガニ「ペラップが無事でホントよかったよ！ヘイヘイ！」

みんな安堵した

キマワリ「親方様」

キマワリが親方に声を掛けた

プクリン「なあに？キマワリ」

キマワリ「親方様は昔ペラップに助けてもらったっておっしゃってましたよね？」

たしかにそう言った

プクリン「うん、あの時は……」

……

ペラップは天上を見た

そこにはカブトプスとオムスター兄弟が張り付いていた

そしてプクリンを襲おうとするが

ペラップ「親方様！危ないっ！！」

……

プクリン「カブトプス達はふいをついて僕を襲ってきた、ペラップは僕をかばったばかりに犠牲になって……その後カブトプス達は追

い払ったんだけど……でも僕は倒れた、ペラップをどうすることもできなかった、ペラップを助けられず途方にくれてたその時……ラプラスが現れたんだ」

キマワリ「ラプラス？」

今ブレイブのドルクとシルムとソウ、そしてジュプトルを幻の大地まで運ぶあのポケモンだ

プクリン「うん、ラプラス、ラプラスはペラップを助けてくれたんだ」

……

その頃、ドルク達は

シルム「ふうん、ラプラスとプクリン親方はそんな風にして出会ったんだ」

ラプラス「はい、本当は姿を見せるつもりはなかったのですが……でも傷ついたペラップさんを見た瞬間……助けずにはいられませんでした、そしてその後で……プクリンさんとある約束をしたのです」

同じ頃、ドルク達もプクリンと同じ話を聞いていた

ソウ「約束？」

ラプラス「はい」

……

プクリンのギルド

ヘイガニ「ヘイ！その約束ってなんだい？」

プクリン「ラプラスは僕達を見て、すぐに探検隊だってわかったらしい、そしてこう言ったんだ、『あなた達が野心に満ちた盗賊か…あるいは正義の心を持った探検隊かはわからない、でも……世界の平和のために……不思議な模様だけは探求しないでくれ……』って」

それがプクリンとラプラスの約束だった

だが今は

チリーン「それで……親方様はなんて答えたんですか？」

……

再びドルク達に戻る

ラプラス「プクリンさんは心よく約束してくれました、ペラップさんを助けてくれたお礼もあるし……この件からは手をひくと……」

ドルク「そうだったのか……」

シルム「でも……どうして探求しちゃいけないんだい？」

その理由は

ラプラス「幻の大地には……ディアルガのいる時限の塔があります、ディアルガは時間を司るこの塔に色々な者が訪れるのを恐れました、そしてディアルガは時限の塔を守るため……幻の大地を時の狭間（はざま）に隠したのです」

シルム「時の狭間？」

ラプラス「はい、説明が難しいのですが……時と時の……ほんの隙間の部分と申しましょうか……」

ジュプトル「なるほど、道理で見つからなかったはずだ、時の狭間なんて……そんなところには誰も行けないからな」

たしかに、それなら誰も見つからない

ラプラス「いえ、ディアルガは幻の大地に入る資格を一つだけもうけました、それが不思議な模様の書かれた特別な欠片です」

……

再びギルドサイト

プクリン「コータス長老の話……そしてシルムの遺跡の欠片を見て……僕はピンときたんだ、あの不思議な模様こそが幻の大地に通じるものだと、だから僕はみんなが磯の洞窟へ行く前に出かけたんだ、再び……ラプラスと会うために……」

……

僕はラプラスに会って話した、各地の時が止まり始めてこの世界が

危機にあることを……そして一刻も早く時限の塔に時の歯車を納めなければならないことを……だから幻の大地へ行く方法を教えてほしいと頼んだんだ」

……

キマワリ「それで……どうなったんですか？」

プクリン「ラプラスは教えてくれたよ、幻の大地に行くものは遺跡の欠片が選ぶんだって」

ダグトリオ「遺跡の欠片が！？」

チリーン「選ぶんですか！？」

ギルドのみんなが驚く

プクリン「うん、そうらしいよ♪そして遺跡の欠片はシルムを選んだんだ」

カザリ「そうなんだ……僕は欲望とかもあるから選ばれなかったんだね」

ラース「僕もです」

ネク「俺も…スカイックなのに」

控えの３匹はショックを受ける

プクリン「そんなに落ち込まないで３匹とも♪」

プクリン親方は3匹を励ます

ヘイガニ「ヘイ！なぜ遺跡の欠片はシルム達を？」

プクリン「僕もわからないけど……たぶんディアルガは悪しき者を時限の塔には入れたくないと思うんだ、だから大切なのは心、遺跡の欠片はシルムの心に共鳴したんじゃないかなあ、とにかく僕達ができるのもここまで、後は……シルムやドルク達……ブレイブで選ばれた者達にすべてを託そう、幻の大地へ行き、時の破壊を食い止めるのを……」

……

次の朝

シルム「なあラプラス」

ラプラス「なんでしょうか？」

シルムはラプラスに声を掛けた

シルム「大分長い時間泳いでるけど大丈夫か？」

ラプラス「僕なら大丈夫ですよ、シルムさん、それより……もう少しで着きますよ」

ドルク「急いだ方がいいな、急いでくれラプラス」

ラプラス「わかってます……ホラ！見えてきました！」

ソウ「えっ？」

ラプラス「海の前方にちょっと違う所が見えますよね？」

前方には波がねじれてるところがあった

ジュプトル「本当だ！波が……波がねじれてるぞ！」

ドルク「ラプラス！あれは！？」

ラプラス「あそこは時の狭間の境目（さかいめ）です、あそこを通って幻の台地へ行きます」

するとラプラスの泳ぎのスピードが上がる

ラプラス「さあ！行きますよ！」

スピードが上がり、ラプラスが海から浮いた

シルム「ああ！ラプラスが！ラプラスが飛んでるッ！」

ジュプトル「いや、違う！こ、これは……飛んでいるのではないぞ！時の海を渡っているのだ！」

そしてラプラスとドルク達の周りには水がアーチのように覆い、抜けていく

水のアーチを抜けると

前方には宙に浮く島が現れた

ジュプトル「ラプラス！あれが！あれが幻の大地なのか！！」

ラプラス「そうです！幻の大地です！突入します！」

ドルク達は幻の大地へと突入した

……

シルム「こ、ここが……幻の大地なのか……」

ジュプトル「ついに来たんだな、俺たちは」

ソウ「う、浮いてますよ師匠！？」

ドルク「ついに来たな……」

ラプラス「みなさん、正面を見てください」

みんなは正面を見た

シルム「あ！あれは！」

その先には闇の雲に覆われた塔がそびえ立っていた

ジュプトル「も…もしかしてあれが！」

ラプラス「そうです、あれが時限の塔です」

どうやらあれが時限の塔らしい

ジュプトル「……あそこにディアルガがいるんだな、あそこに行って……時の歯車を納めれば！」

ソウ「だけど空中に浮いているみたいですね、どうやってあそこに行けばいいんでしょうか？」

たしかに、あそこまで行くのは難しい

ラプラス「虹の石船に乗るのです」

ドルク達が振り向く

ジュプトル「虹の石船？」

ラプラス「はい、この先をずっと行くと古代の遺跡があります、そこに古代の船……虹の石船が眠っているのです、それに乗れば時限の塔まで行けるでしょう」

シルム「ありがとう！ラプラス！」

シルムはラプラスにお礼をした

ラプラス「僕ができるのもここまでです、後は時限の塔を目指して……がんばってください！」

シルム「うん！ジュプトル！ドルク！ソウ！もう少しだ！がんばろうな！」

ジュプトル「ああ」

ソウ「はい！」

ドルク「もちろんだ！……行くぞ！！みんな！！」

みんな「おおーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！！！！！」

ドルク達は幻の大地の奥、古代の遺跡まで急いで行った

ラプラス「がんばってください……」

第４６話　幻の大地へ（後書き）

なんかすごく泣きそう……

ドルク「ついにか」

次回はついに古代の遺跡へ！

ドルク「ついにか……」

だけどまた奴らが！？

第４７話　思いと別れ～お前達は最高のコンビだ！！～（前書き）

世界を救う！

俺達の未来のために！！

第47話　思いと別れ～お前達は最高のコンビだ！！～

４匹は古代の遺跡の通路を走っていた

壁には伝説のポケモンの壁画が書かれていた

それでもドルク達は走った

未来を救うために！！

……

古代の遺跡の通路の先に光が見えていた

ドルク達は通路を出た

その先には

シルム「こ…ここは！」

ジュプトル「遺跡の神殿だな」

ドルク「階段があるな、のぼるぞ！」

ドルク達は階段をのぼった

……

頂上についたドルク達

そこには

ドルク「ここは！」

シルム「オイラの遺跡の欠片と同じ模様だ！」

すると

ドルク「みんな！見ろ！」

空を見ると

ドルク「時限の塔があんな所に！」

すると

ドルク「なんだ？これは？」

ドルクは石盤を見つけた

ドルク達は早速石盤に駆け寄る

ジュプトル「どうした？ドルク」

ドルク「石盤がある！何か文字が書かれているんだ」

みんなはその石盤を見る

ジュプトル「これは、アンノーン文字だな、古代の文字で書かれて

いる」

ドルク「読めるのか？」

ジュプトル「ああ、このために俺は色々調べてきたのだからな」

シルム「ホント！すごい！早く読んでよ！」

シルムは目をキラキラさせる

ジュプトル「そうせかすな、ちょっと待ってろ」

ジュプトルは石盤の文字を解読した

だがその神殿の下には何かが出てくる

ソウ「どうですか？ジュプトル」

ジュプトル「……わかったぞ、どうやらこの神殿自体が……虹の石船になっているらしい」

シルム「ええっ！ここが！？」

この神殿自体が虹の石船そのものらしい

ジュプトル「ああ、そうだ」

ジュプトルはくぼみの所に行く

そのくぼみの部分には砂で隠れていた

ジュプトルは砂を振り払うと
そこにはくぼみがあった

ジュプトル「シルム、ここにシルムが持っている遺跡の欠片をはめこむんだ、そうすれば虹の石船は起動し、時限の塔へ行けると書かれている」

シルム「ホント!?」

ドルク「はめてみろよシルム」

シルム「うん!」

シルムは遺跡の欠片をはめこもうとしたその時!?

空から悪の波動が
それがちょうどはめ込もうとしたシルムに直撃

シルム「うわっ!?」

遺跡の欠片は飛ばされて、シルムも

ドルク「なっ!?」

ソウ「一体!?」

ジュプトル「何っ!?」

遺跡の欠片はヤミラミに取られてしまう

ドルク「ヤミラミ！」

そこからヤミラミ達がどんどん出てきてドルク達を囲んだ

シルム「欠片を返せ！」

？？？「フフフフッ！」

そこから奴が

ドルク「ヨノワール！」

ヨノワールだ

ヤミラミは遺跡の欠片をヨノワールに渡した

ヨノワール「ごくろうだった」

シルム「あーっ！！それはオイラの宝物だ！返せ！！」

しかし

ヨノワール「フン、未来は返させん」

ドルク「どうしてお前がここに！」

そうなると思うのは一つ

ヨノワール「簡単なことだ、ディアルガ様にここへ直接飛ばしてもらったのだ、お前達はかならずやってくる、ここで待ってた方が探す手間もはぶけるからな」

ドルク達「くッ……」

ヨノワール「後は任せたぞ」

ヨノワールは遺跡の欠片を持って未来へ逃げる気だ

ヤミラミ達がドルク達に襲いかかる

ドルク「みんな散れ！」

ドルク達は散ってそれぞれのヤミラミ達の攻撃を避けていく

その間ヨノワールは時空ホールへ向かう

遺跡の欠片がなければ虹の石船は起動しない、つまりそうなると時限の塔へは行けないのだ！！

……

その頃、トレジャータウンの時間が止まろうと暗黒の雲が迫ってきた

ネク「こっちに来る！？」

カザリ「僕のエアロガで！」

だがここで

プクリン「無駄だよ！」

真剣な表情のプクリン親方が外へ出てきた

ラース「でも！」

プクリン「言ったでしょ？僕達の役目はここまでだって、後は……
ドルク達ブレイブを信じよう！君たちもブレイブの一員だから信じ
てあげよう」

カザリ「…そうだね」

すると他のギルドのみんなも出てくる

ペラップは治ったためなんとかなった

ペラップ「お前達、頼んだぞ」

キマワリ「信じましょう、ブレイブを」

ドゴーム「俺達の！」

チリーン「未来の希望を！」

ビッパ「ドルク達を信じるでゲス！！」

ヘイガニ「ヘイヘイ！」

ラース「ソウ先輩！シルムさん！師匠！！」

ネク「俺たちの変わりに世界を救って！！」

カザリ「みんなの希望を！！」

みんなは手をつないだ

そして……

トレジャータウンの時間は止まった

みんなは手をつないだまま動かなくなった

……

シルム「フレイボール！」

シルムは炎の弾を数発ヤミラミ達に当てる

ドルク「エナジーカノン！」

ドルクは4発のエナジーボールを少し小さくまとめてはなってヤミラミ達にダメージを与える

ジュプトル「種マシンガン！！」

ジュプトルは種マシンガンでヤミラミ達にダメージを与える

ソウ「サウザントカッター（光）！！」

ソウは光のサウザントカッターでヤミラミ達にダメージを与える

しかし

シルム「だめだ！数が多いよ！」

ジュプトル「どうすれば！」

そこでドルクは

ドルク「ここは連携技で行くぞ！」

みんなは構える

ジュプトル「エナジーボール！」

シルム「バーンボール！」

ドルク「エナジーウィンド！」

ソウ「サウザントカッター（光）！！」

ジュプトルはエナジーボール、シルムはエナジーボールと同じ炎の弾を、それをドルクのエナジーウィンドと呼ぶ緑のエネルギーの風が二つの技を包み、最後に光のサウザントカッターがエナジーウィンドの周りをかまいたちのように包む

ドルク達『連携技！セイントウィンドバーン！！』

連携技がヤミラミ達を襲う

ヤミラミ達はぶっ飛ばされた

その間ヨノワールは時空ホールに

ヨノワール「この遺跡の欠片がなければ……誰も時限の塔に近づくことはできん、フフフッもうすぐです、ディアルガ様、今すぐもど…」

ヨノワールは勝利を確信し、時空ホールに入ろうとしたが

ガシッ

ヨノワール「何っ!?」

ジュプトル「ヨノワール!」

ジュプトルがヨノワールの足の部分を掴んでいた

ソウ「間に合ったようですね」

シルム「さあ!オイラの遺跡の欠片を渡してもらおうか!」

しかし

ヨノワール「ヤミラミ達を倒したか…成長したな!!ブレイブ!!」

ヨノワールは体を回転させてドルク達を振りほどいた

ヨノワール「だが私は負けん!!悪の波動!!」

悪の波動がドルク達に襲ってくる

ドルク達『うわあああああああああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!?』

全員吹っ飛ばされてしまった

ヨノワール「お前達の実力では私は倒せんのだ」

ドルク「くっ!だが俺達は負けねぇ!!」

シルム「くっ…やっぱヨノワールは強いや」

シルムは弱気をはく

ジュプトル「あきらめちゃだめだ!何処かに突破口があるはずだ!」

ソウ「ここでやられるわけにはいきません!!みんなのためにも!!」

そう、みんなの未来がかかっているのだ!!

ここで負けるわけにはいかないのだ!!

ヨノワール「ここまでやれたのは褒めてやろう」

ヨノワールのお腹の口が開く

ヨノワール「これで……終わりだァッ！！」

ジュプトル「気をつけろ！何かしかけてくるぞ！」

お腹の口からエネルギーが溜まる

どうやらシャドーボールを放つするつもりだ

ヨノワール「フフフフ…ハハハハハハハハッ！」

まるで吸い込まれそうな勢いだ

ジュプトル「くそっ！なんてパワーだ！」

ソウ「このままじゃ僕達がやられます！」

さらにお腹の口のエネルギーが大きくなる

ドルク「シルム！ジュプトル！ソウ！俺達の力で止めるしかねぇ！！」

ジュプトル「しかし、俺達の力を吸収されかねない、そうなると」

しかしドルクの目は真剣だった

ドルク「やるしかねぇんだ！！」

ドルクが叫ぶ

ジュプトル「……わかった！！」

シルム「オイラ達は絶対に！！」

ソウ「負けないです！！」

ドルク「行くぞ！！」

ヨノワール「食らえええええぇぇぇぇぇッ！！シャドーボール！！」

ヨノワールはシャドーボールを繰り出した

だがドルク達は負けずに技を出す

ジュプトル「エナジーボール！」

シルム「バーンボール！」

ドルク「エナジーウィンド！」

ソウ「サウザントカッター（光）！！」

ドルク達はそれぞれの技を合わせた

ドルク達『連携技！セイントウィンドバーン！！』

連携技、セイントウィンドバーンを放つ

シャドーボールとセイントウィンドバーンがぶつかる

だがシャドーボールが押されていた

ヨノワール「な、何っ！？」

ドルク「いっけえええええええ

ヤミラミ1「ウイイィッ、ま…まさかヨノワール様が!?」

ヤミラミ2「ヨノワール様が!?」

ヤミラミ3「ヨノワール様が……た、倒されたぁーーーーーーーーーーーーっ!!」

するとヤミラミ達は

ヤミラミ達「ウヒイィィィィッ!!」

ヤミラミ達は一斉に時空ホールへと入ってしまった

ドルク達はヨノワールに近づいた

シルム「へへっ、遺跡に欠片は返してもらうよ」

シルムは遺跡の欠片を取り返し、階段へ

シルム「ドルク!ジュプトル!ソウ!先に行ってるよ!」

ソウ「あっ!待ってください!」

ソウは追いかけた

ドルク「俺たちも行くぞ!」

ドルクもジュプトルも追いかける

しかし

ヨノワール「うぐぐっ……ジュプトル、ドルク……お前達は本当にこれでいいのか？」

ドルクとジュプトルは足を止める

ヨノワール「もし、歴史を変えたら……私達未来のポケモンは消えてしまうんだぞ」

ドルク「なんだと？」

ジュプトル「あいつの言ってることは気にするな」

だが

ヨノワール「私だけじゃない、お前達二匹……ジュプトルとドルクもそうだ……未来から来たお前達も消えてしまうんだぞ……それでもいいのか？」

ドルク「なんだと！？」

ソウ「師匠！」

シルム「おーい！ドルク！ジュプトル！なにやってんだよ～」

シルムとソウの声が聞こえる

ドルク「ヨノワールの言ってることは…ホントなのか！ジュプトル！」

ジュプトルは答える

ジュプトル「本当だ、ドルク」

ドルク「なんだって！？」

だがジュプトルは

ジュプトル「でも……でもいいんだ、それで時が動き、みんなが平和になるのなら、俺はそのためにやってきたのだから……またセレビィも……消えるのがわかっているうえで協力してくれてたんだ」

ドルク「セレビィもか！？」

……

セレビィ「それにもし星の停止を食い止めることができて……この暗黒の世界が変わるなら……私も命をかけて……ジュプトルさんに協力します」

……

ドルク「あの時のセレビィの言ってる意味はそういう意味だったのか！？」

ジュプトル「ドルク……そしてお前もそれは同じだった、その覚悟で俺達二匹は未来から来たのだ、ただ……今のお前に覚悟の記憶はない、だから急にこんなことを言われたら戸惑うと思う、しかし……どのみち俺達には選択肢はないのだ、このまま放っておけば時は

破壊され……やがて星の停止を迎えてしまう、世界を平和にするには……俺達は消える運命なのだ、わかってくれ、ドルク」

ドルクは暗くなる

ドルク「そうだったのか……俺はそんな覚悟でこの世界にやってきたのか……俺は……自ら消える覚悟で……だがなジュプトル」

ジュプトル「ドルク……」

だがドルクは真剣な目をしていた

ドルク「俺達がやらなくては時の破壊は止められないだろ？ならやるしかねぇ！！たとえ俺の命が尽きようとも！！俺は…やる！！」

ジュプトル「ドルク……」

ドルクの決意は固かった

ジュプトル「ただ……一つ気がかりなことが……この時代に来て変わってしまったことがある」

ドルク「変わってしまったこと」

その隙にヨノワールは立つ

ジュプトル「たしかに俺達の覚悟は決まっていた、この世界に初めてタイムスリップするとき……俺達には失うものなんて何もなかった、しかしドルク……今のお前は違う、今のお前にはシルムがいるのだ」

ドルク「シルムが！？」

ヨノワールはそのまま浮いてシルムとソウに向かう

だがドルク達は気付いていない

ジュプトル「シルムはお前のことをしたっている、もしお前がいなくなることを知ったら……シルムはきっと悲しむだろう」

ドルク「俺が消えた時…シルムは……」

……

シルム「遅いな～二匹とも～」

ソウ「遅いですね、何かあったんでしょうか？」

二匹は待ちくたびれている

シルム「もう！先に準備してるからな！！」

ヨノワール「そうはいくか！！」

復活したヨノワールがシルムとソウに向かって悪の波動を放った

シルム・ソウ「うわあああああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！？」

爆発が起こり、下にいるドルクとジュプトルにも伝わる

ドルク・ジュプトル「何っ!?」

ヨノワール「未来は変えさせん!!」

ヨノワールは再び遺跡に欠片を奪う

シルム「ああぁ!!」

ソウ「させません!!」

シルムとソウがジャンプする

シルム・ソウ「返せ!!」

シルムとソウはヨノワールに体当たりした

ヨノワール「ぐおっ!?」

その拍子に遺跡の欠片がヨノワールの手から離れる

そこから上にのぼってきたドルクが口でキャッチ

ドルク「大丈夫か!!シルム!!ソウ!!」

シルム「ドルク!!」

だがヨノワールはすかさず悪の波動をドルクに向けて放つ

ドルク「しまった!」

しかし

ジュプトル「ぐおっ！？」

ドルク「ジュプトル！？」

ジュプトルがドルクをかばい悪の波動のダメージを受けてしまった

ヨノワール「くっ……余計な邪魔を」

ヨノワールは復活してもまだダメージがあって倒れてしまった

シルム「大丈夫！ジュプトル！？」

シルムとソウが駆けつける

ジュプトルは苦しそうだ

すると

ジュプトル「うお…うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

突然ジュプトルはヨノワールを羽交い絞めに

ヨノワール「何っ！？」

ダメージを負っているヨノワールには抵抗する力は残っていない

ジュプトル「おりゃあああああああ

ジュプトル「やるんだ！そしてシルムならできる！お前達は！！最高のコンビだ！！」

ソウ「ジュプトル！！」

ジュプトル「ソウ！ドルクとシルムの事を頼んだぞ！！」

ソウ「ジュプトル！！（泣）」

ソウの目から自然と涙が出てくる

ジュプトル「ドルク！！急いでシルムとソウと一緒に虹の石船に乗り込め！！」

ブチッっとジュプトルは自分の肩にかけていた麻の袋についた縄をちぎった

ジュプトル「そして！！この袋に入ってる歯車を時限の塔にはめ込め！！」

袋から時の歯車がちらばり、カランカランと階段などに落ちる

ドスーン！とヨノワールとジュプトルは落ちた

だがジュプトルはヨノワールを羽交い絞めにしたままだ

ヨノワール「や、やめろジュプトル！」

ジュプトル「もう少しだ辛抱していろ！」

なおもヨノワールは抵抗するがジュプトルは放してくれない

ジュプトル「ドルク、俺はお前に会えて幸せだった」

ジュプトルの目がうるんだ

別れ行くかつてのパートナーに

ドルク「ジュプトル！」

ジュプトル「別れは辛いが後は頼んだぞ！！」

3匹は涙ながらジュプトルを見ていた

ドルク「くっ……ジュプトル！」

ジュプトル「またせたな！ヨノワール！」

ジュプトルはそのままヨノワールを羽交い絞めしたまま時空ホールへとジャンプする

ドルク・シルム・ソウ「ジュプトル！！」

そして時空ホールに最初ヨノワールが入り込んだ

そしてジュプトルも

ジュプトル「頼んだぞ、この世界を……美しい朝日を……守ってくれ……」

ジュプトルの目から涙が流れ、そしてジュプトルは時空ホールへと入っていった

ドルク・シルム・ソウ「ジュプトルーーー

涙が止まらない

シルム「オイラ、かならず時の破壊を食い止めて……」

シルムの目には涙が出なくなった

シルム「未来をいい世界に変えるからね！ジュプトルが幸せに住める世界に！きっと！」

もうシルムの目には涙がなかった

シルムとソウが時の歯車を集め終わり、ソウはシルムに時の歯車を渡した

シルム「なあ、ドルク、ジュプトルが最後にドルクに言った最後の言葉……」

……

ジュプトル「ドルク、俺はお前に会えて幸せだった」

ドルク「ジュプトル！」

ジュプトル「別れは辛いが後は頼んだぞ！！」

……

シルム「別れるのが辛いって言ってた……最後の言葉……オイラその気持ちが痛いほどわかるよ……だってジュプトルはドルクとずっ

とコンビを組んできたんだもん……ジュプトルはドルクと別れるのが……すごく辛かったんだと思う……」

ソウ「シルムさん……」

ドルク「（それもあるけどな……違うんだシルム……ジュプトルが俺に言った最後の言葉、あれは俺とジュプトルの事を言ったわけじゃねぇ……俺とシルムとソウの事を言ったんだ、ジュプトルはいずれ来るであろう俺とシルムとソウの別れをあんじて……言ってくれたんだ、歴史を変えたその時……俺は消滅する……シルム…そしてソウと一緒にいられるのも……この冒険で最後になる）」

そう……

ドルクの冒険ももう最後になるのだ

シルム

そしてソウとの最後の冒険に

シルム「ドルク！ジュプトルのためにも行こう！時限の塔へ！」

ドルク「ああ！」

……

シルム「はめるよ！」

ドルク「ああ」

ソウ「はい！」

シルムは遺跡の欠片をくぼみにはめた

するとくぼみは消えて模様がはっきりとなり、サークルができる

３匹はサークルに入った

すると

虹の石船は動き出した

後ろには虹が出ていた

シルム「あっ！あれを見てよ！」

目の前には時限の塔が見える

シルム「時限の塔だ！」

ソウ「ついに来てしまいましたね」

ドルク「そうだな」

だんだんと時限の塔へと近づく

シルム「オイラ達は……あそこへ……」

そして道が続いてるところに止まった

3匹は虹の石船から降りて時限の塔への道を歩く

ドルク「きついな……」

ソウ「大丈夫ですよ師匠」

シルム「もう少しだドルク、ソウ、がんばろう」

すると急にシルムは止まる

ソウ「どうしたんですか？」

シルム「あっ！あそこ……」

目の前には時限の塔、そのてっぺんには

シルム「時限の塔のてっぺんが赤くなっているけど……なんだろう？」

ソウ「何か嫌な感じです」

ソウは嫌な感じがした

ドルク達は急いだ

シルム「急ごう！」

……

時限の塔入口

シルム「ここが……ここが時限の塔の入口だな」

すると

シルム「わわっ！地面が揺れてるっ！」

突然地面が揺れた

しばらくしておさまった

ソウ「おさまりましたね」

シルム「今の地響きはなんだったんだろう……あっ！そういえば！前にジュプトルが言ってたよな！各地の時が破壊されたのは時限の塔が壊れ始めたからだって、だとするとさっきの地響きは」

ドルク「時限の塔が少しずつ壊れていってるってことだ急ぐぞ！！」

ドルク達は急いで時限の塔へ入った

第４８話　最後の冒険（前書き）

ジュプトル

俺は最後までシルム達とともに……

世界を救う！！

第４８話　最後の冒険

時限の塔

ドルク「はあ…はあ…」

ソウ「かなり敵が強いですね」

シルム「かなり疲れるよ」

時限の塔は最後の冒険にふさわしく、敵は強かった

ドルク「だがここであきらめるわけにはいかねぇ！！」

ドルクはまだまだやる気だ

すると

ソウ「そういえば……」

シルム「どうしたの？ソウ？」

ソウが何か言いたいようだ

ソウ「実はあの時の歯車の入った袋にこんなものが入ってたんです」

ソウが取り出したのはオーブだ

オーブの中にはV字の文字が赤く書かれていて、オーブの色が緑だった

ドルク「ジュプトルはこれも託してたのか…でも一体？」

ドルクがオーブに触れると

ドルク「光ったぞ！」

オーブが光出した

するとオーブはドルクの体にすっと入り込んだ

ソウ「オーブが！？」

シルム「入った！？」

ドルク「何がなんだかわからねぇな」

このオーブ、一体何の意味があったのだろうか

そんなこと気にしてる場合じゃない3匹は急いで進む

……

時限の塔中間地点

シルム「大分のぼったよな」

ドルク「そうだな」

ソウ「一番上まではあとどれくらいなんでしょう」

すると

シルム「わわっ！また地響きだ」

地響きがさっきより大きくなっていた

すぐさまおさまった

シルム「今の揺れはすごかったな、やっぱり……この塔はどんどん壊れてるのかな……なんとなくだけど……ラプラスの言うように時間を司るのがこの時限の塔だとすれば……最後はこの塔が壊れて……世界は星の停止を迎えるかもしれない……」

すると再び地響きがした

ドルク「急ぐぞ！」

シルム「うん！」

ソウ「はい！

ドルク「（ここまで来たか……最後になると……辛く感じるな……）」

ドルクはいまだにシルムとソウに言えなかった

ドルク「（俺の使命…そしてジュプトルが残した時の歯車と……俺の体に入った、V字のオーブ……ジュプトル…俺はこれを託したのは何かあるんだな……俺は……絶対に世界を救うからな！）」

ドルクはジュプトルの思いを胸に歩き出した

託された思い

そして、最後の冒険

シルムとソウとの……

……

頂上

そこは柱もあって床は少しヒビが入ってたり、少し穴が開いてたりしていた

シルム「ここが……時限の塔の一番上なのかな……」

ピシャーーーーーーーーーーン！！

シルム「わわっ！雷！」

ソウ「やばいですね」

するとシルムが

シルム「ドルク！ソウ！空を見てよ！」

空を見ると赤い雲が渦巻いていてそこから電気が流れ出していた

シルム「すごい！赤い雲が渦巻いている！」

するとまた地響きが

ソウ「またです！」

すぐに地響きがおさまる

シルム「なんかすぐにでもこの塔が崩れそうだな……」

ドルク「たしかにやばいな、急ぐぞ！」

3匹は先に進むと

シルム「あっ！あそこに！」

目の前には丸い石盤があり、そこには5つの窪み（くぼみ）があった

シルム「これはなんだろう……なんか神秘的な感じがするけど」

ドルク「サークルの模様の中に5つのえぐれるように崩れた窪みがあるな、なんだ……」

ソウ「師匠……これって」

そうだ5つの窪みがあるということは

ドルク「つまり……シルム！」

シルム「ドルク？どうしたの？」

ドルク「このサークル、時の歯車に合ってるはずだ」

このサークルの石盤はたしかに窪みは歯車の形だった

シルム「そ、そっか！この５つの窪みに時の歯車を納めれば……時の破壊が納まるかも！」

ソウ「急いでやりましょう！」

しかし

ピシャーーーーーーーーーーーン！！

ドルク・シルム・ソウ「うわあーっ！」

雷が３匹に直撃し、サークルから離れてしまった

すると辺りが暗くなった

ソウ「暗くなりましたよ？」

すると

グルルルルルルルルルルル……

獣の唸る声が聞こえる

？？？？「お前達か！この時限の塔を……破壊するものはッ！」

何処からか声が聞こえる

シルム「ええっ！？違うよ！オイラ達は時の破壊を防ぎに来たんだ！」

謎の声は

？？？？「トキノ……ハカイ……」

言葉がカタゴトになってきた

すると辺りが明るくなった

？？？？「トキノ……グオオオオオオォォォォォーーーーーーーッ！」

すると辺りがまぶしくなり、光がおさまると3匹の目の前には

シルム「ディ…」

ドルク「ディアルガ！！」

そう

黒き青色の体色に胸のオレンジの宝石

闇のディアルガだ

だが未来とは違って、正気な感じだった

ディアルガ「グオオオオォォォォーーーーーーーッ！お前達！どうしてもこの塔を破壊するというのかッ！」

シルム「違うよ！そうじゃない！」

ドルク「俺達はこの塔が崩れるのを防ぐために……」

だがディアルガは

ディアルガ「だまれっ！グルルルルルルルルルルルルル！時限の塔を壊す者は……私が許さんッ！！」

聞く耳もたない

ディアルガ「グオオォォーーーーーーーッ！！」

ドルク「くそっ！全然聞いてくれねぇ！」

シルム「一体？」

ドルクは何か思った

ドルク「ディアルガは時が壊れた影響で暴走してる、だが未来の世界のディアルガに比べると、まだ闇に染まっていないようだ、ディアルガを正気に戻すぞ！まだ希望はある！」

そうだ

今のディアルガは未来と比べてまだ闇に染まっていないレベルだ

ソウ「やるしかないですね！」

ソウが構える

シルム「く、来るぞ！ドルク！」

ディアルガ「グオオオォォォーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！」

ドルク「やるしかねぇ！！シルム！ソウ！行くぞ！！」

ソウ「はい師匠！！」

シルム「うん！！」

今

彼等の最後の戦いが

始まろうとしている

第４９話　絆と希望（前書き）

ついに闇のディアルガ戦です

今回、ドルク達に力が！？

ではどうぞ！

第４９話　絆と希望

ドルク「エナジーバスター！！」

ドルクは闇のディアルガに向けてエナジーバスターを放った

ディアルガ「効かぬ！」

闇のディアルガにエナジーバスターが直撃したが効く様子がない

ドルク「俺のエナジーバスターが効いてねぇ！？」

シルム「ならこれならどうだ！大文字！！」

ソウ「サウザントカッター（光）！！」

シルムの大文字とサウザントカッター（光）がディアルガに向ける

しかし

ディアルガ「時の咆哮！！」

ディアルガの最強技、時の咆哮が炸裂して二匹の技は消された

ドルク「避けろ！！」

３匹は散らばって時の咆哮を避けた

しばらくして動かなくなる闇のディアルガだが

しかし

ディアルガ「ドラゴンクロー！！」

闇のディアルガはドラゴンクローを繰り出す

ドルク「守る！！」

ドルクは守るで防いだ

ドルク「宿木の種！！」

ドルクは宿木の種を闇のディアルガに植え付けるか

ディアルガ「こんなもので私に通用すると思うか！！」

宿木の種は闇のディアルガに届かなかった

ドルク「なっ！？」

ドルクは驚く

ディアルガのかしこさスキル、威圧感

ソウ「威圧感は厄介ですね」

威圧感は厄介なかしこさスキルのため、技を無効にされる

ディアルガ「食らうがいい！！時の……咆哮！！」

闇のディアルガは時の咆哮を繰り出した

ドルク・シルム・ソウ「うわあああああああああああああああああ！！！！！！！！？」

ドルク達は時の咆哮を食らってしまった

ドルク「くっ……」

シルム「ううっ……」

ソウ「う……」

3匹はボロボロになっていた

だが時の咆哮は攻撃すればしばらくは動くことができないのだが、

ドルク達はダメージを受けて攻撃ができない

ディアルガ「げんしの力！！」

闇のディアルガは隙を与えない

ドルク「く……守る！！」

ドルクは守るを繰り出す

しかし

ディアルガ「ドラゴンクロー！！」

闇のディアルガはドラゴンクローで守るを破ろうとしている

ドルク「くっ！？」

しかし闇のディアルガはドラゴンクローを連続で繰り出す

すると

じょじょに守るのバリアにヒビが入る

ソウ「師匠！！アルテマ！！」

ソウはアルテマを繰り出す

ディアルガ「ぐおっ！？」

闇のディアルガにダメージが通る

ドルクは守るを解除し

ドルク「アルテマ！！」

アルテマで闇のディアルガに攻撃するが

ディアルガ「舐めるな！！」

アルテマは威圧感により無効にされた

シルム「バーンボール！！」

シルムは巨大な炎の弾を繰り出す

ディアルガ「時の咆哮！！」

闇のディアルガは時の咆哮で打ち消した

シルム「くっ……」

シルムは倒れてしまう

ドルク「シルム！」

ドルクはシルムに駆け寄る

ソウ「師匠！ここは僕が相手します！師匠はシルムさんを！」

ドルク「頼んだぞソウ！！」

ソウは闇のディアルガの相手を

ドルク「シルム、食え」

ドルクはオレンの実をシルムに食べさせた

シルム「ご…ごめん…ドルク……」

シルムは苦しそうにオレンの実を食べた

ドルク「ごめんな……」

ドルクの目には涙が

シルム「ドルクのせいじゃないよ、オイラが……」

ソウ「うわあああああああああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！？」

ソウは飛ばされた

ドルク・シルム「うわっ！？」

ドルクとシルムはソウにぶつかり飛ばされる

3匹は倒れてしまった

ソウ「し…しょ…う……」

ソウは苦しそうに言う

シルム「く……オイラ達……」

シルムも回復いしてるものの、体が動かない

ドルク「ソ…ウ…シ…ル…ム……」

ドルクもボロボロで体が動かない

ディアルガ「グオオオオオオォォォォォォォォーーーーーーーーーーーーッ！！！！！！！！！」

闇のディアルガが吼える

ドルク「（く…そ…体が……動かねぇ……）」

３匹とも動けない状態だ

ドルク「（くそ……俺は……ここで倒れるわけには……いかねぇんだ……ジュプトルとの約束と……世界を……救う……ために……）」

ドルクの目に涙がポツポツと落ちる

ドルク「（俺は……誰も……守れ……ないのか……チ……チクショ……チクショオ……）」

ディアルガ「これでトドメだ」

闇のディアルガは時の咆哮を溜める

これを食らえばドルク達もただではすまない

時の咆哮にエネルギーが溜まる

ドルク「（もう……終わりなのか……俺達は……）」

闇のディアルガの時の咆哮が最大まで溜まった

ディアルガ「終わりだ！！時の…咆哮！！」

闇のディアルガの時の咆哮が発射された

時の咆哮がドルク達に迫る

ドルク「（ジュプトル……俺……）」

時の咆哮がドルク達を飲み込んだ

……

ドルク「……」

ドルクは不思議な空間にいた

ドルク「……ここは……」

そこは青空が広がっていた

広く太陽が照らし出す空間

ドルク「俺は……死んだのか……」

ドルクは自分が死んだと思っている

そこに

？？？「あきらめるな」

ドルク「！？」

ドルクの目の前に光が現れ、そこから

ドルク「ジュプ…トル……」

ジュプトルだった

ジュプトル「お前言ってたろ？お前の命が尽きても……やると」

ドルク「でも……俺は負けたんだ……あいつに……」

ドルクは暗くなる

ドルクらしくない

ジュプトル「何言ってんだ、まだお前には希望がある、俺が時の歯車とついでに託した……クロスオーブを」

ドルク「クロス…オーブ？」

あの時ソウが渡したV字の文字が入ったオーブのことだ

ジュプトル「そうだ、それはお前とシルム、そして俺達の絆だ、お前に使いこなせる、仲間を思う気持ちが、クロスオーブに伝わる…念じるんだ……お前の思いを！！」

ドルクは頷き念じた

ドルク「俺は……」

ドルクは願った

俺は……

俺は！！

世界を！！

そして仲間を！！

みんなを！！

守る！！

するとドルクの体が光った

……

ディアルガ「これで……終わったな……」

闇のディアルガは勝利を確信した

だが

ディアルガ「なっ！？」

闇のディアルガは見た

煙が晴れるとそこには

ドルク「……」

強力なバリアを張ったドルクの姿だった

シルム「ん……オイラ達は……」

ソウ「あれ？……僕達は……」

いつの間にかシルムとソウの傷は治っていた

シルム「ドルク！」

ソウ「師匠！」

バリアは消えた

ドルク「大丈夫か？」

シルム「うん！」

ソウ「はい！」

シルムとソウは大丈夫のようだ

ディアルガ「バ…バカな！？」

闇のディアルガは唖然としていた

ドルク「俺は負けねぇ！！この命に代えても！！みんなを守るとな！！」

ドルクの体が緑のオーラに包まれた

すると

シルム「わっ！オイラにも！？」

ソウ「これは！？」

シルムには赤いオーラが包み込み

ソウには白いオーラが包み込む

ドルク「行くぜ！！ディアルガ！！」

ドルク達はジャンプして上空で3匹が一つに集まり

光が包み込んだ

ディアルガ「くっ……」

闇のディアルガは目を瞑った

そしてドルク達は叫んだ

ドルク・シルム・ソウ「ポケ！クロス！！」

叫んだ後、姿が変わった

まず足は筋肉質で白い足の鎧をつけていて

腕は機械の鎧で右は赤、左は緑になっていて、手はロボットの部品

の手のようだ

右肩にはイーブイの顔をした形のもの、左にはヒコザルの顔をした形のもの

胸にはナエトルの顔をした形のものがついている

そして顔は白い甲冑（かっちゅう）で隠れていて、さらに角みたいなものがついていた、目は真剣で正義感を思わせる目だ

背中には探検隊バッジを模したものがついていた

ドルク「ドルクＸ３！！」

ドルク…いやドルクＸ３は闇のディアルガに接近する

第４９話　絆と希望（後書き）

ふう～

ドルク「ついに出たな♪」

うん、ポケクロス、というかデジクロのデジクロスみたいだけどね（汗）

シルム「これなら勝てるかも！」

ソウ「すごいです！！」

やっぱドルクのイメージＣＶにはこうやらないとね～と思って♪

シルム「なんでもありのように思っちゃう（汗）」

ソウ「さすがフォックさんです！」

次回はドルクＸ３の実力をとくとごらんあれ！

第５０話　ブレイブソウル（前書き）

ドルクＸ３「あ～やっぱいいな～♪」

よかったね、さて闇のディアルガを

ドルク「行くぜ！！」

第５０話　ブレイブソウル

ドルクＸ３が闇のディアルガに迫る

ディアルガ「無駄だ！！メタルクロー！！」

闇のディアルガはメタルクローを繰り出すが

ガシッ

ドルクＸ３がメタルクローを受け止めた

ドルクＸ３「無駄なのは……」

闇のディアルガを掴んで

ドルクＸ３「お前の方だ！！」

闇のディアルガを掴んで投げた

ディアルガ「グワッ！？」

闇のディアルガは地面に叩きつけられた

ディアルガ「グオッ……」

闇のディアルガはダメージを受けても立ち上がる

ディアルガ「くっ……」

闇のディアルガは苦しそうだ

ドルクＸ３「行くぜ！！セイントバスター！！」

ドルクＸ３は両手を構えだして光の光線を撃つ

ディアルガ「げんしの力！」

闇のディアルガはげんしの力で防ごうとしたが

ディアルガ「何っ！？」

セイントバスターがげんしの力の岩を次々と消していき

ディアルガ「グオッ！？」

闇のディアルガに直撃

ドルクＸ３「ナエトルレーザー！！」

ドルクＸ３の胸のナエトルの顔の形のものから若葉のような光線が出る

ディアルガ「グオッ！？」

闇のディアルガは避けられず食らってしまう

ディアルガ「グオオオオオオォォォォーーーーーーーーー

ーーーーーッ！！！！！！！」

闇のディアルガは吼える

すると再び時の咆哮を繰り出そうとしている

するとドルクＸ３は構える

ドルクＸ３の周りから緑のオーラが包む

ディアルガ「食らえ！！時の……咆哮ーーーーー

ソウ『師匠！！』

シルム『ドルク！！』

ドルクＸ３「ブレイブソウル！！」

ドルクＸ３は時の咆哮に突進した

それが直撃するが時の咆哮は裂かれてドルクＸ３はオーラをまとったまま、そのまま突撃する

ディアルガ「何っ！？」

闇のディアルガは驚いていた

自分の最強技が

彼…いや彼等に通用しないと

ドルクＸ３「オラアアア

ドカーーー

ソウ「世界は星の停止に向かって一気に加速してるってことですね！？」

地響きが大きくなり、地面にヒビが大きく入る

シルム「ううっ……早くしなくちゃ」

ドルク達は急いで石盤の元へ

シルム「ううっ……地面が揺れてて……時の歯車を納めるのが難しいぞ……」

ドルク「俺が押さえる！」

ドルクがシルムを押さえた

ソウ「シルムさん！」

シルム「ありがとう！」

シルムは時の歯車を石盤に納めた

シルム「やった！うまくはまった！」

石盤の時の歯車は納まり光を包む

すると石盤には時の歯車はなく、石盤は新しくなり、丸いぐぼみがない不思議な模様の石盤になった

だが地面が激しく揺れる

ドルク・シルム・ソウ「うわあああああっ！」

ドルク達は階段から転げ落ちて倒れてしまった

だが揺れはおさまらない

ドルク達はすぐさま立った

シルム「ど、どうして！？時の歯車はあそこに納めたんだよ！それなのにどうして地響きがおさまらないんだ！？」

ソウ「まさか……もうすでに間に合わなく」

シルム「時限の塔もこのまま崩れ落ちて……星の停止を……迎えちゃうんじゃ」

すると雷が落ちて柱が崩れ、地面もさらに揺れた

ドルク・シルム・ソウ「うわあああああああああああああああああああああああっ！」

光が包み込んだ

第５１話　君がいない世界（前書き）

ハンカチの用意を（汗）

ここからは涙が流れるシーンがあるため、一応ハンカチの用意を

ではどうぞ

第５１話　君がいない世界

ドルク「……うぅっ……うぅっ……こ、ここは……」

光がおさまった

ドルクはすぐに起きた

ドルク「こ、ここは……」

ドルクが辺りを見渡すと

ドルク「シルム！ソウ！」

ドルクは倒れてるシルムとソウの元へ

ドルク「おい！シルム！ソウ！」

ドルクはシルムとソウを起こす

シルム「……うぅっ……うーん……」

ソウ「ううっ……」

シルムとソウが起きだす

シルム「あ……ドルク……」

ソウ「師匠……」

二人は大丈夫のようだ

ドルク「よかった！無事で！」

ドルクは少し涙を流す

シルム「心配かけてごめんね」

ソウ「師匠……」

３匹は無事のようだ

シルム「こ、ここは？……」

ディアルガ「ここは……時限の塔だ」

３匹の目の前にはディアルガがいた

ドルク「なっ！？ディアルガ！！」

ドルク達が構えるが

ディアルガ「ま、待て！構えなくてよい！正気は取り戻した」

ドルク・シルム・ソウ「えっ？」

闇に染まったディアルガは正気を戻した

体の色は元の透き通った青い体色となり

オレンジだった宝石…こんごうだまは青い色へと戻った

ソウ「戻ってる……」

そう、ディアルガは闇から解放されたのだ

ディアルガ「時限の塔も大分崩れてしまったが……何とか持ちこたえた、これを見てくれ」

ディアルガは振り返り、胸のこんごうだまが光った

すると

シルム「こ、これは……」

止まっていたはずのキザキの森は動きを見せていた

ドルク「これはディアルガのテレパシーか何かで……俺達に映像を送りこんでるのか」

ソウ「ここはキザキの森ですね」

シルム「……！そうだ！キザキの森は時が止まってたはずなのに……時間が……時間がまた動き出しているよ！」

そう

キザキの森は再び時間が動きだしたのだ

次の映像は

シルム「トレジャータウンだ、みんな元気そうにしてる！」

トレジャータウンは暗黒の雲により、時間が止まってしまったが、
その時間は再び動いたのだ

そして最後に

シルム「時限の塔だ、大分壊れちゃってるけど」

ソウ「しっかりと残ってますよ！」

ドルク「時限の塔は崩れ落ちずになんとか残ったようだな！」

映像はここで消えた

ディアルガ「時限の塔は残り、時が戻ったことにより……止まっていた各地の時間もまた動き始めた、時限の塔の破壊が止められたことで……星の停止を免れたのだ、世界の平和は……保たれたのだ」

シルム「ホ…ホント！？」

3匹がお互いに振り向く

シルム「やった！ドルク！ソウ！オイラ達はついにやったんだな！！」

ソウ「はい！世界は平和になったんですよ！！」

3匹はディアルガに振り向く

ディアルガ「礼を言わせてくれ、よくぞ幻の大地まで到達し、暴走する私を恐れず……時限の塔の破壊を食い止めてくれた、ありがとう、すべてはお前達のおかげだ」

ドルク「ディアルガ……」

ディアルガは3匹に礼を言った

ディアルガ「しかしまだすべてがおさまったわけではない、私もこれからすぐに時限の塔を修復しなくては」

ディアルガは周りを見る

ディアルガ「幻の大地も大分荒れてしまったが……それでも虹の石船はまだ動くだろうし……ラプラスもお前達を待っているはずだ」

シルム「うん！ドルク！ソウ！帰ろう！トレジャータウンに！」

ソウ「はい！」

ドルク「ああ（だが俺は……）」

そう、ドルクはあまり嬉しくない

自分の使命が終わり

自分が消えいく運命を

……

帰り道

3匹は坂を下りていく

だがドルクは苦しそうな表情をする

シルム「どうした?ドルク」

ソウ「早く行きましょう師匠」

ドルク「（……くっ……体が……重い……なんでこんなにも……体が動かねぇんだ……まるで……足に重りがついてるようだ……やっぱ……歴史を変えたことで……俺の消滅の時が……近づいているのか……）」

すると地響きがした

ソウ「うわっ!?」

シルム「地響きだ!」

地響きはすぐにおさまった

シルム「揺れが止まった……」

ソウ「まだ完全におさまってないのかもしれませんね」

シルム「行こうドルク」

ドルク「ああ」

二匹は先にいった

ドルクも行こうする

するとドルクの体に異変が

ドルク「（！…こ、この光は……そうか……やはりとうとう……とうとうこの時が来たんだな……俺がシルムとソウと一緒にいられるのも……ここまでだ……）」

シルム「おーい！ドルクー」

シルムとソウが来る

シルム「あれ？ドルク……」

ソウ「師匠！？どうしたんですか！？体が……体が光に！？」

ドルクはシルムとソウに言った

ドルク「ごめんな……シルム、ソウ、ずっと話せなくて……どうやら……ここでお別れだ……」

シルム「ええっ？……お…お別れだって！？」

ソウ「そんな！師匠！？」

彼等はショックを受けた

ソウ「どういうことなんですか師匠！？」

ドルク「ヨノワールが言ってたんだ、歴史を変えると未来のポケモンも消えるとな……だから俺も……消える運命にあるんだ」

シルム「え？ええ？ど、どうして？」

ソウ「なんでですか！？よくわかりませんよ！」

ドルク「今まで本当にありがとな、俺はここで消えてしまうけどな……でもソウのことはずっと忘れねぇ、そして……シルムのこと……ずっと忘れねぇ（泣）」

ドルクの目に涙が出てくる

シルム「ちょ、ちょっと待ってよ……オイラドルクがいたからここまでがんばれたんだよ？ドルクがいたから……強くなれたんだよ？……（泣）」

ソウ「僕も……師匠がいたからここまでがんばってきたんですよ（泣）師匠がいなくなったら……」

シルム「ドルクがいなくなったら……オイラは……オイラはもう……どうしたら……（泣）」

だがドルクは首を横に振り

ドルク「だめだシルム、ソウ、お前達だけでも強く生きるんだ、ちゃんと生きて帰って……ここであったことをみんなに話すんだ、こんなことはもう……二度と起こさないようにするためにな……（泣）」

ソウ「師匠！（泣）」

シルム「ううっ……ドルク……（泣）」

ドルクの体の光がさらに増す

ドルク「……！光が……光が強くなってきたな……」

シルム「だめだ！ドルク！いっちゃ…だめだ……」

ソウ「行かないでください！師匠！！（泣）」

ドルク「ソウ、お前と探検して……楽しかったぜ……お前と一緒だと俺は幸せだった」

ドルクの涙が地面にポタポタと落ちる

ソウ「くすっ……師匠（泣）」

ドルク「シルム、今までありがとな、一緒にギルドで修行して……一緒に冒険できて……シルムに出会えて……本当によかった……」

シルム「ドルク……待ってくれ……（泣）」

ドルク「でもごめんな、せっかくお前と友達になれたってのに……

（泣）」

友達

ドルクはもうシルムという唯一の親友ができた

シルム「そうだよ、ドルク、ドルクはオイラにとって……何より大切な……（泣）」

ソウ「そして……僕の大切な……（泣）」

ドルク「ああ、俺もだ、ソウの事……そしてシルムの事は……ここで消えてしまっても……ずっと忘れないからな」

するとドルクは光の粒子に包まれて消えた

シルムとソウが駆け出す

シルム「ドルク！ドルク！！」

ソウ「師匠！師匠！！」

シルム「ドルクーーー

二人は泣き叫んだ

自分の師との別れ

そして自分の友達との別れ

二匹は声がかれるまで泣き叫んだ

……

数分後

二匹は歩いた

シルム「……」

ソウ「……」

シルム「……生きて……生きて帰らなきゃ……（泣）」

ソウ「帰って……このことをみんなに話して……（泣）」

泣きながら二匹は歩き出した

シルム「それが……ドルクの……（泣）」

ソウ「それが……師匠の……（泣）」

シルム「ドルクの……最後の願いだから……（泣）」

すると

ソウ「あ、あれは……」

シルム「虹の石船だ……」

二匹は虹に石船乗った

虹の石船は動いた

シルム「時限の塔が……遠くなっていく……ドルクが……（泣）」

ソウ「師匠が……（泣）」

遠くなっていく時限の塔

シルム「ドルクが離れていく……ドルク……（泣）」

ソウ「師匠……（泣）」

二匹の思い

そして……今いないドルクの思い

それぞれが遠くなっていく

流れゆく涙があふれていく

悲しみは

深いままに

水のように流れていく

……

こうしてドルクとシルム、そしてソウは……

見事使命を果たし……世界の危機を救いました

またシルムとソウは……

崩れた幻の大地を踏み越え……

ラプラスに乗り……

無事トレジャータウンに帰りつくのでした

シルムとソウはギルドに帰ってくると……

みんなに今回の冒険の事を話しました

幻の大地で起きたこと……

時限の塔でのこと……

ジュプトルやドルクの事……

もちろん時の破壊を防ぐことができ……

世界が平和になったことも……

そして一番ショックを受けたのは……

ブレイブのメンバーであるネクとカザリとラースでした

ネクは涙を流し

カザリもネクと同じように泣き

ラースは泣き叫んだ

……

そしてシルムとソウは色々な場所で……

できるかぎり多くのポケモンに……

今回あったことを必死に伝えたのです

世界の平和を願うように……

未来の平和を祈るように……

そうして月日は流れ……

トレジャータウンにも平穏な日々が過ぎて行きました

そして今回の事件のほとぼりも……

大分さめてきたころ……

第５１話　君がいない世界（後書き）

書きながらドルクの別れを見て……悲しく（泣）

やっぱずっとわすれないは神曲でした（泣）

なんでポケダンの曲ってこういい曲があるんだろう

そしてこういう悲しく、切なく、涙する曲を作ったんだろう

マジで少し泣きました

実際、俺も時の探検隊をやって、ずっとわすれないと主人公の別れを見て、泣きましたから（泣）

こんなに悲しくて感動してしまったんだなっと

感じました

さて次回は……その後です

第５２話　思い出と再会（前書き）

その後です

第５２話　思い出と再会

夕方のギルド

シルムとソウが歩き出す

ビッパ「あれ？シルム、ソウ、お出かけでゲスか？」

シルム「うん、ちょっと散歩にね」

ソウ「僕もシルムさんと同じ散歩ですよ」

二匹は散歩らしい

ビッパ「そうでゲスか～もうちょっとで夕飯だから早く帰ってくるでゲスよ～」

シルム「うん、わかったよ」

ソウ「はい」

二匹は歩き出した

……

海岸にクラブの泡が綺麗に飛ぶ

シルム「わあ～！綺麗だあ！」

ソウ「綺麗ですね」

夕方の海岸はクラブの泡で綺麗だ

シルム「久しぶりに見たけど、やっぱり綺麗だなあ、今まで忙しくて見にいけなかったけど……やっぱりいいよな、この光景」

ソウ「シルムさんも前にこの光景見てたのですか？」

ソウが質問してくる

シルム「うん……たしか……前にここで見たのっていつだっけ？」

シルムが唸る

ソウ「何か余計なことを？」

シルム「いや……そうじゃないけど……たしか前に見たのって……そっか……前に見たのは……ドルクと……初めて出会った時だ……」

ソウ「えっ！？」

ソウは驚く

そう

この光景はシルムとドルクが最初に会った時だった

シルム「あの時もこんな風景だった……」

シルムがちょっと歩く

ソウも後からついてくる

そして少しして止まった

ソウ「師匠……」

ソウが暗くなる

シルム「クラブ達のたくさんの泡が浜辺をおおっていて……気がつくとちょうどこの場所に……ドルクが……倒れてて……そしてそこから……オイラとドルクの……冒険が始まったんだ……」

ソウ「ここが……師匠が倒れたところ……ここでシルムさんと師匠は出会ったんですね……」

ここでドルクとシルムは出会い

探検隊を作った

お腹がなったときや……

ソウ「僕を助けたときも……」

シルム「一緒に戦ったときも……」

霧の湖のイルミネーションのときも……

ソウ「僕が師匠とシルムさんとジュプトルを助けたことも……」

シルム「オイラを心配してくれたときも……」

探検隊ブレイブを結成したときも……

流砂に入ったときも……

大水晶の道の時も……

ソウ「未来で僕達との絆を深めたときも……」

シルム「虹の箱船のときも……」

二匹の思い出が走馬灯(そうまとう)のように思い出す

シルム「今でも感じるよ……ドルクと一緒に過ごした思い出を……ドルクの……その面影を……」

ソウ「でも……」

シルムとソウに目には涙が

シルム「でも今……ドルクはいない……ここに……ドルクはいないんだ……」

二匹は泣き崩れてしまった

すると

ビッパ「わっ！シルム！」

ネク「ソウ！」

カザリ「二人とも！」

ラース「シルムさん！ソウ先輩！」

ビッパとネクとカザリとラースは二匹に駆けつける

ネク「心配したんだよ」

カザリ「あまりにも帰りが遅いから……でもどうしたの？」

ラース「何かあったんですか？」

すると二匹は振り向いて

シルム「ビ、ビッパ！！」

ソウ「ネク君！カザリ君！！」

シルム・ソウ「わあああああああああああああああああああああああああああん！！！！！」

二匹は思いっきり泣き出した

ビッパ「わわっ！？本当にどうしたんでゲスか！？」

二匹の泣き叫ぶ声が聞こえる

ネク「ソウ、シルム……」

ネクは二匹を自分の翼で抱きつく

ラース「ソウ先輩…シルムさん……」

カザリ「ソウちゃん、シルムちゃん」

カザリは悲しい表情をしてしまう

もうドルクには会えないのか

そんな二匹の悲しみがこだまする

……

幻の大地

ここは少しは元通りにはなったがまだ崩れている部分もある

その上には

少しずつだがまだ崩れてる部分がある時限の塔がある

そんな時限の塔の頂上

ディアルガ「シルム、ソウ、お前達がここを離れるとき……虹の石船でここから別れを告げるとき……お前達の悲しみが……ここまで強く伝わってきた、お前達が今も願うなら……そしてドルクも同じ

く望むなら……私もそれを受け入れよう、お前達はこの世界に必要な存在だ、だからこそ……託すのだ！お前達に……これからの未来を！」

ディアルガは振り向く

ディアルガ「これは私からの礼だッ！受け取るがいいッ！！」

グオオオオオオォォォォォーーー

突然シルムとソウの後ろから一つの光が

みんな「!?」

それは段々とおさまっていく

そこから出てきたのは

ドルク「ここは?……」

ドルクだった

シルム「ドルク!!」

ソウ「師匠!!」

ネク「ドルク!!」

カザリ・ラース「師匠!!」

みんなはドルクに駆け寄る

ドルク「お前等……」

そうドルクは戻ってきたのだ

この世界に

ドルク「ただいま……ただいま……(泣)」

ドルクは泣きながらただいまをいった

シルム「ドルクーーー

帰ってきた彼

忘れない

思い出を

ずっと一緒だよ

俺達は……

第５２話　思い出と再会（後書き）

ドルク「戻って来たぜ！！」

シルム「これで小説の方も終わりだね」

シルム～だ～れが終わりって言った？

シルム「えっ？」

まだ続きがあるんだよつ・づ・き・が！

ドルク「でもな～ポケクロスもできねぇかもな」

何いってんの、ポケクロスはもう定着してるんだよ、次回からはその能力＋新章突入だよ！

ドルク「おっしゃあ！！暴れるぜ！！」

シルム「オイラ達の活躍、またまた見てくれよな！」

ソウ「僕達も♪」

ネク「たっぷりと♪」

カザリ「暴れるよ♪」

ラース「楽しみにしててください♪」

次回もお楽しみに

第５３話　ギルド卒業試験（前書き）

ドルク「久しぶりの更新じゃあああああああああああああああああああああああ！！！

第５３話　ギルド卒業試験

ドルクとシルムとソウの活躍によって
時の歯車は食い止められ
ポケモンの世界には平和が訪れました
もちろんすべてがおさまったわけではなく
時がまだ正常でないところもありましたが……
それでも、少しずつよくなる方向に向かっているのでした
一方ドルクとシルム、そしてソウを始めとする仲間達も
プクリンのギルドに戻り
また厳しい修行の毎日に明け暮れていました
しかし
そのブレイブの仲間の中で、ラースは
ある方が大変なことになったのをきに
こちらの世界から去っていきました
彼もまたドルク達に別れを告げて

自分の世界へと戻っていきました

そうして数ヶ月たった朝……

朝礼の時間

シルム「ええ～っ！？そ…卒業だって～！？」

ペラップ「そうだ、ギルドを卒業だ♪」

なんとドルク達ブレイブはギルド卒業ということになった

ペラップ「卒業すればギルドから出られるし……毎日の辛い修行からもおさらばだ」

だが卒業には条件が

ペラップ「ただし、卒業試験に合格しないとだめだがな」

卒業試験

それがドルク達ブレイブのギルドでも生活の終わりを告げている

ヘイガニ「ヘイ！ペラップ！」

ヘイガニが叫ぶ

ヘイガニ「おいら達先輩をさしおいて……なんでドルク達が先に卒

業試験なんだよ！ヘイヘイ！」

たしかに

ほとんどのポケモン達はみんなドルク達の先輩だ

だが差があった

ペラップ「お前達とはすでに実績が違う、何と言ってもドルク達は世界を救ったのだからな♪試験を受ける資格があるのも当たり前だ」

ドルク「ほう～その割にはいいこというな駄目鳥」

ペラップ「ペラップだ！！（怒）」

ペラップがツッコむ

ペラップ「ゴホン、というわけだ、これから卒業試験を行うからがんばってくれ♪」

ドルク「楽しみだな♪」

ドルクは嬉しそうだ

ソウ「どんな試験なんでしょうね師匠？」

どんな試験なのかはわからない

だが

キマワリ「去年はドゴームが卒業試験を受けたわよね」

なんと実はドゴームが卒業試験を受けていたのだ

しかし

ヘイガニ「でもあっけなく落ちたけどな、ヘイヘイ！」

ヘイガニは馬鹿にしたような言い方をする

ドゴーム「う、うるさいっ！！」

ドゴームは恥ずかしくなり焦ってしまった

ドルク「（後でこいつをお……聞くか）」

今ドルクさん、脅すとか思ってませんでした（汗）

シルム「それで……卒業試験って何をすればいいんだい？」

その卒業試験の内容は？

プクリン親方が説明した

プクリン「神秘の森という森の奥に……光の泉という場所があるんだよ」

シルム・ソウ「光の泉？」

光の泉、シルムとソウが頭にハテナを浮かべる

プクリン「うん♪元々進化できる場所だったんだけど……時が壊れた影響なのか、今は泉に光がささなくて……進化もできないんだけどね」

ドルク「（進化か……）」

ドルクは想像した

……

ドルク（ドダイドス）「オラァ！！」

ペラップ「いやあああああああ

ペラップ「その光の泉に行き……そこにあるお宝を取ってきて欲しいのだ♪お宝を無事持ち帰ることができれば合格だ、お前達は一人前の探検隊として認められ……はれてギルドから卒業できる♪」

シルム「そっか！お宝を取ってくれればいいんだね！」

ネク「それならいけるね♪」

ソウ「そうですね♪」

カザリ「わ～い♪」

楽しそうな雰囲気なブレイブ一行

シルムはドルクに振り向く

シルム「ドルク！がんばろうな！」

ドルク「もちろんだぜ♪」

だがプクリン親方が

プクリン「ただ……気をつけてほしいことが一つ」

ドルク「気をつけてほしいこと？」

それは忠告ってことのようだ

プクリン「あそこには……とても恐ろしい……悪の大魔王が住んで

いるんだよ」

シルム「あ……悪の大魔王だってぇ！？」

ドルク「大魔王か……」

悪の大魔王とは？

プクリン「うん、大魔王はとても凶悪で……誰も関わりたくないぐらい恐ろしい存在だけど……がんばってね♪」

と、親方はいつもの拍子抜けな笑顔で応援する

シルム「ええ～～～～～～～～～～～～～っ！？」

ある意味やばそうな感じだ

ペラップ「以上、今日の朝礼終わり！それではみんなっ♪仕事にかかるよ♪」

みんな「おおーーーーーーーーーーーーっ！！」

みんなは解散した

シルム「ドルク！どうしよう！大魔王だって！」

ドルク「大魔王か……これはおもしれぇな♪（黒）」

ドルクは嬉しそうだ

ソウ「これは僕達の出番ですね♪（黒）」

ネク「面白そう♪（黒）」

カザリ「楽しそう♪（黒）」

ドルク・ソウ・ネク・カザリ「フフフフ（黒）」

４人の目がキランと光る

シルム「（汗）とりあえず…ドゴーム！」

ドルク達は去年試験を受けたドゴームに聞く

シルム「ドゴームは去年卒業試験を受けてるんだろ？だったら教えてくれ、悪の大魔王ってどんな奴なんだい？」

聞くが、ドゴームはなぜか震えていた

ドゴーム「うぐっ……残念だがそれは教えられん、ギルドのしきたりだからな」

ドルク「チッ」

ドルクは舌打ちした

ドゴーム「しかし……これだけは言っておこう……とても……とても恐ろしい……出来事が待っていると……あれは……今思い出しても……うわあああぁぁぁぁっ！！」

ドゴームは逃げてしまった

ソウ「よっぽど嫌なトラウマってことですね」

シルム「ううっ……ドゴームに聞いても結局よくわからなかったな……とにかく卒業できるようにがんばるしかないな」

ドルク「とりあえずトレジャータウンで準備しに行くぞ」

ドルク達はトレジャータウンで準備をすることに

……

トレジャータウン

ヒメグマ「あっ！シルムさん！ドルクさん！こんにちは！」

シルム「あっ！ヒメグマにリングマ！どうしたんだい？これから何処かお出かけ？」

ドルク「何かあるのか？」

ヒメグマとリングマと話しているドルクとシルム

ヒメグマ「うん、これから神秘の森へ」

シルム「えっ！？神秘の森だって！？」

ドルク「あそこは危険じゃないのか？なにしろ悪の大魔王がいるって話だったぞ？」

しかし二人は頭にハテナが浮かぶ

リングマ「あ、悪の大魔王？そんなの……聞いたことがないよな、ドルクなら悪魔亀大王ドル君でお尋ね者では有名になってるしな、何かの間違いじゃないか？」

ヒメグマ「私達よく神秘の森に遊びに行くけど……大魔王なんて一度も見たことないわよ？」

何かの聞き間違いなのだろうか？

リングマ「たぶん変な噂とか聞いたんだろうそれは」

ドルク「そうなのか……」

変な噂なのかどうかはわからないが

リングマ「行こうぜ」

ヒメグマ「じゃあね」

二人は神秘の森へと向かった

ドルク「なんか変だな……」

シルム「プクリン親方が言ってたこととずいぶん違うんだけど……」

ソウ「これは何かありそうですね」

ネク「そうだね」

カザリ「準備して行こう」

ドルク達は準備をして神秘の森へと向かった

第５３話　ギルド卒業試験（後書き）

はい、新章です

ドルク「ついに卒業か……」

次回はドルク達が悪の大魔王とご対面！！

シルム「そういえばラースがいなくなっちゃったけどどうしたの？」

ある話であいつが死んだからラースは帰ったのだよ

ソウ「ラースさん、また会えますでしょうか？」

また会えるときが来ると思うよ、さて次回もお楽しみに

第５４話　悪の大魔王の正体（前書き）

さて、悪の大魔王の正体は！？

ドルク「早くやれ」

まてまて！？エナジーバスター打つなって！？ではどうぞ！

第５４話　悪の大魔王の正体

神秘の森

シルム「ここが神秘の森の入口だな」

ドルク「油断はできねぇ、この奥の宝物はどんなもんかわからねぇが」

ソウ「僕達の卒業試験ですしがんばりましょう」

ネク「試験に合格してギルドを卒業しよう！」

カザリ「がんばろう師匠！みんな！」

ドルク達は神秘の森へと入った

……

ソウ「あまり敵が強いわけではないようですね」

ドルク「俺と同じ種族もいやがる」

神秘の森にはドルクやソウと同じナエトルやイーブイがいる

ネク「俺達は強くなったからだよ」

シルム「たしかにそうだね」

依頼や特訓をしたためか、ドルク達は闇のディアルガと戦った以降、
強くなっていた

ドルクには新たな能力、ポケクロスも持っている

それなりに彼らも成長しているのだ

ドルク「まあ特訓の成果だ、悪の大魔王でもやっつけてやるぜ」

ドルクは気合を入れる

……

神秘の森奥地

シルム「大分奥まで来たよな」

ドルク「この先に光の泉があるんだな」

そこに

ヒメグマ「あっ！シルムさん！ドルクさん！それにソウさんとネクさんとガザリさん！」

後ろからヒメグマとリングマが来た

ソウ「ヒメグマさんにリングマさん！あなた方も来てたんですか」

ヒメグマ「うん」

リングマ「ここへは遊びによく来るからな、それでどうだ?悪の大魔王はいたのか?」

ドルク「それが、全然見かけなかったぜ」

たしかにここにはそんな輩(やから)はいなかった

リングマ「だろ?だから単なる噂だって言ったじゃないか」

ヒメグマ「君達はどうしてここに?その大魔王を探しに来たの?」

ドルク「いや、俺達は光の泉を探しに来たんだ」

そう、本来の目的は試験だ

ヒメグマ「ああ、光の泉なら!このすぐ先にあるわよ」

ネク「この先なんだね?」

ヒメグマ「私達もこれから行こうとしてたとこ、一緒に来る?」

リングマ「来るなら着いて来な」

ヒメグマとリングマは先に行った

シルム「ドルク!みんな!オイラ達も行こう!」

ソウ「そうですね」

ネク・カザリ「うん」

先に進もうとし、ドルク達は進んだが、目の前の床がズボッとなった

ネク「え？」

下には落とし穴があった

全員『うわあああぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！！？』

ドルク達は落とし穴に落ちてしまった

……

落ちたそこは岩だらけの空洞だった

シルム「イタタタタ……」

ドルク「酷い目にあったぜ……」

なんとか全員が立ち上がる

周りを見渡した

シルム「こ、ここは……」

ドルク「さっきのは落とし穴だったのか……」

カザリ「僕の透視能力があったのに使わなかったから、油断してたよ」

すると

ズズズズズズズズズ

シルム「ああ！穴がっ！穴が閉まっていく！」

穴がしまって暗くなってしまった

ソウ「真っ暗で何も見えませんね」

シルム「オイラ達閉じ込められたのかな！」

そう、ドルク達は閉じ込められたのだ

すると

？？？「クックックックックッ！」

ドルク「だ、誰だ！！」

暗くて何も見えないため姿を確認できない

？？？「ようこそ、闇の世界へ、僕は悪の大魔王」

ドルク「何っ！？」

シルム「あ、悪の……大魔王だってぇ～～～っ！？」

すると今度は別の声が

？？？「フンッ！大魔王だけじゃないぞ♪」

？？？「ワシ達大魔王の子分もたくさん来てるんだぜ！」

子分「真っ暗でわからんだろうが……お前達は完全に包囲されてるんだっ！」

ある意味警察の犯人の包囲みたいだ（汗）

大魔王「クックックックッ！クーックックックックックックッ！ここに来たら最後……生きては返さないよ、覚悟し……」

すると穴が開き

明るくなる

大魔王「あ……」

そこにはプクリン親方と弟子達がドルク達を囲んでいた

シルム「あれ！？親方！？」

ドルク「それにお前等まで」

ソウ「どうしてそんなとこにいるんですか？」

ネク「何がしたいの？」

カザリ「ビックリさせないでよ～」

弟子達が焦る

子分（ペラップ）「こ、こら！ビッパ！！なんで蓋（ふた）を開けたのだ！？」

すると上からビッパの声が聞こえる

ビッパ「え？ええ～～っ！？」

落とし穴の上の方

そこにはビッパが上からみんなを見ていた

ビッパ「だ、だって真っ暗だと見づらいかなと思ったんで開けたでゲスが……もしかして余計なことしちゃったでゲスかねぇ……卒業試験の手伝いなんて……あっしは何せ初めてなんでわからんでゲスよう～ううっ……」

たしかにビッパはギルドに入ってまもない、当然のことだ

……

戻って下

子分（ペラ八）「ううっなんと言う……ってゴラァ！！作者！！なんで名前をペラ八にしてんじゃおい！！（怒）」

だってその方がいいもん♪ｂｙ作者

ペラ八の作者へのキレツッコミが炸裂した

ドルク「なあ親方様、これはどういうことなんだ？」

ドルクが聞くが、親方様は

大魔王（プクリン）「……プ、プクリンってだあれ？」

ドルク達『えっ！？』

なんと知らないふりをしたのだ

大魔王（プクリン）「僕は大魔王、プクリンなんて知らないよ」

シルム「ええっ！？」

そして今度はペラ八までも知らないふりをする

子分（ペラ八）「そ…その通り！そして私達もそこ子分！」

子分（キマワリ）「その通り！私も知りませんわ！キマワリなんて！」

子分（ハイテンション蟹）「ヘイヘイ！ってハイテンション蟹って作者！！」

うるさいよナッコー！（怒）ｂｙ作者

ドルク「たしかに中の人がな」

シルム「なんなんだよう！」

もはや何がなんだかになっていた（汗）

大魔王（プクリン）「クックックッここに来たら最後、生きては返さないよ！大魔王の恐怖……とくと味わうがいいよーーーーー！たあーーーー

シルムも構えた

ドルク「行くぜ！！探検隊チーム・ブレイブ！！突撃だ！！」

ドルク達『おおーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！』

ついに大魔王と子分ＶＳブレイブの

対決が今始まる！！

第５４話　悪の大魔王の正体（後書き）

ドルク「親方だったんだな」

うん、卒業試験にふさわしいバトルになりそうだよ♪

子分（ペラ八）「それより私の名前はペラップだ！！（怒）」

子分（ハイテンション蟹）「ヘイヘイ！ハイテンション蟹じゃねぇ！！」

ナックルズだろ？

子分（ナッコー）「ヘイヘイ！そうそう俺は……って違う！！」↑

ノリツッコミ

もしくはイジワルズゲンガー

子分（ゲンガー）「ヘイヘイ！そうだケケッ…ってこれも違うだろ！！ヘイヘイ！！」

だってね～

シルム「すごくいじられてる（汗）」

次回は大魔王＋子分ＶＳブレイブの対決です♪

第５５話　大乱闘バトル！悪魔亀大王ＶＳ大魔王（前書き）

悪魔亀大王と大魔王、そして子分と仲間達の大乱闘の始まりですｗｗ

ドルク「よっしゃあ！！」

シルム「スパーク団ＶＳコラボ軍団のあれみたいだね（汗）」

まあバイオレンスな感じになるでしょう（笑）

シルム「えっ！？」

そんな第５５話をどうぞ

第５５話　大乱闘バトル！悪魔亀大王ＶＳ大魔王

子分（ペラ八）「（今までやられた分、倍に返してやるわ！！）」

子分（スピーカー）「（ワシもこの腹黒亀に何度やられたことか、ここで倒してやる！！）」

子分のペラ八＆スピーカーは闘志を燃やす

あの悪魔亀大王ドル君に何度もやられまくりでどうやらしかえししようとしている

ドルク「みんな！行くぞ！！」

ドルク達『おおーーーーーーーーーーーーーーーー！！』

それぞれ散らばって戦う

……

子分（キマワリ姉さん）「まずはあなたからやられなさいですわ！」

子分（チリーン）「覚悟してください！」

ソウ「僕はそう簡単にやられませんよ、お二人とも」

ソウはキマワリとチリーンを相手する

2対1ではソウは不利だが

子分（キマワリ姉さん）「行きますわよ、花びらの舞ですわ！」

キマワリは花びらの舞を繰り出す

子分（チリーン）「ねんりき！」

チリーンはねんりきを繰り出す

ソウ「守る！」

ソウは守るで防いだ

ソウ「ホーリーボール！」

ソウは白いエネルギーをチリーンに放つ

子分（チリーン）「きゃあああああっ！？」

チリーンは倒れてしまった

子分（キマワリ姉さん）「葉っぱカッター！」

キマワリは葉っぱカッターを繰り出す

ソウ「サウザントカッター（炎）！」

ソウは炎属性のサウザントカッターを繰り出して葉っぱカッターをごとごとく無効にした

子分（キマワリ姉さん）「そんな！？」

キマワリは動揺する

ソウ「セイントバスター！！」

ソウはホーリーボールを光線にして放った

子分（キマワリ姉さん）「きゃーーー

ダグトリオとディグダの親子はいわなだれ、グレッグルは地震だ

ネク「インビシブリーズ」

ネクの体が全体が風となり技がはずれた

ネク「ブレイズキック！」

ネクはそこからグレッグルの背後にまわりブレイズキックを炸裂した

子分（シビレビレ）「ぐおっ！？」

グレッグルはブレイズキックで倒れてしまった

子分（ダクトリオ）「何っ！？」

ダグトリオは動揺してしまう

子分（ディグダ）「どうしよう！？」

息子のディグダもどうしようかで戸惑う

だがネクは隙を与えない

ネク「フラッドトルネード！」

ネクは水をまとった竜巻を発生させた

子分（ディグダ）「うわあああああああああああああああ

あああああっ！！！！！！！！！？」

子分（ダグトリオ）「ぐわあああああああああああああああああああああ
あああっ！！！！！！！！！！！？」

親子同時に戦闘不能に

……

カザリ「さて、相手はヘイガニだね」

子分（ハイテンション蟹）「ヘイヘイ！おいらは負けねぇ！！」

気合を入れるヘイガニ

カザリ「でも僕は負けるつもりないよ、エアロサンダー！！」

カザリは風と雷を組み合わせた技でヘイガニを倒す、しかし

子分（ハイテンション蟹）「ま…まだだぜ！」

ヘイガニはボロボロになりながら立ち上がる

カザリ「すごいね♪」

カザリは余裕の表情だ

子分（ハイテンション蟹）「クラブハンマー！！」

ヘイガニはクラブハンマーを繰り出す

カザリ「アイアンテール！」

カキーン！！

カザリはアイアンテールで防ぐ

子分（ハイテンション蟹）「バブル光線！」

ヘイガニはいったんカザリから離れてバブル光線を繰り出した

カザリ「ならサンダーボルト！！」

カザリは口から強力な雷の光線を繰り出した

バブル光線はすべてその技で無効のされ、ヘイガニに襲い掛かった

子分（ハイテンション蟹）「ヘイヘーーーーーーーーーーーーーーーーーーーイ！！」

光線があたり、ヘイガニから強力な電気が浴びせられる

シュウ～……

ヘイガニはボロボロとなり倒れてしまった

……

子分（ペラ八）・子分（スピーカー）「覚悟！！」

ペラ八&ドゴームは目を光らせてドルクとシルムに襲い掛かろうとしている

ドルク「エナジーフレイム!!」

ドルクは緑色の炎を吐いた

子分（ペラ八）・子分（スピーカー）「ぎゃあああああああ

ビッパ「あっしが戦ったら完全にやられるでゲス（汗）」

たしかに（汗）

……

ドルク「残るは大魔王だけだ！」

残っているのはプクリン親方だけだ

大魔王（プクリン）「子分達を倒したようだね♪でも僕はそう簡単に倒れないよ！」

すると大魔王は何処からか剣というか刀を取り出す

大魔王（プクリン）「さて、君達に倒れるわけにはいかないよ♪いくよ……魔法剣！ファイガ！！」

プクリンの刀から炎が刀身をまとう

ドルク「守る！」

カキーン！！

ドルクは守るで防いだ

シルム「大文字！！」

シルムは大文字を繰り出すが

大魔王（プクリン）「斬岩剣！！」

ズバッ！

なんとプクリンは大文字を一刀両断にしてしまった

シルム「えっ！？」

ソウ「かなりの剣の使い手ですね」

たしかに、大文字を一刀両断してるってことは相当の実力だ

ドルク「なら……ここは行くぜ！みんな！」

ドルクの体が緑のオーラを包み込む

ドルク「シルム！ソウ！ネク！ガザリ！ポケクロス！！」

ドルクがそう言うとシルムは赤いオーラをまとい、ソウは白いオーラをまとい、ネクはシルムと同じ赤いオーラをまとい、ガザリは黄色いオーラをまとった

ドルク達が一つに集まり

ドルク達『ポケ！！クロス！！』

合体する

足は長く、腕はロボットのように力強く、前のディアルガ戦で戦っ

た時と同じ姿だったが、今回は違かった

背中にはネクの翼、そしてレントラーの盾を持っていて、剣は白と黒と半分の刀身の剣だった、剣は赤く燃えるように燃える

ドルク「ドルクＸ５！！」

ドルクＸ５

剣を持ち、盾を持ったドルク達の姿

それはまるで騎士のようだった

大魔王（プクリン）「これが噂のポケクロスなんだね……なら僕も本気で行くよ！！マキシマムドラゴン！！」

プクリンは刀を一振りした、そこから炎の龍が現れた

ドルクＸ５「とおりゃあああああああああああああああああああああああ！！！

カキーン！！

剣と刀がぶつかり合う

大魔王（プクリン）「百花両断（ひゃっかりょうだん）！！」

プクリンの刀から桜の花びらが舞う

ドルクＸ５「ウィンドブレード！！」

ドルクの剣が風をまといきりつける

カキーン！！

キーン！！

キーン！！

お互いの剣がぶつかり合い、火花を散らす

大魔王（プクリン）「（ここまでやるなんて……これがブレイブの絆なんだね）」

プクリンはそう考えて後退した

大魔王（プクリン）「（でも僕は負けないよ！！）百烈桜花斬！！」

素早くプクリンは剣でドルクＸ５に斬りつける

しかし

カキーン！！

大魔王（プクリン）「えっ！？」

ドルクＸ５「そうはいくか！！」

プクリンを押し出した

大魔王（プクリン）「うわっ！？」

プクリンは再び後退した

ドルクＸ５「ブレイブ……」

剣を横にして構えた

するとそこから若葉マークが現れる

ドルクＸ５「エナジイイイ

大魔王（プクリン）「僕の……負けだよ……」

光線はプクリンをのみこんだ

おさまるとプクリンは倒れていた

ドルクはポケクロスを解除した

ドルク「よっしゃあああああああ

第５５話　大乱闘バトル！悪魔亀大王ＶＳ大魔王（後書き）

書くの大変（汗）

シルム「親方の技って中の人の入ってるね（汗）」

そうだよ、少しオリ技にしてるのもあるけどね

ドルク「でもいいバトルだったぜ♪」

まあ満足ならそれでいいよ（汗）

第５６話　ギルド卒業～新たなるスタート～（前書き）

ドルク「これで卒業だ！！」

うん、今回は大魔王と戦った後からです、ではどうぞ

第５６話　ギルド卒業～新たなるスタート～

大魔王（プクリン）「や、やられたぁ～……みんな逃げろ～～～～～～っ！」

穴からまず

大魔王（プクリン）「ひゃーーーーーーーーーーーーーーーーー！」

子分（ペラ八）「ひゃーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！」

親方とペラップが出てきて走り出していった

その次から

子分（キマワリ姉さん）「きゃーーーーーーーーーーーーーーーーーー！」

キマワリとグレッグルが穴から飛び出していき、走り去っていった

さらにそこから

子分（ハイテンション蟹）「ヘイヘーーーーーーーーーーーーイ！！」

ヘイガニ・ドゴーム・チリーンの３匹が飛び出して走り去っていった

そこからドルク達が穴から飛び出してきた

シルム「ふうっ……」

ドルク「あ～楽しかったぜ♪」

ドルクは嬉しそうだった

シルム「結局なんだったんだろうな」

ソウ「まあでも結果オーライですよ♪」

と、ソウがニコニコと笑顔を見せる

シルム「とにかく先へ……光の泉へ行ってみよう」

ドルク達は光の泉へ

……

光の泉

シルム「あっ！ヒメグマ！リングマ！」

二匹は何か宝物のような箱を見ていた

すぐにドルク達に振り向く

リングマ「おっ、お前達、どうしたんだ？俺達のすぐ後を着いてきたと思ってたんだが……」

ネク「なんでもないよ」

カザリ「ちょっと色々あってね」

シルム「それより……どうしたんだい？」

リングマは置いてあった宝箱を見る

リングマ「いや、ここに宝箱が置いてあるんだけど……」

ヒメグマ「前は宝箱なんて置いてなかったのよ、開けてみたいけど、なんか怪しい気もするし……」

リングマ「ホラ、なんか罠とか仕掛けてあったら嫌だろ？それで開けるかどうしようか悩んでたんだよ」

たしかに罠とかもあるかもしれない、どうすればいいのか？そこで

シルム「それなら！オイラ達が開けてみるよ、オイラ達、ギルドの卒業試験で……ここの宝物を取ってくるように言われてるんだ」

リングマ「そっか！じゃあそれに関係してるのかもしれないな、お前達で開けてみてくれ」

シルム「ドルク、お願いしてもいいかい？」

ドルク「いいぜ」

ドルクは宝箱に近づいた

ドルク「（大丈夫だと思うが一応用心だな、とりあえず時空の叫びが発動できれば、この宝物が安全なのかどうかもわかるはずだ）」

ドルクは宝箱に触れてみた

すると

ドルク「（めまいが……めまいが始まりやがった）」

閃光が始まりだした

……

ドルク「（プクリン親方だ）」

プクリンが光の泉に来ていた

プクリンはまわりを確認した

そして、プクリンは宝箱を置き、もう一度まわりを確認して帰っていった

……

ドルク「（ここに宝を置いたのは親方だったのか、ということは……この宝箱の中身は）」

ドルクは宝箱を開けてみた

パカッ

そこからリンゴがポーンポーンとバウンドして落ちていった

リングマ「こ、これは……」

ヒメグマ「これはセカイイチだわ」

シルム「光の泉にある宝って……セカイイチだったのか」

ソウ「でもなんでセカイイチなんでしょうかね？」

ソウが疑問に思い頭を少し傾ける

ドルク「まあ親方らしいし、拾おうぜ」

ドルクはセカイイチを拾い、トレジャーバックにしまった

すると何処からか何かが

シルム「わわっ！な、なんだろう！」

泉の中央から光がスポットライトのように中心に光る

ネク「あれは？」

リングマ「光が……光が差し込みはじめたぞ！」

ヒメグマ「じゃあもしかしたら！光の泉も復活したのかな！？」

ドルク達は光の元へ

すると何処からか声が聞こえる

……目覚める者達よ……

シルム「わわっ！何処からか声が！」

その声の主は話を続ける

時が動き出すことで……

光もまたここに流れ始めた

進化したい者は前に来るがよい

ヒメグマ「やっぱり！」

ヒメグマはリングマに向ける

ヒメグマ「やっぱり光の泉が復活したのね！」

リングマ「よかったな！ヒメグマ！お前ずっと進化したがってたからな！」

ヒメグマ「うん！」

どうやらヒメグマは進化を望んでいたらしい

シルム「進化？」

シルムは首をかしげる

シルム「あっ！そういえば前に親方が……」

……

シルム・ソウ「光の泉？」

プクリン「うん♪元々進化できる場所だったんだけど……時が壊れた影響なのか、今は泉に光がささなくて……進化もできないんだけどね」

……

シルム「親方もここは元々進化できる場所だって言ってたけど……でも進化って一体なんなの？」

リングマ「なんだお前進化を知らないのか？」

ソウ「僕はわかりますよ」

ソウはわかっているらしい

ヒメグマ「ポケモンは元々ある条件を満たすと……進化して自分の姿が変わったりするのよ」

シルム「ええ！？自分の姿が変わるのっ！？」

リングマ「ああ」

カザリ「僕はレントラーだから進化できないし」

ネク「俺も進化できないよ」

カザリは最終進化系なのでこれ以上進化はできない

ネクもオリポケでも最終進化系なのでこれ以上進化はできない

リングマ「たしかにそうだな、それに変わるのは姿だけではないぞ、進化すると自分の持つ能力も上がることがあるんだぜ？」

シルム「そ、そうなの！？」

ヒメグマ「うん♪私もっと強くなりたかったの、だからずっと進化したかったのよ、早速試してみるね」

ヒメグマはそう言うと差し込んだ光の中へ

……目覚める者達よ……

ここは光の泉、汝（なんじ）新たな進化を求めるか？

ヒメグマ「うん！お願い！」

ヒメグマは元気な声で言う

汝、道具は必要か？

声の主は道具は必要かと質問してきた

ヒメグマ「いや、いらないです！」

ヒメグマはそう答えた

……承知した……

……目覚める者達よ……では始めるぞ

……ヒメグマの様子に変化が……

ヒメグマは姿が変わり……

ヒメグマからリングマへ進化した！！

シルム「わわっ！ヒメグマがリングマみたいになっちゃったぞ！」

そりゃあ進化後の姿はそうなのだ

リングマ♀「やったー！」

ヒメグマだったリングマは喜んだ

リングマ♀「どうお？リングマ、私進化したわよ」

リングマ♂「おめでとう！今までがんばってレベルを上げてきたかいがあったな、なんか俺達見分けがつきにくくなったけど……でもまあよかったな！（汗）」

ほぼ同じなのでどっちなのかわからない

シルム「ドルク！オイラ達も進化してみようぜ！」

ドルク「そうだな♪」

ソウ「僕は召喚獣があるから進化や退化はできるので師匠とシルムさんが」

ソウは技で進化するため遠慮する

イーブイは進化系統が多い種族なのでどれに進化するかは道具にもよる

シルム「先にオイラからやってみるな」

シルムが光の中へ

……目覚める者達よ……

ここは光の泉、汝、新たな進化を求めるか？

シルム「うん！進化したいよ！よろしくね！ドキドキ……」

シルムはドキドキとしていた

ドルク「俺も進化してぇ～」

ドルクも待ち遠しくなり落ち着かない様子だ

汝、道具は必要か？

道具が必要か質問してきた

シルム「道具？……よくわからないけど……いいや、いらないよ」

……承知した……

……目覚める者達よ……では始めるぞ

しかし

シーン

……

……いやだめだ……汝は進化できない

シルム「ええ！？どうして！？どうして進化できないの？もしかして進化できる条件がそろってないのかな？」

驚いたシルムは慌てて声の主に質問した

いや、そうではない

進化条件は大丈夫みたいなのだが

条件などの問題ではない……

シルム「だったらどうして？ヒメグマは進化できたのに……なんでオイラは進化できないんだい？」

その理由は

汝が進化できないのは……おそらく空間の歪みによる影響だと思われる

シルム「空間の……歪み？」

なぜそうなのかはわからないが……とにかく汝の存在が空間の歪みを引き起こしている……そしてその影響で汝のみ進化はできない……いや汝だけではない……もう一匹いる……汝の真後ろにいる者もまた、進化できない

ドルク「何っ！？」

なんとドルクまで進化できないようだ

シルム「ええっ！？ドルクも！？」

ドルク「ちょっと待て！！俺が進化しないっておい！！（怒）テメェ！！エナジーバスターぶちこむぞ！！（怒）」

怒り狂ったドルクがエナジーバスターを放つ準備をする

シルム「落ち着いてよドルク！！？」

リングマ♂「進化できないからって壊すな！！落ち着け！？」

なんとかドルクの怒りをおさめた

（汗）そこまで文句言われる筋合いはないが……わかることはここ

までだ……ここは光の泉、新たな進化を求める者はまた来るがよい
……

中央の光が消える

シルム「どうやらオイラだけでなく……ドルクも進化できないようだな、なんでなのかはわからないけど……」

シルムは酷く落ち込んだ

ソウ「調べた方がいいですね、空間の歪みの事を」

たしかに、ここで落ち込んでいる場合ではない

ネク「まあでにお宝のセカイイチも取ったことだし」

ドルク「そうだな……とりあえずギルドに帰ろうぜ」

ドルク達はギルドへと帰って行った

……

ギルド地下2階

みんながドルク達を囲んで集まっていた

プクリン「卒業試験合格～～～

プクリン「おめでとう！君達はギルドの卒業試験に合格したんだよ♪やったねーーーーーっ♪」

みんなが拍手する

拍手がおさまり

プクリン「……あれ？どうして喜ばないの？もしかしてあまり嬉しくないの？」

プクリンはシルム達に聞く

シルム「いや、嬉しいけどなんかピンとこなくて……あまりたいしたことしてないような気が……」

しかしプクリンは慌てて

プクリン「そんなことないよ！君達はとてつもないことをやってのけたんだよ！？だってセカイイチというすごいお宝を取ってきたわけだし……」

それは自分の大好物だと思いますが（汗）

プクリン「何よりあのとても恐ろしい……悪の大魔王を倒したじゃないの！？」

ドルク達の目の前にいますけどね（汗）

シルム「ううっ……悪の大魔王を倒したことを……なんで親方が知

ってるの？」

プクリン「……なんとなく……かな？……」

いや戦ったじゃないですか（汗）

シルム「それにさあ……悪の大魔王って……もしかして親方じゃないの？」

ドルク達はジーっとプクリンを見る

プクリン「えっ？」

プクリンと弟子達が慌てる

プクリンの額から冷や汗が出る

プクリン「？？？……さ、さあ？ぼ、僕は知らないよ、あ、悪の大魔王なんて……」

プクリンの隣にいるペラップは慌てて自分の翼をばたつかせ

ペラップ「つ、ついでに！私も知らないよ、大魔王の子分なんて……」

ヘイガニ「おいらも……」

キマワリ「私も……」

みんな「ハハハハハハハハハハハッ！」

いや思いっきりやってただろとツッコミたく思った（汗）

みんなは笑ってごまかした

シルム「みんななんなんだよ……」

ドルク「（逆にツッコミたくなるぜ（汗））」

もろドルク達にはバレバレに思うが（汗）

ペラップは再び翼をばたつかせた

ペラップ「とにかく！お前達はギルドを卒業できたのだ♪これからはギルドの厳しいしきたりに縛られずに……探検隊の活動ができるんだぞ♪」

シルム「あっ！そっか！じゃあこれからは掲示板の報酬や賞金も……ギルドに取られずにまるごともらえるんだね！やったな！ドルク！」

しかし

ペラップ「いや、残念ながらそこだけは同じだ、いつもどおり報酬のほとんどはギルドに支払ってもらう」

ドルク「さて、どういうことか説明してもらおうか？」

ドルクはペラップにエナジーバスターを打つ準備をしていた

もちろんソウはアルテマ、ネクはコンプレッサンダーの準備を

ペラップ「わかりましたからそれだけはやめてえええええええええええええええ！！！！！？」

ペラップは必死に彼らの攻撃を止める

気を取りなおして説明

ペラップ「え～卒業と言ってものれんわけだからな、ブレイブの探検活動も親方様のギルドがあってこそなのだ、だからそこについては我慢しな♪」

ドルク「まあお尋ね者だけは報酬は変わらねぇしな～」

ほとんどお尋ね者の逮捕が多いため、ブレイブのお尋ね者の報酬だけはなぜか高い感じなのだ、そこはプクリン親方が決定しているため、ブレイブはお尋ね者以外は報酬の１０分の１はギルド支払いだ、まあお尋ね者も少し分けた感じでギルドに支払うが（汗）

シルム「ううっ……それじゃ今までとあまり変わってないような……」

シルムは落ち込むが、そこに声を掛けたのはキマワリだった

キマワリ「でも……ギルドを卒業できるだけでもスゴイですわよ！」

ドゴーム「そうだぜ！なんだってこのワシが卒業できなかったぐらいだからな！ガハハハハハハハハハハハハーーーーッ！！」

ドゴームは泣きながら笑った

プクリン「とにかく君達は試験に合格したんだよ♪これからも探検活動がんばってね♪」

シルム「プクリン……」

そう、これからの新たなスタートなのだ

チリーン「おめでとうございます！シルムさん！ドルクさん！ソウさん！ネクさん！カザリさん！」

キマワリ「すごいことですわー！」

ヘイガニ「ヘイヘーイ！」

ビッパ「ううっ……嬉しすぎて……あっしは……あっしは……（泣）」

ビッパは涙を流す

ドゴーム「たまには遊びに来いよな！」

シルム「み、みんなぁ……（泣）」

シルムの目から涙が出る

ドルク「ありがとなお前等♪」

ドルクは喜んで笑顔になる

プクリン「おめでとう♪ブレイブ♪」

再びクラッカーと拍手がでる

シルム「ううっ……みんな……みんなありがとう！」

……

その後、ドルク達はギルドから１００００ポケをもらい

彼らはサメハダ岩へと向かった

シルム「ギルドの部屋ももう使えないから……今日からはここで寝泊りしような」

ドルク「そうだな、世話になるぜ相棒♪」

ソウ「お世話になります」

ネク「で？ちょっと悪いんだけど？」

ドルク達はネクに向ける

ネク「空間の歪みについては俺とカザリちゃんで調べるからここでお別れだよ」

そう、ドルクとシルムが進化できない原因、空間の歪み

その原因を探るべく、ネクとカザリはしばらく帰って来ないようだ

ドルク「そうか、何かわかったら連絡してくれ」

カザリ「うん♪師匠もシルムちゃんとソウちゃんも元気でね」

ソウ「ネク君とカザリ君もお元気で」

ネクとカザリは去った

シルム「行っちゃった……卒業って言われてもなんかピンと来ないけど……でもこれからも一緒に探検隊をやっていこうな」

ドルク「ああ！俺達はいつでも繋がっているからな！」

そう、たとえ離れても絆は繋がっている

シルム「今日からここが……オイラ達ブレイブの新しい探検基地だ！」

ドルク「がんばろうな！！」

シルム・ソウ「おおーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

これから新しいスタートをきったブレイブ

別れた仲間もいつかまた会える日がある

彼らの物語は新たなスタートをきったのである

第５６話　ギルド卒業～新たなるスタート～（後書き）

卒業おめでとう！！

ドルク「よっしゃあ！！」

シルム「オイラ達のこれからだよ！」

ソウ「楽しみです♪」

さて、ネク君とカザリ君はまた別の話で登場させますのでしばらくお待ちください

第57話　空の頂（前書き）

……

ドルク「作者？どうした？」

シルム「なんでもトラブルがあって機嫌が悪いみたいだよ、そのせいで更新しようとしているオイラ達の小説が手を出せない状態だったみたい」

ドルク「とりあえずなんとかなったってことか……作者の代わりに俺が言うぜ、第57話」

ドルク・シルム「どうぞ！」

第57話　空の頂

次の日

交差点

シルム「あれ？カフェの入り口に誰かいるぞ」

パッチールのカフェの入り口にはバリヤードとオクタンがいた

ドルク「なあ、何してるんだ？」

ドルクが二人に聞いた

バリヤード「うん、なんだかね、探検家のみんなにむけて、嬉しいお知らせがあるらしいよ」

ソウ「嬉しいお知らせ？」

オクタン「嬉しいお知らせって何かしら？なんだかとっても気になりますの、アタクシ行ってみますわ」

そういうとオクタンはカフェの中へ

バリヤード「僕も行ってみようっと」

バリヤードも中へとはいった

シルム「ん?そういえば前にもこんなことがあったような」

ドルク「今度はどんなお知らせか楽しみだな♪シルム、ソウ、俺達も中に入るぞ」

ソウ「はい♪」

3人は中へ入った

……

シルム「わあ、みんな集まってるな」

そこにはチームかまいたちなどの探検隊が集まっていた

ドルク達はパッチールとソーナノとソーナンスがみえるところまでいった

パッチール「えーみなさん!お忙しい中お集まりいただきありがとうございますぅ〜」

みんなが話しをやめてパッチール達に視線を向けた

パッチール「今日はみなさんに嬉しいお知らせがございますぅ〜みなさん、「空の頂」という山はご存知でしょうか?」

オクタン「空の頂?」

バリヤード「ああ、僕は知ってるよ」

バリヤードは空の頂について説明した

バリヤード「東の方角にあるものすごく高い山のことだよね、なんでもその高さは天にも届くほど高いっていう噂だよ、でも険しい山脈に囲まれているせいでそこにいくルートが開拓されてないんだ、だから今まで詳しい調査はほとんどされてないみたいだよ」

パッチール「はい～そのとおりですぅ～よくご存知で～バリヤードさんがおっしゃるとおり、空の頂はほとんど調査されておらず…今だ多くの謎に包まれているのです、天に届くほど高く！そして多くの謎に包まれたミステリアスな山……ああ！なんて探検心をくすぐる響きなのでしょう！」

パッチールは驚いた表情をするが

パッチール「行って見たい！見てみたい！」

すぐに優しい表情になる

パッチール「そこでてまえどもプロジェクトPではその願いを叶えるべく……しばらく前から空の頂へ通じるルートを開拓してきたのです…そして先日ついに！そのルート開拓に成功したのですっ！」

みんな「おお～～！」

パッチール「しかも！しかーも！！ルート開拓に成功しただけでなく……なんと！山のふもとに小さな隠れ里を発見してしまったのです！」

みんな「おおおぉぉ～～！！」

これにみんな驚く

バリヤード「隠れ里！なんだか忍者みたいだね」

パッチール「はい～さすがに忍者ではないのですが、その代わり…とてもめずらしい「シェイミ」というポケモンが住んでいるらしいですよ～」

ニョノトノ「シェイミ？」

シェイミとは一体？みんなが疑問に思っていた

パッチール「ええ、てまえも知らない種族なので詳しいことはわからないのですが…とてもかわいらしい方達だそうですぅ～♪」

ヘラクロス「か…かわいい……」

サンドパン「き…気になる……」

みんなシェイミがどんなポケモンか気になってるようだ

パッチール「それからさらに！調査チームの報告によると…シェイミの里のはずれに空の頂の頂上へつづく登山道を発見したとのこと！これは大発見ですよ～！」

するとパッチールはフラフラしはじめる

パッチール「この山は今までほとんど調査されていないので…お宝がザックザク！新発見がドッコドコ！かもしれません！それに古い

言い伝えではどんな宝にも勝る秘宝が眠るとも言われているのですッ！」

みんな「おおおお～！！」

オクタン「お宝！」

バリヤード「新発見！！」

ヘラクロス「すごいっスーーー！」

みんな拍手喝采だ

パッチール「はいー！それではみなさんお待ちかね！シェイミの場所をお伝えいたしますぅ～！！」

シェイミの場所を教えてもらい

パッチール「詳しいことは現地にいるプロジェクトPの調査チームに聞いてください～それではみなさん、夢とロマンに向かって、張り切って行きましょー！」

みんな「おおーーーーーーーーっ！！」

シルム「すごいなドルク！ソウ！」

ソウ「お宝ザックザク！新発見がドッコドコ！ですよ！」

シルムとソウが目をキラキラさせる

ドルク「そうだな♪シェイミというポケモンも気になるから行ってみようぜ！」

ドルク達はシェイミの里へと向かった

第57話　空の頂（後書き）

ドルク「今回は短いな」

シルム「やっぱ作者さんの機嫌であまり進まない感じみたいだね」

ドルク「作者のことだ、そのうち機嫌がよくなると思うぜ」

シルム「そうだね」

ドルク「次回はシェイミの里に向かうぜ♪」

第５８話　登って戦って（前書き）

さて、ポケダンも進めないと

ドルク「新年まで何話更新できるかだな」

そうだね、できたら最終回までいきたいところだけど間に合わないかもしれない（汗）とりあえず第５８話をどうぞ

第５８話　登って戦って

シェイミの里

ここはのどかな里だった

そこには緑のふわふわした体毛で耳にきれいな花をつけたポケモンがいた

シルム「ここがシェイミの里かぁ、のどかなところだなぁ」

ドルク「そうだな、結構いいな」

するとそのポケモンがドルク達の元へ

？？？「ようこそ、シェイミの里へ、初めまして、私はシェイミ、この里の者です、といってもここの住民はみんなシェイミって言うんですけどね…わかりにくくてごめんなさいね」

たしかに、ほとんど周りがシェイミだらけだ

シルム「あはははは」

ソウ「初めまして」

ドルク「俺達は探検隊、ブレイブだ、よろしくな！」

ドルク達がシェイミに挨拶する

シェイミ「ブレイブさんも空の頂にお登りに来たのですか？」

ドルク「ああ、そうだ」

シルム「君達はこの山に詳しいのかい？」

シェイミ「ええ、私達はずっと昔からここに暮らしながら…山に登る方々の案内役をしてきました、でもそれももうずーっと前の話なんです、というのも大昔の地震でここに通じる山道が崩れてしまって…外から探検家が中々来られなくなってしまったんです、だからこの里に調査チームのみなさんがやってきたときはとても驚いたんですよ」

ソウ「そうなんですか～」

シルム「だから今まで言い伝えでしか語られてこなかったんだな、あ！言い伝えといえばさ！」

シルムは何か思い出したようだ

シルム「この山にはどんな宝にも勝る秘宝が眠っているって本当なの？」

シェイミ「ウフフ…さてどうでしょうね？単純に道を案内するのが私達の仕事ではないのです、あくまでも主役は山を登るみなさん、私達はそれを支える役割でしかないのです」

ドルク「役割か…」

シルム「なんだかよくわからないけど奥が深いんだな」

シェイミ「ええ」

シェイミは笑顔になる

シェイミ「ところで…こうしてお話できたのも何かの縁かもしれません、もしよろしければ私を案内役にいかがでしょうか？なんだかブレイブさんとお話していたら一緒に登りたくなってきてしまって」

ドルク「それならいいぜ♪」

ドルクはかまわないみたいだ

シェイミ「うふふ、よかった！では私は登山道の入り口で待ってますね、登山道はここからまっすぐ行った先にあります、準備ができたら来てくださいね、それではまた後で！」

シェイミは先に登山道へと行った

ドルク「それじゃあ俺達も行くか」

そういうと登山道へと向かった

……

シェイミ「準備できたんですね！」

ドルク「ああ、案内頼むぜ」

シェイミ「はい！では頂上目指してがんばりましょう！」

彼らは頂上目指して登っていった

……

1合目

シェイミ「もうすぐ1合目ですよ、がんばって！」

ドルク達はようやく1合目についた

シェイミ「ここは1合目、空の頂は1合目から9合目まで休憩ポイントがあるんです、最後の10合目はもちろん頂上です、まだまだ先は長いですが少しずつ進みましょうね」

1合目はなんとか登れた

ドルク「この調子で2合目までいくか」

ソウ「はい！」

すると

ヘラクロス「あーーーーーーオレンの実を忘れたッス！！」

ヘラクロスだ

ドルク「オレンの実なら、ほらよ」

ドルクはヘラクロスにオレンの実を渡した

ヘラクロス「うおーーーーーーーーーーーーーー！！ありがとうッス！！お礼に…そうだ！！このあなぬけの玉をもらってくれッス！！」

ドルク「ありがとな」

ドルクはヘラクロスからあなぬけのたまをもらった

シェイミ「ドルクさんっていいポケモンですね」

ソウ「師匠は根は優しいですよ」

シルム「腹黒だけどね（汗）」

シェイミ「そうなんですか（汗）でも腹黒くは見えないですね」

たしかに（汗）

こんな調子で2合目の道のりへと進もうとドルク達は歩き出した

……

シェイミ「あ！2合目が見えてきましたよ！がんばって！」

2合目

シェイミ「わあ～すごい！これは……」

ドルク達はプロジェクトPの調査チームのところに駆け寄った

キノガッサ「やあ！俺達はプロジェクトPの調査チーム『フロンティア』！ここはものすごく高い山だろ？それに救助もできないからね…だから2合目ごとに基地を作ることにしたんだ、ガルーラ像やゴンドラを用意したから遠慮なくつかってくれ！これも全部プロジェクトPのリサイクルでまかなってるからね、ぜーんぶタダだよ！」

ドルク「おお！」

シェイミ「すごい！！助け合いの精神ですね！ああ～やっぱり山はいいですねぇ～」

ドルク「そんじゃあ俺達は準備とかするか」

……

数分後

ドルク「よし！出発だ！！」

ドルク達は次の3合目に向かった

……

シェイミ「もうすぐ3合目ですよ、がんばって！」

3合目

シェイミ「ふぅ～やっと3合目ですね、ところでドルクさん、山の途中で『空の贈り物』という宝を見つけませんでしたか？」

ドルク「いや、見つけてねぇが」

シェイミ「そうですか、『空の贈り物』というのは空の頂にしかない特別な宝なんですよ、これは名前の通り、誰かにプレゼントするための贈り物なのですが…あけてみるまで何が入っているかわからないとても不思議な宝なんです、ただし拾った自分があけても中身はカラッポなので気をつけてくださいねフフ♪」

ドルク「ああ、気をつける」

ドルクは頭にそのことを入れた

シェイミ「空の贈り物は感謝の気持ちを込めて送ると幸せになれると言い伝えられています、ドルクさんも日頃お世話になっている方々に送ってみてはいかがですか？」

ドルク「まあそのときはそうするぜ」

すると

パチリス「あっ！ドルクさん！」

パチリスが声をかけた

パチリス「さっきのシェイミさんの話聞いてたんだけどさ…僕、空の贈り物見つけちゃったんだよね、ブレイブさんには世界を救ってもらったり色々お世話になってるし…ずっとお礼をしようと思ってたんだ、だからどうかこれ受け取ってくださいな！」

ドルク「ありがとな♪」

ドルクはパチリスから空の贈り物をもらった

そっとふたを開けてみた

なんと中身は復活の種だった

ドルク「なんだか、あったかい気分だな、ありがとな」

パチリス「いえいえそんな、どういたしまして！」

パチリスはおじぎした

ドルク「さて、４合目に行くか」

ドルク達は４合目へ

……

ソウ「あ～楽しいですね～♪」

ドルク「そうだな♪」

シルム「うん♪」

３匹は楽しそうだ

シェイミ「そろそろ４合目です！がんばって！」

４合目

キノガッサ「よっ！おつかれさん！４合目にも基地を作ったからね、自由に使ってくれよ」

シェイミ「はい！ありがとうございます、さて疲れたでしょう？一休みしましょうか」

すると

オクタン「大変ですわよ～！！」

するとオクタンが血相をかえって降りてきた

オクタン「はぁはぁ……」

チーム『フロンティア』の一人、クチートが声をかけた

クチート「どうしたんだい！？」

オクタン「５合目付近で探検家のニューラが変な輩（やから）にからまれてるみたいですのッ！」

ニューラは今４合目にはいなかった

すでに先に行っているみたいだが

まさかこんなことになるとは

オクタン「アタクシだけじゃ無理だから誰か助けに行ってあげてち

ょうだいー！」

するとフロンティアの体長ゴーリキーが叫ぶ

ゴーリキー「出動！！」

キノガッサ「ほい来た！リョーカイ！！」

フロンティアの3匹は5合目へと向かった

シェイミ「5合目……」

するとシェイミは何かに気づいた

シェイミ「あっ……！もしかして……」

ドルク「なあ？何かあるのか？」

シェイミ「ドルクさん！説明は後です！私達も急ぎましょう！」

ソウ「何か嫌な予感がしますね」

シルム「急ごう！！」

4人は5合目へと向かった

……

シェイミ「5合目が見えてきました！急ぎましょう！」

5合目

そこには口がでかく、足が赤と緑のつるをしたポケモンにニューラは囲まれていた

ニューラ「くっ……！」

そこに

クチート「大丈夫かい？助けに来たよ！」

その後からドルク達が駆けつけた

シェイミ「あっ！やっぱり！」

ちなみのニューラを囲んでいるポケモンはマスキッパという草タイプのポケモンだ

マスキッパ「ああーん？助けに来ただあ？てめえ何様だ！」

クチート「私達はチームフロンティア！（怒）大勢でよってたかって卑怯じゃないか！今度は私達が相手だよ！」

マスキッパ達がチームフロンティアを囲む

その間ニューラは先へと進んで行った

マスキッパ「おうっ！上等だ！！」

シェイミ「あのっ！ちょっとまっ…」

だがすぐにマスキッパ達が襲ってきた

ドルク「ほう～だが相手が悪かったな…シルム！ソウ！」

シルム「うん！」

ソウ「はい！」

ドルク「行くぜ！！ポケクロス！！」

3人はそれぞれの色のオーラを包み、合体した

ドルク・シルム・ソウ「ポケ！クロス！」

3人は合体した

ドルク「ドルクX3！！」

マスキッパ「なんだ！？こいつは！？」

ゴーリキ「なんだ！？」

キノガッサ「すげぇ！？」

クチート「なんなの！？」

マスキッパ「なんだてめえは！！」

ドルクX3「俺達は探検隊ブレイブ！この世界を救った探検隊だ！

！テメェらのハートに刻んでな！！」

するとドルクＸ３は

ドルクＸ３「行くぜ！！エナジーブレイク！！」

ドルクＸ３の胸の若葉マークから若葉マークのビームが発射された

それがマスキッパ達を飲み込んだ

マスキッパ達「ぎゃあああああああ

といいながらドルクＸ３のダメージでボロボロなのだが（汗）

シェイミ「どーもお世話様…もう！マスキッパさん達、全然変わってませんね！探険家とのトラブルはやめてくださいってあれほどお願いしてたのに！（怒）」

と、シェイミはマスキッパ達に説教をしていた

シルム『えっ！？どういうこと！？』

マスキッパ「だってよぉ！あのニューラって奴が悪いんだぜぇ、俺達が先に見つけたお宝を横取りしやがったんだからな！」

すると別のマスキッパが辺りを見回す

マスキッパ２「！！！！いねえっ！！アイツめ！この混乱の中逃げやがったな！」

キノガッサ「え……そうだったの……？」

クチート「私達、てっきり悪者かと思って……」

ゴーリキー「……」

ドルクＸ３「わりぃ、俺も勘違いしちまった」

ドルクＸ３は背中をかいた

シェイミ「まあいいポケモンとも言えないですけどね……」

マスキッパ１「けえーっ！久々に会ったてえのにシェイミちゃんてばつれねぇなぁ、まあいいや、今回はシェイミに免じて許してやらあ」

ドルクＸ３「まあ結構面白かったしな♪」

と、ドルクは喜んでいた

すでにポケクロスを解除していた

マスキッパ１「だが…そこのナエトル！」

ドルク「なんだ？」

ドルクを指名する

マスキッパ１「お願いします！！俺達をあなたの仲間に入れてください！！」

マスキッパ達『お願いします！！』

全員（ドルク以外）『えええええええ

マスキッパ1「俺達、あんたの強さにほれました!!」

マスキッパ2「草タイプでもこんなに強い人と戦えて俺達あなた様についていきます!!」

マスキッパ3「これからは兄貴と呼ばせてください!!ドルクの兄貴!!」

マスキッパ達『お願いします!!』

と、マスキッパ達はドルクの前で頭を下げた

ドルク「まあいいが、その代わりシェイミを困らせるなよ?」

マスキッパ達『はい!!ありがとうございます!!』

と、まさか仲間になるとは思いもよらなかった

シルム「えっ!?これどうしたら(汗)」

ソウ「まあこれでにぎやかになりそうですよ♪」

と、ソウは喜ぶ

ゴーリキー「……」

キノガッサ「あのドルクというナエトル…すごいね(汗)」

クチート「驚いたよ(汗)」

シェイミ「これがドルクさんの実力ってものですか（汗）」

ドルク「正確にいうと俺達だけどな」

そう、ポケクロスは3匹の絆が一つとなった姿

それぞれの姿が彼らを強くしたのだ

マスキッパ1「まあ山に登るのは自由だけどよ、あんま好き勝手やんなよー、まあ兄貴とその仲間なら喜んで好きにしていいですが」

と、なんという早代わり（汗）

マスキッパ1「それじゃあ俺達はここで、兄貴！困ったときには俺達を呼んでくださいね！！それでは！！」

マスキッパ達に探検隊バッジを渡してマスキッパ達は去っていった

シェイミ「すみませんねぇ、マスキッパ達、この辺を縄張りにしてるんです、根はいい方達なんですけど、ちょっとガラが悪くて……その割にはドルクさん達を兄貴とは…さすがブレイブさんですね（汗）」

シェイミはそのことで驚いている

クチート「私達の方こそ、話も聞かずにいきなり戦ったりして悪かったよ」

キノガッサ「見た目だけで判断しちゃだめだよな」

ドルク「まあ俺達もだ」

ソウ「結果的には師匠の仲間になってしまいましたけど大丈夫ですか？」

シェイミ「まあブレイブさんなら大丈夫だと思いますけど（汗）」

まあ悪魔亀大魔王ドル君（大魔王プクリンを倒したため）にハートを刻んでおいてしまったのだから（汗）

ゴーリキー「……スマンッ！」

とりあえずみんなはシェイミに謝った

シェイミ「いいんですよ！わかってもらえれば、さあ！気を取りなおして行きましょう！ここは5合目！頂上まで後半分です！」

クチート「うん！」

みんなは6合目へと向かった

第５８話　登って戦って（後書き）

まさかの仲間ブラグ（汗）

シルム「オイラ達、そこまでやるなんてね（汗）」

あくまでこれはポケダンのアレンジだからストーリーとは異なるのもあるよ、基本は同じだけど

シェイミ「本当にドルクさんって何者ですか（汗）」

悪魔亀大魔王ドル君です（笑）

第５９話　頂上の戦い（前書き）

残り半分まで来たドルク達

それでは第５９話をどうぞ

第５９話　頂上の戦い

シェイミ「もうすぐ６合目ですよ、がんばって！」

６合目

キノガッサ「よっ！来たね！先回りして６合目にも基地を作っておいたよ！」

シェイミ「はい！いつもありがとうございます！」

フロンティアは先回りして基地を作っておいたのだ

しかし

キノガッサ「でもね…この先、雪山になっていて、これ以上基地が作れそうにないんだ、だからここから上は自力で登っていってくれ、ごめんな」

ドルク「いや、大丈夫だ」

シェイミ「いえいえ、ここまで基地を作ってもらえただけでもありがたいですよ」

と、シェイミはお礼を言う

キノガッサ「へへっ、どういたしまして、あ、そうだ、これから俺達も本格的に頂上目指すからさ、途中で会ったらよろしくな！」

シェイミ「はい、こちらこそ！」

ドルク「ああ、よろしくな」

キノガッサ「じゃあ先に行ってるよ！」

フロンティアは先へと進んだ

ドルク「俺達も行くぞ！」

シルムとソウ、シェイミもうなずき、先へと進んだ

……

ドルク「やっぱ寒いな」

ソウ「そうですね」

シルム「オイラは炎タイプだから平気だけど」

シェイミ「あ！トンネルが見えてきました！7合目まであとちょっとです！がんばって！」

7合目

すでにフロンティアが到着していた

シェイミ「わぁ、フロンティアのみなさん、早いですねぇ」

すると

シェイミ「どうしたんですか！？」

3人がフロンティアに駆け寄る

ドルク「ニューラ！？」

なんとニューラが倒れていた

キノガッサ「俺達が来た時にはもう倒れていて…寒さでやられたのか、道具が尽きたのかわからないけど、とにかく危ないぜこれは」

シェイミ「……」

シェイミがニューラに駆け寄る

シェイミ「これはよくないですね…私、助けを呼んできます」

クチート「えっ…助けって言ったって誰を！？」

すると

シェイミ「8合目に救助のエキスパートがいるんです、めったなことでは呼ばないのですが緊急の場合は別です、フロンティアさん達はニューラさんを見ていてください、私達で行って来ます！」

ドルク「そうだな、ここは俺達に任せてくれ」

クチート「そうかい、じゃあ頼んだよ！」

シェイミはドルク達に振り向く

シェイミ「ドルクさん、急ぎましょう！」

ドルク「ああ、行くぞ！」

ドルク達は８合目へ

……

ドルク「まだか～」

シェイミ「あ！８合目です！急ぎましょう！」

８合目

そこは十分な環境だった

そこに一匹のポケモンがいた

額に赤い玉、黄色の体色に二足で尻尾の先端には赤い玉がついていた

シェイミ「デンリュウさん！」

シェイミはそのポケモンに向かって叫んだ

デンリュウ「おお、誰かと思ったら、ふもとのシェイミかー！いやー！ずいぶん久しぶりだなー元気だったか？」

シェイミ「お久しぶりです、デンリュウさん、でもすみません、今急いでいて！」

デンリュウ「ん？どうした？」

シェイミ「7合目で遭難です！」

デンリュウ「おっと、久々のお客さんかと思ったらいきなりか、よしわかった、行って来るよ、7合目だな？」

シェイミ「はい！」

デンリュウ「お前達はここで待っててくれ」

シェイミ「お願いします！」

デンリュウは急いで7合目へと向かった

……

7合目

ニューラ「……」

ニューラはまだ意識など回復していない

すると

デンリュウ「おーい、助けに来たぞー！」

するとデンリュウの声が聞こえた

クチート「ああ！こっちです！」

急いでデンリュウは駆けつけた

デンリュウ「うん…まだ間に合うな、とりあえず8合目まで運ぼう」

フロンティアとデンリュウは急いでニューラを8合目まで運んだ

……

ニューラ「う……うーん……う…うううっ……」

ニューラは目を覚ました

シェイミ「あ！目を覚ました！」

みんなが駆け寄る

シェイミ「ニューラさん！大丈夫ですか？」

ニューラ「うう…ここは…？」

ドルク「ここは8合目だ」

クチート「あんた、7合目で倒れてたんだよ」

キノガッサ「デンリュウさんがここに運んでくれなきゃやばかったよ、ほんと」

ニューラ「あんたが俺を…？」

ニューラはデンリュウを見た

デンリュウ「まあ俺だけじゃなくてここにいるみんなで救助したんだけどな」

ニューラ「そうか……俺は……ウッ！！」

シェイミ「大丈夫、何も言わなくても、まずはゆっくり休んでください」

シェイミが優しく言う

ニューラ「……」

デンリュウ「まあとうげはこしたようだし、後は俺だけで大丈夫だ、みんな、頂上まで行くんだろ？ここは8合目だからあとちょっとだ、がんばって行ってきな！」

クチート「で…でも……」

しかしデンリュウは

デンリュウ「ここにみんなでいたってなんもできないよ、俺だけで十分だからさ、ほら行って来なって」

キノガッサ「そうかい……？それじゃあニューラの事、よろしく頼むよ」

ソウ「よろしくお願いしますね」

ドルク「ありがとな、行くぞ！」

シルム「うん！」

ドルク達とフロンティアは次の9合目へ

……

シェイミ「もうすぐ9合目です！がんばって！」

9合目

シェイミ「ふう～、やっと9合目まで来ましたね」

頂上はもうすぐだ

シェイミ「フロンティアのみなさんはもう先に行ったのかしら」

ソウ「そうかもしれませんね」

するとシェイミは辺りを見渡す

シェイミ「……なんとなく前に来た時と様子が違うような…」

ドルク「様子が違う？」

ドルクが首をかしげる

シェイミ「あ！ごめんなさい、なんでもないです、たぶん気のせいです、とにかく頂上まで後少しです！がんばっていきましょう！」

ドルク「そうだな（シェイミ、なんか気になることでもあるみたいだが、この場所が来た時とは違うか……とにかく頂上に行ってみるしかないな」

ドルク達は頂上まで向かった

……

空の頂　頂上

シェイミ「あっ！見えてきました！いよいよ頂上ですよ！」

頂上にたどり着いた４人は信じられない光景をまのあたりにした

シェイミ「こっ…これは……酷い……」

そこは紫の得たいのしれないものやヘドロなどで汚れていた

ドルク「なんだここは！？」

シェイミ「長い間来ないうちにこんなことに…」

すると

キノガッサ「いやあ、先を越されちまったかー」

そこからフロンティアまで来た

キノガッサ「……ってなんだこれっ！！！」

クチート「こ…これが…頂上？」

シェイミ「いえ、これは……」

すると今度は

？？？？「ベットベト～のベッタベッタ～～～……汚いのだぁ～いすき…」

すると何処からか数匹の紫のポケモンがドルク達を囲んだ

キノガッサ「な…なんだ…！」

シェイミ「ベトベター、ここはあなた達のねぐらじゃないでしょ、自分のおうちにお帰りなさいな」

シェイミがベトベター達にいうが彼らは首を横に振る

ベトベター1「やだやだ～～」

ベトベター2「うそうそ～～」

ベトベトン「きれいな奴は追っ払っちゃうぞぉ～！！」

ソウ「うわぁ～これはなんとかしないといけませんね」

キノガッサ「あんた、関心してる場合じゃないよ！？」

キノガッサがソウにつっこむ

シェイミ「……これはちょっと目を覚ましてもらわないといけないようですね…みなさん、よろしくお願いします！」

ドルク「任せときな…」

ドルク達が構える

すると

シェイミ「ドルクさん、あなたのポケクロスの力…私にもできないですか？」

シェイミが突然、ポケクロスできるかを聞いてきた

ドルク「可能なら可能だな、だがいいのか？」

シェイミ「それでもかまいません、お願いします！」

するとドルクは

ドルク「わかった！行くぜ！ポケクロス！！」

ドルク達の周りに色んな色のオーラが包み込む

そしてシェイミにも

シェイミ「暖かい…こんなオーラが…私に…」

４人は一つになり

ドルク・シルム・ソウ・シェイミ「ポケ！！クロス！！」

するとドルク達が一つになるとき、ピンクの花びらがいくつも包み込んだ

花びらが収まると、そこからドルクＸ３と花の剣が現れた

柄は開いた花で、中から剣がキラリと輝き、飛び出してきた

ドルク「ドルクＸ３Ｒ！！」

ドルクＸ３Ｒは剣を構えてベトベター達に迫る

ゴーリキー「こっちも行くぞ！！」

キノガッサ・クチート「おおーーーーーーーーーーーー！！」

フロンティアもかかんに攻めてきた

ドルクＸ３Ｒ「フレグランス！！」

ドルクＸ３Ｒは剣を一振りする

すると

ベトベター達「ぎゃ～～～

ドルクＸ３Ｒ「セイントフレア！！」

するとドルクＸ３Ｒを中心に輝かしい緑の光と白き光が交互に放ってきた

ベトベトン達「ぐわあ～～～

しかし

ベトベター1「ええ～？ここは僕達のねぐらだよぉ～だってこんなに汚いじゃ～ん」

ソウ「消毒したほうがいいでしょうか？」

と、ソウは何処から持ってきたのか消毒系統の物をいくつも持ってきていた

ベトベター達「それだけは勘弁してぇ～（泣）」

と、泣くベトベター達

シェイミ「汚いって…そっか……長い間誰も来なかったから……ごめんねベトベター、ここは山の頂上なの」

ベトベター1「ええ～～～っ！頂上～～～！？」

ベトベター2「うそぉ～～～っ！！」

シェイミ「しばらく誰も来なかったから土地が荒れちゃったみたい……でも頂上をこのままにするわけにはいかないから元のねぐらに戻ってもらえるかな？ね？お願い」

すると

ベトベター1「なぁ～～んだ、ここは頂上だったのかぁ～気がつかなかったよぉ～」

ベトベター2「ごめんねシェイミちゃあ～ん僕達お家に帰るね～」

ベトベター達は謝り、自分達のねどこへ帰ると言った

シェイミ「うん！ありがとう！今度お礼持って遊びに行くから！またね！」

ベトベター1「うん、ばいばあ～い！」

ベトベター達は帰っていった

シェイミ「さてと……ここを元に戻さないと…」

クチート「元に戻すって、こんな荒れ放題なのを一体どうやって…？」

だがシェイミという種族には能力があった

シェイミ「私達シェイミには大地の汚れを吸収してきれいにする力があるんです、といってもこれだけ汚れてると結構大変かもしれませんが……いきますよぉ……」

シェイミは大地の汚れを吸収していった

キノガッサ「わわっ！？」

するとシェイミの体毛の色が紫へと変わっていった

シェイミ「ちょっと伏せていてください！」

みんなは伏せた

すると吸収したシェイミは光を解き放った

シェイミが使える技、シードフレア

この技はその吸収したものからあふれるばかりの力を解き放ち、大地を緑へと変える技だ、バトルのときなどはとくぼうを下げる技なのだが（汗）

シェイミのシードフレアで頂上の大地は花畑となり緑が広がった

キノガッサ「うわぁ…」

ドルク「これは……」

ソウ「これが…シェイミの能力…」

クチート「これが頂上…？さっきまでとは全然違う…すっごくきれい…」

キノガッサ「俺、こんな景色見たことないよ…」

ゴーリキー「……」

すると

シェイミ「登頂おめでとうございます！ここが空の頂の頂上です！！」

するとあまり話さないゴーリキーが

ゴーリキー「うおーーー！！やったぞおーーーーーー！！」

叫んだ

キノガッサ「ついに頂上まで到達したんだーーー！！」

するとクチートが何かを見つけた

クチート「ねえ、みんな！こっち見て！」

みんなは景色をみた

雲に覆われたいくつもの山

そして上には星がいくつも光っていた

キノガッサ「うわぁ……す…すごい……」

ソウ「きれいですね……」

ゴーリキー「……」

キノガッサ「俺…この山登ってよかったな……」

クチート「私も……なんか……なんともいえないこの感覚…こんなの初めてかも……」

ソウ「もしかしたら、これがどんなお宝にも勝る秘宝なんですね」

キノガッサはシェイミに振り向く

キノガッサ「シェイミ…」

シェイミがみんなに駆け寄る

ドルク「ここまでつれてきてくれてありがとな」

シェイミ「はい！私もみなさんと一緒に登れて楽しかったです！そしてありがとうございました！それから…また一緒に登りましょうね！」

クチート「うん！！」

ソウ「もちろんですよ♪」

みんな笑顔になる

感謝という気持ち

それがシェイミの由来となった感謝なのだ

シェイミ「それじゃあ頂上の景色もたんのうしたみたいだし……ふもとに戻りましょうか！」

ドルク「ああ！！」

クチート「……戻るってもしかして……」

キノガッサ「あああああーーー！！帰りのこと考えてなかった！！来た道戻らなきゃいけないのかーーー！！」

ドルク・シルム「えええええええ

シェイミ（スカイフォルム）「こんな風に花びらに触れると一時的にフォルムチェンジできるんです」

キノガッサ「え……君があのかわいい…シェイミ……ちゃん？」

ゴーリキー「……」

シェイミ「うふふ、私こうなると空を飛べるんですよ」

クチート「空を飛べるって、じゃあもしかして…」

シェイミ「ええ、空を飛ぶってすごく気持ちいいですよ！ささやかですが、これは私からの贈り物です！さあ、ふもとまで一気に降りますよ！しっかりつかまっててください！」

ドルク達は一気にふもとまで降りていった

こうして空の頂の登頂に成功したブレイブは……シェイミ達に精一杯のお礼をしてトレジャータウンに帰ってきたのでした、そして帰ってきた日の夜はパッチールのカフェで盛大なパーティーが開かれ……夜が明けるまでみんなで探検話に花を咲かせたのでした……

次の昼……

シルム「おそよう！ドルク！ソウ！」

ドルク「おそよ～う」

ソウ「おはようです」

シルム「昨日はすっごく楽しかったな！」

ドルク「そうだな、朝までどんちゃん騒ぎで疲れたが」

ソウ「みんなの笑顔が忘れませんね♪」

みんなで楽しんだので彼らも満足している

シルム「なあ、ドルク、ソウ、改めて思うけどさ……やっぱり探検っていいよな」

ドルク「ああ！」

ソウ「はい♪」

シルム「だよな！よーし！じゃあ今日も張り切って探検行こうかー！」

ドルク・ソウ「おおーーーーーーーーーーーーー！！」

第59話　頂上の戦い（後書き）

ドルク「あ～楽しかったぜ～♪」

いい思い出になってよかったね

ドルク「さて次回はなんだ？」

次回はね…寒いとこになるよ～

ドルク「なんだよ（汗）」

第６０話　探検家ハッサムと氷の世界（前書き）

ドルク「なんだ？このタイトルは？」

今回はある話になります

ドルク「よくはわからないが、第６０話行くぜ！」

第６０話　探検家ハッサムと氷の世界

今日も平和なトレジャータウン

今日もドルク達は依頼をこなそうと交差点に差し掛かっていた

すると交差点で

ドルク「ん？バリヤードだ？何やってんだ？」

バリヤードがいた

ソウ「めずらしいですね、いつもはカフェにいるのに今日だけはめずらしく交差点にいますね」

たしかに

ドルク「お～い」

ドルクはバリヤードに声をかけた

バリヤード「やあ、今日も元気に探検してるかな？」

シルム「うん、こっちはね」

何気ない会話だった

バリヤード「ところで君は知ってるかい？有名な探険家ハッサムの

話を」

ドルク「ハッサム？」

ドルク達には聞いたことがない

バリヤード「そうか、君達にはわからないか、いいかい、ハッサムは世界に名をはせた有名な探険家でね、探検家なら誰もがあこがれる存在だったんだ」

ドルク「へえ～そうか～」

バリヤード「しかし南西のはてにある吹雪の島を探検中に行方不明になってしまってね」

ソウ「行方不明？」

何かあったのだろう

バリヤード「彼を助けにたくさんの救助隊が現地に向かったんだけど……いてつく寒さと吹雪に阻まれ、救助を打ち切られてしまったんだ…もうずいぶん昔の話だけどね」

シルム「昔の話か～」

バリヤード「しかしなんでも、ハッサムはものすごいお宝を探していたって噂だよ」

ドルク・シルム・ソウ「お宝！？」

この話にドルク達がひっついた

バリヤード「ブレイブは世界を救うくらいのすごいチームじゃないか」

ドルク「まあそうだが」

実際世界を救った探検隊なので

バリヤード「あれから吹雪の島に挑んだ探険家は誰もいないけど…ひょっとしてブレイブなら行けるんじゃないかな?吹雪の島はこの辺にあるらしいよ」

すると地図は氷雪地方周辺の雲が晴れた

これで吹雪の島まで行けるようだ

ドルク「なるほどな…早速準備して行くぜ!!」

張り切るドルク

ソウ「でも師匠は草タイプですので僕の召喚獣の力で進化すればなんとかなると思います」

たしかに

吹雪の島＝寒いという感じだろう

ドルク「なら暖かいかっこうして行くぞ」

シルム・ソウ「おおーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

こうしてドルク達は準備をして吹雪の島へ

……

吹雪の島

ドルク「あ～やっぱいいな～♪」

ドルクはコートを着ていた

モコモコとした感じで暖かい

ソウ「やっぱこうじゃないとだめですね」

ソウはブースターに進化していた

召喚獣の力を使って進化させたのだ

シルム「でも敵も氷タイプや水タイプが多いね」

たしかに

ほとんどが氷や水タイプが多い

だが

ドルク「そんなの関係ねぇよ！オラオラオラァ！！」

と、ドルクはエナジーバスターを連射した

……

シルム「かなり奥まで進んだね」

ドルク「そうだな、シャクシャク」

ソウ「はい師匠」

シルム「って!?何二人でカキ氷作ってるの!?」

ここはクレパスの洞窟の入口

師弟コンビはカキ氷を食っていた

ドルク「あ～うめぇ～♪」

シルム「お腹壊すよ（汗）」

ドルク「俺の胃袋は無敵だ、腹なんかこわしてねぇし」

それ以前にドルクの胃袋はどうなっているのかも知りたい（汗）

ソウ「まあいいじゃないですかシルムさん、ここまで来たのですし」

ソウはブースターからグレイシアに変化していた

シルム「先が思いやられるよぉ～（汗）」

まあそんなこんなでドルク達はクレパスの洞窟に入っていった

……

中継地点

シルム「ここまでついたね」

ソウ「でもこの先油断できませんね」

ドルク「そうだな」

3人は休憩していた

ソウ「それにしてもここは結構寒いですね」

ドルク「とりあえず俺も体が温かくなってきたしな」

ドルクは温かくなったためコートを脱いでいた

シルム「炎タイプでよかったよ（汗）」

ドルク「よし！行くぞ！」

ドルク達は先へと進んだ

……

クレパスの洞窟　奥地

ドルク「ふう～何とか奥まで行ったな」

ソウ「そうですね…師匠！？シルムさん！？あれ！？」

シルム「どうしたの？」

ドルク「どうした…ってこれは！？」

ドルク達の前には一匹のポケモンが氷ついていた

赤いボディに手ははさみのポケモンだ

ソウ「このポケモンがハッサムですね」

ドルク「生きてるかどうかわからねぇがとりあえず助けるぞ」

ドルク達が凍ったハッサムに近づいたその時

ピュオオオ……

突然部屋から吹雪が舞った

？？？「ウフフフ…久々のお客様…」

何処からか声が聞こえる

ドルク「誰だ！」

吹雪が強くなった

すると目の前には

ドルク「なっ！？」

頭には氷でできた角、まるで雪女みたいなポケモンだった

？？？？「ウフフ、いらっしゃいませ…私はユキメノコ、この辺境の地にいらしたお客様をおもてなしております…吹雪の中ここまで来るのはさぞ大変だったでしょうね…さあさどうぞこちらへ…その冷え切った体を私が…もっと凍えさせてあげる！！」

ユキメノコが襲い掛かった

ドルク「おっと、ここで温まった体が冷えるのはごめんだ、ファイガ！」

ドルクは炎魔法ファイガをユキメノコ向かって放つ

炎の弾は3発ユキメノコに向かう

ユキメノコ「ここは、あられ」

あられが降り注ぐが

ソウ「残念ですけど、あられは降らせませんよ、日本晴れ！」

ソウはすぐさま日本晴れで天気をひざしがつよいにした

ドルク「よ～し…ドーピー3分クッキング！！」

また何処かの某番組の音楽が流れる

ドルク「今日の料理は雪女のあったかスープで～す♪（黒）」

すでに準備万端にエプロンをつけるドルク

シルム「いつの間に準備していたの！？」

シルムはつっこんだ

ドルク「まずこの雪女をファイガでじっくりとあぶりま～す」

すると再びファイガを放った

ユキメノコ「くっ！？」

ユキメノコはダメージを受ける

ソウ「そして新技、ホーリーバスターをぶっぱなします♪（黒）」

ソウは白い光線をユキメノコに放った

ユキメノコ「きゃー！？」

ユキメノコはさらにダメージを受けた

ドルク「そしてトドメは…俺達のフルボッコタイムでできあがり！！バスターマシンガン！！」

ドルクは緑の弾を数発マシンガンのように吐いた

シルム「とりあえず、フレイムクロス」

シルムは炎を十字にして放った

ソウ「エレメントバスター（炎）！！」

ソウは赤い光線をユキメノコに放った

ユキメノコ「きゃあーーー

ドルクが声をかける

？？？？「もしやお主らが助けてくれたのか？」

ドルク「ああ、大丈夫か？」

？？？？「かたじけない、申し遅れた、拙者の名はハッサム、探検家でござる」

ソウ「やっぱり…」

バリヤードが言っていた探険家だ

ドルク「とりあえずトレジャータウンに戻るか」

ソウ「そうですね、ここにいては危険ですし」

シルム「それじゃあ戻ろう」

ドルク達はトレジャータウンへと戻った

……

交差点

ハッサム「いやあ、本当に助かったでござる、おぬし達が来てくれなかったら、永遠に氷の中に閉じ込められているところであった、しかし拙者が遭難してから数十年の月日がたっていたとは……まるで知らない世界にやってきた気分でござる」

たしかに
氷に閉じ込められていたのだから
すでにコールドスリープの状態だったので世界が変わるのは無理もない

ドルク「まあそうだな、何年か前だからな」

ソウ「でも無事でよかったですよ」

これでもう一安心だ

ハッサム「ところで、命の恩人であるおぬし達に礼をしたいのだが…残念ながら気づけば拙者無一文……どのように礼をすればよいのやら……」

シルム「そんな、お礼なんていいよう」

ドルク「あんたが無事だっただけでいい」

ハッサム「うーむ…しかし…」

すると

ハッサム「むっ！そうだ！おぬし達探検隊であったな？」

ドルク「ああ、そうだが？」

シルム「う…うん」

ソウ「はい」

ハッサム「ふふっ、これでも拙者、その昔は名の知れた探険家だったでござるよ、むふふっ…何を隠そう、この拙者、ポケモン探検隊連盟の名誉隊員なのであーる！」

ドルク「名誉隊員？」

ソウ「それって有名なんですか？」

まあ有名な探険家だったのだから

でも今でも通じるかどうかもわからない（汗）

ハッサム「そうでござる！名誉隊員は実力ある探検隊に称号を授けることができるのであーる！そこで勇敢（ゆうかん）にも拙者を助けてくれたおぬし達に…『シークレットランク』を授けようではないか！」

ドルク・シルム・ソウ「シークレットランク？」

聞いたこともないランクだ

ハッサム「うむ、この称号を持つ探検隊は『特別指令』が受けられるのだ、『特別指令』とは、探検隊連盟から極秘に届けられる依頼の事でござるよ」

シルム「極秘に届けられる？なんだかよくわかんないよ」

ハッサム「まあ今はわからなくてもそのうちわかるときが来るであろう、では『探検隊バッジ』に印をつけておくでござるよ」

ドルク達の探検隊バッジに『シークレットランク』の印をつけてもらった

シルム「……なんだかよくわからないけど、ありがとう……」

ドルク「ありがとな」

ソウ「ありがとうございます」

ドルク達はお礼を言った

ハッサム「なんのこれしき、おぬし達に助けてもらった恩は一生忘れぬぞ！それではこれにてさらば！また会う日まで！」

ハッサムは去っていった

シルム「……」

ドルク「まあ今日はがんばったことだしな、帰るか」

ソウ「そうですね」

ドルク達は自分の基地へと帰って行った

第６０話　探検家ハッサムと氷の世界（後書き）

ハッサムのイベントいっきにやったからグダグダ（汗）

ドルク「まあカキ氷食えたしな♪」

なんでカキ氷なんだよ（汗）」

ソウ「さて、次回はなんでしょうか？」

次回は……卵です

ドルク・ソウ「卵？」

それは次回のお楽しみ

第６１話　ドルク、パパになる（前書き）

シルム「なんなの（汗）このタイトル（汗）」

今回はドルクが！？

ドルク「？」

シルム「わからないよぉ～（汗）」

それは見てからのお楽しみじゃあ！！

シルム「わあっ！？」↑驚く

第61話　ドルク、パパになる

交差点

いつものどおりドルク達は依頼掲示板で依頼を見つけるために、ギルドへと行こうとしていた

ドルク「よっ」

ヘイガニ「ヘイ！今日もいい天気だな！」

ヘイガニだった

ヘイガニ「ところでよ……ここのところキマワリが妙に盛り上がってるんだよ」

ソウ「盛り上がってる？」

ヘイガニ「なんでも……閉ざされた海きゃー！とか……何万年もの間、誰も見たことがないきゃー！とかって……なんか1匹で盛り上がってるんだけどな……ヘイヘイ……」

ドルク「それで、キマワリ姉さんは何処にいるんだ？」

ドルクは気になるためキマワリの元に行くつもりだ

ヘイガニ「キマワリなら、今ギルドの地下2階にいるぜ、お前達も興味があるようだったら、キマワリから話を聞いてみたらどうだ？

ヘイヘイ！」

シルム「気になるね！」

シルムは目を輝かせた

ソウ「キマワリ姉さんのとこに行きましょう！」

ドルク達は早速キマワリの元へ

……

ギルド地下2階

ドルク「キマワリ姉さん！」

キマワリ「あら、あなた達、閉ざされた海の話はもう聞きました？」

ソウ「いや、姉さんが知ってるみたいですので聞きにきました」

キマワリ「まあ～そうでしたの♪じゃあ話してあげますわ」

キマワリはハイテンションに話した

キマワリ「閉ざされた海は南の果てにある海で…何万年もの間分厚い氷に閉ざされて来た未知の海域（かいいき）なのですが…なんでも、最近の調査で氷の裂け目が見つかったらしく…そこから海の中へ探検に行けるようになったんですって！きゃー！何万年もの間、誰も見たことのない世界が広がっているなんて！なんだかロマンを感じますわー！しかも閉ざされた海には世界中の海流が流れこんでいるらしく…

めずらしいものがたくさん流れ着いているんじゃないかって噂ですわ！きゃー！考えるだけでもう気絶しそうですわー！」

と、キマワリはすごく盛り上がっていた

シルム「（すごいハイテンション（汗））」

キマワリ「閉ざされた海の入口は、吹雪の島の東の海域にあるらしいですわ、あなた達も行ってみるといいですわよー！」

ドルク「よっしゃあ！ありがとな～♪姉さん！よしっ！俺達も行くぞ！！」

シルム・ソウ「おおーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

ドルク達は準備して、早速閉ざされた海へ

……

閉ざされた海

シルム「やっぱオイラの苦手なタイプが多いな～」

ここは水タイプのポケモンが多いためシルムは苦戦するが

ドルク「オラオラ！！どきやがれ！！」

ドルクは技をぶっぱなしでほとんどのポケモンが逃げてしまった（汗）

シルム「ドルクが草タイプだからいいけど（汗）やりすぎだよ（汗）」

もはや暴れ放題だった（汗）

……

閉ざされた海２０Ｆ

シルム「うわぁ～宝箱だ～」

宝箱がいっぱいの部屋だった

ソウ「持ち帰りましょう♪」

……

シルム「結構お宝があってよかったよ♪」

ドルク「そうだな、それじゃあ帰るとするか」

ドルク達が帰ろうとし、進んだとき

ドルク「ん？なんだ？」

ドルクが何かを発見した

ソウ「あれって？卵ですよね？」

卵だった

その卵は青くて真ん中に赤いものがついていた

ドルク「ついでだ、こいつも持ち帰るか♪」

ドルクは不思議な卵を持ち帰った

……

次の朝……

シルム「おはよう！ドルク！ソウ！」

ソウ「おはようございます」

ドルク「ふわぁ～おはよう～」

みんな起きてきた

シルム「そういえば、昨日閉ざされた海で見つけた卵…これって不思議な色をしてるよな？一体なんの卵なのかな？」

ドルク達は卵の元へ近づく

ドルク「俺もわからないな」

ソウ「気になりますね」

すると

ボコッ

シルム「わわっ！動いた！」

卵が動いたのだ

シルム「なあドルク！ソウ！今、卵動いたよな！？」

ドルク「ああ、動いたぞ！？」

ソウ「僕も見ましたよ！？」

ドルク達は驚いていた

すると卵がさらに激しく動いた

シルム「ドルク！卵が……生まれるよ！！」

ドルク「おおっ！！」

卵は光に包まれた

生まれてきたのは

一匹のポケモンだった

ぱっちりとしたかわいい目に、水色の体色で胸には赤いものがついているポケモンだ

？？？？「……？」

生まれたポケモンは辺りを見渡して

？？？？「ニコッ♪」

笑顔を見せた

シルム「すごい！見たことないポケモンだ！」

ドルク「すげぇ～♪」

ソウ「なんなんでしょうかね♪」

ドルク達でも見たことがないポケモンだ

するとそのポケモンは

？？？？「キャッキャ♪キャッキャ♪」

シルム「あはは！かわいいなぁ」

ドルク「かわいい／／／／」

ドルクは赤くなった

シルム「ドルク（汗）っと、なあお前、お前はなんていうポケモンなんだい？」

シルムがそのポケモンに名前を聞いてきた

しかし

？？？？「ポーケ？」

ソウ「まだ生まれたばかりですから僕達の言ってることがわからないようですね」

？？？？「デスネー？」

ソウ「（僕の言葉をリピートしてる…）」

シルム「ええと…どうしよう……オイラ、コイツみたいなポケモンに会うの初めてなんだよな…うーん……」

ドルク「なあ？これからは俺がお前のパパだぞ～♪」

？？？？「パーパ？」

ドルクはなぜかそのポケモンに何か言っていたというかパパって（汗）

ドルク「そう♪パパだぞ～♪」

？？？？「パーパ♪キャッキャ♪」

なぜかドルクに気に入ってしまっていた

ソウ「師匠が（汗）」

シルム「とりあえずペラップに聞こう（汗）ペラップなら何かわか

りそうだし（汗）」

情報屋のペラ八…いやペラップならわかりそうだ

ドルク「そんじゃあペラ八の元に行くか♪」

と、ドルクは上機嫌に言う

……

ドルク「というわけだが、ペラ八～このポケモンがなんていうポケモンなのか知ってるか？」

ペラ八「ペラップだ（呆）ふむ……私も直接見るのは初めてだけど……お前達の話を総合すると……どうやらこの子はマナフィというポケモンのようだな」

ドルク・シルム・ソウ「マナフィ？」

ペラ八「そう、世界に数匹しかいないとてもめずらしいポケモンだ、冷たい海の底で生まれてから数千キロも旅をすると言われている、しかしマナフィが目撃されることはめったにないので……どんなポケモンなのか、詳しいことはよく知られていないのだ」

シルム「へぇー！コイツ、そんなにめずらしいポケモンなんだぁ」

マナフィ「ナンダナンダー♪」

と、マナフィはシルムのさいごのなんだぁのマネをする

ドルク「めずらしくてもかわいいな～／／／／」

ドルクはすごく上機嫌だ

ペラ八「（あの悪魔亀大魔王ドル君が（汗）こんなポケモンに愛想つかすとは（汗））」

ペラップはドルクの一面を見て驚いていた

ペラ八「で、お前達、これからこの子をどうするつもりなんだ？」

ドルク「もちろん、俺の子にする♪」

ペラ八・シルム「なんだってえええええええ

ソウ「そうですね♪師匠、せっかくですし、僕達でしばらく育てましょう♪」

ペラ八「えっ!?マジですか!?ちょっと!?それいくらなんでも(汗)」

ドルク「なんか文句あるのか童貞(黒怒)」

ドルクはペラップをにらんだ

ペラ八「ナンデモゴザイマセン」

カタゴトで涙目になるペラップであった

すると

マナフィ「ふぇ…ふぇ……ふわあぁぁあああ~~~~ん!!」

突然、マナフィが泣き出した

ドルク「わわっ!?どうしたんだ~マナフィ~」

と、ドルクが泣き止ましにマナフィを見る

ペラ八「たぶん、お腹が減っただろう」

ソウ「でも、何をあげればいいんでしょうか?」

ドルク「ミルクはねぇのか?」

そう言ってもミルクはこの世界にあるのかどうか（汗）

ペラ八「うーん…私もわからないが、この子は水タイプのポケモンだから……青いグミでもあげｔ」

ビュオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

とっさにドルクはもうダッシュして何処かへ行った

シルム・ペラ八「はやっ！？」

ソウ「師匠！！」

ソウも後を追いかけた

シルム「待っててね」

シルムもドルクの後を追いかけた

第６１話　ドルク、パパになる（後書き）

マナフィの話に突入しました♪

シルム「作者さん（汗）ドルクがすごく変だけど（汗）」

もはやドルクはお父さん的な存在となったか～（汗）

シルム「あんなドルク初めてだよ（汗）」

俺も（汗）次回はドルクパパの子育て奮闘記です

第６２話　ドルクパパの子育て奮闘記（汗）（前書き）

シルム「もはやタイトルが（汗）」

もうカオスだよマジで（汗）

第62話　ドルクパパの子育て奮闘記（汗）

ドルク「帰ったぞ！！」

シルム・ペラ八「はやっ！？」

シルムとペラップがつっこんだ

ペラ八「って！？なんじゃこりゃあーーー

マナフィ「……グーミ？」

パクッ

マナフィ「モグモグ……！！」

すると

マナフィ「グーミ！グーミ！」

シルム「ああよかった～！グミを食べてくれたよ」

ドルク「よかったな～♪」

マナフィ「グ～ミ♪グ～ミ♪」

と、マナフィは喜んでいる

シルム「あはは！ドルクになついてるよ！かわいいな～」

ソウ「そうですね♪さすが師匠です♪」

ドルク「しばらくは面倒見てやるからな～♪よ～しよし♪」

マナフィ「よしー♪」

しかしペラップはうなずいた表情をする

ペラ八「……心配だな……」

シルム・ソウ「え？」

ペラ八「この子は本来なら海で育つはずのポケモンだ、ここは海の中とはまったく違う環境だし……マナフィについてはわからないことが多すぎる……何が起こるかわからんぞ？」

しかしドルクは

ドルク「そんなの関係ねぇよ！」

シルム「ドルク…」

ドルク「今のままじゃ海にかえしてもあぶねぇし、大きくなってからのほうがいい、俺はそれでもな」

ドルクの決心はかたかった

ドルクは前の時限の塔でも覚悟はしていた

それでも彼は前へと進むのだ

ペラ八「うーむ……そこまでいうのなら……」

ドルク「任せろ、俺達ががんばればこわくねぇ…それでも俺達は探検隊ブレイブだ」

ドルクはそう高らかに言った

……

ブレイブ秘密基地

シルム「さあマナフィ、しばらくはここがお前のおうちだ」

マナフィ「おうちー？」

ソウ「そうです、おうちです、僕達が君の面倒を見てあげますからね」

マナフィ「おうちおうちー♪」

かわいい笑顔を見せるマナフィ

ドルク「さてと、何をするかだな」

すると

マナフィ「グーミ！グーミ！」

ドルク「青いグミか…ちょっと待ってろ」

ドルクはトレジャーバックから青いグミを取り出した

ちなみに大量の青いグミは

半分はガルーラ倉庫に

残り半分はプクリンのギルドに寄付した

シルム「食いしん坊だな！マナフィは、なんかドルクに似てきたな～」

ドルク「俺に似たか♪そうかそうか♪」

ソウ「師匠嬉しそうですね♪」

ドルクはマナフィにもうメロメロだ

性別ないのだが（汗）一応♂という設定なので（汗）

マナフィ「グ～ミ♪」

パクッ

マナフィ「モグモグ……」

シルム「どう？おいしい？グミおいしい？」

マナフィ「おいしー？」

シルム「そう、おいしい？」

すると

マナフィ「おいしー♪グーミおいしー♪」

喜んでいた

シルム「あはは！この調子だとすぐに成長しそうだな！」

ドルク「そうだな」

マナフィ「……」

ドルク「どうしたんだ？」

マナフィ「…ふわわぁ……むにゃむにゃ……」

マナフィはすぐに眠ってしまった

ソウ「お腹いっぱいになって寝ちゃいましたね」

ドルク「しばらくそっとしておこう、おやすみ…マナフィ」

……

次の朝……

シルム「おはよう！ドルク！ソウ！」

ソウ「おはようございます♪」

ドルク「おはよう～」

マナフィ「はぁーい！」

シルム「おはよう！マナフィ」

ドルク「おはよう、マナフィ」

ソウ「おはようございます、マナフィ」

マナフィ「おはよー！ドルクパパー、シルムー、ソウー」

シルム「わわっ！オイラ達の名前を呼んだぞ！！」

ソウ「すごいですマナフィ！」

なんとマナフィはたった1日でドルク達の名前を覚えたのだ

ドルク「おお～パパと呼んでくれたか～♪」

逆にドルクは嬉しそうだ（汗）

マナフィ「スゴイー！」

ドルク「さてと、今日はどうっすかな～どうせだから食べたり寝たりだと健康にわりぃしな、海岸に散歩に行くぞ」

シルム「賛成！」

ソウ「いいですね♪」

マナフィ「おさんぽー♪」

ドルク達は早速海岸まで散歩した

……

海岸

シルム「おいで、マナフィ。こっちだよー。」

ドルク達はマナフィを誘導する

マナフィ「！！！」

マナフィは海に近づいた

マナフィ「キャッキャ♪キャッキャ♪」

シルム「マナフィ、これは海だぞ海。」

マナフィ「うーみ？」

ドルク「そうだ、海。お前の故郷だぞ～」

マナフィ「海！海ー！」

するとマナフィは順番に

マナフィ「ソウー♪」

まずソウの周りを回り

マナフィ「シルムー♪」

次にシルムの周りを回り

マナフィ「パパー♪」

最後にドルクの周りを回った

マナフィ「海、海ー！」

ドルク「嬉しいんだな♪つれてきてよかったぜ♪」

マナフィ「う～み♪う～み♪」

こうしてマナフィとドルク達は日がくれるまで海岸で遊んだのでした

そしてその夜…

一人、マナフィは目を覚まして、地平線を見ていた

マナフィ「……」

……

次の朝

シルム「おはよう！ドルク。ソウ。」

ソウ「おはようございます」

ドルク「おはよう」

みんないつものように挨拶するが

ドルク「おはよう！マナ……！！！！！マナフィ！」

なんとマナフィがいなくなったのだ

ドルク「マナフィ！！」

ソウ「マナフィがいなくなっちゃいました！？」

シルム「ど…どうしよう！？何処に行ったんんだろう？」

ソウ「とにかくマナフィを探しましょう！！」

ドルク達はマナフィを探しに行った

……

交差点

ドルク「お～い！マナフィ！！いたら返事してくれ！！」

ソウ「マナフィー！！」

すると

ペラ八「あ、ブレイブ♪」

なんとペラップに遭遇してしまった

ペラ八「ちょうど今からマナフィの様子を見に行くところだったのだよ♪マナフィは元気にしてるかな？」

ドルク「そんな場合じゃねぇんだよこっちは！！（怒）」

ドルクは鬼のような形相になる

ペラ八「どうかしたんですか（汗）」

ペラップは怖くなり恐る恐る聞く

ドルク「マナフィが…マナフィがいなくなっちまったんだ！」

ペラ八「なっ…なんだって！？あれだけ面倒を見ろと言っただろ！」

ドルク「わりぃ、でもそれどころじゃねぇんだ！」

ペラ八「ああもうーっ！私も一緒に探す！」

ペラップもパニクりながら一緒に探すことに

ペラ八「マナフィはまだ小さい、それほど遠くには行っていないはずだ、私はギルドの中を探すから、お前達は外を探すんだ！」

ペラップはギルドへ向かった

ドルク「マナフィ！！何処だ！！」

ドルク達は一生懸命探す

……

海岸

シルム「はあはあ……」

すると

ソウ「いました！？」

ドルク「マナフィ！！」

マナフィはいた

ドルク達はマナフィの元に駆け寄る

シルム「マナフィー！！マナフィ！心配したんだぞ？」

ドルク「どうしてこんなところにいたんだ！？なあ！マナフィ！…

…マナフィ？どうしたんだ？」

するとマナフィは倒れてしまった

ドルク「！！！！！マナフィ！！」

シルムがマナフィに触ると

シルム「大変だドルク！すごい熱だ！」

ドルク「なんだと！？マナフィ！しっかりしろ！マナフィー！！」

ソウ「急いで秘密基地に運びましょう！！」

ドルクとシルムはうなずいてマナフィを秘密基地まで運んだ

……

秘密基地

マナフィの熱はまだ下がらずいっこうによくなっていない

シルム「ああ……どうしてこんなことに……」

するとペラップが来た

ペラ八「！！！マナフィを見つけたんだな！」

ドルク「ペラ八！マナフィが！！」

ペラ八「ペラップだ！」

ペラップはマナフィのそばへ

ペラ八「マ…マナフィ！すごい熱じゃないか！」

ソウ「海岸で見つけて、その時倒れてしまったんです」

ソウがペラップに説明した

ペラ八「……おそらく環境の違いが原因だろう。やはりマナフィは海で育たなければならないポケモンなんだよ、ここは海の中とはまったく違う…。だから病気になってしまったんだろう……」

ドルク「くっ!?俺達のせいでマナフィは……」

ペラ八「うむ……しかしこうなってしまった以上、ここで後悔していてもしかたがない……まずはマナフィの病気を治すことだけを考えよう」

たしかに

後悔よりまず行動だ

ドルク「だが治す方法はあるのか?」

ペラ八「以前、何処かで聞いたことがあるのだが……海で暮らすポケモン達の万能薬(ばんのうやく)といわれる『フィオネのしずく』というものがあるらしい、それがあればマナフィの病気も治るかもしれないぞ」

ドルク「それがあれば治るんだな!!で!!場所は!!」

ドルクはペラップに迫る

ペラ八「落ち着け!?『フィオネのしずく』は海の妖精と呼ばれるフィオネというポケモンが作り出すそうだ、フィオネは西の方にある奇跡の海というところにいるらしいぞ」

ドルク「奇跡の海だな!!わかった!!」

ビュオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!!

ドルクはまるでポケモンではありえない速度で奇跡の海へと向かって行った

シルム「待ってよ！！ドルク！！」

ソウ「師匠！！」

シルムとソウは後を追いかけた

……

奇跡の海

ドルク「どけぇ！！」

敵ポケモン「ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

ドルクはエナジーバスターを放って敵ポケモンを倒した

ソウ「師匠！落ち着いてください！！」

ソウはドルクを落ち着かせようと大声をあげた

ドルク「おちつかねぇ！ソウ！シルム！急ぐぞ！」

シルム「ドルク…あんなに落ち着かないなんて」

ソウ「師匠はマナフィの事。一番心配していましたし」

たしかに

マナフィを一番心配していたのはドルクだ

そんなこんなで

……

奇跡の海　奥底

そこにあるポケモン達が集まっていた

マナフィと対等するような姿のポケモンだ

このポケモンがフィオネらしい

フィオネ１「クスクス♪」

フィオネ２「ウフフ♪」

フィオネ３「ヨネー♪」

フィオネ４「ネー♪」

なにやら楽しく会話しているように思える

ドルク達が近づこうとしたその時

グオオオォォォォーーーーーーーーーーーッ

ドルク・シルム・ソウ「！？」

突然、一匹のポケモンがフォオネに向かって襲い掛かってきた

凶悪そうな顔立ちで、体が長いポケモンだ

フィオネ「キャーーーーーーーーーーー！」

そのポケモンが凶悪ポケモンのギャラドスだ

ギャラドス「ガハハハハ！やっと見つけたぞ！お前達が万能薬のしずくを作り出すというフィオネ達だな？よろこべ！お前達は今から俺様の僕（しもべ）だ！『フィオネのしずく』は俺様が独占するのだ！ガハハハh」

ドルク「どけぇ！！」

ドルクはギャラドスにエナジーバスターを放った

ギャラドス「ぎゃあああああああ

ドルク「よかった、早速なんだが」

すると

ギャラドス「やりやがったな貴様ら！！俺様にはむかおうなんざ１億年はやいｗ」

ドルク「だまれ！！こいのぼり野郎！！（怒）」

ドルクは再びエナジーバスターを放った

ギャラドス「ぎゃあああああああ

フィオネからお礼として『フィオネのしずく』をもらった

ドルク「これでマナフィの病気が治る！帰るぞ！」

ドルク達は秘密基地へと帰った

……

秘密基地

ペラ八「おお！『フィオネのしずく』を手に入れたんだな！早くマナフィにあげるのだ！」

ドルク「ああ！」

シルム「さあマナフィ。『フィオネのしずく』だ」

ドルクは『フィオネのしずく』をマナフィに飲ませた

マナフィ「……う…ん……」

マナフィの熱が下がっていく

マナフィ「……ありがと……パパー…シルムー…ソウー。」

シルム「ああ、よかった～」

ソウ「一時はどうなるかと思いましたよ」

ペラ八「どうやら効いているようだな、後2・3日もすればきっと元気になるだろう」

ドルク「よかった…本当によかったぜ（泣）」

ドルクの目から涙が

……

そして数日後……

サメハダ岩

ドルク「すっかり元気になったな♪」

マナフィ「元気！元気ー！」

マナフィの体調はすっかりよくなった

ソウ「よかったです♪」

シルム「ほんとによかった～」

ペラ八「ドルク、シルム、ソウ……」

ドルク「そうだな……わかってる……」

ドルク達はなぜか元気がなかった

ドルク「マナフィは海で生きていく力をみにつけねぇとだめなんだ

よな」

シルム「ドルク、ソウ、マナフィを海まで送っていこう」

ドルク「ああ」

ソウ「はい」

……

海岸

ドルク達とマナフィとペラップが集まり、さらに他に一匹のポケモンがいた

厚い脂肪のたくましい体に2本のたくましい牙を持ったポケモン

こおりわりポケモンのトドゼルガだ

ペラップ「親方様に相談して、北の海からはるばるトドゼルガさんに来てもらったのだ、トドゼルガさんなら安心してマナフィをお任せできる」

トドゼルガ「うむ。話はすべてプクリンから聞いている、私が責任をもってマナフィの面倒を見よう」

ドルク「よろしくお願いします」

ドルクの若葉はしおれたままだ

ドルク「マナフィ、これからはトドゼルガの言うことをよく聞くんだぞ。そして海の中で元気に暮らすんだぞ…」

マナフィ「？」

マナフィは幼いのでそれがわからないようだ

シルム「ううっ……大きくなってオイラ達のこと…忘れるんじゃないぞ……（泣）」

ソウ「元気で暮らすんですよ（泣）」

3人は泣いていた

特にドルクは目から大粒の涙が出てくる

マナフィ「？シルムー？ソウー？」

マナフィはドルクに向く

マナフィ「ドルクパパー？」

ペラ八「……さあこれ以上は別れが辛くなるだけだ…トドゼルガさん…」

トドゼルガ「うむ」

トドゼルガはマナフィに向く

トドゼルガ「さあ行くぞマナフィ」

マナフィ「？」

トドゼルガがマナフィの手をつなぐ

マナフィ「？？？」

マナフィはあわてる

マナフィ「パパー？シルムー？ソウー？」

そしてトドゼルガはマナフィを連れて行った

マナフィ「ドルクパパーーーーーー！！シルムーーーーーーーーー！！ソウーーーーーーーー！！（涙）」

マナフィは大泣きしながらドルク達と別れた

シルム「ううっ……（泣）」

ソウ「マナフィ（泣）」

ドルク「さよなら……マナフィ……（泣）」

マナフィはこうしてドルク達に別れていった

……

次の朝

何もないマナフィの寝床

シルム「……マナフィ……行っちゃったんだよな…」

ドルク「寂しいよな…もうパパと呼べなくなったのは寂しいしな…」

みんな気分がブルーだ

シルム「うん……でも……」

ソウ「マナフィにとってはこれでよかったかもしれません、きっとまた会えますよ、トドゼルガさんがしっかり育ててくれますし」

ドルク「そうだな…ありがとなソウ」

ソウ「師匠を元気つけることが弟子の仕事ですし」

そう

またきっと会える

また何処かへと

思いはいつもつながっているのだから

前へ前へと

進んで行こう

前へと

第６２話　ドルクパパの子育て奮闘記（汗）（後書き）

また何処かで会えるといいね

ドルク「そうだな、あいつが帰って来るまでがんばらねぇと！」

そう！その意気だよ！！次回はあるチームの登場です

第６３話　チャームズ（前書き）

はい！物語もいよいよ終盤に突入です！

ドルク「今回はどうなんだ？」

今回はあるチームの登場です、ではどうぞ

第63話　チャームズ

それから数日後

ドルク達はなんとかがんばっていた

ドルク「さて、今日も依頼こなすか」

シルム「そうだね」

ソウ「元気に行きましょう♪」

ドルク達はギルドへ

……

ギルド地下1階

ドルク「ん？誰もいねぇな」

ソウ「そうですね」

シルム「みんな何処に行ったんだろう？」

地下1階には誰もいなかった

シルム「ん？なにやら2階がさわがしいようだけど」

シルムは地下2階の階段から声が聞こえた

ドルク「行ってみるか」

ドルク達は地下2階へ

……

ギルド地下2階

シルム「あれ?なんだろう?みんな集まってどうしたのかな?」

みんななにやら集まっていて、輪のようになっていた

しかも見られない3匹がその中心にいた

ペラップらへんの一匹は足が太く、細い腕と体に頭に突起があるポケモン

キマワリらへんの一匹は足がスカートのような白いものに、頭が黄緑色の短髪に、みぞおちには赤い突起がついていた

そしてその2匹の真ん中にいる一匹は長い耳でうさぎのようなポケモンだ

キマワリ「きゃー!信じられませんわー!」

ビッパ「本物でゲスー!!」

ドゴーム「うおーー!サインくださいーーー!!」

ドルク「おい、ペラ八、あのポケモン達は誰だ?」

近くにいたペラップに聞くドルク

ペラ八「はっ!?お前はまたなんって失礼なことを!」

ドルク「は?」

ペラ八「は?じゃないよ!あの方々は超有名なトレジャーハンター、チャームズのみなさんだぞ!」

ソウ「チャームズ?」

どうやらあの3匹のポケモンのことらしい

ペラ八「特別なチームにしか与えられないというマスターランクのトレジャーハンターで……今まで数え切れないほどのお宝を発見しておられるのだ」

ペラップはドルク達に向く

ペラ八「しかもただお宝を発見するだけではない!強く、かしこく。美しく…華麗(かれい)にお宝をゲットするその姿はみんなの憧れの的(まと)なのだ♪」

ドルク「ずいぶんと詳しいんだな」

ペラ八「だてに情報屋をやっていないからな…ほら真ん中にいるあの耳の長いゴージャスな方がミミロップ様で……」

真ん中のポケモンはミミロップというポケモンだ

ペラップ「その隣にいるおしとやかな方がサーナイト様♪ああお美しい……」

隣のミミロップから右のポケモンがサーナイトだ

たしかに見た目で見ればおしとやかなポケモンだ

ペラップ「そして最後にチャーレム様。踊るような身のこなしがちょーかっこいいのだ！」

ミミロップの左のポケモンがチャーレムだ

姿からしてたしかに身のこなしがいいようだ

ドルク「お前、完全にオタクだな」

ペラ八「あぁ！！誰がオタクだ！私はオタクではない！」

実際情報ついでになぜか赤くなっているのはなぜなのか（汗）

ソウ「その割に赤くなっているのは完全にオタクですね」

ペラ八「あぁ！オタク舐めんなよ！あ…」

ペラップは言ってしまって言葉がつまってしまった

ドルク「（やっぱオタクじゃねぇかよ）」

おめでとう、ペラ八はおたく鳥という称号を手に入れた

ペラ八「やかましいわ!!（怒）しかしあの有名なチャームズのみなさんがどうしてこんなところに…？」

すると

プクリン「やあっ!!」

プクリン親方が部屋から出てきた

すると

ミミロップ「あっ!プクリ～ン!久しぶり～!!」

プクリンがミミロップ達に近づく

ミミロップ「やだプクリン!全然変わってないわね!元気だった？」

チャーレム「ギルドの親方になってるなんてスゴイじゃん!」

サーナイト「お久しぶりね。プクリン」

まるで親しんだかのように楽しく話すチャームズ

プクリン「うん。久しぶり♪みんな元気だった?」

ドゴーム「……久しぶり……って……（汗）」

キマワリ「まさか親方様……あのチャームズとお知り合い？」

恐る恐るキマワリは聞いてきた

チャーレム「プクリンってさあー昔はずいぶんブイブイ言わせてたよねー。今はどうなのさ？」

ミミロップ「あの頃のプクリンは向かうところ敵なし！って感じでほんっとかっこよかった～」

プクリン「ハハハハハッ♪」

しかしチャームズとプクリンは昔話に花を咲かせる

ペラ八「あのー…。親方様。親方様とチャームズのみなさんはそのー…どういうご関係で？」

ペラップは恐る恐るプクリンに聞いてきた

プクリン「えーとね、友達だよ。昔の友達♪」

ミミロップ「そう。私達とプクリンは、昔一緒に冒険していた仲なのよ」

ペラ八「えええええーーーーーーーーーーーーーーーっ！！親方様とチャームズが……！？」

みんな驚いていた

ドルク「マジかよ」

ソウ「驚きましたね」

たしかにこれは驚く

プクリン「で、今日はみんな何しに来たの？」

プクリンは話を変えてチャームズがここに来た理由を聞く

サーナイト「そうです。今日は大事な用があってここに来たのです。昔一緒に探検をしたときに使い道のわからないカギを見つけたのを覚えていませんか？そのカギの使い道が最近ようやくわかったのです」

チャーレム「この前、あたい達が発見した『番人の洞窟』ってとこの入口のカギ穴にピッタリなんだよ！しかもその洞窟には莫大（ばくだい）な財宝が眠っているって言う言い伝えでね」

ドゴーム「莫大な……」

キマワリ「財宝ですって！？」

みんなはこの言葉に反応して驚く

ミミロップ「ねえプクリン。あの時見つけたカギ……あなたが預かってたわよね？」

しかし

プクリン「カギ？うーん……どんなカギだっけ？覚えてないや。あ

ははー」

と、忘れてのんきに笑うプクリン親方

チャーレム「ちょっと！みんなであんなに苦労して見つけたカギなのに忘れたって言うのかい！？（怒）」

チャーレムは怒った

サーナイト「……さすがプクリン。昔と全然変わってないようですね……」

そこで

サーナイト「ミミロップ。例の物を……」

ミミロップ「わかってるわ。サーナイト」

ミミロップはＯＫとサーナイトにウィンクした

ミミロップ「はいプクリン。あなたにプレゼント。大好物のセカイイチよ」

ミミロップはセカイイチを取り出して置いた

例の物とは親方様の大好物、セカイイチの事だった

それに反応したのか親方は

プクリン「わあ！セカイイチ！僕にくれるの？わーい！ありがとー

ー！！」

親方はセカイイチを拾って頭に乗せてまわした

サーナイト「で…例のカギなのですが……」

すると

プクリン「あ！思い出したよ！あのカギだよね。アンノーンの形した、ちょっと待っててね！」

親方は思い出したのか、セカイイチを持って自分の部屋へ

すると

プクリン「たあーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

親方のハイパーボイスとガシャアンと音が響いた

親方は部屋から出て

プクリン「はいこれ♪」

親方の手にはアンノーンの形をしたカギを持っていた

ミミロップ「そう。まさしくこのカギよ！これで番人の洞窟の入口が開くわ！ありがとうプクリン！どう？久しぶりにあなたも一緒に来る？」

しかし

プクリン「わーい。セカイイチだー♪ありがとー！」

大好物のセカイイチに夢中だった（汗）

サーナイト「……（汗）相変わらずね……」

ミミロップ「じゃあ私達、そろそろ行くわ。またね、プクリン！」

チャームズ達は去ろうとした時

シルム「あっ…あのっ！」

シルムがチャームズに声をかけた

ミミロップ「なあに？」

シルム「あの……オイラ達も探検に加わってもいいですか？」

するとその言葉に

ドゴーム「ワ…ワシもっ！」

ディグダ「僕も！」

キマワリ「きゃー！私も行きたいですわー！」

と、他のみんなも行きたいようだ

シルム「なあドルク？ドルクも探検したいよな？」

ドルク「もちろんだ♪俺も行くぜ！」

ソウ「僕もです♪」

シルム「うんうん！そうだよな！」

シルムはチャームズ達に向ける

シルム「どうかお願いします！オイラ達にも探検させてくださいっ！！」

みんな「お願いしますっ！！」

みんながチャームズにお願いする

すると

ミミロップ「うふふ。みんな一生懸命でかわいいわね…もちろん…よろしくてよ！」

ミミロップはウィンクした

シルム「わあーーーー！！やったー！ありがとうございます！！」

みんな歓喜に包まれた

ミミロップ「私達は先に行って入口を開けとくから後から来るといいわ。場所じゃここから南東に行ったところの洞窟よ」

チャームズ達は番人の洞窟に向かった

シルム「やったな！ドルク！」

ドルク「準備して行くぞ！ソウ！シルム！」

ソウ「はい！」

第６３話　チャームズ（後書き）

ドルク「番人の洞窟か…」

そこにはどんな謎が隠されているのか…次回は番人の洞窟です

第６４話　文字と謎（前書き）

ドルク「早いな」

もうすぐ２０１１年だし、急いで書かないと

ドルク「やけにはりきるな～作者」

さて今回は番人の洞窟です、ではどうぞ！

第６４話　文字と謎

番人の洞窟　石碑の間１

そこにはチャームズ、さらに今回はドゴームとヘイガニとビッパも参加だ

ミミロップ「来たわね。ここが番人の洞窟よ。この先は今まで誰も入ったことのない未知の世界。どんな謎が待ち受けているのか考えるだけでワクワクしてくるわね！」

ヘイガニ「ヘイヘイヘーイ！これなんかものすごく怪しいぜー！」

ヘイガニが示しているのはドルク達の目の前にある石碑だ

ビッパ「なんか不思議な形のくぼみがあるでゲスよ！」

チャーレム「きっと何かしかけがあるに違いないね！絶対解き明かしてみせるよー！」

と、意気込むチャーレム

ミミロップ「そうだ。他のみんなにはもう聞いたんだけど、君のチームの名前はなんて言うの？」

ドルク「俺達は探検隊ブレイブだ」

ミミロップ「ふーん。ブレイブって言うの。中々いい名前ね♪」

ドルク「ありがとな」

と、ドルクはいい名前言われて嬉しくなった

ミミロップ「さてと、それじゃあそろそろ行きましょうか。誰が先にお宝を手に入れるか……ま、当然私達がいただくことになると思うけどね。うふふっ。お互いがんばりましょう！じゃあお先にっ！」

チャームズ達が先に行った

ドゴーム「うおー！！ワシが一番に見つけてみせるぞー！！」

ドゴームはそう意気込み先へと行った

ビッパ「あっしらも行くでゲス！」

ビッパも彼女達を追いかけるように行った

ヘイガニ「ヘイヘイヘーイ！」

ヘイガニはテンション高く行くが、途中転んでしまったが急いで行った

ソウ「さて、僕達も」

ドルク「ちょっと待て」

突然ドルクが待ったをかけた

ドルク「その前にこの石碑、気になるから調べようぜ」

ドルク達は石碑を調べた

不思議な形をしたくぼみがあった

そこには何かかれていた

アンノーン文字で3文字だ

『これより先に進みたければ目を閉じてその証を示せ』

ドルクは目を閉じたが

ドルク「何も起こらないな…」

ソウ「アンノーン文字のくぼみに何か入れればなんとかなりそうですね」

ドルク「とりあえず進むか」

ドルク達は進んだ

……

ソウ「アンノーンがいっぱいですね」

ドルク「とりあえず倒すか、エナジーボール！」

ドルクはエナジーボールを放った

するとアンノーンは倒れて何かを落とした

シルム「なんだろう？」

ドルク達はその落としたのを拾った

ソウ「これ、あの文字の見たいですね…もしかして…」

ドルク「あの石碑の文字に書いてあるのは…Ｉ…Ｃ…Ｅ…」

ソウ「ＩＣＥ！？」

シルム「もしかして、この石の文字なら！？」

ドルク達はようやく謎が解けた

ドルク「よし！その文字のアンノーンを探すぞ！」

シルム・ソウ「おおーーー

ドルク「そっちはどうなんだ？」

ミミロップ「まだよ、どうやらこの洞窟は謎を解かないと先に勧めないみたいだわ……」

サーナイト「おそらくこの石碑がカギを握っているのでしょう。石碑にあるアンノーンの形をしたくぼみ……洞窟にいる大量のアンノーン達……きっと何か関係があるはずです」

たしかに

アンノーンの文字とアンノーンの大量出現

関係はあるようだ

ミミロップ「これより先に進みたければ目を閉じて、その証を示せ……か。目を閉じても何も起こらないってことは、きっと何か見落としてるのね。私達はもう一度洞窟を探索してくるわ。そんじゃあまたね」

チャームズ達は再び先へと進んだ

ソウ「どうやらこの石碑とアンノーンが落とした石が関係あったのですね」

ドルク「後は残りの石を集めればなんとかなるな」

シルム「うん！行こう！」

ドルク達は先へと進んだ

……

ドルク「ようやく集まったぜ！」

ドルク達はようやく3文字の石を手に入れた

シルム「早速やってみよう！」

ドルクは目を閉じた

石碑が光りだす

！！！！

トレジャーバックの中のアンノーンの石I・C・Eが反応している！

アンノーンの石が石碑のくぼみに吸い込まれていく！

光が包み込み

石碑が消えて秘密の階段が現れた！

ソウ「やりましたね！」

ドルク「行くぞ！！」

ドルク達は階段を降りた

……

レジアイスの間

ドルク「なんだ！？」

そこには一匹のポケモンが立っていた

点がいくつもあり、クリスタルの結晶のような形をしたポケモンだ

レジアイス「コレヨリ先ニ進ミタケレバ、ソノ力ヲ我ニ示セ」

ドルク「へっ！なら行くぜ！エナジーブースト！！」

ドルクの周りが緑のオーラが包み込む

ドルク「行くぞ！シルム！ソウ！」

シルム「うん！フレアマシンガン！！」

シルムは炎の弾を数発吐いた

ソウ「はい！ホーリー！」

ソウはホーリーを唱えた

ドルク「行くぜ！エナジーバスター！！」

ドルクはエナジーブーストで強化したエナジーバスターを放った

レジアイス「デンジホウ」

レジアイスはでんじほうで迎え撃つが

ドルク「甘いぜ！コンボ技！ホーリーエナジーマシンガン！！」

エナジーバスターの周りから光球と炎の弾が包み込んだ

ドカーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！

爆発を起こした

レジアイスはボロボロだ

するとレジアイスは不思議な光となり、ドルクを包み込む！

ドルク「なんだ…感じる…」

ドルクは何かを感じていた

光は収まった

番人の許しを得た！

すると壁がなくなった

ソウ「これで先に進めますね」

ドルク達は先へと進んだ

……

石碑の間2

ドルク「またここか…だがここは何か違うな」

すると

？？？？「中々やるわね！」

ドルク達が振り向くと、後からチャームズが追ってきた

ミミロップ「さっきの戦い、おみごとだったわ」

ドルク「ありがとな」

チャーレム「あたい達もうかうかしてられないね！」

サーナイト「うふふ。久々に燃えてきます」

3人とも燃えてきていた

ミミロップ「次の謎は私達が先に解いて見せるわよ！じゃあお先にっ！」

チャームズ達は先へと進んだ

ソウ「さて、今度はどんな文字でしょうか…」

ドルク「これは…R…O…C…K…ROCK！」

ソウ「ロック！」

シルム「探そう！」

ドルク達は先へと進んだ

……

ドルク「ふう～中々出ない場合があるな～ん？」

ドルク達は石碑の前に手紙を見つけた

手紙にはこう書かれていた

ブレイブへ

宣言通り、今回の謎は私達が先に解かせてもらったわ。どちらがお先にお宝を手に入れるか競争よ！

ーチャームズー

ドルク「競争って言われてもな～（汗）」

ドルクは額に汗をかく

ドルク「とにかく石を集めないとな」

再び先へと進んだ

……

ドルク「これで！」

ドルクはなんとかR・O・C・Kの文字を集めて、目を閉じた

トレジャーバックの中のアンノーンの石R・O・C・Kが反応している！

アンノーンの石が石碑のくぼみに吸い込まれていく！」

光が包み込み、石碑が消えて秘密の階段が現れた

ドルク「やっぱりな」

ドルク達は階段を降りた

……

レジロックの間

そこには次の番人がいた

点がついていて、岩のボディのポケモンだ

レジロック「コレヨリ先ニ進ミタケレバ、ソノ力ヲ我ニ示セ」

ドルク「岩なら…エナジーバスター！！」

ボギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアアアアン！！

再び一発で倒してしまった

レジロックはボロボロになるが、不思議な光となり、ドルクを包み込み光は散った

番人の許しを得た！

壁はなくなり先へと進めるようになった

シルム「行こう！」

ドルク達は先へ進んだ

……

ドルク「チャームズはもう先に行ったのか？」

ソウ「そうですね、とりあえず集めましょう、今度はＳ・Ｔ・Ｅ・Ｅ・Ｌです」

……

ドルク「なんとか集まったが…」

ソウ「チャームズの３人はもう先に行ってる感じですね」

ドルク「そうだな、それじゃあ…」

ドルクは目を閉じた

トレジャーバックの中のアンノーンの石、Ｓ・Ｔ・Ｅ・Ｅ・Ｌが反応している！

アンノーンの石が石碑のくぼみに吸い込まれていく！

光が包み、石碑が消えて、秘密の階段が現れた！

ドルク「これでいけるな」

ソウ「行きましょう！」

シルム「行こう！」

ドルク達は階段を降りた

……

レジスチルの間

また、番人のポケモンが立っていた

点とそして鋼鉄のボディをもったポケモンだ

レジスチル「コレヨリ先ニ進ミタケレバ、ソノ力ヲ我ニ示セ」

シルム「オイラに任せて！フレアショット！」

シルムは炎の弾を放つ

レジスチル「鉄壁」

レジスチルは鉄壁を繰り出した

シルム「かなり厄介だよ」

ドルク「ソウ、連携技行くぞ！」

ソウ「はい！」

ドルクとソウは手をつなぎ

ドルク・ソウ「Wアルテマ！！」

膨大な魔力でレジスチルを包み込んだ

シルム「オイラも！アトミックバーン！！」

シルムは巨大な炎のかたまりを作り、レジスチルに向かって投げた

ドカーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！

大爆発が起きた

レジスチルはボロボロになり

不思議な光へとなり、ドルクを包み込んだ！

光は散り、番人の許しを得た！

壁はなくなり先に進めるようになった

さらに

ドルク「！？光が３つ？」

ドルク達の目の前で３つの光が出た

そして光が収まると

ドルク「！？」

なんとチャームズが倒れていた

ミミロップ「う…ううっ……」

ドルク「大丈夫か？」

ドルク達がチャームズに駆け寄る

ミミロップ「私達は一体……。そうだ！ここでレジスチルと戦っていて……チャーレムがピンチになって……そこから先は覚えてないわ……」

ミミロップは暗くなってしまった

ドルク「とりあえずは無事のようだな」

ミミロップ「ブレイブが私達を助けてくれたのね。危ないところを助けてくれてありがとう……」

ドルク「いや、無事でなによりだ」

チャームズ達が無事でなによりだ

ソウ「まさかここで倒れていたなんて…」

チャーレム「ブレイブには借りができちまったね……もし助けてくれてなかったら、あたい達おしまいだったよ」

サーナイト「そうですね。本当に。なんとお礼を言えばよいか……」

ドルク「いや、お礼はいい、とりあえずはなんとかなったから結果オーライにしとけ」

と、ドルクは言う

ミミロップ「そうだ！」

ここでミミロップが

ミミロップ「この先ブレイブに協力させてよ！」

ソウ「えっ！？」

なんと協力を求めたのだ

ミミロップ「私達はもう探検に失敗したようなものだし。うふふっ！大丈夫よ！お宝を横取りなんかしないから！」

ソウ「どうします師匠？」

ドルク「いいぜ、この先の方が気になるしな、協力してもらうぜ」

ミミロップ「ありがとう！さあ、行きましょう！きっとゴールは近いわよ！」

シルム「うん！」

チャームズとドルクは先へと進んだ

第６４話　文字と謎（後書き）

ここからはブレイブとチャームズが協力です、次回はそんな彼女達とドルク達が戦います

お楽しみに

第６５話　巨人と隠されたダンジョン（前書き）

さあ、ここからはブレイブとチャームズの戦いをお楽しみください

第６５話　巨人と隠されたダンジョン

レジギガスの間

ミミロップ「どうやらここが最後の部屋のようね……」

ドルク達の目の前には銅像が数体もある

４匹のポケモンの周りには大きい石像のポケモンがあった

ドルク達がその銅像の目の前まで来ると

？？？？「……。大地ニ眠リシ財宝ヲ我ガ物ニセントスル者ヨ……スベテノ力ヲ我ニ示セ！」

すると光が包み込んだ

光が収まると

チャーレム「せ…石像が！動き出した！！」

なんと動かなかった石像達が動き出したのだ！

ミミロップ「ここは協力プレイで行くわよっ！」

ドルク「なら行くぞ！シルム！ソウ！」

シルム「うん！」

ソウ「はい！」

ドルク達はオーラをまとう

ミミロップ「えっ！？」

ドルク・シルム・ソウ「ポケ！クロス！！」

チャーレム「なっ！？なんなんだい！？」

サーナイト「これは！？」

ドルク達の姿が変わる

ドルク「ドルクＸ３！！」

ミミロップ「こんな姿をしているの！？ポケモンなのに！？」

チャーレム「すごいよ！あんた達！？」

サーナイト「こうしちゃいられませんね！私達も！」

ミミロップ「ええ！」

チャームズ達も果敢に攻めてきた

ドルクＸ３「行くぜ！バーニングスターブレイカー！！」

ドルクＸ３の手から赤い星形のものが現れ、そこからレーザーのよ

うに放った

サワムラーとドータクンなどが数体吹っ飛ばされ倒れた

ミミロップ「とびげり！」

チャーレム「とびひざげり！」

サーナイト「サイコキネシス！」

チャームズ達もそれぞれの技で残ったサワムラーとドータクンを倒した

ドルクＸ３「そういえば、あいつだけやけに遅く感じるな」

巨大なポケモン、レジギガスは動きがなぜか遅く感じた

ソウ『師匠！レジギガスの特性はスロースタートですから、それで遅くなってるかと』

ドルクＸ３「なるほどな…だからあんなに遅くなっているのか」

ミミロップ「それならチャンスだわ！高速移動！」

ミミロップは高速移動をした

これは味方にも影響があり、素早さもあがるのだ

ドルクＸ３「これなら！行くぜ！アトミック…ブレイカー！！」

巨大な炎の弾を放つ

レジギガスにあたり

ボギャアアア

ドルク「読んでみるぜ」

ドルクは石碑を調べた

『目を閉じて汝の波動を大地に伝えよ』

ドルクは目を閉じてみた

すると石碑が光り、波動が大地に伝わっていく！

ズズ……ズズズ……

するとレジギガスが起き上がった

チャーレム「！！！！！」

サーナイト「レジギガスが！！！」

ミミロップ「また戦うのっ！？」

レジギガス「グオオオオォォォォォォォオオオオオッ！！」

するとレジギガスは地面を殴った

ズウウウゥゥゥゥゥウウウウウン！！

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

突然激しい揺れが起こる

チャーレム「わわわっ！！！！」

サーナイト「早く逃げましょう！！」

ドルク達は急いで逃げた

……

サーナイト「みんな無事ですか？」

チャーレムが確認する

チャーレム「大丈夫。みんないるよ」

サーナイト「よかった……」

ソウ「危ないところでしたね」

ミミロップ「……でもお宝は……」

お宝が手に入らず落ち込むミミロップ

サーナイト「そうね……残念だけど……」

すると

チャーレム「ああっ！！あれを見てっ！」

チャーレムが何かを見つけたらしい

上を見ると

大地がせりあがり、そこから洞窟の入口があったのだ

ミミロップ「あっ…あれはっ！！！」

チャーレム「大地がせりあがって断層に入口が！！！」

サーナイト「さっきの揺れが……レジギガス達が守っていたものは……これだったのですね！！」

そう

レジギガスが守っていたのは

新たなダンジョンの入口なのだ

チャーレム「きっとあそこにはたくさん財宝が眠っているはずだよ！」

ミミロップ「やったー！！今回の探検も大成功ね！」

チャーレム「あはははは！！やったー！やったー！」

チャームズ達は喜んだ

しかし

サーナイト「でも今回は私達の手柄ではないですね」

すると、チャームズはドルク達に向く

サーナイト「ブレイブさん。あなた達の手柄です」

ドルク「俺達の？」

チャーレム「そうだね。あそこの財宝は全部あんた達の物だ！しかしあんた達ほんとすごかったよ！まるで昔のプクリンのようだったね！」

ドルク「そ…そうか？」

みんな「あはははははは！」

みんな笑い合った

こうした達成感がみんなをワクワクさせるのだ

サーナイト「それでは私達は次の冒険へ向かいましょうか」

ミミロップ「そうね」

ドルク「もう行くのか？」

ミミロップ「ええ♪ブレイブと一緒に探検できてとても楽しかったわ。これから冒険を続けていけば、また何処かで会うかもしれないわね」

ソウ「はい！みなさんと探検できて僕も嬉しいですよ♪」

シルム「オイラもチャームズと探検できて嬉しいです！」

ドルク「ああ、また何処かで会えるといいな」

また会える

つながっているのだから

ミミロップ「そうね、でも今度会った時には私達が先にお宝をいただいてみせるわよ！それじゃあまたね！プクリンによろしく！」

チャームズ達は去っていった

ドルク「また会おうな！！」

こうしてチャームズと一緒に探検したブレイブ

いつかまたきっと

また会う日を夢見て

第６５話　巨人と隠されたダンジョン（後書き）

ドルク「あ～楽しかったな～♪」

シルム「オイラも満足だよ♪」

ソウ「そうですね♪」

さて、次回は…ついに最終章です！

物語もついに終わりへと近づきました！

最終章はかなりのものになると思いますので

次回も楽しみにしててください

第６６話　悪夢の始まり（前書き）

ついに最終章です

今回でドルクの事などもわかってきます

そんな今回はなにやら急展開になりそうです

それではどうぞ！

第６６話　悪夢の始まり

夜

嵐が吹き荒れる

シルム「嵐が近づいているみたいだな。久しぶりだね。嵐が来るのは」

ソウ「嵐？」

ドルク「ソウは仲間になってない前からなんだ」

そう

嵐が来るのはドルクがこの世界にやってきた時以来だ

シルム「最近ずっと平和だったせいか……嵐とか見るとすごく新鮮な気がするよ。オイラ達が時の破壊を食い止めた冒険も……すごく昔のことのように感じちゃうよな」

ドルク「たしかにな、シルムとソウ、そして今いないネク達とも未来に行ったことや、時限の塔でディアルガと戦ったことも、今思うとずいぶん昔のことのように感じるな、時が元に戻り……世界は平和になった今はな……！（そういえば……時が戻ったことで……光の泉でもみんな進化できるようにはなったが……俺とシルムだけは進化できないって言われたな、あの時言われたのは……）」

……

シルム「だったらどうして？ヒメグマは進化できたのに……なんでオイラは進化できないんだい？」

その理由は

汝が進化できないのは……おそらく空間の歪みによる影響だと思われる

シルム「空間の……歪み？」

なぜそうなのかはわからないが……とにかく汝の存在が空間の歪みを引き起こしている……そしてその影響で汝のみ進化はできない……いや汝だけではない……もう一匹いる……汝の真後ろにいる者もまた、進化できない

ドルク「何っ！？」

なんとドルクまで進化できないようだ

シルム「ええっ！？ドルクも！？」

ドルク「ちょっと待て！！俺が進化しないっておい！！（怒）テメェ！！エナジーバスターぶちこむぞ！！（怒）」

怒り狂ったドルクがエナジーバスターを放つ準備をする

シルム「落ち着いてよドルク！！？」

リングマ♂「進化できないからって壊すな!!落ち着け!?」

……

ドルク「（俺とシルムが進化できないその原因が、空間の歪みにあるってことだが……今はネク達が調べて行っているが、その空間の歪みっていうのがなんなのかがわからねぇな、時が元に戻っても…まだうまくいかないところがあるっていうのか」

すると

光りがなる

シルム「わわっ！雷！なんかこっちにきそうだし……今日はもう寝よう」

ドルク「そうだな」

ソウ「それじゃあおやすみなさい」

シルム「おやすみ。ドルク、ソウ」

ドルク「お休み」

……

キサギの森

ある一匹のポケモンがいた

そのポケモンはシルエットでよくわからない

？？？？「……。いい感じだ。この森もだいぶ歪んできている。空間の歪み……これをもっと膨らませることができれば……私の力も増幅する、時の破壊には失敗したが……今度こそは……むっ！誰か来る！……クレセリアか……。しつこい奴め。しかし私を捕まえることはできない。絶対にな」

雷がなる

そのポケモンは姿を消した

そこから、頭がみかづきの形の突起のポケモンが現れた

このポケモンはクレセリアというポケモンだ

さっきの影のポケモンと何か関係あるように思える

クレセリア「……逃げられたわ……ここまで接近できたのも初めてだけど……最後はどうしても逃げられてしまう。これ以上は難しい……か……いえ。なんとしてでも捕まえないと……そして空間の歪みを止めないと……世界は大変なことになってしまう！なんとしてでも……ダークライ！！」

雷が悲鳴をあげたように鳴る

そこから

？？？？「その話…詳しく聞かせて」

クレセリアの後ろから

クレセリア「あなた達は？」

ネク「それが原因でドルクとシルムが進化できない原因なら…」

カザリ「僕達も手伝うよ」

ネクとカザリの二人だった

第６６話　悪夢の始まり（後書き）

さて！最終章解禁です！

次回はさらに展開が悪い方向にいきます

第６７話　存在と悪夢（前書き）

はい、ついに最終章です

この章でドルクの事などわかってくる部分が出てきます、ではどうぞ！

第67話　存在と悪夢

夜

ドルク達は眠っていた

そんな時、ドルクは苦い表情をしていた

……

ドルク「……これは……ここはもしかして……夢の中か？……ん？誰かいるな」

ドルクの夢の中から一匹のポケモンが出てきた

みかづきの突起の頭にきよらかな姿のポケモン

みかづきポケモンのクレセリアだ

ドルク「誰だ？」

？？？「……私は……私はクレセリア」

ドルク「ク、クレセリア！？……俺に何の用だよ？」

するとクレセリアは驚くべき言葉をドルクに言う

クレセリア「あなたの……あなたの存在が……世界を破滅の道へと

追い込んでいます」

ドルク「何っ!?俺が!?世界を破滅の道だと!?」

ドルクは驚く

クレセリア「あなたがこの世界にいるために……あなたが……ここに存在するために……このままだと……世界は滅んでしまうのです!」

ドルク「うわあああああああああああああああああっ!!!!!!」

……

ドルク「ハッ!」

ガバッ!

ドルクは起きてしまった

ドルク「はあはあ……今のはなんだったんだ?」

ドルクは周りを見た

シルムとソウはすやすやと寝ている

ドルク「シルムとソウは……寝てるよな……やっぱ夢だったのか?しかし変な夢だな……まあいいか。まだ夜も明けてねぇしもう少し寝るか」

ドルクは再び眠った

だがこの夢が

後に大変なことになろうとは

まだドルクは知るよしもなかった

……

ソウ「今日もいい天気ですね♪」

シルム「そうだね！今日もがんばろうな！ドルク！ソウ！」

ソウ「はい！」

ドルク「ああ」

今日もドルク達は依頼をこなしに行った

……

再び夜

ドルクはまた

ドルク「……また……夢を見てるのか……ん？あれは……」

再びクレセリアが現れた

ドルク「たしか、クレセリアだったよな……おい教えろよ！前に俺の存在がこの世界を滅ぼすって言ってたがどういうことなんだよ！！」

すると

クレセリア「あなたは未来から来た人間であり……この世界の者ではありません。それが空間の歪みを生み出しているのです」

ドルク「空間の歪みだと！？しかもなぜ俺が元は人間と知っているんだ！？」

しかしクレセリアは話す

クレセリア「これ以上空間の歪みが大きくなると……しまいにはこの世界も崩壊してしまうのです」

ドルク「なっ！？空間の歪みが……せ、世界を崩壊させるだと！？」

クレセリア「あなたは……この世界にいてはならない存在なのです！」

するとクレセリアの姿が少し薄くなり

クレセリア「絶対に……いては……ならない……」

ドルク「あっ！ま、待て！もう少し話を……」

クレセリアは消えてしまった

ドルク「くっ！…だめだ。意識が……」

……

次の朝

シルム「ドルク。ドルクってば」

ソウ「師匠。起きてください！」

シルムとソウがドルクの体をゆさゆさと動かす

シルム「もう朝だぞ」

ドルク「…あ…ああ……」

シルムとソウは移動して

シルム「なあ見ろよ！今日もいい天気だぞ！」

ソウ「今日も探検日和ですよ♪」

ドルク「（また…あの夢だった……だが夢にしてはずいぶんリアルだな…俺は……この世界にいてはいけないと言われたが……あの時クレセリアはたしか……空間の歪みが大きくなると……世界が崩壊するって言ってたな……！空間の歪み！？そういえば！）」

……

汝が進化できないのは……おそらく空間の歪みによる影響だと思われる

……

ドルク「（俺と空間の歪みが関係していることは、光の泉でも言われた！だとすれば……俺の存在が世界を崩壊させるというのも……もしかすると……本当の事だってことか……俺がここで生きていること自体がこの世界を壊す……その原因なのか）」

すると

ソウ「どうしたんです師匠？」

シルム「何ぼーっとしてるんだよ？ドルクらしくないぞ？」

ドルク「あ、ああすまないな」

シルム「元気出して行こうぜ！ドルク！ソウ！」

ソウ「はい！」

元気なのはシルムとソウだ

シルムはもう臆病でいくじなしが見られなくなっている

ドルク「（シルムはいつにも増して元気がいいな、でもシルムの言うとおりだな。俺が世界を壊す存在と決まったわけじゃねぇし、ここでクヨクヨしてもしかたねぇな元気を出さなきゃな）そうだな♪」

シルム「うん！それでこそドルクだ！」

ソウ「今日もがんばっていきましょう！」

ドルクは無理しながら笑顔になる

本当に自分の存在が

世界を滅ぼすことになるのか

それはまだわからない

……

ビッパ「お～～～～～～～～い！大変でゲス～～～～ゥ！！」

サメハダ岩にビッパがやってきた

ドルク「ビッパ！」

ビッパ「よかった～！これから出かけるところだったでゲスね。はあはあ……」

ソウ「どうかしたんですかビッパさん？そんなに急いで？」

ビッパはあわてていた

一体何が起こったのか？

ビッパ「た、大変でゲス！ルリリちゃんが……ルリリちゃんが大変なんでゲス！！」

シルム「えっ？ルリリが！？」

ビッパ「今ギルドに運ばれているでゲス！」

ドルク「急ぐぞ！」

ドルク達はギルドへ

……

ギルド、元ブレイブの弟子部屋

そこにみんな集まっていた

シルム「あっ！ルリリ！大丈夫！？」

キマワリ「とりあえずは大丈夫なようだけど……でも……」

ソウ「一体何があったんですか！？」

マリル「ずっと寝たままで……全然起きてくれないんです」

なんとずっと寝たままなのだ！？

シルム「えええっ！？ずっと寝たままだって！？」

マリル「はい……。何度も起こそうとしたんですが、全然起きてく

れなくて……それで心配ニナッテギルドへ連れてきたんです……」

すると

ルリリ「ううっ……うううううっ……」

ルリリは苦しい表情をする

なんだかうなされてるようだ

ドルク「なんか、うなされてるな？」

マリル「ああしてもうずっと寝込んでいるんです。いつも苦しそうにして……悪い夢でも見てるんでしょうか」

ヘイガニ「そうかもな。ヘイヘイ。あのうなされ方だとどう考えても悪い夢を見ていそうだもんな。ヘイヘイ」

シルム「なあペラップ。ルリリを起こす方法はあるの？」

ペラップ「うーん……それが何も思いつかないのだ、悪夢にうなされながら何日も眠り続けるなんて聞いたこともないからな」

情報屋のペラップでもわからないようだ

チリーン「寝てるから、木の実とかも食べさせられないし……みんなでどうしようか悩んでたのよ」

これでは食事も困難だ

ヘイガニ「悪夢を振り払う方法なんてわからんよなあ。ヘイヘイ……」

するとビッパが

ビッパ「あ、あの～。みなさんちょっといいでゲスか？」

一斉にビッパに注目した

ドゴーム「なんだビッパ？」

ビッパ「悪夢を振り払うことができないならせめて……どんな悪夢を見てるのか分かれば……ルリリちゃんが起きない原因も突き止められるんじゃないでゲスかねえ～」

たしかに

振り払うことができないなら、悪夢を見ることは可能だ

ドゴーム「そっか！なるほど！ルリリの夢の中を見ればいいのか！……ってどうやって見るんだよー！！（怒）夢の中なんてよー！！」

ドゴームはノリツッコミした

ビッパ「ひえええっ！ゴメンでゲスゥ～！」

ペラップ「いや。もしかしたらできるかもしれないぞ」

みんな「ええっ！？」

なんとペラップはできる可能性の方法があるらしい

ヘイガニ「ヘイ！どうやってやるんだい？」

その方法とは

ペラップ「スリープなら……スリープならもしかしたらできるかもしれない」

ドルク「スリープ…どっかで聞いたことあるな」

シルム「そ、そうだ！スリープってあの時の……」

……

シルム「そこまでた！お尋ね者スリープ！」

スリープ「なっ！？なぜここが！？しかも不意打ちとは」

……

ジバコイル「コノタビハオカゲサマデ、オタズネモノヲタイホスルコトガデキマシタ！ゴキョウリョクカンシャイタシマス！」

ドルク「いや、俺達は探検隊のことをしたまでだ」

ピポピポとサイレンをならすジバコイル

ジバコイル「ソウデスカ、ショウキンハギルドニオクッテオキマス、アリガトウゴザイマシタ！」

スリープに向いて

ジバコイル「サア、クルンダ」

スリープ「トホホ」

……

ドルク「思いだしたぞ！あいつは俺達が初めて捕まえたあのお尋ね者だ！」

ソウ「スリープ？僕もまだ入ってなかった頃のですね」

この時はソウはまだいなかった

シルム「でも……そのスリープがどうして？」

ペラップ「私も噂で聞いただけなんだけど……その噂によると……スリープはなんと夢の中に入れるらしいのだ」

シルム「ええ～！？夢の中に入れるの？」

だが

ペラップ「あくまでも噂だがな。本当かどうかはわからんぞ。でも可能性はある」

シルム「そっか。じゃあスリープにお願いしたら……もしかしたらルリリの夢の中に入れるかもしれないな！」

ソウ「でもそのポケモンは一体何処にいるんですか？お尋ね者なら刑務所とかだとは思いますが？」

ドルク「なあコイル、スリープは捕まった後はどうしている？」

コイルにたずねる

コイル「ビビビ！スリープはあの後ジバコイル保安官にみっちり絞られました。そして悪いことはもう二度としませんと反省したので……釈放（しゃくほう）しました」

ヘイガニ「ヘイ！本当に反省したのかよ！怪しいぜ！ヘイヘイ！」

キマワリ「ヘイガニ。今はそんなこと言ってる場合ではないですわ」

キマワリがヘイガニに仲裁する

キマワリ「それで……スリープは今何処におりますの？」

コイル「ビビビ！反省して、自らを戒める（いましめる）ために……修行の山にこもると言ってました！ビビビ！」

チリーン「修行の山？たしか山岳地帯にある山の事ですよね」

ドルク「そこにスリープがいるんだな」

シルム「ドルク！ソウ！行こう！修行の山へ！」

マリル「シルムさん……」

シルム「ちょっと待っててな。マリル。かならずスリープを連れてくるからな」

マリル「ううっ……シルムさん……いつも助けてくれて……本当にありがとうございます……」

マリルの目から涙がこぼれる

プクリン「決まりだね♪」

みんながプクリン親方に注目する

プクリン「今回の件はブレイブに任せるよ♪みんなもルリリが心配だとは思うけど、ここはブレイブに任せて……自分の持ち場に戻ってね♪」

ペラップ「さあみんな！仕事だよー♪」

弟子達「はーーーーい！」

プクリン「スリープの事は頼んだよ。がんばってね♪」

ドルク「はい！」

シルム「よし！じゃあ行こう！スリープを探しに修行の山へ！」

ドルク達は修行の山へと向かった

……

修行の山　入口

シルム「ここが修行の山だな」

ソウ「ここに師匠とシルムさんが最初に捕まえたお尋ね者がいるんですね」

シルム「ルリリが起きない原因を突き止めるにはスリープの協力が必要だ」

ドルク「そのためにも早くスリープを探すぞ！行くぞ！！」

ドルク達は修行の山へと入っていった

第６７話　存在と悪夢（後書き）

はい！次回はそんなスリープとの再会です！

第６８話　３人の誓い（前書き）

修行の山です

はたして！！

第６８話　３人の誓い

修行の山　頂上

シルム「あっ！あそこにいるのスリープじゃないかな！？」

ドルク達の目の前には

広大な眺めで何かをしているスリープだった

ドルク「おい！」

スリープは振り返る

スリープ「わわっ！お前達は！？お前達、ここへ何しに来たんだ！？お、俺はもう悪いことはしてないぞ！」

ドルク「別にそうじゃねぇよ、ちょっと一緒に来い、テメェを捕まえに来たんじゃねぇんだよ、テメェに協力してほしいんだよ」

スリープ「お、俺に？……協力してほしいだって？」

ソウ「とりあえず言いますが、あなたはルリリちゃんの事は覚えてますか？そのルリリちゃんが眠ったままでまったく起きないんです」

その言葉で

スリープ「え？ルリリが？……」

シルム「どうして起きないのかわからなくて……そんな時、スリープなら夢の中に入れるかもしれないって聞いたんで……それでここまで来たんだ」

スリープ「……」

スリープは黙ったままだ

ドルク「なあ？手伝えるか？」

しかしスリープは

スリープ「……お、俺は……俺は以前ルリリに酷いことをしてしまった……罪滅ぼしになるかどうかはわからないが……少しでもルリリの力になるのなら……俺が何処まで役に立てるかわからないが……やらせてくれ」

ドルク「よ～し、よく言った、そんじゃテメェの罪滅ぼしとして行くぞ！」

スリープ「早くルリリのところに案内してくれ！」

ドルク「ああ」

ドルク達はスリープと共にギルドへと向かった

……

ギルド　元ブレイブの弟子部屋

スリープ「……」

スリープはルリリを見ていた

シルム「どうお？スリープ。なんとかなりそう？」

すると

スリープ「……お前達。これから冒険に行く支度をしてきてくれ。準備ができたら……お前達をルリリの夢の中に送る」

ソウ「えっ！？じゃあ！」

スリープ「ああ。ルリリの夢の中に入っていけそうだ」

シルム「やったあー！」

これでなんとか入れるようだ

シルム「マリル！これで悪夢の謎も調べることができるよ！」

マリル「はい！」

スリープ「ただ、夢の中に入ったら十分注意してくれ。なぜかこの夢の中に……ものすごく邪悪な空気を感じるんだ」

ソウ「邪悪な空気ですか…」

スリープはドルク達に忠告した

スリープ「後、夢の中はお前達3匹で行ってきてくれ、俺も一緒に行きたいが……正直俺の実力じゃお前達に迷惑をかけそうな気がするんだ。あまり役に立てずにすまないが……」

ドルク「いや、十分だ。夢の中まで送れるだけでも十分だ、ありがとなスリープ、準備ができたら行くぜ」

……

ドルク「準備できたぞ」

スリープ「そうか…」

シルム「うん！バッチリだよ！」

ソウ「いつでも行けます！」

スリープ「わかった。ではこっちに来てくれ」

……

スリープ「これからルリリの夢の中にお前達を送る。行くぞ！」

紫の線が広くなり

ドルク達は夢の中へ

……

悪夢の中

シルム「……こ、ここが……夢の中なのかな？」

すると

スリープ「シルム！ソウ！ドルク！」

何処からかスリープの声が

スリープ「聞こえるか？俺だ、スリープだ」

ドルク「聞こえるぞ！」

スリープ「よかった。無事入れたみたいだな。前にも言ったがこの夢の中は邪悪な何かを感じる。わかっているとは思うが……十分注意して行ってきてくれ」

ドルク「ああ！ありがとな！スリープ！」

シルム「じゃあ行こうか。夢の奥へ」

ソウ「行きましょう」

ドルク達は先へと進んだ

……

ドルク「それにしても夢の中でもポケモンが出るんだな」

ソウ「そうですね、不思議ですね」

夢の中ではポケモンも出てきて、さらに道具までである

ドルク「でもここでよくばってる暇はねぇ、さっさと行こうぜ」

ドルク達は道具を拾いながら先へと進んだ

……

悪夢の中　奥底

シルム「ドルク……ソウ、ずいぶん奥まで来たよな……」

シルムは辺りを見渡した

シルム「ここから先はずっと同じ道が続いているみたいだけど……」

ソウ「もう少し奥まで行きましょう」

すると辺りが暗くなる

シルム「わわっ！急に！」

？？？「……あなた達は……。あなた達はどうやって……どうやってここに……」

シルム「ドルク！ソウ！誰かいる！？」

ドルク「だ、誰だ！何処にいる！？姿を現せ！」

？？？？「……私は」

すると辺りが明るくなり

ドルク達の目の前には

ドルク「なっ！？」

シルム「き…君は！？」

クレセリアだった

クレセリア「私は……クレセリア！」

ドルク「ク……クレセリアだと！？（夢に出てきた……あの…クレセリアだと！？）」

紛れもなくクレセリアだ

クレセリア「あなた達がどうやってここへ来たのかはわかりませんが……でもちょうどよかったです。私もあなた達にお会いしたいと思ってましたから」

すると

シルム「ク、クレセリア……」

ソウ「やっぱりあれは……ただの夢ではなかったんですね……」

ドルク「何っ！？」

ドルクは驚いた

まさか

シルム「じゃあ夢の中で見たことは……」

クレセリア「はい。以前……夢の中でお話したとおり……あなた達はこの世界にいてはならない存在なのです」」

ドルク「あ……あなた達だと!?」

ソウ「やっぱり……」

シルム「やっぱりドルクとソウもオイラと同じ夢を見てたんだな……オイラとソウは一度未来へ行き……」

ソウ「そしてまたこの世界に帰ってきた……」

シルム「そのことが世界を壊すことにつながると……夢の中でクレセリアに言われたんだよ……」

なんとドルクだけではなかった

ドルク「夢を見たのは俺だけじゃなく…シルムとソウもか!?」

ソウ「はい、師匠やシルムさんには言わないでおこうと思い、伏せていましたけど……」

ドルク「シルムやソウも…この世界にいてはならない存在だって!

？クレセリアにそう言われたのか！？」

そう

シルムやソウも同じだ

シルムとソウは一度未来に行って帰ってきた

それが原因でシルムやドルクは進化ができない

ソウは召喚獣の力で進化できるもはできるらしい

しかし

ソウ「僕の召喚獣の進化がなぜかうまくできないのは……」

ソウまでもその影響が出ていたのだ

シルム「なあクレセリア教えてくれ。未来世界へ行ったオイラや…
…別の世界から来て、未来世界へ行ったソウ、元々未来の人間だっ
たドルクの影響で……この世界の空間が歪んでしまったというのは
わかったんだけど……空間が歪むと……どうして世界が壊れてしま
うんだ？」

するとクレセリアは答えた

クレセリア「……空間の歪みが大きくなると、闇の力も増幅（ぞうふく）さ
れ……やがて世界は……悪夢に包まれてしまうからです」

ソウ「悪夢に包まれる？」

クレセリア「はい。今私達は何処にいると思いますか?」

シルム「それは……ルリリの夢の中だと思うけど……」

そう、ここはルリリの夢の中だ

クレセリア「そうです。ルリリの悪夢の中です。そしてルリリは悪夢を見続けたまま……眠りから覚めない……。これがやがて世界に広がっていくのです……今悪夢を見てるのはルリリだけですが……しばらくすると他のポケモンも悪夢を見るようになり……眠り続けるポケモンはどんどん増えてゆき……いずれはすべてのポケモンが夢から覚めなくなるのです」

ドルク「すべてのポケモンが!?」

シルム「な、なあクレセリア。じゃあ空間の歪みをなくすためには……どうしたらいいんだ?どうしたら空間の歪みを消すことができるんだ?」

その方法は

クレセリア「空間の歪みをなくす方法はただ一つ。それは……あなた達が消えることです!」

シルム「ええっ!?オ、オイラ達が!?」

クレセリア「そして私はこの時を待っていたのです」

クレセリアがドルク達に迫る

クレセリア「あなた達を消し去る……この瞬間をッ！」

シルム「ちょ…ちょっと待ってくれ！オイラ達そんなよくわからないまま消えたくないよ！」

しかし

クレセリア「ではすべてのポケモンが悪夢に包まれてもいいと？」

ソウ「そんなこと望みませんけど……クレセリア…本当に……本当に僕達が消えれば……世界は……救われるんですか？」

クレセリア「救われます。あなた達の存在が……世界を破滅へと追い込んでいるのだからッ！」

シルム「ううっ……」

さらにクレセリアが迫る

クレセリア「すみませんが……消える覚悟をッ！！これで！世界は救われるッ！！」

クレセリアは攻撃をしようとする

シルム「うわあああああああああああああああああああっ！！！！！！！！？」

すると

？？？「おーーーーーーーーーーーーーーーーい！ドルク！シルム！ソウ！何処にいるんだ！？」

間一髪、誰かの声が聞こえた

クレセリア「くッ！もう少しだったのに！」

クレセリアは下がった

クレセリア「邪魔が入りましたが……あなた達にはいずれ消えてもらいます。あるいはもし世界を救いたければ……あなた達自らが消えることを選ぶべきでしょう。では……」

クレセリアは消えていった

シルム「ふう……た、助かった～……」

ソウ「危ないところでしたね」

すると

？？？「おーい！ここにいたのか！」

するとドルク達の後ろから

シルム「ス、スリープ！どうしてここに？」

スリープ「お前達の帰りがあまりにも遅いんで心配になってな……それで思い切って来てみたんだ」

スリープは周りを見渡す

スリープ「これ以上ここにいるのは危険なものを感じるな……とりあえずはギルドに戻ろう」

ドルク達はギルドへと戻った

……

ブレイブ元弟子部屋

ペラップ「……なるほど。つまりそのクレセリアが言うには……ルリリの悪夢は……空間の歪みからきていると」

シルム「うん」

ペラップ「そしてこのままだと……ルリリだけでなくすべてのポケモンが眠ったままになってしまうと。そう言ってたんだな？」

シルム「うん……」

シルムの表情が暗くなる

ペラップ「わわっ！それがホントなら！大変なことですよ！これは！なんとかしなくてはっ！！」

シルム「なあペラップ。ペラップは知ってるの？クレセリアの事を」

ペラップ「ああ……と言っても噂でしかないけどな。なんでもクレセリアは三日月の夜に現れ……体から放つやわらかい光で相手の心

を癒すそうだ」

ソウ「そんな優しい感じには見えませんでしたけど……」

たしかに

なんかまるで悪意を感じるようだった

ペラップ「後クレセリアは……闇を振り払う不思議な力があるとも言われている」

シルム「闇を振り払う……不思議な力かあ……」

ヘイガニ「ヘイ！とにかく！このまま放っておいたら……すべてのポケモンが眠ったままになっちゃうんだよな！だったら早く空間の歪みをなんとかしなくちゃ！ヘイヘイ！」

スリープ「なあシルム。空間の歪みを解決する方法について……クレセリアは何か言ってなかったのか？」

これにドルク達は驚くが

シルム「ええっ！？く、空間の歪みを解決する方法だって！？」

スリープ「わわっ！な、なんでそんなに驚くんだよ！？お、俺今なんか変なこと聞いちゃったのかな……」

シルム「い、いや。そうじゃないよ。ゴメン。ちょっと考え事してただけで……えーっと……空間の歪みを解決する方法だよな？……うーん……特に何も言ってなかったな……」

シルムはとりあえず嘘をついた

本当は自分達が原因と言えない

スリープ「うむむ……そうか……残念だな……」

プクリン「まあとにかく♪空間の歪みについてみんなで調べてみようよ♪そうしないと悪夢が広がるのを止めることもできないしね♪ペラップ！」

ペラップ「は、はい！親方様！」

ペラップは両翼をはばたかせ

ペラップ「じゃあみんな！今日のところは解散しよう。そして明日から空間の歪みについて各自調べてみてくれ」

ビッパ「はいでゲス～ッ！」

ペラップ「では解散！」

……

夜

ドルク達は話していた

シルム「ううっ……さっきギルドで話してたとき……スリープに空間の歪みをなくす方法を聞かれたけど……オイラ咄嗟（とっさ）に嘘ついちゃ

ったよ……」

ソウ「空間の歪みをなくす唯一の方法が僕達が消えることですし…
…とてもじゃありませんが言えないですよ」

みんな暗くなっていた

シルム「……でも……本当はちゃんと言わなくちゃいけないのかな
あ……」

ドルク「……」

ドルクは何も言えなかった

若葉がしおれたようになってしまう

シルム「……なあドルク、ソウ……オイラ達これからどうすれ
ばいいんだろう……オイラ達がいなくなれば……世界が救われるの
かな……」

ドルク「俺もそれはわかんねぇ……どうなのか」

ソウ「僕もです……本当にそうなのか僕も」

シルム「……だったら……それでも……」

ドルク「シ…シルムッ！」

すると

シルム「うーん、ああもう。なんか悩みすぎて疲れちゃったよ……ドルク。ソウ、今日はもう休もう」

ソウ「そうですね」

ドルク達は寝た

……

夜

まだ夜は明けていない

しかしドルクはなぜか眠れなかった

ドルク「（眠れねぇな…シルムとソウはもう寝てるのか……空間の歪みに原因が俺達にあるのはわかったが……それがこの世界を壊すことにつながるなんてな……今でも信じられないな……最初はただの夢だと思ったが……でも2回目の夢の時、空間の歪みについて言われたこともあったから……もしかして本当のことかって思ったんだよな……そういえばあの夢を見た後の朝……たしかシルムとソウは……）」

……

ソウ「どうしたんです師匠？」

シルム「何ぼーっとしてるんだよ？ドルクらしくないぞ？」

ドルク「あ、ああすまないな」

シルム「元気出して行こうぜ！ドルク！ソウ！」

ソウ「はい！」

ドルク「（シルムはいつにも増して元気がいいな、でもシルムの言うとおりだな。俺が世界を壊す存在と決まったわけじゃねぇし、ここでクヨクヨしててもしかたねぇな元気を出さなきゃな）そうだな♪」

……

ドルク「（あの時のシルムとソウはすごく元気がよさそうに見えたが……だがシルムとソウも俺と同じクレセリアの夢を見ていたはずだ……それにもかかわらず、あんなに元気がよかったのは……もしかするとこっちも同じ夢を見てるかもしれないと思って……元気づけようとしてくれたんだな……あの時、本当はシルムやソウも不安だったはず、でもそれより先にこっちの事を心配してくれたんだな）」

シルムやソウも無理して元気を出したのだ

ドルク「（あいつらの事、気づかないなんて…俺もまだまだだな…ルリリの悪夢の中で……クレセリアに言われて……気持ちがかなり落ち込んでいるが……でも……でも……でもだからこそ……気持ちを強くもたないとな……気持ちを……強く……気持ちを……）」

ドルクはそう思い眠った

……

ドルク「……！あれ？」

ドルクは目を覚ました

ドルク「シルムがいねぇ、外か？」

ドルクは外へ

すると

ソウ「師匠～」

ソウも目を覚ました

ドルク「ソウもか」

ソウ「あれ？シルムさんは？」

ドルク「外だと思うが」

ソウ「じゃあ僕も」

二人は外へ

……

外で地平線を見ているシルム

ドルク「シルム」

ドルクとソウはシルムに駆け寄る

シルム「ドルク、ソウ……ドルクとソウも起きたのか？」

ソウ「こんな時間どうしたんですか？」

するとシルムは答える

シルム「オイラ全然眠れなくてさ……」

ドルク「シルム……」

シルムは水平線へと向く

シルム「……なあドルク。ソウ、オイラ達はこの世界に……いてはいけないのかな……」

ドルク「シルム……」

シルム「……時限の塔でディアルガと戦った時……ドルクは自分が消える覚悟してたんだよな、たとえ自分が消えたとしても……それで世界が救われると思ったから……そうしたんだよな？……だったら今度も……そうするべきなのかな……」

ドルク「シルム……たしかに俺は……自ら消える覚悟でディアルガと戦った……星に停止を食い止めるために……あの時は俺が消えてもいいと思ったが……今回もそれと同じなのかどうか（だが…何か違うんだ」

ドルクとソウがシルムに近づく

ソウ「師匠……」

シルム「ドルク……ドルクは……どう思うんだ？オイラ達はこの世界から消えるべきなのかな？」

ドルク「それはわからねぇよ……」

わかるわけがない

自分達が消えるとどうなるかさえもわからない

シルム「ううっ……わからないってことは……やっぱりドルクもオイラ達は消えるべきかもしれないって思ってるんだな……だったら……」

ドルク「待てよ！でも何処か妙な感じがすんだよ……」

シルム「えっ？何処が？……何処が妙なんだ？」

ソウ「たしかに妙ですね、師匠は何処が妙に思えるんですか？」

ドルク「クレセリアの言葉だ、なんか妙なんだよな」

しかし

シルム「でも……空間が歪んでるのはオイラ達のせいだって光の泉でも言われたし……そのせいでルリリも悪夢から覚めないのなら……やっぱり信じるしかないんじゃないのかなぁ……」

ドルク「（くっ！たしかに……だが何処か違うようなんだよな……何かが違うんだよな……それがなんなのか……考えるか……！そうだ！たしかに……たしかにあの時は違った！あの時俺は消えることを望んでいたわけじゃねぇ）シルム！」

シルム「え？違うって？何が……何が違うんだ？」

ドルクはシルムに説明した

シルム「ええっ！？」

ソウ「時限の塔で師匠が消滅を覚悟したときと」

シルム「今回とは少し違うって！？」

ドルク「ああ…そうだ……それでな……」

ドルクはさらに説明する

シルム「時限の塔では歴史を変えることが……世界の平和につながるとわかってたからそうしただけで……」

ソウ「自分から望んで消えたわけでないと」

シルム「それに今回は本当に自分達が消えれば……世界が平和になるのかどうかは……まだハッキリしてないんじゃないかと……そうだよな……たしかにまだハッキリしてないと思うけど……でも……」

シルムは地平線に向く

シルム「ドルクは未来から来た人間で……ソウとオイラも一度未来に行ってからまたこの世界へ戻ってきた……そしてその影響で空間の歪みができてしまっている」

ソウ「でも僕達が歴史を変えたことはたしかですし」

シルムはドルク達に向く

シルム「だったらやっぱり……」

ドルク「シルム……」

すると

シルム「あっ……」

地平線から逆のトレジャータウンの方から

ドルク「朝日だ……日が昇ってきたな」

朝日が昇ってきた

ドルク「きれいだな」

ソウ「すがすがしいですね」

するとシルムは

シルム「ドルク、ソウ……この朝日を見て思い出したよ。オイラここで朝日を見るのは……初めてじゃないんだ、最初に見たときは……ジュプトルが一緒だったんだ」

ドルク「ジュプトルが？」

シルム「うん。オイラ達が未来から戻ってきた時、初めてここに寝泊りしただろ？その最初の夜明けを見たんだ。そしてその時……ジュプトルがオイラに聞いてきた言葉を……今思い出したよ……」

……

ジュプトル「あの状況の中であの時お前は最後まであきらめなかった……俺でさえあきらめかけたというのに……あれはどうしてだ？どうしてあそこまで……気持ちを強くもてたのだ？」

……

シルム「未来世界から脱出する時オイラが最後まであきらめなかったから……ジュプトルにはそれが不思議だったようなんだ。それでジュプトルが聞いてきたんだけど……オイラにもどうしてがんばれたのかわからなかったんだ……でも考えていくうちに少しわかってきたことが……」

……

シルム「うーん、どうしてだろうな……オイラにもよくわからないけど……」

シルムは水平線に向ける

シルム「でも……もしかしたら……ドルクがそばにいてくれたからかもしれない……」

ドルク「ドルクが？」

……

シルム「そう……オイラはドルクが一緒だったからがんばってこれた……そしてソウも一緒だったから……それがあの時やっとわかったんだ」

ソウ「シルムさん……」

シルム「そしてジュプトルにもそう答えたんだけど……」

シルムは水平線に向け、一歩踏み出した

シルム「幻の大地でジュプトルと別れた時……」

……

ジュプトル「もうここには二度と戻れないだろう、シルム！ドルクのことは頼んだぞ！！」

シルム「そ、そんな！？ジュプトルの代わりなんてオイラにはできないよ！」

だがジュプトルは

ジュプトル「やるんだ！そしてシルムならできる！お前達は！！最高のコンビだ！！」

……

シルム「あの時ジュプトルから思いを託されたのに……オイラは自分が……はずかしいよ」

シルムはドルクとソウのそばへ

シルム「ドルク。ドルクがあきらめないなら……オイラだってあきらめない！」

ドルク「シルムッ！！（泣）」

ドルクの目から涙がこぼれていく

シルム「オイラ達だってやれることがまだあるはずだよな。オイラ達が消えなくてもうまくいく方法がきっとあるはずだ！」

ドルク「そうだ！それでこそシルムだ！」

シルム「ソウも！」

ソウ「はい！」

3人は誓い合う

シルム「がんばろう！ドルク！ソウ！」

ソウ「はい！がんばって突破口を見つけましょう！」

ドルク「ああ！」

……

シルム「そうだ。ドルク、ソウ、なんとなく思ったんだけど……前は時が壊れれようとしていたよね？そして今度は空間が歪んでいる……時が壊れるのと空間の歪み……2つもオイラにはよくわからないものだけど……でもそれだけに……この2つに何か関係があるような気がするんだ」

ドルク「時と空間に関係か……たしかにありそうだな」

シルム「だろ？そして時が壊れた時の……時限の塔の事はラプラスがよく知っていた……だったら今度の空間の歪みについても……ラプラスなら何か知ってるんじゃないかなあ？」

ソウ「たしかにありそうでですね、ラプラスさんなら何かわかるはずですし」

ドルク「たしかに、ラプラスならなにかしら知っていてもおかしくはねぇよな」

ラプラスはたしかに知っていそうな感じだ

シルム「やっぱりドルクやソウもそう思うよな、よし決まり！じゃラプラスに会ってみよう！」

ソウ「ラプラスさんは海岸にいるはずですし行きましょう」

ドルク達は海岸へ

……

海岸

シルム「ねえラプラス。ちょっと聞きたいことがあるんだけど……オイラ達、今、空間の歪みについて調べているんだ」

ラプラス「空間の歪みについてですか……」

ドルク「ああ、それでラプラスなら何か知ってるかもしれないと思ってな、ぜひ教えてほしいんだが……」

ラプラス「うーん……」

ラプラスは考える

シルム「ど、どうかな？何かわからないかな？」

すると

ラプラス「……残念ですが……空間の歪みについては僕もわからないです」

ドルク「そっか……」

ラプラス「でも……空間を司る者なら知っています」

ソウ「空間を司る者？」

その空間を司る者とは

ラプラス「はい。時と空間は対になるもの……ディアルガが時を支配していたように……空間もまた、支配している者がいるのです」

シルム「そ、それは……誰なんだ？」

ラプラス「名はパルキア。空間を歪める能力を持ち……空の裂け目に住んでいるといわれています」

ドルク「空間を司る……パルキア……ディアルガの他にも、そんな存在がいるなんてな」

つまりパルキアなら何かわかるってことだ

シルム「じゃあそのパルキアに会えば…空間の歪みについてもわかるかもしれないんだね！その……空の裂け目にはどうやって行ったらいいのかな？幻の大地のようにラプラスも行けたりするの？」

しかし

ラプラス「残念ですが……僕は空の裂け目には行けませんし場所も知りません。僕がわかるのもここまでです」

シルム「ううっ……そっかあ……」

ラプラス「すみません。シルムさん。あまりお役に立てなくて」

しかしシルムは

シルム「そ、そんなことはないよ」

シルムはドルクとソウに向く

シルム「パルキアの存在がわかっただけでも収穫だよな」

ドルク「そうだな」

そしてラプラスに向く

シルム「ありがとう。ラプラス。後はオイラ達で調べてみるよ」

ドルク達は自分達の基地へと帰っていった

……

サメハダ岩

シルム「結局……空間の歪みについてラプラスから聞けたことは……空の裂け目に住むパルキアが空間を司っているってことだったよな？」

ソウ「はい」

ドルク「パルキアかあ……パルキアに会えれば空間の歪みについて何か聞けるかもしれないが……問題は空の裂け目が何処にあるかだな」

シルム「うーん。でもここで考え込んでもしかたないし……また明日調べてみようか、くじけずがんばろうな！ドルク！ソウ！」

ドルク「ああ！」

ソウ「はい！」

……

夜

ドルク達はすやすやと寝ていたその時

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

シルム「わわっ！地震！？」

すると光が包み込んだ

するとドルク達の目の前から

シルム「うわあああああああああああああっ！！」

一匹の巨大なポケモンが現れた

両肩にはパールの宝石が埋め込まれ、体色は白とピンクで、凶暴そうな目をしたポケモンだ

？？？「ついに見つけたぞッ！空間を歪める……その元凶をッ！！」

ドルク「なっ！？お前は誰だ！？」

？？？？「俺はパルキア！空間を司る者！」

ドルク「パ…パルキアだと！？」

シルム「パルキアだって～！？」

ソウ「うそっ！？」

まさか直接くるとは

パルキア「もう逃げられんッ！観念しろッ！グオオオオオオォォォォォッ！！」

パルキアの両肩の白玉が光る

ドルク・ソウ・シルム「うわあああああああああああああああああああああああああっ！！！！！？」

ドルク達は光に包まれた

残ったのは巨大な光

その巨大な光は何処かへと向かって高速で行った

……

何処かの場所

巨大な光は収まり、ドルク達は何処かへと到着した

シルム「こ、ここは？」

パルキア「ここは空の裂け目！俺の住処だ！」

ドルク「ここが空の裂け目！？」

パルキア「勝手に空間を歪める者は許さんッ！お前達には消えてもらうッ！」

シルム「ええっ！！？」

パルキアがドルク達に迫る

ドルク達は後退する

パルキア「覚悟しろッ！」

パルキアはドラゴンクローを繰りだした

ドルク達は後退してよけた

シルム「わわっ！何するんだっ！」

ドルク達は後ろを向くと床がない

シルム「あ、後がない！」

パルキア「グオオオオオォォォォッ！！」

パルキアは突進した

その反動で

ドルク・ソウ・シルム「うわあああああああ

けど……」

ソウ「しかしビックリしましたね。急にこんなことになるなんて」

ドルク「まったくだ、それにしても……パルキアはなんで襲ってきたのか……空間の歪みについて何か言ってたみたいだしな、それに空間を歪めてる原因が俺達にあるから襲ってきたようだな、だがそうなった理由もわからねぇし」

たしかに

なぜ襲ってきたのかわからない

シルム「とにかく、オイラ達を狙っていることは間違いないよな」

ソウ「早くここを離れましょう、また襲ってくるかもしれないですし」

ドルク「そうだな」

ドルク達は準備してこの場を離れた

第６９話　空間と悪夢と本当の原因（前書き）

パルキアの真意は！！

第６９話　空間と悪夢と本当の原因

空の裂け目　中間地点

ドルク「ここまで来たがまだ先が長いな」

ソウ「それにしてもここはポケモンが強いですよ」

ドルク達は疲れた表情をする

空の裂け目のポケモン達はかなり強く、ドルク達もかなり倒したが

それなりに強さを感じていた

シルム「でもすぐまたパルキアが追いかけて来るから急ごう！」

ドルク達はうなずき、先へと進んだ

……

空の裂け目　奥底

シルム「あれ？ドルクあそこ！」

ドルク「行き止まりだ！」

ソウ「これ以上先には進めませんね」

すると

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

シルム「わわっ！ゆ、揺れてるっ！？」

光が輝き

光が収まると

シルム「パ…パルキアッ！！」

パルキア「足掻いても無駄だ！ここからは絶対に逃げられない！」

ドルク「くっ！」

ドルク達は苦い表情をする

パルキア「なぜならお前達は……この俺によって……消される運命だからだアッ！！」

シルム「く、来るぞ！ドルク！」

ドルク「やるしかねぇ！行くぜ！」

パルキア「覚悟しろッ！！」

するとドルク達の体がオーラをまとう

ドルク・シルム・ソウ「ポケ！クロス！！」

ドルク達は合体する

ドルク「ドルクＸ３！！」

パルキア「そんなもので俺に勝てると思うな！亜空切断！！」

パルキアの両肩の白玉が光、パルキアの爪から淡いピンクの鋭い三日月状のものが作り出された

それをパルキアは一振りする

するとその三日月状のものはドルクＸ３に襲い掛かるが

ドルクＸ３「オオラァ！！」

ドルクＸ３は亜空切断を拳で相殺した

パルキア「何っ！？」

自分の技が相殺されてパルキアは驚く

ドルクＸ３「オラァ！！」

ドルクＸ３はパルキアを殴った

パルキア「ぐわっ！？」

パルキアな殴られ後ずさる

ドルクX３「行くぜ！！ブレイブソウル！！」

ドルクX３は光をまとってパルキアに突進した

パルキア「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！！！！！？」

パルキアは倒れるがまだ立ち上がる

パルキア「ウグッ！ウガガアーーーーッ！！」

その時

パルキアは石像のように動きが止まってしまった

シルム「……あ、あれ？」

ドルク達は合体を解除していた

ソウ「パルキアの動きが止まりました」

ドルク「一体どうしたんだ？」

すると何処からか声が

？？？？「パルキアは……パルキアは悪夢に包まれたのだ。ルリリと同じようにな」

ドルク「誰だ！」

ドルク達は周りを見渡した

シルム「だ、誰なんだ？パルキアが悪夢に包まれるって一体……」

？？？？「そこまで闇の力が広がっているということだ。このままだと世界が闇に覆われてしまう。お前達。パルキアの悪夢の中に入ってみるか？」

ドルク「なんだと？」

シルム「パルキアの……悪夢の中に！？」

？？？？「そうだ。悪夢の中に入れば……なぜパルキアがお前達を襲ったのかもわかるだろう……どうする？」

悪夢の中に入れる

だが一体これは誰の声なのか？

シルム「どうするドルク？悪夢の中に入ってみるか？」

ドルク「ここは入るしかないな、俺達もわからないことばかりだ、とりあえず行くぜ」

ソウ「僕も！」

？？？？「決まりだな。ではパルキアの悪夢の中にお前達を送り込むぞ」

ドルク達は悪夢の中へ

……

パルキアの悪夢の中

シルム「あっ！パルキア！」

パルキア「お前達は！？なぜお前達が俺の夢の中に！？いや。そもそも俺はお前達と戦っていたはずだ！その俺が……どうして夢を見ているのだ！？」

ソウ「あなたは……悪夢に包まれたんですよ」

その言葉でパルキアは

パルキア「な…なんだとッ！！俺が……悪夢に？グオオオオオオオオオッーーーーーーー！！」

パルキアは咆哮をする

シルム「わわっ！！」

パルキア「やはりお前達を……生かしておくわけにはいかないなッ！グオオオオオオオォォォォッーーーーーーーーーーーー！！」

パルキアは攻撃しようとする

シルム「わわっ！パルキア！」

ドルク「ちょっと待てよ！あんたに聞きたいことがあるんだよ！なんで俺達を消そうとするんだ？」

パルキアは攻撃の体勢を解いた

パルキア「そんなの決まっているッ！お前達が勝手に空間を歪めているからだ！空間の歪みが大きくなると、闇の力も増幅される！そして世界全体が悪夢に包まれてしまう！それを止めるには……お前達に消えてもらうことが必要なのだ！」

シルム「ううっ……でも他に……他に方法はないの？パルキアは空間を支配してるんだろ？だったら空間の歪みも抑えることができるんじゃないの？」

空間を支配しているのなら可能なはずだが

パルキア「たしかに俺は空間を自在に操れる。しかし……今回にかぎってはなぜかコントロールがきかなくなっている！それどころか空間の歪みがどんどん増幅されているのだ！お前達のおかげでな！もはや世界を救うためには……お前達がこの世界から消えるしかないのだッ！！」

どうやら空間のコントロールがパルキアでも制御できないようだった

シルム「ううっ……パルキアもクレセリアと同じ事を……ドルク……やっぱりクレセリアが言ってたことに嘘はなかったんだ。やっぱりオイラ達は……消えるしかないのかも……」

ドルク「シ、シルムッ！」

ソウ「そんなっ！？」

パルキア「お前達には悪いと思っている。しかし平和のためだ。わかってくれ……」

パルキアは謝罪などの言葉をかけた

シルム「パ、パルキア……」

そこに

？？？「ここに……ここにいたのですね」

光が包まれ

パルキアの背後から

シルム「ク、クレセリア！！」

クレセリアだ

クレセリア「闇もとうとうここまで広がっているのですね……」

パルキアは移動してクレセリアはドルク達のとこへ

クレセリア「早くあなた達を始末しなくては……」

クレセリアが迫る

ドルク達は一歩後ろに下がる

クレセリア「すべて手遅れになってしまう」

さらにクレセリアが迫り、ドルク達がまた一歩下がる

シルム「ううっ……ドルク……オイラ達最後まであきらめない気持ちでがんばって来たけど……」

さらに迫り、下がる

シルム「やっぱり……無駄だったのかな……」

さらに迫り、再び下がる

シルム「努力しても……だめだったのかな……」

もう逃げられない

クレセリア「覚悟はできてますか？」

シルム「ううっ……クレセリア……その前に……最後に聞かせてくれ。オイラ達が消えれば……本当に世界は救われるの？」

クレセリア「はい。間違いなく。間違いなく世界は救われます、心残りはないですか？」

シルム「……うん……オイラ達が……オイラ達が消えるだけで……世界が救われるのなら……」

ソウ「もう…だめです……」

ドルク「（つ、ついに……ついにシルムの気持ちが折れ始めた……くそっ！俺までもだ……でも本当に……本当にこれでいいのか……）」

何もできない

こんな状態で

どうすることもできない

絶望だけがドルク達の頭をよぎる

パルキア「クレセリアよ……俺はさっきまで怒りに任せてこいつらを襲ってきたが……ただこうして見てると……俺にはそんなに悪い奴らには見えないのだ、以前夢の中でクレセリアは言ってたが……本当にこいつらは悪い奴らなのか？」

ドルク「（何っ！？パルキアも夢の中で……クレセリアが言ってただと！？）」

クレセリア「見かけにだまされてはいけないですよパルキア。ここで始末すれば……すべてが救われるのです」

ドルク「（パルキアも以前から夢の中でクレセリアと会っていた）」

ソウ「（そしてパルキアは今疑問を持ち始めてる……つまり……）」

ドルク・ソウ「（すべてはこのクレセリアが言ってるだけにすぎない（すぎねぇ！））」

パルキアも夢の中でクレセリアに会っていた

クレセリア「それではあなた達を始末します！」

ドルク「シルムッ！まだ希望を捨てるな！！」

シルム「えっ！？」

ソウ「これは！？」

クレセリア「食らえええええええええええッ！」

クレセリアがドルク達の攻撃しようとした

その時

そうです！！希望を捨ててはだめッ！！

すると光が輝きそこから

シルム「えっ！？ク、クレセリアが……もう一匹いるっ！！？」

なんとクレセリアは二人も

？？？？「そして……」

？？？？「お前が元凶だ！！」

そこから

ドルク「ネク！カザリ！」

ネクとカザリだ

ネク「行くよ！フォーゼラスウィンド！！」

カザリ「正体を現したらどうなのかな？」

ネクは光の風をドルク達を襲うクレセリアに放つ

さらにクレセリアは光を放つ

すると正体が明かされた

シルム「うわあああああぁぁぁぁぁぁっ！！」

その正体は一匹のポケモン

漆黒の体色に少し長い白い髪、首には赤いかざりのようなものがついていて、目が鋭いポケモンだ

パルキア「な、なんだ！コイツはッ！？」

カザリ「アクセルサンダー！！」

カザリは早いスピードでその漆黒のポケモンに攻撃

本物のクレセリアは素早くその漆黒のポケモンに攻撃

漆黒のポケモンは飛ばされた

クレセリア「よかった！間に合った！」

ネク「ギリギリセーフだね」

カザリ「師匠を消すなんてそうはいかないよ」

？？？「ク…クレセリアめッ！あと少しでとどめがさせたというものをッ！」

クレセリア「ドルク！シルム！ソウ！そしてパルキア！よく聞いて。あなた達は今までだまされてたのです！あそこにいるダークライによって！」

パルキア「何ッ！？」

そう、空間の歪みを増幅した犯人

それがこの漆黒のポケモン…ダークライなのだ

クレセリア「あなた達が今まで見てきたクレセリア……あれは私ではありません。あのクレセリアはすべてそこにいるダークライが生み出した幻影……私の偽者だったのです！」

パルキア「なんだとッ！？」

シルム「今まで見たクレセリアが……偽者だってっ！？」

ネク「そう、俺とカザリちゃんでドルクとシルムが進化できない原

因である空間の歪みを調べてね……」

カザリ「ちょうどキサギの森でクレセリアに会ったんだよ、そしたら……」

ネク「この空間の歪みを作り出した張本人がドルクとシルムの進化ができない原因とこの世界を悪夢に包ませようとする元凶だ！！」

こうしてなんとかドルク達はやられずにすんだ

クレセリア「ダークライ！私の偽者を使って、だますあたりはいかにもあなたらしいわね。でも……いつも後ろで暗躍し、表に出てこないあなたが……今回は自分からとどめを刺しに来るなんて……ずいぶんとめずらしいじゃない！」

ダークライ「……そこのクレセリアの後ろにいる3匹……」

シルム「オ、オイラ達の事？」

ダークライ「そうだ、よく聞け。空間の歪みを利用し……世界を悪夢に包み込もうとしてるのは……他でもない。この私だ」

なんと自分からばらしたダークライ

シルム「ええっ！？な、なんだってぇ～っ！？」

ダークライ「私の企みを止めたくば……闇の火口へ来い」

クレセリア「逃がさないわ！ダークライ！」

クレセリアはダークライを捕まえようとするが

ダークライの周りに黒いのが包まれ、消えていった

シルム「ダ、ダークライが消えたっ！？」

ダークライ「クレセリア……お前に私を捕まえることはできない……絶対にな」

余裕に言うダークライ

ドルク達が辺りを見渡すがダークライの姿はない

ダークライ「そこの３匹よ……闇の火口で待ってるぞ」

そう言い残して去って行った

シルム「……闇の……火口……」

第７０話　存在する意味

トレジャータウン広場

ルリリ「お兄ちゃ～～～ん！」

マリル「ルリリ！よかった！悪夢から覚めたんだね！」

ルリリ「うん！」

あの後ドルク達はトレジャータウンへ戻ってきて、クレセリアの力でルリリの悪夢を振り払ったのだ

マリル「クレセリアのおかげです！ありがとうございます！」

ルリリ「後、スリープさんも！」

スリープ「えっ！？俺！？」

呼ばれたスリープは驚く

ルリリとマリルがスリープに近づく

ルリリ「本当にありがとう！スリープさん！」

マリル「スリープさん！僕もお礼を！ずっとルリリの看病をしてくれて……本当にありがとうございました！」

マリルとルリリはスリープにお礼を言った

スリープ「うう……嬉しいけど、なんかテレるな……」

スリープは少し赤くなる

シルム「なあクレセリア。パルキアはあの後どうしてるの？」

クレセリア「パルキアは今、空の裂け目で……空間の歪みを抑えようと動いてます。空間を司る者の誇りをかけて。ですのでここに来ることももうないでしょう」

ペラ八「いやーーー！しかし！それにしてもすごい！すごいですよ！クレセリアさん♪闇を振り払う力は噂とかじゃなく……本当だったんですね♪いやーーー！すごい♪」

ペラップは納得する

シルム「そっか……パルキアの悪夢にいたときもその力を使って……オイラ達とパルキアを悪夢から引き戻したんだね……」

クレセリア「はい。私には闇を振り払う力……つまり……悪夢を振り払い、夢から覚めさせることができます。逆に悪夢を見せる力を持っているのがダークライなのです。シルム、ソウ、そしてドルク。あなた達が偽者の私……つまりこれまでのクレセリアと会っていたのは……すべて夢の中だったのではないでしょうか？」

ドルク「！たしかにそうだ！最初の夢だけでなく、あの時もそうだ」

……

クレセリア「あなた達がどうやってここへ来たのかはわかりませんが……でもちょうどよかったです。私もあなた達にお会いしたいと思ってましたから」

ドルク「あの時は夢を見てたわけじゃなく、気がつかなかったが…よく考えてみるとあれはルリリの悪夢の中……つまり夢の中には変わりなかった」

……

ドルク「そしてその次に出会ったのもパルキアの悪夢の中……あのクレセリアとは……夢の中でしか会ってないな」

クレセリア「ダークライは幻覚を見せる能力があります。つまりダークライは……幻覚で偽者の私をあなた達に見せていたのです。ドルクとシルムとソウを……この世界から消すために」

ビッパ「ええ～～～～～～～～～～～～～～～～～っ!!?」

ペラ八「ドルクとシルムとソウを……この世界から……け、消すぅうううう??だってえぇぇぇぇっ!?」

スリープ「け、消すっていうのはビックリしたけどさ……でも……なんでダークライはこんな手の込んだことをしたのかな?クレセリアの偽者なんかわざわざつかわなくとも……普通に倒した方が早いんじゃないのかな?」

たしかにそれならドルク達はやられるだろう

しかし

クレセリア「それはおそらく……ドルクさんとシルムさんとソウさんを恐れたんだと思います」

ドルク「俺とシルムとソウを恐れた？」

クレセリア「はい。ドルクとシルムとソウは以前……時限の塔が壊れるのを食い止めました。元々時限の塔を壊すようにしむけ……星の停止をもくろんだのが……ダークライだったのです」

ペラ八「ええ～～～

ドルクとシルムとソウ、そしてネクやカザリも空間の歪みの影響を受けている

ネク「大丈夫だよ♪」

クレセリア「たしかに、あなた達の存在も空間の歪みを引き起こしてますが……でもそれはとても小さなものであり……決して空間の歪みを大きくするものではありません」

シルム「じゃ、じゃあ……（泣）」

クレセリア「はい。あなた達のせいで空間の歪みが大きくなっているのではありません。すべてはあなた達をおとしめるための……ダークライの罠だったのです」

シルム「ドルク！よ、よかった……よかったよ……オイラ達はこの世界で……いらない存在なんかじゃなかった……オイラ達は……この世界で生きてもよかったんだ……ううっ……（泣）」

ソウ「シルムさん（泣）」

ドルク「シルム（泣）」

ドルク達の目から涙がこぼれてきた

この世界が

彼らの世界なのだから

生きていいのだ

プクリン「何があったのかわからないけど……でも……シルムもソウもドルクも……この世界にいらないなんてことはありえないよ。だってもしシルム達が消えたら……僕は悲しいもん……後ギルドのみんなだってすごく悲しむと思う……シルム達がいるから僕達は幸せなんだよ♪それだけでも……生きる意味はあるんじゃないかな」

ドルク「親方様（泣）」

ドルク達は涙ぐむ

生きる意味

それだけはあるのだから

プクリン「いや。シルム達だけじゃない。ここにいるみんなや……世界にいるすべてのポケモン達が……生きる意味があると思うよ。だから自分がいらないなんてもう思わないで。元気出して。ねっ♪」

シルム「ううっ……ありがとう。親方様（泣）」

親方様の言うとおり

生きる意味はみんなあるのだから

歩む道はあるのだから

ヘイガニ「ヘイ！しかし卑怯な奴だな！ダークライって奴は！」

クレセリア「決して表には出ず、裏で悪いことをたくらむ……こち

らが追ってもかならず逃げてしまう……それがダークライのやり方です。でもそのダークライが今回にかぎっては……ドルク達に来いと言っている……」

ドルク「たしかに、あの時ダークライが残した言葉」

……

ダークライ「私の企みを止めたくば……闇の火口へ来い」

ダークライ「そこの3匹よ……闇の火口で待ってるぞ」

シルム「……闇の……火口……」

……

ドルク「ダークライは闇の火口に来いと言ってたな、そしてそこに待っていると」

プクリン「クレセリア。ドルク達をわざわざ呼び出すっていうのは……罠だと思ってるんだね？」

クレセリア「はい。間違いなく」

しかしドルク達は

シルム「罠だろうとなんだろうと関係ないよ！」

ソウ「このままダークライを止めないと世界は暗黒に包まれるんでしょう？」

シルム「だったらなんとかしなくちゃ！オイラ達は行くよ！闇の火口へ！」

それでも彼らの決心はかたかった

クレセリア「……わかりました。私も一緒に行きます。私はダークライの野望に気づき……それを防ぐためにずっと追って来ました。追い詰めるたびに逃げられてきたのですが……今回は向こうが待っています。私もそこで決着をつけたいのです」

クレセリアもダークライを捕まえるために決心する

すると

スリープ「俺も行くぜ！」

ペラ八「私も！」

ビッパ「あっしもでゲス！」

みんな行くつもりで言うが

クレセリア「みなさんの気持ちは嬉しいのですが……あまり大勢で行くとダークライが警戒してしまうのが心配です。ダークライを逃がさず確実に決着（けり）をつけるためにも……ここは私達だけで行かせてください」

ビッパ「ううっ……そうでゲスか……でもそういうことならしょうがないでゲスね……」

ドルク「みんな心配すんな！かならずダークライを倒して帰ってくるからな！」

ペラ八「ああ！がんばれよ！」

スリープ「お前達ならやれる！」

ビッパ「気をつけて行くでゲスよ～！」

ドルク「ありがとな！みんな！」

ソウ「僕達も！」

ネク「どうやら俺達はまた留守番みたいだけど……ドルク、これを」

ネクはドルクに何かを渡した

渡されたのはメダルのようなものだった

絵は若葉マークだった

ドルク「これは？」

ネク「それはコアだよ、名づけて若葉コア、これは俺とカザリちゃんの思いがつまっている、だから使ってね」

ドルク「ありがたく受け取っておくぜ」

ドルクは若葉コアをトレジャーバックに入れた

シルム「行こう！ドルク！ソウ！ダークライがいる……闇の火口へ！！

……

サメハダ岩

クレセリア「ここから北西に行ったところに……火山地帯の大陸があります」

クレセリアはドルク達に向く

クレセリア「闇の火口はそこにあります。出発の準備ができたら声をかけてください、闇の火口まで私が案内しましょう」

……

ドルク「準備できたぜ！」

クレセリア「準備が整いましたね、わかりました。それでは行きましょう！闇の火口へ！」

……

闇の火口　入口

シルム「ここが闇の火口の入口か……」

クレセリアはドルク達に向く

クレセリア「ダークライのことです。どんな罠が仕掛けてあるかわかりません。気をつけて行きましょう」

ソウ「油断はできません、とりあえずサポートを入れながら行きましょう」

ドルク「さすが俺の弟子だな♪」

ソウ「師匠のサポートをするのが僕の役目ですし」

クレセリア「それでは行きましょう」

ドルク達は闇の火口へ入っていった

第７１話　本当の真実（前書き）

今回はドルクの事がついにわかります

本当の真実が

今

第71話　本当の真実

闇の火口　奥底

ここはかなりマグマが出ていた

シルム「行き止まりだ」

シルムが辺りを見渡す

シルム「ここが一番底のようだけど……ダークライはいないのかな」

すると少し暗くなり

ダークライ「待っていたぞ」

すると明るくなり、ドルク達の目の前からダークライが現れた

ドルク・シルム・ソウ「ダークライ！！」

ダークライ「よく来たな。シルム、ソウ、ドルク」

なんとドルク達の名前を知っていた

シルム「し、知ってるのか！？オイラ達のことを！？」

ダークライ「ああ。知っている。特にドルク。お前はな」

ドルク「なっ!?なんだと!?」

ダークライは特にドルクを知っていた

その真意は

ダークライ「ドルク。お前はジュプトルと共にこの世界へ来た時…
…事故を起こしているはずだ」

ドルク「事故って……まさか!?ジュプトルが言っていたタイムス
リップ中の事故の事か!」

……

ピシャーーーーン!!

??!?「……うおっ!……だ、大丈夫か?!」

??!?「あ…ああ」

ピシャーーーーーーーーーーーーーーン!!

??!?「は、離してはだめだ!もう少し……なんとかがんばるん
だ!」

ピシャーーーーーーーーーーーーーーーーーーン!!

??!?「くっ?!」

??!?「だ、だめだ……こ、このままだと……」

ピシピシッ…ピシャーーーーーーーーーーーン！！！！

？？？？・？？？？「うわあああああぁぁぁぁぁぁっ！？」

ダークライ「あの時お前とジュプトルはタイムスリップ中に事故を起こし……互いに離れ離れになった……そしてお前は人間からポケモンになり……記憶も失った……」

……

ダークライ「しかし……おかしいとは思わないか？」

ドルク「おかしいだと？」

ダークライ「そうだ。お前とジュプトルがタイムスリップ中に……なぜそんな事故が起こったのか……不思議だとは思わないか？」

ドルク「……」

ソウ「それって？一体？」

シルム「ダ…ダークライは……ダークライは知ってるっていうの？」

ダークライ「ああ」

ダークライは驚愕な言葉を口にする

ダークライ「あの事故を引き起こしたのは……この私だからな」

ドルク「な!?」

シルム「なんだってぇ!?」

あのタイムスリップ中の事故の元凶は

なんとダークライだったのだ!?

ダークライ「私の目的は……この世界を暗黒に変えることだ」

……

ダークライ「ディアルガが司る時限の塔……私はその時限の塔に細工をし……時が壊れていき……やがて星の停止に向かうように仕向けたのだ。しかしジュプトルとドルクが……それを止めるために未来から来ると知ったので……私はジュプトル達を消すために……タイムスリップ中に攻撃したのだ。ただ…邪魔が入ったので息の根を止めることはできなかったが……それでも十分なダメージを与えられるはずだった。特にジュプトルにはな。しかし……」

しかし……

ダークライ「ドルク。なぜお前はポケモンになったのかわかるか?お前はあの事故の時……ジュプトルをかばったのだ」

ドルク「お、俺が!?ジュプトルを…かばった!?」

ダークライ「私の攻撃からあえてジュプトルをかばい……そのかばう思いと……タイムスリップ中の異空間が交錯し……お前はポケモンになったのだ」

ドルク「俺が……そんなことを!?」

ドルクの真実が見えてきた

ドルクは大切なパートナーであるジュプトルをかばって自分が攻撃を受けてポケモンになった

ダークライ「私はそれで十分だと思った。お前にもはや星の停止を止める力はないと思ったからだ。しかし……それが甘かった。お前はシルムと出会い……さらにお前は攻撃を受けて魔法を使うことができるようになり……さらにソウにも出会った……そして時限の塔の破壊を食い止めた。お前達を放っておいたばかりに……私のもくろみは失敗したのだ」

クレセリア「だから……だから今回は先にドルク達を葬ろうと考えたのね!」

ソウ「自分の計画を邪魔されないように!師匠と僕とシルムさんを精神的に追い込むために!クレセリアさんの偽者を使って!そんなあなたを許さない!!」

ソウは怒った

自分の師匠であるドルクにそのようなことをやられたことを

彼は怒っている

ダークライ「……」

クレセリア「そして今も……ここまでおびき寄せ……私達を始末しようとしている！」

ダークライ「……たしかにそう考えている……だが……気が変わった」

ソウ「なっ！？」

ダークライ「ドルク。シルム。ソウ。お前達は勇気があり行動力もある。お前達の命を奪うのは……とても惜しい。だから……私と手を組まないか？」

シルム「えっ？」

手を組む

ダークライはドルク達を誘い込もうとしている

ダークライ「私と一緒に……暗黒の世界を支配してみないか？」

シルム「ええっ！？」

ドルク「手を組むだと！？」

ダークライ「私とお前達ならそれができる。どうだ？やってみないか？」

クレセリアがドルク達に向く

クレセリア「ドルク！シルム！ソウ！だまされちゃいけないわ！」

シルム「……」

するとシルムが黙り込む

クレセリア「シルム！聞いてるの！？」

シルム「……たしかに……ダークライの言うとおりかも……」

クレセリア「シ、シルムッ！！」

ソウ「シルムさん！？」

シルム「どうせオイラ達はここでダークライにやられちゃうんだ。だったらいっそのこと……ダークライとは……手を組んだほうが……いいかもしれない……」

ドルク「シルム！ど、どうして！？」

シルムはダークライのそばへ

ダークライ「フフフッ……中々かしこい選択だな。シルム」

ソウ「シルムさん…」

ソウは攻撃準備に入る

ドルク「ソウ！？」

ソウ「止めないでください師匠！シルムさんがこちら側ならシルム

さんも敵です！」

ダークライ「さあドルク。お前はどうするんだ？お前も仲間になったその時は……手始めにそこにいるクレセリアとソウを……我々３匹で消そう」

クレセリア「な、なんですって！？」

ダークライ「さあ、ドルクもこっちに来てくれ」

まるで誘っているようにダークライはドルクを誘い込もうとしている

クレセリア「い、行っちゃだめ！ドルク！」

シルム「ここに来てくれ。ドルク」

クレセリア「シルム！」

ソウ「師匠だめです！あなたが行ってしまうと！あなたも僕の敵に！」

シルム「ドルクが来てくれないと……オイラダークライにやられちゃうよ……」

ドルク「シ、シルム……」

ドルクは困惑した

そしてドルクはダークライの前へ

ダークライ「フフフッ。さあどうする?ドルク。私と手を組むか?」

ドルク「……」

ソウ「師匠!!」

シルム「暗黒の世界はすばらしいよドルク……」

ダークライ「ホラお前の相棒もせっかくこう言っているんだ。一緒に世界を支配してみないか?そしてお前は……暗黒の世界の王となるのだ」

ドルクの選択、闇に染まるか

倒すか

ドルク「……」

ダークライ「さあ、ドルク。よく考えて答えてくれ。私やシルムと一緒に……世界を支配するよな?」

はたしてドルクの答えは

ドルク「そんなこと!できるわけがないだろ!これは……これは……」

ドルクの答えは

ドルク「これは!悪夢の中だ!!」

すると辺りが明るくなり

ドルク「オラァ！！」

ドルクはダークライに体当たりした

ドカッ！

ダークライ「ぐおっ！」

シルム「ドルク！」

シルムはクレセリアとソウのところにいて動いていない

やはりこれは悪夢だったのだ

クレセリア「ドルク！」

ソウ「師匠！」

ダークライ「き…貴様ァッ！！」

ドルク「ぐわっ！？」

ダークライは反撃した

ドルクは倒れたが

ドルク「やっぱりな…」

ドルクは立ち上がる

ドルク「やっぱり俺は、ダークライに幻覚を見せられていたんだな！危ないところだったぜ！」

ダークライ「も、もう少しのところをッ！！ドルク！それが貴様の答えかッ！！」

するとドルクは言う

ドルク「聞きてぇか？」

ダークライ「？」

ドルク「聞きてぇよな～俺の答えを……」

ダークライ「なんだと！？」

ドルク「当たり前だ！シルムがあんなこというはずがねぇ！ソウもそんなの攻撃的のそんなことはしねぇ！それにテメェと手なんか組めるか！！暗黒の世界に絶対させねぇ！俺達はテメェを倒しにここまで来た！よ～く聞け！俺達は探検隊ブレイブ！！テメェの胸の中に刻んどきな！！」

ダークライ「フッ……よかろう。お前は選択を誤った。残念だが……お前達には消えてもらおう」

すると辺りが暗くなりすぐに明るくなると

シルム「わわっ！囲まれたっ！」

ドルク達は囲まれてしまった

6匹のポケモンに

クレセリア「やっぱり、こんなことじゃないかと思ってたわ！」

ダークライ「フフッ何度でも言え。お前達をここで始末し……私は暗黒世界の……王となるのだ、みなのもの！かかれィッ！！」

ダークライの目が光る

すると

トレジャーバックが光る

ドルク「これは！？」

ダークライ「なんだ！？」

それはネクから渡された若葉コアが光る

それがドルクの体に吸収した

ドルク「力が沸いてくる……これが若葉コアの力なんだな……」

するとシルムとソウとクレセリアがオーラをまとう

クレセリアはオーロラのオーラをまとっている

ドルク「行くぜ！」

ダークライ「！？そうはいくか！ダークホール！」

ダークライは黒い球体をドルクに当てようとするが

ドルクのオーラがそれを阻止してしまううまく決まらなかった

ダークライ「！？」

ドルク・シルム・ソウ・クレセリア「ポケ！クロス！！」

ドルク達は合体した

大魔王プクリンとその子分達と姿は同じだがさらにオーロラのマントをなびかせて

光をまとった剣が輝いている

ドルクＸ６「ドルク！Ｘ６！！」

ドルクＸ６は神秘のベールに包まれて登場した

第７１話　本当の真実（後書き）

今年最後の更新になりました

次回、ついに決着！！

第７２話　生きる者達へ（前書き）

はい！新年最初のポケダンです！

ドルクＸ６「ついにか」

本当は新年迎える前に終わらせたかったですが、無理でしたＯＴＺ

ドルクＸ６「おいおい」

そんなこんなな第７２話をどうぞ！

第７２話　生きる者達へ

ダークライ「バ…バカな！？」

ダークライは目の前の光景を目にした

それは

ほとんどのポケモンがやられていたのだ

しかもたった一匹のポケモン…いや合体した複数のポケモン達によってだ

そのやられたポケモン達の中心にはオーロラのマントをなびかせて、さらに光を放つ剣を持ち、まるで合体ロボットのような姿の者

そう

彼…いや彼らは、探検隊ブレイブの３匹、ドルク、シルム、ソウ、そしてさらにクレセリアも加えて合体した姿なんだ

その名はドルクＸ６

ドルクＸ６は剣を構える

ダークライ「くっ！合体ごときで！！」

ダークライは再びダークホールを放つ

黒い球体がドルクＸ６に当たり、黒く広がってドルクＸ６を包み込んだ

この技は当たると眠り状態にする技だ

しかし

ドルクＸ６「効かねぇな～」

ダークライ「！？」

なんと効いていなかった

ダークライ「何っ！？なぜダークホールが効かない！？」

ダークライも自分の切り札であるダークホールが無効化されてあせってしまう

ドルクＸ６「教えてやろうか？なぜ俺…いや俺達にダークホールが効かないのか」

それは

ドルクＸ６「クレセリアの能力で、俺は眠り状態にすることはできねぇ」

そう、クレセリアもポケクロスで合体しているため

そのまま彼女の能力も使えるのだ

ドルクＸ６の目が真剣になる

ダークライ「ならかげぶんしん！！」

ダークライはかげぶんしんで自分の分身を作り上げた

ダークライ「どうだ！ドルク！どれが本物の私か当ててみろ！！」

しかしドルクＸ６は動じない

ドルクＸ６「……」

ドルクＸ６は剣を地面に刺した

ドルクＸ６「光の波動！！」

剣の刺したところから光が放つ

辺りは光に包まれた

光が収まると

ダークライ「何っ！？」

ダークライの分身は消えていた

ドルクＸ６「残念だな、ダークライ！！」

ダークライ「バカな！？」

ダークライはかなり焦る

ドルクＸ６「さて……そろそろトドメといこうか！！」

ドルクＸ６は剣を再び持った

そして剣を一振りして

ドルクＸ６「ブレイブスラッシュ！！」

光の衝撃波がダークライに向かって放たれた

ダークライ「ぐわあああああああ

ダークライ「うぐぐぐっ！」

クレセリアがダークライに近づく

クレセリア「これで最後だわ！ダークライ！」

クレセリアは攻撃した

ダークライは少し飛ばされダメージを受けた

ダークライ「うぐぐっ……ク…クレセリア……言ったはずだ……」

ダークライは立つ

ダークライ「お前には……お前には絶対に捕まらないと！」

ダークライの目が光る

するとダークライの後ろから時空ホールが現れた

シルム「あっ！あれは！？」

ドルク「時空ホールだ！！

ダークライ「フフッ……この時空ホールに入って……未来へ行くのか……それとも過去にさかのぼるのか……私にもわからない。しかし！この世界は無理だったが……違う時代から暗黒に変えてやろう」

なんとダークライは別の時代に行くつもりだ

シルム「や、やめろっ！ダークライ！！」

クレセリア「逃がさないわっ！」

ドルク達が追いかける

ダークライはもう少しで時空ホールに入る

しかし

シルム「うぐ……」

ドルク「くっ……だめだ……」

ソウ「さっきの戦いで合体したから、消費が激しいみたいです」

さっきの戦いの合体で

体力を消費しているドルク達

ダークライ「フフッ、残念だな。後はここに飛び込むだけでタイムスリップできる。私を捕まえることはできない」

クレセリア「ああっ……」

ダークライが時空ホールに近づく

ダークライ「さらばだッ！お前達！」

シルム「ううっ……」

ダークライ「フフフッ！悪いな！最後は私の……私の勝ちだッ！！」

ダークライは勝利を確信したその時！！

パルキア「そうはさせんッ！」

ダークライ「な…何ィッ！！」

地面が揺れて光が放たれた

光が収まると

ダークライ「お、お前はッ！？」

シルム「パ、パルキア！！」

空間の神、パルキアだ

パルキア「空間の歪みを広げた罪は重いぞッ！ダークライ！正義の鉄槌だ！食らえッ！」

グオオオオオオオオオォォォォォッーーーーーーーーーーーーーーーッ！！

パルキアの両肩の白玉が光りだす

ダークライ「うわ…うわあああああっ！」

ダークライは時空ホールに入った

パルキア「逃がすかァッ！！」

パルキアは波動弾を繰り出した

ダークライ「ギャアアア

クレセリア「どうでしょう。それはわかりませんが……ダークライが時空ホールに飛び込んだ時……すでにタイムスリップに入ったと思われます。そしてその時パルキアの攻撃を受けた……ダークライの話だと……以前ドルクさんが未来から来た時……ダークライの攻撃を受け……記憶を失ったと言ってましたね。ということは……ダークライもドルクさんと同じように……記憶を失ってしまった可能性が高いと思われます」

シルム「ダークライが記憶を!?」

そうなると

クレセリア「おそらくダークライは記憶をなくしたまま……この世界の何処かをさまよっているのではないでしょうか」

シルム「ダークライが……」

ソウ「たしかにそれはありえますね、師匠と同じ被害を受けたなら……記憶も失ったままですし、それに……師匠は記憶が少し戻っていますけど、すべての事を思い出していないですし」

たしかにソウの言うとおり

記憶が少ししか、ドルクは戻っていない

パルキア「とにかく。しばらくは空間の歪みが広げられることもないだろう、俺は空の裂け目に戻る。ここへ降りてくることももうないだろう。さらばだ、グオオオオォォォォォォッ!!」

パルキアは光に包まれて帰って行った

クレセリア「さあ、私達も戻りましょうか」

シルム「うん！」

シルムはドルクの方を向く

シルム「ドルク！ソウ！帰ろう！トレジャータウンに！」

ドルク「ああ！行こうぜ！」

……

こうして……

ダークライをめぐるオイラ達の戦いは終わった……

トレジャータウンに帰ってくると……みんなが祝福してくれるんで本当にビックリしたよ！たとえダークライにだまされてたとはいえ……

オイラもドルクもこの世界にいてはだめなのかなって思ったこともあったけど……でもこうやってみんなに囲まれてると……生きててよかったんだなって……ホント思った

後、ルリリも悪夢から覚めたし……

みんなも元気でいてくれて本当によかった

前に親方様も言ってたけど……

世界にいるすべてのポケモン達に生きる意味はあるんだと思う

あれだけ悪いことをたくらんだ……

あのダークライでさえも……

これからも……

オイラとドルクの探検は続くだろう

そして色んなものを見て……

色んなものを発見するだろう

相変わらずオイラ達は光の泉に行っても……

進化はできないみたいだけど

でも……

ここにいられる……

ここに生きて生活できる……

それだけでもとても幸せだって……

思うようになったんだ

ドルク

いつも一緒にありがとう

これからもがんばろうな！

そしてこれからもよろしくな！

次の朝

サメハダ岩

そこにクレセリアとドルク達がいた

クレセリア「ドルクさん達のおかげでダークライの野望を止めることができました。私の役目もこれで終わりです。本当に……ありがとうございました」

クレセリアはお礼を言う

ドルク「で？クレセリアはこれからどうするんだ？」

すると

クレセリア「そうですね……色々考えたんですが……私も……ブレイブの仲間に入れてもらえませんか？」

シルム「えっ？クレセリアがオイラ達の探検隊に？」

クレセリア「ご迷惑でなければ私も仲間に入れていただいきたいん

ですが……どうでしょうか？」

すると

シルム「全然、迷惑じゃないよ！むしろ嬉しいよ！」

ドルク「そうだ、いいぜ♪」

クレセリア「はい、ありがとうございます」

ソウ「そういえば名前とかどうします？」

クレセリア「そうですね…私の事はシムーンって呼んでください」

ドルク「ああ、改めてよろしくなシムーン」

シムーン（クレセリア）「はい！」

シルム「うん！シムーン！こちらこそよろしくな！」

第７２話　生きる者達へ（後書き）

はい、クレセリア改め

シムーン（クレセリア）「シムーンです、よろしくお願いします」

ドルク「さてこうして平和になったしな」

でもね、もうすぐ最終回になるよ

ドルク・シルム・ソウ・シムーン「えっ！？」

最終話　再会と別れ～また会う日まで～（前書き）

ついに最終回です

ドルク「ついにか」

この最終回で終わりではないですので

シルム「でも再会と別れって？」

今回はなんとあのポケモンが帰ってきます！！ではどうぞ！！

最終話　再会と別れ～また会う日まで～

それから2日後

シルム「みんなおはよう！」

ソウ「おはようございます」

ネク「おはよう～」

カザリ「おはよう～」

みんな起きた

ドルク「今日もがんばろうな」

ソウ「そうですね…」

ネク「ちょっといいかな？」

ネクが突然みんなに待ったをかける

ドルク「どうした？ネク？」

ネク「そろそろ俺も自分の世界に帰るよ」

カザリ「僕も」

するとカザリも

カザリ「いままでお世話になったし、ネクちゃん達と探検できてよかったよ♪」

シルム「そんな」

ソウ「ネクさんとカザリさん」

ドルク「そうか……」

でも

ネク「大丈夫」

カザリ「僕達はいつでもつながってる♪」

そう

彼らはいつでもつながっている

たとえ離れていても

絆は切れない

ネク「それじゃあね、これからもがんばってね♪」

カザリ「師匠！ありがとう！」

ネクとカザリは秘密基地を出てった

ドルク「元気でな！！」

シルム「また遊びに来てね！」

ソウ「また会いましょう！」

こうしてネクとカザリは自分の世界へと戻っていく

……

残された3人は

シルム「……」

ソウ「……」

2人は暗くなるが

ドルク「大丈夫だ」

シルム・ソウ「！？」

ドルク「俺達はいつでもつながっている、だから暗くなるなよ！元気に今日も探検行こうぜ」

シルム「そうだね」

ソウ「はい」

2人は納得した

……

ドルク達は早速外に出た

すると

ペラ八「おーーーい!!お前達ーーー!!」

ペラップが駆け出してきた

ペラ八「ぜえぜえ……」

疲れた表情でなにやら慌てている様子だ

ドルク「どうした?ペラ八。そんなに慌てて」

ペラ八「ペラップだ……はぁはぁ……海岸に……海岸に……」

シルム「海岸がどうしたの?」

ソウ「何かあるんですか?」

すると

ペラ八「マナフィがっ!マナフィが帰ってきたんだよ!!」

ドルク「何っ!?あのマナフィが!?」

ペラ八「そうだっ！そうなんだよ！！早く海岸へ！」

シルム「うん！！」

ドルク達は海岸へ

……

海岸

４匹は海岸へ

すると

地平線を見ている一匹のポケモン

ぱっちりとしたかわいい目に、水色の体色で胸には赤いものがついている

そう

あのドルク達が育てた

あのマナフィなのだ！

シルム「マナフィ……」

マナフィ「ドルクパパ……シルム……ソウ……（泣）」

ドルク・シルム・ソウ「マナフィーーーーーーーーーーー！！」

ドルク達とマナフィが互いに近づく

感動の再会を

彼らは果たした

ドルク「ほんとに……ほんとにあのマナフィなんだな？（泣）」

マナフィ「うんうん！僕、海で大きくなったよ！全部……全部ドルクパパとシルムとソウのおかげだよ！（泣）」

そう

彼は大きくなり

さらに言葉をしゃべるようになったのだ

シルム「ああっ……オイラ達の事覚えていてくれたんだな！」

マナフィ「僕、一度も忘れた事なかったよ！一度も…ただの一度も……会いたかったよー！（泣）」

ドルク「マナフィーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！（泣）」

ドルク達（ペラ八を除く）とマナフィは互いに泣きながら抱き合った

涙が潮風と共に流れていく

……

ブレイブ秘密基地

なんとか彼らは感動の再会をして秘密基地に戻ってきた

マナフィ「わあ……ここ覚えてるよ。僕ここで生まれたんだよね？」

マナフィはあの頃を懐かしむ

閉ざされた海でドルク達が拾った卵

そしてそれが一つの命を生み出した

それがマナフィだ

シルム「そうだよ。オイラ達はここで初めて出会ったんだ」

ドルク「それにしてもよく覚えてるな」

マナフィ「僕達マナフィは生まれた場所を記憶する能力があるんだって。海で成長したら、本能で生まれた場所に戻ってくる……トドゼルガさんがそう言ってたよ」

ソウ「すごいですね」

マナフィという種族は

生まれた場所を記憶し

そしてある程度成長すると本能でその生まれた場所へ戻る

マナフィは立派に成長して

このブレイブの秘密基地に帰ってきたのだ

マナフィ「僕の場合はここが故郷(ふるさと)だから…だからここに戻って来たんだよ」

ペラ八「それで……故郷に戻ったマナフィはその後どうするのだ？」

そう

これからどうするべきなのか

マナフィ「それは自分で決めるものなんだって」

マナフィはドルク達に向く

マナフィ「でね…あのね……僕、色々考えたんだけど…僕、ドルクパパとシルムとソウに恩返しがしたいの。パパ達、世界中を探検してるでしょ？だからそれに少しでも役に立てたらなー…って。だから…その……僕をブレイブに入れてくれないかな……？」

なんと！？

マナフィはブレイブの仲間に入るつもりだ

お世話になったドルクとシルムとソウの恩返しに

ドルク・シルム・ソウ「……」

ドルク達は黙ってしまう

それに慌てたのかマナフィは

マナフィ「だ…大丈夫！僕、大きくなったからもう病気になったりしないよ」

ドルク・シルム・ソウ「……」

マナフィ「……だめ……かな？」

それでもドルク達は黙ったままだ

すると

シルム「ううっ……だめなわけないじゃないか！！なあ？ドルク！（泣）」

ドルク「ああ！お前の居場所はここなんだ（泣）だめなわけがないだろ！！（泣）」

もううれし泣き状態のドルク達

ソウ「そうですよ（泣）だめじゃないです！！」

マナフィ「ほんと？ほんとにいいの？」

ドルク「ああ！今日からお前も俺達の仲間だ！！（泣）

マナフィ「わあーーい！やったーーー！！」

マナフィはクルクルと回る

マナフィ「僕、一生懸命ドルクパパ達の役に立つからね！」

ドルク「ああ、ところで？お前は名前がほしいか？」

マナフィ「え？」

ドルク「お前の名前…実は決まっていてな」

そう

彼のマナフィへの愛情が詰まった

そんな名前を

マナフィ「さすがパパだよ！僕、名前マナフィだとね、だからドルクパパみたいに名前がほしかったんだ♪それでパパ？僕の名前は？」

ドルクは言う

ドルク「ミネラ」

マナフィ「ミネラ……パパ、僕嬉しいよ（泣）」

マナフィは自分の名前をもらってうれし泣きした

ドルク「気に入ってくれて嬉しいぜ（泣）」

ドルクもうれし泣きだ

ミネラ（マナフィ）「これからもよろしくねパパ、シルム、ソウ」

シルム「よろしくな（泣）」

ソウ「はい（泣）」

みんなは抱き合って涙する

再会という

イベントを

最終話　再会と別れ～また会う日まで～（後書き）

感動できた最終回でした

ミネラ（マナフィ）「うん（泣）そして僕はマナフィのミネラだよ、よろしくね」

ドルク「俺の自慢の息子だ」

おいおい（汗）あんた種族的には違うだろ（汗）

ソウ「でもまあこれでよかったです」

シルム「次で終わりなんだね（泣）」

うん……次回はエピローグです

エピローグ　俺達の歩む道（前書き）

ついにエピローグです

ドルク「長かったな」

うん、これで終わりだよ

では…どうぞ

エピローグ　俺達の歩む道

それから4日後

？？？？「パパーーー！シルムーー！」

サメハダ岩からミネラが

ドルク「どうした？ミネラ」

ミネラ「あ！パパ！シルム！今日も日課のお散歩に出かけたんだけどね…そこでねすんごいいいところを見つけたの！」

ドルク「すんごいいいところ？」

ミネラ「そうそう！きらめく海に白い砂浜…その上グルメなグミを快く（こころゆく）まで堪能（たんのう）できるの！その名も海のリゾート！！ポケモンのパラダイスだよ！」

海のリゾート

もはやポケモン達の楽園に思える

シルム「海のリゾート！ポケモンのパラダイス！？」

ドルク「しかもグミが食べ放題！」

食べ放題は言っていないが（汗）

ミネラ「もうね、いっこくも早くパパ達に教えたくていてもたってもいられなくなってね。お散歩から帰ってきてすぐにパパ達に知らせようとしたんだ、場所はねここから南西にあって、ゼロの島から西にある島なんだ」

ドルク「それじゃあ準備して行こうぜ♪」

ドルク達は準備した

ちなみにソウはいない

なぜなら2日前

……

ドルク「帰るのか？」

ソウ「はい、師匠達にも世話にはなりました、僕はこっちに帰ろうと思いまして」

どうやら帰るようだった

シルム「そうか……寂しくなるね」

ソウ「でもまた会えますよ、その時はまた一緒に探検しましょう♪」

ドルク「がんばれよ、ソウ、こっちでも手紙くれな」

ソウ「はい♪」

ミネラ「元気でね」

ソウ「ミネラ君も元気で」

ソウは笑顔で帰って行った

ミネラ「僕達3人になっちゃったね」

ドルク「ああ、でもソウもまた会える気がする」

シルム「オイラ達もがんばろう、それにシムーンもいるし」

ドルク「そうだな」

ドルク達は新たな気持ちを胸に

ミネラとシムーンも加えてがんばることを誓った

……

トレジャータウン

相変わらず賑わいがたえなかった

すると

リングマ♀「あっ！ドルクさん！シルムさん！」

リングマ達がドルク達に声をかけて近づく

ドルク「どうしたんだ？」

リングマ♀「私達、この間光の泉に行ったのよ。ホラ私達この見かけじゃ区別つかないでしょ？それもあって私、さらにもっと進化したくなって……それでまた光の泉に行ってみたの」

リングマ♂「俺はもうこれ以上進化するのは無理だって何度も止めたんだぜ？でもこいつ、全然言うこと効いてくれなくてよう……それでしかたなく行ってみたんだけど……やっぱり進化できなくてよ……ってまあ当たり前なんだがな」

そりゃあ進化が1段階しかないのだから（汗）

リングマ♂「でも……」

シルム「でも？」

リングマ♀「前に行った時と……ほんの少し様子が違う気がしたの……」

ドルク「様子が違う？」

リングマ♀「うん、空気が違うというか……なんとなくもやが晴れたというか……うまく言えないんだけど……でも前の光の泉とはなんとなく違う気がしたのよ」

それはどういうことなのか？

リングマ♂「それは俺も感じたぜ。パッと見た感じは変わらないん

だが……でも前とは何かが違うってな……で、そこで思い出したんだが……お前達、前に進化しようとしたけどできなかったよな？たしか何かしらの影響で進化できないって言われてたと思うが……でも光の泉の様子が変わったのなら……その影響ももうすでにはらわれたのかもしれない……つまり……お前達ももしかしたら進化できるようになったのかもしれないと思ってな」

シルム「ええ～っ！？オイラ達も進化できるようになったの！？」

リングマ♂「本当にできるかどうかはわからんぞ。あくまでもしかしたらって思っただけだからな……でも……試してみる価値はある。進化したければもう一度光の泉に行ってみるのもいいかもしれないぜ」

リングマ♀「私達、それをあなた達に伝えたかったの、じゃあね」

リングマ達は去った

ドルク「もう空間の歪みの影響もないなら……」

シルム「オイラ達も進化できるってことだよ！」

ドルク「その前に……海のリゾートでバカンスを楽しんでからにするか♪」

シルム「そうだね♪」

ドルク達は笑顔になった

俺達はいつでもつながっている

俺達はそれでも探検する

それが……

俺達……

ブレイブ……

希望をつなげる

チームなのだから

エピローグ　俺達の歩む道（後書き）

え～ついに終わりました

今回ポケダンをゲーム進行とともに書いていきましたが

結構キャラが壊れたりなどもあってさらにグダグダですみません（汗）

そしてこのポケダンを見てくれた読者のみなさん

そして見てくれた作者のみなさん

おかげさまでポケダンの小説も終わりました

また、ドルク達の物語が来るかどうかわかりません

でもその時には

ドルク達も成長していると思います

それでは最後に

ポケダンを見てくれてありがとうございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9601j/

ポケモン不思議のダンジョン希望の空と絆

2011年4月2日15時53分発行